THE CENTRAL REVIEW

中央公論

五月號

大正十三年五月一日發行（毎月一回一日發行）

第三十九年 十四號

▲說苑



ひばり　　森田恒友筆

大正十三年

中央公論

五月一日發行

五月號

第卅九年 第五號

第四百三十四號

國際勞働會議代表を送る

國際勞働會議に列すべき代表諸君の渡歐を送るに際し、綠言ながら念を押したいのは、會議開催の根本精神を忘れざらんことである。富士登山者に富士の秀麗を說くは無用のやうでもあるが、世には本を忘れて末を說く者少らず、殊に勞働會議の如きに在ては動もすれば各自の立場よりする利己的希望に眩惑されて何時の間にやら根本の理義を遠ざかるのが常だ。一片の警告強ち無用ではあるまい。況んや勞働會議の成績のあがらざる、就中會議に於て我が日本側代表の毎に見苦しき態度に出づるは、主として之に因るといふに於てをや。今度もまた同じ醜態を繰り返すが如きあらば予輩は帝國の名譽の爲に甚だ之を惜まざるを得ない。

國際勞働會議は何の爲に開かれるのか、資本家が資本家としての自家の利益をはかり、勞働者も同じく勞働者としての自家の利益を主張し、而して政府はまた一に自國産業の興隆のみを念とするといふのなら、何も面倒して國際會議を開くの必要はない。わざ〳〵國際會議を開いてまで、相變らず銘々が專ら銘々の立場だけを主張するのは、取も直さず自ら國際會議開催の根本精神に裏切るものではないか。

第一に國際勞働會議は資本家の利益の共同擁護又は共同伸張の爲に開くものではない。又産業興隆の方策に就て各國家間の共同施設を目的とするものでもない。固より斯種の仕事も必要には相違ない。併しそれなら別の機關でやつたがよい。苟くも勞働會議といふ以上は、主たる問題はどこまでも勞働改善といふことの外に出でてはならない。尤も勞働改善を目的とするものだから勞働側が主として幅を利かすべきだなどとは云はない。が、之れ迄の我が代表諸君の態度は、丁度店員慰安會に出て主人連と御役人とのみが我は顏に自分勝手を言ひ募つたといふ樣な嫌はなかつたか。彼等の心なき傍若無人の態度には局外の我々も不快に感じた位だから、直接の相手たる勞働者側が憤慨の情をもらすのは尤もだと思ふ。さればと云つて予輩は勞働者側が徹頭徹尾資本家并に政府側に反抗を續けるのにも贊成は出來ない。

そこで第二に予輩は單に勞働側の要求を貫かしむるといふが國際會議の根本精神でないことを指摘しておき

たい。資本家乃至政府を相手として勞働側が其要求の貫徹を謀るは勞働運動の一要諦に相違なく、而して彼等が國内の問題として此の運動で突進する分には一向差支ない。併し乍ら彼等が一度國際會議に參加の意を表した以上、彼等は既に(一)資本家の或る程度の利益の擁護を許し、(二)産業興隆に關する或る程度の國家的施設を認め、(三)勞働改善の要求に就ては以上二つの條件を著しく阻礙せざる程度に讓歩し、要するに彼我の間に適當なる妥協點を發見せんことに同意したものと觀なければならぬ。多少の讓歩すらも嫌だといふなら始めから之に參加せぬがよい。現に飽くまで之を否認してやまぬ團體もある。が已に之に參加せる以上は多少の讓歩は已むを得ぬものと覺悟せなくてはならない。

第三に予輩は以上の結果として、勞働と資本との調和を可能ならしめ且此基礎の上に産業の發達を可能ならしむる諸條件の攻究が國際會議の最も大事な仕事でなければならぬことを注意したい。例へば今度の會議で問題となる硝子工業に付て見るに、勞働條件を改善しては生産費が增す、折角協定しても之に加入しない國と競爭することは出來ぬといふ。そんなら不加入國の製品に高い輸入税を課するといふやうな約束をしてもいゝではないか。色々不便は忍んでもとにかく勞働改善が目下の最要急務だといふに腹を決めれば、其の趣旨を貫く爲の方策は如何様にも工夫がつくと思ふ。而して之等が攻究するのが國際會議本來の機能であるべきのに、實際會議せらるゝ所はいつも之れでは競爭が出來ぬの何のと云ふに止り、遂に勞働改善の根本義を忘れんとする色あるは、予輩の常に甚だ遺憾とする所である。

× × × ×

要するに資本と勞働との利害相反するは始めから分り切つて居る。この爭に於て結局勞働者を勝たしめなければならず、但だ無條件に勞働者を勝たしめたのでは一國産業の興亡に關する、且つその條件は一國だけで決めたのでは有效でないといふ所から、國際會議の開催を見たのである。この事をよく代表諸君に考へて居て貰ひたい。そして斯うした會合に出席した者が話を元に戻して又もや資本勞働の古い階級的衝突を露骨に持ち出す樣では餘りに不名譽な醜態ではないか。而して之れ實に單なる代表諸君の名譽の問題にとゞまらないことは言ふまでもない。

中央公論



第卅九年第五號
五月號
第四百三十四號

全人道（ユーマニテ・アンテグラル）の闘士ジャン・ジョレスの人及び思想

柳澤健

○

話は數年前に遡る。

ロマン・ロランに『クルラムボー』といふ著作のあることは人の知る通りである。この小說――然しロラン自身、これは小說（ロマン）ではなくて戰爭の災禍のなかに於ける自由なる魂の告白（コンフェシオン）だと斷つてゐる――の出版された年のこと、折柄巴

早にあつた自分はその都の数々の書肆の店頭に堆高く積まれたこの水色の表紙の書物を見ることができた。自分は早速その一部を買ひ求めて、當時人の出入りの烈しいホテル生活から引移つて間もなかつた物靜かなパッシイの素人下宿の窓際で、その頁を切ツたのであつた。恰度秋の澄み渡つた黄昏の頃であつた。久し振りで讀むことができたロランのあの朗らかで穩やかな文章にふかく心を索かれながら、歐羅巴大戰といふ嵐の襲來をまへにして巴里に近いサン・ブリの靜かな楽しい家庭生活の美くしい描寫につよく心を動かされながら、我れ知らず讀み續けて行くうちに、その描寫は漸次進展して露西亞の動員の報知が巴里に屆いた邊にまで及んで來た。その續きである。主人公のクルラムボーの心を打ち砕いたおそるべき報知が、この靜かなサン・ブリの家庭にはいつて來た描寫のある章のあらはれたのは！そのおそるべき報知は、クルラムボーの心を打ち砕いた以上に、實は作者ロランの心をば打ち砕いたものに他ならなかつたのだ。

順序として先づ自分はその描寫の前後の文章をこゝに譯出しやう

「……六日あと。

クルラムボーは森のなかで午後をすごした。彼は恰度昔噺の坊さんのやうであつた。樫の樹の根もとに臥し、鳥の歌のなかに、彼は口を開いて一世紀を一日のやうに流れさせることができた。夜が落ちて來るまで彼は家に歸へることを決めやうとしなかつた。玄關のところで、マキシムは、すこし蒼ざめ、笑ひながら迎つて來て、父に言つた。

――おゝ、パパ、よかつた！

彼は父に報道を齎らした。――露西亞の動員、獨逸に於ける戰時狀態。クルラムボーはそれを理解することなしに子供をみつめた。彼の思想は、かゝる陰慘なる痴愚からはずつと離れてゐたのだつた！で、彼はよくそれを知らうと努め

た。報道は正確であつた。皆はテーブルについた。クルラムボーは殆んど食べなかつた。

彼はこの二つの罪の結果を否定すべき理由を求めた。輿論の良識、各國政府の叡智、社會黨の寄せる度々の保障、ジョーレスの確固たる言說。マキシムは、父の言ふにまかして、注意を他にくばつてゐた。犬のやうに耳を夜の顫動のなかに向けてゐた……かくも淸らかにかくも優しき夜！……この千九百十四年の七月の最後の夜と八月の最初の日の最も美くしい夜とを生きてゐた人々は、その思ひ出のなかに、愛情ふかい腕をもつて取圍むでゐる自然のたぐひなき壯麗さが、愛憐の美くしき微笑をもつて、この淺ましき人類をまさに飮み盡さんとしてゐたことを、ふかくとゞめてゐるに違ひあるまい。

十時近くであつた。クルラムボーは喋べるのを止めた。誰も答をするものもなかつた。皆は默り合つた。重い心のなかに、容しく思ひを凝し、また思ひを凝さんとつとめてゐた。――女たちは仕事へと考を向け、クルラムボーはその眼だけが見てゐるに過ぎない一冊の書物へと考へを向けて。マキシムは戶口の踏段まで出て行つて、煙草をふかしてゐた。欄干にもたれながら彼は睡りに落ちた庭園と小徑の暗のなかの月光の不思議な流れとを眺めてゐた。

電話の鈴が皆をびつくりさした。クルラムボーへとかゝつて來たものだつた。彼は足重げに放心した樣子で步いて行つた。最初彼は何のことか理解ができなかつた。

――どなた？……あゝ、あなたでしたか？……

（ある新聞の編輯局にゐる彼の僚友からかゝつて來た電話であつた）

彼はどうも聽きとれないと言ひ續けた。

――いえや……ジョレス……どうしたんですつて！ジョレスが？……あゝ、それあ！……

マキシムは何かなしに絨づいて遠くからその談話を追ふてゐた。彼は父の手から受話器をとるために急いで歩を運んだ。クルラムボーはその受話器を絶望の身振りで落した。

――もしもし！……もしもし！……何ですつて？ジョレスが暗殺されたつて！……

悩みと怒りとの叫び聲が電線のうへに交叉した。マキシムはその詳細を聴いてから皆の者に慄へ聲でそれを語つた。ロジィヌはクルラムボーをテーブルの近くへ連れて來た。彼は打ち砕かれて席に腰を卸した。古代の『運命』とでも言はれさうな限りのない不幸の影が家のうへに蔽ひかぶさつた。それは單純に友といふばかりではなかつた――この世からそれが失はれたといふことが心を締めつける――善良な、樂しげな面貌、親しげな手、雲をば押ひ拂ふ音聲……それは實に脅やかれつゝある民衆の最後の希望であり、群れ集ふ暗雲を吹き飛ばし得る唯一の人間であつたのだ。その彼が、アトラスのごとくに倒れたのだ。空は崩れた。』

クルラムボーの心をかくも無慘に打ち砕くに到つたジョレスの死の報知は、取りも直さずわがロマン・ロランの心をば打ち砕いたものであることは、既に前に書いた通りである。それは、『クルラムボー』が所謂小説（ロマン）ではなく告白（コンフエッション）であることを特にことはつてゐる作者自身の言葉からも容易に推測せられる所である。然しながら、ロラン自身が如何にジョレスの死を哀み悼んだかは、この『クルラムボー』が刊行せらるゝずつと以前に、彼自身の口から何よりも明確に述べ立てられてゐるのを人々は知らなければならぬ。即ち大戰當時瑞西で發行せらるゝ『ジュールナル・ド・ジュネーヴ』に連載せられ後纏められて巴里の、ユーマニテ社から刊行せられてゐる『ジャン・ジョレス』といふ文章こそそれである。この一文に於てロランは遺憾なくジョレス讚頌の心を傾けて、彼の死を『全人類にとつての大敗戰』であるとさへ

痛嘆してゐるのを見る。ロランは、その文章の劈頭に於て言ふ。——

『我々の眼前に於いて戰爭が行はれその爲めに幾千幾萬といふ人々が死んで行くけれども、その生命の犧牲は必しもこの爭鬪の結果を左右するものではない。然るに、たゞ僅かに一人の人間の死が全人類にとつての大敗戰であり得る場合がある。ジョレスの殺されたことは實にかゝる大いなる災禍の一つに他ならない。

あゝ幾多の世紀がかゝる生命を生むために要せられたことであらう！西歐の空の下にあつて、佛蘭西のよき土壤のうへに播かれて熟した、南北に亘り過去現在に亘つてのあゝ如何に豐かなる文明が、それに要せられたことであらう！その本質をなすべき要素とそれを動かすべき動力とをいみじくも結び合はすべき神秘なる機會が、彼の如く高貴なる精神を再びこの世に生み出すことのできるのは、果して何時の日のことであらう！

ジョレスは、偉大なる政治的雄辯家としてのみならず、同時に偉大なる思想家であるといふ、近代にその比儔を見ない一つの模型を示してゐる。彼にあつては、博大なる教養は銳敏なる觀察と一をなし、また、その道德的偉大は精力的活動と一をなしてゐた。かくのごとき人の典型を見るためには人々は古代にまで遡らなければならない。…………』

『クルラムボー』を讀むでこのジョレスの章まで來た自分は、何時しか頁を切るのも忘れて、彼の悲劇的なる死の情景を、——『全人類にとつての大敗戰』であつた彼の非業なる死のうへを、さては、彼の偉大なる一生の姿を、——『脅やかされつゝある民衆の最後の希望』であつた彼の壯嚴なる一生のうへを、想ひやつたものであつた。刻々に暮れ行く窓際の卓子に凭りかゝつたまゝ、今更に彼の如く高貴卓逸なる精神がこの世から永遠に失はれてしまつたことを痛感し

ながら、暗然たる氣持の中にその昏れ行く淋しい空合を眺めてゐた時のことを、自分はあだかも昨日のことのやうに鮮やかに思ひ出すのである。——

○

自分が巴里にあつた時、幾度かモンマルトル街にユーマニテ新聞社をたづねたことがあつた。そこの一室に陳列せられてゐる諸種の特種な書物を買ふことが主眼ではあつたけれども、ジャン・ジョレスその人をこゝで偲ばうとする心持からも來てゐることは言ふまでもなかつた。

人々も知る通りこゝで發行さるゝ日刊新聞の『リューマニテ』はジョレスの創刊にかゝるものであつた。ジョレスのあの『柔しい、人食ひ鬼のやうに皺だらけな、靜かで、樂しい、大きな顏』に『人間の本性を機敏に見ると等しく、觀念の飛躍をも機敏に追ひかける、光つて微笑してゐる小さな眼』（ロランの言葉）を持つた身體が、このがたぴしした古い稍汚ない建物の薄暗い階段をゆつくりゆつくり上つたり下りたりしてゐたのだ、といふことを考へるだけでも、自分はある強い感慨に捉はれずにゐられなかつた。それ計りではなかつた。ジョレスのあの非業なる死を遂げたのは、このリュマニテ社からすぐ近くにあるレストランでである。彼はこの新聞社の編輯室を友人とともに出て、そのレストランにはいり、間もなく無殘なる凶手に倒れるに到つたのである。それを考へて來れば、自分の眼には、この古いがたぴししてゐる建物は優にあのヲーターローの古戰場にも、さてはあのマルヌ河畔の新戰場にも譬へられるほどの偉大なる歷史上の名跡にほかならなかつたのである。……

ジョレスが、彼にとつてその生命の大部分を注いでゐたと言つてもよいこのユーマニテ社の編輯室へ最後に遣つて

來たのは、七月三十一日の夜の八時少し前であつた。ケードルセーにある外務省に時の首相兼外相のルネ・ヴィヴィアニを訪ねての歸り途であつた。ルノーデルとロンゲと（二人とも有名なソシアリストである）が彼に同行してをつた。

千九百十四年のこの七月の下旬、――それは言ふまでもなく五年に亘つての慘虐なる世界殺戮史の第一頁を染め出さうとしてゐた時期である。數十年來清澄な空合を續けて來た平和の歐羅巴が、今や晦冥なる空合の下に怖るべき戰禍の血の雨をば降らさんとしてゐる危機一髮の時期である。この重大なる時期に當つて、熱烈なる平和主義者であり革命的なる人道主義者であり、熱情的なる自由の使徒であり、最も深刻にして執拗なる非軍國主義者であつたわがジョレスが、文字通り寢食を忘れてこの怖るべき殺戮戰の防止に東奔西走してゐたことは、言ふまでもないことである。數々の演説と執筆とによつて直接民衆に訴へこの戰禍の襲來を逸早く防がせやうと努めた許りではなく、一方政府當局者に對しても忠告と激勵とに勉め飽まで戰爭の勃發を避くるに全力を注がんことを要求して憾す所がなかつた。が、歐羅巴の形勢は彼の意に反して刻々と惡化しつゝあつた。露西亞の動員令の報知と相繼いで、獨逸も戰備を整ふるに到つたといふ報知が、巴里へ屆いた。然しながら、ジョレスは最後の一瞬までその努力を捨てやうとはしなかつた。未だ未だ一つの希望だけは殘つてゐた。プロレタリア・ソシアリストの群の抱いてゐる戰爭反對の意嚮と、有力なる英吉利政府の調停と。卅一日の夕刻も彼はその唯一の希望を抱いて外務省を訪ね、正義と名譽とのなかに平和を獲得し得べきことをば切言して、此際飽まで冷靜且迅速に事件を措置し萬遺漏なきを期せられたきやう衷心激勵する所があつたのである。情熱に充ちた鳴りひゞく聲をもつて彼はヴィヴィアニに言つた。――『あなたが平和を希望してゐるといふことを、はつきりと英吉利に示すやうになさい。そして英吉利をして調停の役割を努めさせるやうに、全力を擧げて支持なさい。露西亞に對しては、斷じて輕卒なことをやらぬやう申入れて下さい！』……

前記したごとく彼は漸く八時近くに外務省を辭してルノーデル及びロンゲとともにユーマニテ社へ歸つて來た。彼は暫らく社の主幹及び僚友たちと語を交へた。彼は未だ夕食まへであつた。が、未だうんと仕事が溜つてゐたので、家に歸ることは能きなかつた。で、近くで食事を攝らうと、社から程近いクロッサンといふ小さなレストランへ僚友たちと出掛けた。そして、そのレストランの入口の左手にある長いテーブルに着いたのである。

重大なる時機に際してゐるだけ、レストランの内部も異常に緊張してゐるやうに見えた。ジョレスは彼獨特の壯重な美くしい聲で話しをしてゐた。彼は、これ等の政治上の僚友たちに二三指揮の言葉を與へてゐた。やがて、食事も終つた。と、恰度その時、隣りのテーブルで年若い妻と一緒に食事をしてゐた一人の男が席を立つて、ジョレスの占めてゐるテーブルの所まで遣つて來た。手には一枚の寫眞を持つて、それをジョレスの隣りに並んだ者のまへに差出した。

——御覽なさい、僕の小さな女の子ですよ。

ジョレスは、人の善い微笑を浮べながら、その男に言つた。

——わしにも見せて下さい。

彼はその寫眞を受取り、褒めながらしばらく眺めて、その女の子の年齢なぞを父親に尋ねた。

彼此時刻は十時に二十分計りまへであつた。

突然に二發の爆火が閃光とともに鳴りひびいた。女の叫び聲が一席から起つた。——『ジョレスが殺された!』『ジョレスが殺された!』

見るとジョレスは一つの塊のやうになつて左側に倒れてゐた。室内の人々は皆立ち上つて叫びながら突き進んで來た。瞬間は混亂と喫驚の渦であつた。何人かの僚友は街上に飛び出して——銃火は外から放たれたのであつた——ジョレス

が恰度背を向けてゐた窓の所を調べてゐる間に、人々は彼を板の上に寝かしつけた。彼は最早呼吸もたえだえで、眼は閉ぢてゐた。この凶行を意識してゐるかどうかすらも判断がつかなかつた。

が、彼は直ぐには死ななかつた。人々が醫者を探しに行つてゐる間、恰度そこに居合はした一人の藥劑師が近寄つて彼の脈をとつたが、たゞちに首をかしげた。彼のシャツを展げて心臓を診べて見ると、最早辛ふじて打つてゐるだけであつた。身體はやがてテーブルのうへに移された。僚友のコムペール・モーレルは、凶報を聽いて驅けて來て、泣きながらだらりとなつたその手を捉へた。ルノーデルは、ナフキンをもつて傷から出て來る血を止めてゐた。

やがて遣つて來た醫者は、ジョレスを診斷し終るや言つた。

——皆さん、最早つくすべき方法はないやうに私は考へます。

三分間ののち、血は咽喉のなかに流れて來た。醫者は言つた。

——皆さん、ジョレス氏は息を引き止られました。

あゝかくして『クルラムボー』に所謂『脅かされつゝある民衆の最後の希望』であり『群れ集ふ暗雲を吹き飛ばし得る唯一の人間』である彼ジョレスが、この世から永遠に姿を消したのである。『アトラスのごとくに倒れ、空は崩れた』のである。彼が倒れて後數日目、終に未曾有の慘虐なる鐵と血との大戰が歐羅巴全土のうへに展開するに到つたことは、人の皆知る通りである。

その日から四日目の八月四日、山と群れ集ふた民衆の群のなかにわがジョレスの葬儀は擧げられた。首相ヴィヴィアニは、明かに兩眼に涙を湛えながら彼の柩のまへに立つて、『我々の尊敬と我々の讃嘆とを集めてゐた彼の心情、彼の性格、

彼の高貴なる良心、全部義務の爲めに献げられたる誠實にして簡素なる彼の一生、この不屈の使徒、壓し碎かるるものをあくまでも保護せんとするこの決意……』が、最早この地上から喪はれてしまつたことを、悲痛な言葉で述べた。

セー・ジェ・テエの名をもつて棺前に立つたかのレオン・ジュオーはジョレスが『我々の思想であり、我々の生ける教義(ドクトリヌ)であつた』ことを述べ、『彼の面影のなかに於いてこそ、彼の思ひ出のなかに於いてこそ、我々は未來に於ける我々の力をば汲み出し得る』ことを切言した。

また、マルセル・ザムバは、『佛蘭西が最も彼を必要とするときに人々は彼を殺した。が、今や彼の敵も佛蘭西並びに世界の失つたものが何であるかを了解し得たであらう』と述べた。

最後に國際勞働社會主義者の名で爲された白耳義のカミーユ・ユイスマンスの哀悼の言葉こそ、ジョレスの高貴なる肖像を如實に現はしたものと言ふことができるであらう。——

「……ジョレスの天才は、單純なるある黨派の額縁のなかに押し籠め置かるべきものではない。彼こそは、ある一つの階級の代表者といふよりも更により以上のものであつた。彼は實に一時期(エポック)を表徴してゐたのである。

ジョレスは、單に佛蘭西にのみ屬してゐるものではなかつた。彼はあらゆる國民に屬してゐるものであつた。昨日の英吉利のある有力な新聞紙は書いてゐた。——『ジョレスの死は歐羅巴のキャタストロフである』と。……私は彼が他の國々の勞働者たちに對して爲した事柄をば思ひ出す。私はまた、外國の代表たちがその意見を決定する爲めに彼が話して吳れるのをば待つてゐたのを見る。それ許りではない、彼等外國の代表たちが彼とは意見が合致しない時であつても、尙且彼の見方に接近することを望んでゐたのである。彼は藝術家といふより更により以上のものであつた。言說よりより以上のものであつた。雄辯家といふより更により以上のものであつた。彼は實に『良心(コンシアンス)』であつた。一の道德的價値

であつた。彼はまた訓練の實例を與へることを知つてゐた。彼はフインランドの樫の樹のごとく、マストのやうに高くまた力強く土壤に根ざしてゐて、抜けることなしにその頂きを下へ曲ぐることを知つて居り、またその彈性は力を二倍にすることをも知つてゐたのである……』

○

ジャン・ジョレスは千八百五十九年の九月三日にカストルで生れた。佛蘭西の南部、所謂ラングドックの地方にある町である。土壤を形作る大理石の堅さと、野山の持つてゐる線の整つた美くしさと、流れた熔岩の現はしてゐる壯嚴さと、——この風物の特徴はそのまゝにこの地方に生れた數々の人のうへにも現はれてゐた。ギゾーがオーギュスト・コムトが、ラ・ファエットが、ラペールーズが、さては畫家のアングルが、それであつた。言ふまでもなくわがジョレスもそれに他ならなかつた。

彼の幼時は實に彼の一生に於けるがごとくに努力的なものであつたと言はれてゐる。彼がカストルの學校で教はつた希臘羅甸の古典文學さては佛蘭西文學の、どんなに根强い影響を彼に與へたかは、彼が後年一世の雄辯家として、稀れに見る豐かなる表現方法を有してゐたといふその事實に徴しても知ることができる。同時にまたカストルの內外の自然の美くしさは、彼の心に自然に對する理解と愛とを抱かせずには措かなかつた。彼は野山で耕やすことすらも、喜こんで爲したことがあつたといふ。この自然に對する愛の念は、彼が忙がしい政治の世界に身を投ずるやうになつても、些かも渝らがなかつた。暇さへあると、彼は絕えずこの母なる大地の懷に抱かるることを努めた。

千八百七十六年にサント・バルブの學校に入り、續いて、巴里の有名なる師範學校（エコールノルマル）の豫備教育を受けるが爲めにル

イ・ル・グランの學校にはいり、七十八年目的のごとく師範學校に入ることができた。彼の知的優秀、その限りない好奇心、そのすばらしき記憶力、その天性の雄辯、その隔意なき友情は、總ての學友の間の賞讃の標であり敬愛の的であつた。

師範學校を卒業してから、アルビの高等學校の哲學教授に任ぜられてそこに赴任した。彼は一方教授の職責を充分完全に果し得たばかりではなく、他方一哲學者として己れの思想の深化と組織化との爲めに全力を擧げて努めてゐたが、この時既に政治は彼を索引してゐた。千八百八十一年はじめて彼は選擧場裡の人となつて見たのである。

然しながら彼が下院議員に當選せられたのは、四年經つて後の八十五年の年であつた。彼は八十三年に哲學の講師としてトゥールーズの文科大學に招聘せられ、そこで將來に於ける公共生活のための準備を孜々として努めてゐた。タルンから議員に選擧されてはじめて立法府の演壇に立つ人となつた彼は、所謂その處女演說を小學教育に關して試みたのであつた。

千八百八十九年の總選擧の折には、彼は再選を見ることができなかつたので、再びトゥールーズ大學で講壇に立つことになつた。そこで試みた彼の公開講演には常にすばらしい人氣があつた。彼の有名なる『感覺世界の實相（ラ・レアリテ・デュ・モンド・サンシブル）』及び羅甸語で書かれた『獨逸社會主義の起原』の二論文は、實にこの時期に於いて書かれた彼の博士論文であつたのである。彼はまたトゥールーズで發行してゐる『デペーシュ』新聞の編輯にも携はり、續いて市會議員に選ばれ市の公共教育事業にも與かるやうになつた。

千八百九十三年、彼は再び下院議員に選ばれて巴里セエヌ河畔の『シャムブル』に戻ることとなつた。爾來引續き死に到るまで彼は議院に席を占むることとなつた。（たゞ一度千八百九十八年から千九百二年までの期間を除いて）即ち、こ

の九十三年をエポックとして彼の政治的生活がこゝに確立したわけである。かくして彼の政治的活動は佛蘭西政治史のうへに日一日とその強大を増し來つたのである。ソシャリスト若くはデモクラットの手で起されたあらゆる大なる論戰のなかには必ず彼の名が見出さるるやうになつた。雄辯家として、新聞記者として、實際運動家として、歴史家として、彼の活動といふものは實に目覺ましいものであつた。殊にかのドレフュース事件に於ける彼の行動は、佛蘭西の社會主義運動に先づ最初の新らしき燦光を與へたものであると言ひ得やう。狹隘なる階級鬪爭觀から社會主義を解き放してヒュマニチーの眞の意味を吹き込んだのは、實にこの事件の時であつたのである。

彼の最大なる努力の一つは、佛蘭西に於けるデモクラシイの勝利を確保するが爲めに所謂左黨各派の聯合を實行せしめたといふことであつた。當時佛蘭西に於ける社會主義者は夥しき黨派に分れてゐて、全體としての統一を缺いた、極めて力の弱いものとなつてゐた。ジョレスはその統一――あゝこの統一といふ言葉こそ、彼の生命、彼の事業の全部を說明してゐる言葉だ！――の爲めに力を盡した。それは困難な仕事であつた。彼等社會主義の鬪士連はそれぞれ己れの黨派に密着してゐて、意見や見解やの相違する他の社會主義者が侵入して來ればそれだけ自分等の立場が稀薄になることを、ひたすらに怖れてゐた。ジョレスは彼等のこの尤もなる恐怖を充分理解して、これ等の傾向の相違せる見解をも各自自由に發表し得るやう極めて彈性を有する一政黨を創るにつとめると同時に、外に對する關係については、一目瞭然他の政黨と區別せらるるやう極めて鮮明なる輪廓をそれに附與するのを忘れなかつたのである。これを爲し遂げるためには、彼は決して性急にまたは力づくで爲さうとはしなかつた。協同と統一との形式を求めるに急で、眞の心の協同と統一とを閑却するといふやうな輕率は、彼の些かでも有する所ではなかつた。あくまで寛厚な忍耐力をもつて彼はこの大事業を押し進めて行つた。そして、終に彼はその目的を果たすことができたのである。

かゝる實際的大事業に携はりつゝある一方、彼はその疲れを知らぬ精力をもつて、一日と雖も缺かすところなく新聞『リューマニテ』に執筆してゐた。この新聞は一寸前に記したがごとく、彼の創刊したもので、かねて彼の政黨の機關紙となり、彼自身その社長を務めてゐたところのものである。そのほか彼は、定期に『初等教育及中等教育評論』並びにトゥールーズ發行の『デペーシュ』紙に書いてゐた。さては、佛蘭西大革命に關する文獻公刊の委員會なぞをも統轄してゐた。ソシャリストの會合に臨席することは勿論であるが、このほか巴里並びに諸地方の諸種の講演會に臨んでは、時事問題を論じ、時としては秀れたる藝術家に關し、秀れたる著述家に關し、その造詣を披瀝することさへ稀れではなかつた。佛語、英語、獨語で書かれたる文藝、哲學、歷史上の新刊書は常に彼の書齋のなかに持ち運ばれた。彼の知的好奇心は、停まる所を知らぬほどであつた。わけて、古典の傑作と佛蘭西文藝の傑作とは絕えず彼の親しんでゐる所のものであつた。こればかりではない、彼は外國の雜誌なぞにまで筆を執ることすら珍らしくはなかつた。あゝ、かゝるなかにあつて、彼は更に五冊の大部な『佛蘭西革命史』及び『佛獨戰爭史』を書いてゐる！『千八百八十五年に於ける社會主義とラディカリズム』といふ長論文をも書いてゐる！彼はまつたくその知識力によつても、人々の心を克ち獲たのであつた！

演壇の人としての彼の活動に到つては、前記したやうな歷史上、哲學上若くは政治上の數々の秀れたる著作や、さては實際運動のうへに於ける目覺しき活躍振りやに對して、優るとも決して劣らないものであつた。むしろこの演壇に於ける活動こそ、彼の公生活の中心をなすものであるとさへ言ふことが能きるであらう。まつたく彼の雄辯は、あらゆる時代、あらゆる邦國を通して曾て聽かれたもののうち最も偉大なるものの一つであると言はれてゐるほどである。彼の聲は力强かつた。その金屬性を帶びた鳴りわたる聲音は、聽くものにすさまじき効果を與へた。その聲は如何なる場所

でも一杯に鳴りひゞいた。彼が青天井の下で、數萬の人を優に收容し得るあのニームの闘技場で語つた時なぞは、最も離れた高い段階にゐた人達でさへ一語も洩らさずそれを聽きとることができたと言はれてゐる。彼にとつては、どんなに廣大な野外劇場でも、大き過ぎると言ふことはなかつたのである。それに、彼の聲は明暗に充ちてゐて、語調の變化を最も鮮やかなものにした。彼の說話の調子とリヅムとは、正確にその思想に伴つてゐた。話しが迫つて來るとき、調子は高められリヅムは速度を加へて來た。話しがあるイメージを現はそうとするとき、聲は嚴肅なものとなつて來、そして話は漸次ゆつくりとなつて恰かも喚び起されたそのイメージの周圍に靜かに搖曳してゐるがごとくに感ぜられた。

彼の雄辯は決して世の所謂雄辯ではなかつた。單なるデモンストレーションではなかつた。それはまつたく人を摑まし、魅了し、率き入れるところのものであつた。それこそは單に彼の演說の內容から來てゐるばかりではなく、實に彼の舌からも來てゐるところのものであつた。彼はまた單に話さんがために話すといふ風のことはなく、たゞ己れのなかに熟りたる思想を傳へんがためにのみ話すといふ風であつた。人々がよく彼を詩人であると評するのはまつたく正しい。彼こそは思想をば正しくつゝむで現れる言葉の衣裳を間違もなく見出してゐる大詩人に他ならなかつたのであるから。——

千九百十四年の七月末日、彼がカッフェ・デュ・クロアッサンで橫死を遂げたといふことは、彼が平素から如何に軍國主義者の有力なる敵であり平和主義者の尊崇して措かなかつた使徒であつたかを直接に物語つてゐる事柄であると言つてよい。彼の一生は、世界の平和の維持といふことの爲めに全部捧げられてゐたと言つても過言ではなかつた。

彼の戰爭嫌厭と平和希求との思想は、既に最初の政治的行動のなかから明かに現はれてゐた。それは彼の最初の講演集や著作集やのなかに隨所に發見することができる。然しながら、世人が彼を目して『平和の權化』となすに到つたの

は、ずつと後年になつてであつて、獨佛の國際關係が再び動もすれば圓滿を缺くやうになり、他方所謂バルカン問題が世界の禍源と見做さるるやうになつた頃からであつた。彼は間斷なく演說に依り著作に依り、或は自國若くは外國の民衆に訴へ、或は時の當局者に迫り、戰爭の勃發の防止については寢食を忘れて苦慮する所があつたのである。

千九百十一年の十二月、下院に於いて二日に亘つて試みた獨佛協調に關する彼の大演說のごときは、彼の非戰論中その最も代表的のものの一つである。彼は、戰爭が今日のごとき文明國民に及ぼす禍害は到底從前のごとき比には非ざるべきことを先づ極力切言した。ケルトやゲルマンやの野蠻時代に於いては、異民族間の戰爭は可成り大規模に行はれたことは事實であるが、その慘禍は、彼等の兵器の幼稚であるだけに、さして驚くほどのこともなかつた。中世紀から近代にかけての戰爭は、それと較べると可成り數も多くなりまた慘虐の度も強くなつて來たが、それとても、そこで用ゐらるる兵力といふものは極めて僅少で、從つて戰鬪も極めて小さなものであるに過ぎなかつた。所が、今日に於いては、戰爭の大規模なることは野蠻時代の民族戰爭とひとしく、國民全體がその渦中に投じられてしまふのに加へて、人類の文明のあらゆる複雜さあらゆる豐富さがそれに捲き込まれてしまふのである。即ち、これ等の巨大なる國民をして、近代科學の發明にかかる破壞の怖るべき器具を使用せしめるわけである。その慘禍の甚大なることは、斷じて過去の歷史にその比を見ざるべきものである。……

ジ・レスは更に論を進めて、現代に於ける戰爭が極めて短期間のうちにその勝敗を決せしむるものと推測してゐる世人の蒙を啓くにつとめた。即ち世人は、動員の迅速なること、軍隊の集中の迅速なること、或は兵器其他の機械の威力の逞ましきこと等から見て、現代の戰爭なるものは極めて短期間のなかに終るべきものとして、戰爭の苦痛の一時的なることを信じやうとしてゐた。然し彼はその反對に「恐怖すべく且殺傷たる格鬪」を明かに豫想せなければならぬこと

を力說した。決して戰爭は一氣には終らない。凶暴なる行動の時期に次いで表面平靜なる時期が遣つて來る、その時期に於いては、戰鬪員はそれぞれ缺けた人員の補充をする、兵糧と武器とを充實する、そして新規の襲撃と新規の殺戮との身構へをする。かくて忽ち凶暴なる行動の時期に移る。その時期が經過すると、更に平靜な補充と準備との時期がくる……

歐羅巴大戰の勃發に先つこと約三年、このジョレスの演說が爲されてあつたことを人々は記憶せねばならぬ。人々は今日彼の正しい識見を今更に理解することができたわけである。そしてまたジョレスが世に行り勝ちのセンチメンタルな空漠たる平和論者と如何にその類を異にして眞に『現實』を如實に看透ほすの士であつたかをも、廣く人々に理解させたわけである。

十四年の夏七月、バルカンの一端に湧き出た雲翳は見る見るうちに歐羅巴全土のうへに——否世界全體のうへに擴がつて行かうとした、この恐るべき危機に際してわがジョレスが脅威せられつゝある文明と民衆とのために率先身を挺して慘禍の防止に當つたことは、今更言ふまでもあるまい。おそらく彼の長い政治的生涯のなかに於いて、この時期ほどはげしい奮闘を現はしたことはなかつたであらう。彼には、數百千萬の人命の毀損とこの文明の覆滅とが、はつきり過ぎるほどはつきりと眼のまへに浮んでゐたのであつたから。

七月の廿五日ジョレスは、リオンの都に近いヴェーズで催された政友の選擧演說會に臨んだ。その席上で彼の試みた演說は戰爭防止の爲めに全力を盡さざるべからざることを切言したものに他ならなかつたが、このヴェーズでの演說こそは、彼が佛蘭西に於ける最後の演說となつてしまつたのである。即ち、彼の凶手に倒れたのはその日から六日目の當日に他ならなかつた。

彼は、墺太利がセルビアに致した脅迫に充ちてゐる通牒が、如何に怖ろしき結果を生ずるものであるかを、豫見してゐた。若し墺太利にしてセルビアの領土を侵すならば、露西亞は墺太利に對して戰端を開くに違ひない。若し露西亞にして紛爭の渦中に投ずるとすれば、墺太利は救ひを獨逸に求むべきことは明かである。しかも獨逸は、この求めに容易に應ずべきことを既に知らせてある。然るに獨逸にして戰爭に投ぜんか、續いて佛蘭西も投ぜざるを得なくなる。おゝ、それこそ歐羅巴の火事たるに止まらずして世界全體の火事となるものである。

この恐怖すべき重大なる局面を轉化せしむるためには如何にすべきか? ジョレスは、佛、英、獨、伊、露等のプロレタリアがその全力を併せて、この慘禍を避けんことを努むるほかには他に有力なる方法はなかるべきことをもつてした。『我々は是等幾千萬のプロレタリアに要求する、彼等の心臟の合致せる鼓動が遂にこの恐るべき凶態を拂ひ除けんが爲めに一致するに到らんことを!』

このヴェーズの演說會の後間もなく彼は白耳義のブラッセルへ政友のジュール・ゲードやロンゲやザムバなどとともに出掛けた。佛蘭西社會黨の名をもつて勞働インタナショナルの各國代表者たちと戰爭防止の最善方法を講ぜんが爲めであつた。七月廿九日その町のシルク・ロアヤルで試みた彼の演說は、前記のヴェーズに於ける演說とともに、彼の偉大にして不朽なる最後の言葉であつたのだ。

彼は先づ獨逸政府の狡猾と獨逸民衆の無力とを烈しく責め立てた。若し獨逸にして墺太利の通牒を豫め知つてゐたとしたならば、かゝる手段を採ることを認めたといふことは到底許されぬことである。若し獨逸の官邊が墺太利の通牒を知らなかつたものとすれば、その痴愚や言語に絶するものと言はざるを得ない。然も一般民衆は、かゝる政府によつてずるずるの間に戰爭に引き込まれ行くのである。

これに反して、佛蘭西には悄むべき主戰論者無きには非ざれども、尠くともその政府と民衆とは衷心平和を希求してゐることは明かであるとなした。『自分は獨佛接近をもつて希願とする者であることには依然變りはないけれども、今日の場合、佛蘭西政府は平和を望んでゐる、といふことを明言する權利は持つ者である』といふ言葉には、烈しい喝采が送られた。(さうだ、閣員でこそなけれ、ジョレスの意見は、最も强く深く時の政府を動かしてゐたのだ!)

然し彼は佛蘭西が止むを得ず情けない役割に置かれやうとすることに反對して、から叫んでゐる。

『若し人々が佛蘭西は旣に露西亞との間に秘密に攻守同盟の條約を結んでゐたことを持ち出して來やうとするものならば、我々は此際佛蘭西は『人道(ユーマニテ)』との間に公然たる攻守同盟を結んでゐたことを持ちださうではないか!』

その演說を終るに當つて、彼は下のごとき豫言的な文句を用ゐてゐる。

『戰爭の始まりに當つては、すべての人々は雷同する。然し、その結果とその慘害が擴がつて來たとき、民衆は當局者に對してかう言ふ。―『失せてしまへ、この野郞共!』と……』

獨逸は、露西亞は、墺太利は、まつたくこのジョレスの言葉通りになつた。……

ジョレスのこの明徹なる豫見とその不屈なる努力とにも拘はらず、戰雲は一日一日とその影を濃くして行つた。然し乍ら、彼は最後まで已れの義務を果すことを擲らうとはしなかつた。如何にしても戰爭が避け得られぬものならば、せめてその範圍と限界とを局限することが彼の義務であつた。一方政府に對しては極力忠告を與へ監視を嚴にするに努めるとともに、他方ペンを執つては連日『ユーマニテ』紙を通して民衆に訴へるのに努めたのである。こゝに、同紙に載つた彼の論說の一部を揭げる。これこそは、七月卅一日、―取りも直さず彼の暗殺せられた當日の『ユーマニテ』紙に載せられた所のものである。―

『……今日に於ける最も大なる危険は、決して事件それ自體のなかにあるのではない。また、それは、假令如何にその罪を惜むべしとしてもかの大臣等の爲した條約の現實の條項のなかにあるのでもない。または、民衆の現實の意嚮のなかにあるのでもない。それは實に、襲ひ來る麻痺のなかにある、擴がり行く不安のなかにある、恐怖と、烈しき不安定と、永きに亘る憂慮とより生じ來る唐突なる衝動のなかにある。かゝる痴かしきパニックに面しては、群集は自然讓歩し勝ちなものである、が、政府はこの場合讓歩せぬかといふと、それは疑問である。政府は民衆に對して一方には脅かし一方には安堵させて時を過すのである。かうして、幾週間かは過ごさせることができる。思ふに、かゝる艱苦なる試錬に抗するためには、人々は鋼鐵のごとき神經を持たねばならぬし、堅固にして明晰且つ冷靜なる理性を持たねばならない。若し吾人にして、人類をして戰爭の慘害より遠ざからしめんが爲めに、眞に己れ自身を律し、このパニックを踏み摧き、麻痺を支配し、人間及び事物の進行を監視することができるやうに望むものならば、今日吾人がその救ひを求むる所のものは實に、民衆の叡知であり、また彼等の思想なのである！』

○

『ジョレスの有つあらゆる天賦のうちで最も根本的である所のものは、眞に人間であるといふことであつた。職業とか、階級とか、黨派とか、概念とかに促はれたる人間ではなくて、完全な、調和した、自由な人間であるといふことであつた。彼は一切をば彼自身の裏に捉へたけれども、自分自身何物かに捉へられるといふことはなかつた。……彼の叡知は『統一』を求めた。また彼の心の情熱は『自由』を求めた。この二つの本能が、一黨派の專制といふことからも、また、無政府狀態といふことからも、彼を遠ざけしめた。彼の精神は實にあらゆるものを抱擁することを求めたので

あつた。しかもそれは、束縛しやうといふ爲めにではなく、それを調和させやうといふ爲めであつたのだ。……」

ロマン・ロランが『ジャン・ジョレス』の一文のなかで書いてゐる是等の短かい言葉は、ジョレスのイメージをいみじくも精巧に彫り出してゐると言ふことができる。まつたくジョレスの一生は、戰ひの一生ではあつたけれども、その戰ひは他を討つが爲めの戰ひではなくて、他を討つことなきが爲めの戰ひであつたのだつた。統一と自由との爲めの戰ひに他ならなかつたのだつた。生命の至高なる二つの流れの爲めの戰ひに他ならなかつたのであつた。

ジョレスが、單に一個の職業人でないことは、既に前に示した通りである。彼は、哲學教授でもあり、議會の鬪士でもあり、新聞記者でもあり、實際運動の指揮者でもあり、さては歴史家でもあり、著述家でもあり、文藝の深き鑑賞家でもあつた。世人はゲェテが偉大なる詩人であり哲人であり更に生物學者であり鑛物學者であり、加へて政治家でもあつたことに、感嘆の眼を向けてゐるけれども、到底わがジョレスの有つた博い世界には及ぶべくもないことを自分は感じる。そしてこのジョレスの超職業的なる經歴こそ、そのまゝに、ジョレスの裏にある博大なる心の世界を表現してゐるのであつた。かうして彼はある職業に屬する者たちの味方でもないし代辯者でもなかつた。彼は實にあらゆる職業の爲めの――あらゆる人間の爲めの味方であり代辯者であつたのだ。

彼はある職業に捉はれなかつた許りではなく、またある階級に捉はれるの人でもなかつた。彼は勿論プロレタリヤ階級の爲めに身を挺してその開發と擁護とに當つたことは言ふまでもないけれども、それは決してプロレタリヤ階級それ自身の利益の爲めを慮つてではなかつた。かゝる階級を超えて更にその奥に存する『人道（ユーマニテ）』を慮つたが爲めに他ならなかつた。虐げられ、脅かされつゝある今日のプロレタリヤ階級を救ふことが、やがて悩める『人道（ユーマニテ）』全部を救ふの途であることを信じてゐたからに他ならなかつた。プロレタリヤ階級の獨裁とか專制とかいふがごときは、彼の些かも豫

想する所のものではなかつた。若しプロレタリヤ階級にして『人道（ユーマニテ）』の進展の爲めの障碍を來すがごときことありとせば、かゝることは容易に豫想し難きも、何等の躊躇なく彼はプロレタリヤ階級を去りて『人道（ユーマニテ）』の味方たらんことを期するの人であつた。この點に於いてジ・レスは世の滔々たる左傾思想家連と甚しくその類を異にするものあるを見るのである。

ジ・レスのかゝる思想を最も明確に知り得るのは、蓋しかのドレフュース事件の當時である。

ドレフュース事件といふのは、多くの人々の知るごとく、千八百九十四年參謀本部附の砲兵大尉ドレフュースが、軍用の機密書類を獨逸に賣つたといふ廉で、軍法會議に附され島流しを宣告さるゝに到つたのを、その發端とする。然るにドレフュースの所刑は全然猶太人排斥派の陰謀にかゝるものであつて、彼がアルサス生れの猶太人であるといふことがこの冤罪を招くに到つたのであることが、種々の點から立證せらるるに立ち到つた。然しながら、當時の內閣並びに上院は、判決破棄、裁判再審の要求あるもこれを拒絕するに到つたので、彼の無罪を主張する者等は强力輿論を煽るにつとめ、殊に文豪エミール・ゾラのごときは『予は告發す（ジヤキユース）』と題する宣言を公にして、公然と陸軍側に對し挑戰するなぞ、次第次第に佛蘭西全體がこの事件のなかに捲き込まるることとなつたのである。ドレフュザール（ドレフュース派）に對して、平素から猶太人排斥を念としてゐる保守黨や加特利黨のものは國權主義者や、將校團なぞとともにアンチ・ドレフュザール（反ドレフュース派）を形作り、かくして佛蘭西民衆は二つに分れるといふがごとき情勢を呈するに到つたのであつた。

このドレフュース事件の當時、佛蘭西に於ける一般のソシャリストはこの事件に對して如何なる態度を採つてゐたかと言ふと、それは甚だ冷淡を極めてゐて、それはかゝる事件に容喙するを快しとしないと言ふ風であつた。即ち、ある者は公然宣言した。『それは何もプロレテエルに關したことではない。ブールジョアのことはブール・ジアにまかせて置

けばいいさ！』更に或る者は肩を聳やかして言つた『それは陸軍の大尉殿だから問題になつたまでさ。若しそれが一働者のことででもあつて見ろ。もうとうに世の中から忘れられてしまつてゐらあな！』かくのごとき一種の強い階級反感はふかくソシアリストの群に滲みこんでゐた。從つてソシアリストがこの事件に對し、直接且有力なる行動に出づるといふがごときことは、殆んどこれを期待し得べくもなかつたのである。

然るに當時三十餘歳のわが若きジョレスは、敢然として起つたのである。彼の先輩にして同志たるジュール・ゲードが、この事件について世人の口にする權利(ドロワ)とか正義(ジュスチス)とかいふがごときは畢竟キヤピタリスト社會に於ける空しき言葉たるに過ぎないと宣言し、かゝる論議は何等プロレタリア階級の興味を惹かぬと述べたのに對して、彼は遂に起つて厳粛なるプロテストを吐露するに到つたのである。自分はいまこのプロテストの全文をこゝに譯載する餘裕はないが、その最も重要なる箇所を書き記すことにしやう。

『……若しドレフュースが不法に所罰せられ且又實際彼が冤罪であるとしたならば、彼は最早一箇の士官でもなく、一箇のブールジョアでもないのである。彼こそは慘めなる不幸によつて、階級のあらゆる特質を剝衣せられた者なのである。彼こそは、想像し能ふ限りに於いて最も憐むべきまた最も絶望の淵にのぞめるユーマニテそれ自身に他ならぬのである！……彼は最早指導者階級の人間ではなくなつてゐる。卑法なる野心によつて、彼のために合法と眞實とを示すことに躊躇してゐるところの指導者階級に屬する人間ではなくなつてゐる。彼は最早、最も痛苦なる苦しみに泣く人類の一實例たるに過ぎない。彼こそはまつたく、軍國的虚僞、政治的卑劣、並びに、權力の罪惡の生きたる證據なのである。……

我々は、我々の主義に牴觸することなしに、また、階級闘爭を否定することなしに、我々の慈悲心の叫ぶ聲をば聽く

ことができるのである。また我々は、革命の戰ひのなかに於いても、人類の愛情を保護することができるのである。我々は決してソシァリズムの埒内に閉ぢ籠つてゐるためには、ユーマニテの外に逃がれ出なければならぬといふ風には創られてゐないのである。……』

ジョレスは、實にかくのごとくプロレタリア階級を見、『人道(ユーマニテ)』それ自身を見て來た。自分は、彼のプロレタリア階級擁護が、如何に深い理性と感情とから來てゐるものであるかを示す更に恰好なる例として、矢張その當時發表した言葉を左に書き記すことにしやう。

『……今後に於ては、思想のなかに社會力を與へることのできるのは、唯一つの階級しかあるまい。即ちそれはプロレタリアの階級である。何等の特權をも持つてゐないその階級、マルクスの言葉に從へば鐵鎖のほか失ふところのないその階級は、如何なる眞實(ヴェリテ)をも怖れることはない筈である。何となれば、あらゆる眞實は彼等に用立つのであるから。陳腐な誤つた概念をば粉々にするあらゆる自由批評なるものは、彼等の蹶起を用意するのである。

また、勞働者の階級を眞實へと運んで行く本能的な理想主義は、その深い利益とも合致するものである。即ち、プロレタリア階級のなかには、奴隷的な仕事のために壓しつぶされ、また、ブールジョア階級の偏見のために碍げられてゐる數多くの頭腦があるのである。勿論、プロレタリア階級以外に於ても、眞實をばあらゆるものの上位に置く豪膽にして不屈なる思想家はある。然しながら、全體としては、プロレタリヤ階級のみが眞實と完全の調和をば形作るのを見る。眞の知識階級なるものは、假令彼は自身氣付かずとも、勞働者階級自體を意味する。これ、彼等には虛僞の必要がまつたく存しないからである。』

見よ、ジョレスにとつては、プロレタリア階級の蹶起は決してその階級の利益のためといふのではなくて、眞實(ヴェリテ)それ

自身のためであつた。人類全體の利益それ自身のためであつた。あらゆるものの上に眞實を置き、人道を置いた。從つて、彼を所謂ソシアリストの形のなかに入れ、若くは、プロレタリア階級の代辯者の部類に置くことは、必しも正しいことではない。彼は寧ろその以上であつた。眞實それ自身、人道それ自身であつた。

階級鬪爭の眞實の目的を上のごとくに觀じてゐるわがジョレスが、嚴格なる意味で決してある階級の代辯者ではなかつたのと均しく、彼はまた決してある黨派の代辯者でもなかつたのである。彼の思想及び行動がある一定の階級に專屬してゐるものでなかつたがごとく、またある一定の黨派に專屬してゐるものでもなかつた。

彼が、ある黨派に屬するものではないといふことの證左は、最も明らかに彼の社會黨統一の努力と、その統一後社會理想に向つての更に新たなる努力との歴史にこれを見ることができる。

當時佛蘭西に於ては、勞働者若くはソシアリストは無數の黨派と集團とに分れて互に睨み合を續けてゐた。思想の些少の相違が利害の僅少の牴牾が甲を乙と分ち乙を丙と離してゐた。そして孰れも已れの思想と利害とをもつて最上の信條となしてゐた。コレクチヴィストはコムミュニストを罵つてゐたし、ゲディストはブランキストを嘲つてゐたし、さては、南部(ミヂ)の地方の硝子職工たちは北部(ノール)の地方の百姓たちを輕蔑してゐた。『世界を改造しやうなどとするまへに、先づおまへさん自身をちやんと造つて置け』といふやうな非難が、心ある者のなかから起つてゐたほどであつた。彼自身の言葉に所謂『全人道』の實現を念としてゐるジョレスにとつて、この群雄割據は何としても許し難い痴愚であつた、社會主義を國家的且國際的に偉大なる現實の政治力とたさしめる爲にも、この小黨分立の勢は矯正せられねばならなかつた。ソシアリストの統一(ユニテ)は何よりも先決問題であつた。

「……こゝに瞬時も忽せにするを有されぬ問題が我々の眼前にある。佛蘭西の社會黨の統一を圖るといふことだ。それは

決して專制的なひからびた統一を云ふのではない。ソシアリストの種々な組織は維持することもできるし、また是非維持しなければならぬものではある。然し、何時でも共同動作をするために仲善く手を握ることができるやうにはなつてゐなければならない。…コレクチヴィストもコムミュニストも總て同じ社會理想を抱いてゐるわけだ。たゞ違ふのはそのタクチックあり、その戰鬪方法であるに過ぎない。……』

既に千八百九十七年に此等の言葉を書いて社會黨の統一の必要を絶叫してゐるジョレスは、多大なる困難と戰つた末遂にその後數年にしてかの佛蘭西社會黨の大團結を樹立するに到つたのである。

數多い黨派を結合してこの新らしい統一を爲し遂げることが出來たジョレスは、今やその新勢力を用ひて『全社會主義的理想の高きインスピレーション』(ジョレス自身の言葉)の實現を圖るに取りかゝつたのである。ソシアリストの統一のために戰つた時代を、ジョレスのソシアリストとしての活動時代の第一段とすればこの高きインスピレーションの下に戰つた時代をその第二段と見ることができよう。彼は明白に『プロレタリアの革命の目的は、畢竟するに人道を創造するのにある』と宣言して、この統一されたるソシアリストの黨派を、更に高所に昇揚せしめて解放せんとしたのである。

然も、かゝる偉大なる活動にも拘はらずジョレスを目して社會黨の首領と見ることは、必しも當つてゐない。ジョレスは既に、彼の望む統一が專制的で且ひからびてゐる統一ではないことを――生動しつゝある統一でなければならぬことを、明言してゐる。そのジョレスが、專制的な命令を下すべき首領であり得ないことは言ふまでもないことである。

彼は、單にその一人の同志たるに過ぎなかつたのだ。たゞ、その高き德性とその深き知力とに依つて、自ら千萬人の心を獲るに到つたのである。誰かも言つてゐるやうに、彼は實に獨裁政治の唯一つの形式をしか知悉してゐなかつたのである。――叡知と良識と心情との獨裁政治の形式を!

○

ジョレスの翹望せる理想が要するに全人道(ユーマニテ・アンテグラル)にあつたことは、既に前に述べた。彼にとつては、社會主義なるものはただこの目標に達するに避くべからざる途であつたに過ぎなかつた。更に淨らかなる山頂に達せんとする人類の大なる努力を意味してゐるのに外ならなかつた。それ自身が決して目的でもなく目標でもなかつたのである。

かくのごとく高遠なる理想主義者であり淸純なる人道主義者であるジョレスが、祖國(パトリイ)なるものを如何に見てゐたかは、最も興味ある問題である。世人の多くを見るに、理想主義者、人道主義者は、殆んど常に國際主義者であり、非愛國主義者である。また、愛國主義、國家主義を念とする者は、殆んど常に現實主義者であり、非人道主義者である。この兩者は到底並び立つを得ないもののやうに見られてゐる。然らば、わがジョレスは、かゝる世の例に洩れず所謂國際主義者でありまた愛國主義に反對する論者であつたか?

この點を說くに當つて、直ちに自分の念頭に來るものはピエール・ルノーデルがジョレスについて書いた一文のなかに出てゐる彼の逸話でなければならない。

それは、ジョレスの晩年のことであつた。ある時トゥールーズの町に集會があつたので巴里からそこまで出かけて行つたことがある。そこの知合の家に宿をとつた翌くる日の朝、彼はひとりで庭の小徑をそゞろ歩きしてゐた。――兩手を後ろに組み如何にも好々爺らしい恰好をして。たちまち、彼が高い聲でかう獨りごとを口にしてゐるのが、家の人たちの耳にはいつて來た。

――あゝ!佛蘭西人に生れて、わしは何といふ仕合せだらう!

彼は、己れ自身の高い聲にびつくりして、附け加へて言つた

――あゝ！ とんだこと、こんなに高く喋べるなんて何んてわしは間拔けなやつだ！

この逸話は、ルノーデルも言つてゐるやうに、彼の誠實と高貴と素朴との魂をありのまゝに見せて與れる氣がするが、更にまた、彼の思想の傾向を直截に語つてゐる何よりもいい證左として追憶せざるを得ない。彼はまつたく祖國の愛に燃えてゐる人間であつた。おそらく、人類愛に燃えてゐると同じ强さで愛國の熱情に燃えてゐたのだつた。佛蘭西の血が、彼の全心臟に常に炎となつて燃えてゐたのだつた。

更にも一つルノーデルによつて語られてゐる逸話がある。彼が非業の死を遂げる數日まへにブリュッセルのメーゾン・デュ・プープルに於て彼は演説したことがあつたが、彼の姿が演壇に現はれるや、割れるやうな拍手喝采が續いた。彼は、それについて前記のルノーデルにかう語つてゐるのであつた。

『わしが順番になつて演壇のうへに立ちあがると、わしを迎へて與れるすさまじい喝采の聲といふものはかうなんだからね。――佛蘭西萬歳（ヴイーヴ・ラ・フランス）！佛蘭西萬歳（ヴイーヴ・ラ・フランス）！とな。』

かう語るジョレスの顏には、隱さうとはしない善良な滿足の微笑があつたのである。

ジョレスの一身のなかに人類愛の思想とともに合流してゐるこの祖國愛の思想は、畢竟、彼の盲目的な本能の力傳統力の眼覺めに歸すべきものであらうか？ それとも、單なる詩人風なる感情の現はれたるに過ぎないものであらうか？ 博大なる人格の有つその抱擁力の大いさのたま〳〵然らしめたために他ならぬのであらうか（たとへばかのゲェテのごとく）？

孰れもそれ等の説明は當つて居らない。彼の祖國愛の思想こそは、決して單なる本能から傳統力から感情から來たも

のではなくて、一段合理的なる一段高遠なる理想から必然的に生れ出てゐるのに他ならぬのであつた。それには、先づ彼が千九百十年の末に刊行した『新らしき軍隊』と題する著書のなかに書いてゐる次のごとき言葉を見よ。この祖國愛と人類愛との合流の自然さが、最も正確に最も端的に言ひ現はされてゐるのを人々は見ることができやう。——

『少量の國際主義は、祖國より遠ざかる。されど多量の國際主義は、祖國へと近付き來る。少量の愛國主義は世界より遠ざかる。されど、多量の愛國主義は、世界へと近付き來る。』

この數行にも足らぬ言葉のなかに、ジ・レスの最も光輝ある思想の結晶がある。そして、あらゆる人々にとつての最も永遠なる眞理もこゝにある。わけて現代の人々にとつては何よりも高貴なる教訓がこゝにある。

(たまたま自分は、數ケ月まへに發行せられたある雜誌のなかで、獨逸の平和主義の團體たる獨逸人權同盟 Deutsche Liga für Menschenrechte のポスターの寫眞をば見出した。そのポスターの四隅にはそれぞれ斜めに人名が書かれてある。上欄の左の端にはカントと書いてある。右の端にはゲエテと書いてある。下欄の左の端には耶蘇基督と書いてある。そしてその右の端にはジャン・ジョレスと書いてある！ そしてゲーテとジ・レスとをつないでゐる所を大きな文字をもつて、ジ・レスの言葉が獨逸語で拔かれてある。即ち、『パトリオチスムス(愛國主義)はナチョナリスムス(國家主義)となる。然し、多量のパトリオチスムスはインテルナチ,ナリスムス(世界主義)となる。』といふ言葉がそれであつた。)

ジ・レスのこの光輝ある思想が、最も周到に展開せられたものは、千九百五年に彼が書いた一文のなかに見出される。彼は言ふ。——

『……何といふ愚鈍で下等な悲憤慷慨說であることか！ 愛國心といふものは『佛蘭西を熱狂的に好愛する』といふことだと、渠等は言ふ。大きな間違ひだ。愛國心といふものは、佛蘭西人にとつては、佛蘭西をよく知るといふこと——即ち

彼女の特質を、缺點を、彼女の德性を、不德を、彼女の光を、暗を、よくよく知るといふところにあるのでなければならぬ。彼女の缺點を矯め、彼女の不德を匡し、彼女の暗を追ひ拂ひ、そして人道（ユーマニテ）の全部の進歩のために、彼女の特質と德性と光とを增さんことを所期するにあるのでなければならぬ。佛蘭西人には、爾の義務は熱狂的に佛蘭西を愛することにあるのだと言ひ、獨逸人には、爾の義務は熱狂的に獨逸を愛することにあるのだと言ひ、英吉利人には英吉利を、伊太利人には伊太利を、支那人には支那を愛することだと言ふとしたならば、これ、あらゆる國民のなかに、盲目と自負と不正と竝びに暴力との偏狹心を生ぜしむることに他ならぬのではないか？あるものに對して故らに依估贔負するといふことは、畢竟その他のものに對して劣等なる權利しか認めぬといふのである。これこそ、あらゆる加害あらゆる汚行の原となるものである。また、これこそ野蠻なる國家主義者の原則となるものである。……かくのごとき憐れむべき愛國主義者にとつては、佛蘭西を愛しきたそれに仕へる爲めには、その國を『他よりも愛する』といふことが是非必要なことなのである。――即ち、他の國民を低く見るといふこと、更に、人道（ユーマニテ）の他の偉大なる道德力を低く見るといふことが、是非とも必要なことなのである。

然しながら、眞の愛國主義（パーリオチスム）といふものは、自由と正義とに於けるあらゆる國家の均しい權利をいふべきであり、また、自由と正義との力を已れの國家のなかに增殖すべきあらゆる市民の義務をいふべきである。……』

ジ・レスが祖國佛蘭西を愛したのは、實にこの意味に他ならなかつたのだ。彼女のなかに生動して止まない自由と正義との光が、廣く人道（ユーマニテ）の前途を照明すべきことを、彼は心から信じてゐたのだ。所謂愛國者連中が我物顏に取扱つてゐるオフイシアルな佛蘭西ではなくて、誠實と寛容との底深い佛蘭西をのみ、彼は見てゐたのだ。――佛蘭西の淨らかなる『民衆』をのみ彼は見てゐたのだ。

彼の佛蘭西讃頌の言葉は、この故に、實に美くしい。それは、盲目的なる感情の聲ではなくて、清澄なる叡知から湧き出づる聲であるからである。

千九百十年、下院に於いて試みたる非宗教學校(エコール・ライク)の演説のなかで、彼は、如何なるものが佛蘭西の知的竝びに道徳的の財産をば形成したかを説いて、佛蘭西民族の光榮と生命とを高からに宣言してゐる。——

『……ジェラール・ヴァレ君は、いつか、我々は希臘文化の後繼者であると言つたことがある。が、單にかゝる文化のみではない。なるほど、我々は、希臘文化から、法則と韻律と衡平と竝びに自由なる美の讃仰とを享け繼いではゐる。然しながら、自分は、希臘の傳統のみがわが佛蘭西の偉大なる力の唯一の源泉であるとは信じない。更にそこには東邦(オリアン)の傳統がある、基督教の傳統がある。若し我々にして、これ等の偉大なる猶太人等の誠實をばわが佛蘭西の良心のなかに結び付くることを敢てしなかつたならば、我々の損失は幾許なりしやを知らない。彼等猶太人等こそは、實に、正義をば美の一階調(アルモニー)として思惟して居つたに止まらず、更に、彼等の全良心を擧げて熱烈にそれを希求してゐたのであつた。慘虐のあらゆる暴力に抗して正しき神を喚び求めてゐたのであつた。あらゆる人々が正義のなかに融け合ふ時代を、——かのダヴイデ王と豫言者との傑れたる言葉に適へば、『あらゆる顏に流るる涙を消し拭ひ給ふべき『神』の現はるる時代を、喚び起したのであつた。

あゝ、この人類正義に對する熱烈なる希求こそ、このヘブライの良心の誠實こそ、希臘思想の優婉と力と理性とに混り合ふて、わが佛蘭西民族の血のなかに融け入つたのである!』

ジョレスは、かゝる佛蘭西をこそ限りもなく愛したのであつた。かゝる祖國を持ち得たことを限りなき誇りとし欣びとしたのであつた。寔にかゝる祖國の存在とその進展とこそは、取りも直さず人道(ユーマニテ)の高き發顯を豫約するものでなくて何

であらう！彼は實に、祖國を通してはじめて人類に徹し得た所の人であつた。近く訃報を傳へられたモーリス・バレスは、――ジョレスとは議院に於いて椅子を並べたことのある、あの有名な文學者で且政治家であつたバレスは、多くの人も知るごとく、自己から民族へと開展して行つた人であつた。自己のなかに湧き立つ民族の聲を聽き知つてから、極端なる個人主義者より典型的なる祖國主義者へと轉移して行つた人であつた。然し、バレスの心の展開は、民族の――祖國の發見で、ほとんど止んでしまつた。彼は終に光榮ある愛國主義者の域から出づることなくしてその一生を閉ぢるに到つた。然るに、彼に先んじてその一生を終つたわがジョレスは、バレスが更に解かうともしなかつたその民族、その祖國の聖らかなる秘密を遥か以前に解き明かしてゐたのではなかつたか？バレスが自己のなかに民族の聲を聽いたやうに、ジョレスはその民族のなかに更に人類の聲を聽いたのではなかつたか？

かゝる知性とそれから生るゝ熱情をもつて祖國を見更に人道を眺めて來たジョレスにとつては、偏狭で利己的なショーヴィズムの愛國主義者が憐れむに堪えたものであつたことは言ふまでもないが、同時に、徒らに空漠でユートピア式な國際主義者も亦輕侮に値するものでなければならなかつたことも言ふまでもないことであつた。

彼は、前述した『新軍隊』の著述のなかで、マルクスとエンゲルスとの有名な共産黨宣言のなかの文句、――『勞働者には祖國はない』といふ誰もが知る文句に非難を加へて、かう言つてゐる。

『……この文句は、單に感情的な頓智に過ぎない。まつたく前後撞着の答辯で、また、誤解の基をなすものであるに過ぎない。見よ、現にブールジョアの愛國主義者は、共産主義者を攻撃するに祖國の破壞者をもつてしてゐるではないか……』

またジョレスは、アナトール・フランスがその名著『ジャンヌ・ダルク』の序文のなかで、祖國といふものは單に土地の所有者にとつてのほかには意味もなく價値もないものであるかのごとくに書いてゐるのに對し、かゝる思想は誤謬に過

ぎざるものであると強く反駁してゐるのを見る。かくのごとく祖國を目するに、一階級の專屬的なる財產となすことは、敢へてフランスを俟たずとも、世の所謂急進的なる國際主義者の間に多く見らるる言說である。然しながら、ジョレスにとつては、祖國の意味と價値とは、かくのごとく狹隘でまた物質的なものでは斷じてなかつた。彼は、フランスの言葉を驅して、ジャンヌ・ダルクが神意を受け血をもつて守護したところのものは、決して單に佛蘭西の土壤のうへに存する佛蘭西の農夫等の權利ではなくして、實にあらゆる佛蘭西人――農夫も、市民も、職工もの、佛蘭西の偉大を形作るあらゆる人々の權利にあつたのである、と切言してゐる。前述の『新軍隊』のなかに於いて、彼は次のごとく美くしい言葉を書いてゐる。――

『この田舍の貧しい少女は、已れの周圍にゐる農夫たちの惱みと苦しみとを見たのであつた。然し、彼女にとつては、この災禍こそは、更に深く更に廣き惱みの到來を豫報するものに他ならなかつた。――奪はれたる王位の惱み、襲はれたる國家の惱みの到來の豫報に他ならないものであつた。彼女の心のなか、彼女の思慮のなかには、地方もなく、また土地の所有もなかつた。彼女は、ローレーヌの野を越えて、杳か彼方を視つめてゐた。田舍娘の彼女の心は、あらゆる田舍の事物より遙かに偉大であつた。彼女の心臟は、遠くから、異邦人によつて掠奪せられてゐる善き町々と一緒に脈搏つてゐたのであつた……』

あゝ、ジョレスのこれ等の言葉は。そゞろに自分をして、あの『草の葉』の詩人のことをこゝへ想ひ浮ばしめる。あの草の葉のかすかな顫へのなかにも『神』の偉大なる吐息を感じたといふ亞米利加の詩人ホイットマンの細かにして廣い心を想ひ浮ばしめる。そう言へば、ホイットマンの詩のなかに現はれてゐるかの亞米利加に對する愛情と、更にそれを超えて人類を世界を、さては宇宙を思ふ熱望とは、言ふまでもなくこのジョレスのうちに最も明らかに示されてゐる姿で

はないか！

最後にかゝる彼の思想を、彼の言葉によつて、重ねてこゝに要約して置かう。あゝ、それこそは、わけて誤解と敵對とのために八つ裂きにせられてゐるこの苦艱に充ちた世界を悲しむ者にとつての、二とない戰ひの合言葉となるものでなくて何であらう。我等はそれを再度三度繰返へすこととしやう。

『眞の愛國心とは、あらゆる國々が自由と正義とに與かる均しい權利を意味するのである。自國を愛して自國に奉仕するために、他國を――人類の他の大いなる道徳的勢力たる他國を誹謗せなければならぬとする者は、何たる憐れなる愛國者であることか！』

○

ジョレスがアルビの高等學校竝びにトゥールーズの大學で哲學を講じてゐたことは前に言つた。また、彼に『感覺世界の實相』La Réalité du monde sensible といふ哲學上の著述があることも前に言つた。

若し、ジョレスがその光彩ある政治的生涯に入るまへに、かゝる學究的の生活をしてゐたといふことが、單にその對照の奇異さに於いて人々の興味を牽くに過ぎないものならば、自分はこゝにその方面の彼を描き出さうとはしなかつた筈である。自分がわざわざそれを敢てしやうとしたのは、彼の政治的生涯をも引括めた一切の彼の内的竝びに外的の生活が、實に彼の哲學、――殊にその論文『感覺世界の實相』のなかに、緊縮せられてゐることを感ずるに他ならぬからである。即ち、彼の生活は、彼の美くしき哲學に剩す所なくその根を下してゐる。その哲學を離れて彼の生活は全くなかつた。その哲學を理解することなくして彼の生活を理解することは、何人にとつても不可能であるべき筈であるこ

を、自分は深く信ずるからに他ならない。思ふに、彼位その哲學をその實生活に近付けた者は、曾て無かつたであらう。否、彼は、哲、學をそのまゝに實行したのだつた。彼の生活と哲學との間には何等の間隔もなく何等の無理も破綻もなかつた。兩者は最も完全な形で抱き合つてゐた。自分は廣く歴史を訪ねてもかゝる典型を、わがジョレス以外に探し得るであらうか否かを怪しむ。尠くとも彼は、數百年の長き年月を經ることなしには到底この地上には生れ出づべくもない貴い典型であることだけは、憚りなく確言し得るところである。

ジョレスの哲學思想は、強いてこれを分類すれば、進化的汎神論とでも名付けることができるかも知れない。然しながら、かゝるアカデミックなる分類は、充分彼の豐かにして美くしき哲學思想を盡すものではない。寧ろ彼の哲學思想は、ベルグソンなぞの夫れのごとく、哲學と詩との抱合であると言はなければなるまい。精神の自發的な創造こそ、彼の哲學の核心をなすものであるが、それは取りも直さず詩それ自身ではなかつたか？現に彼は『詩とは即ち眞理(ヴェリテ)のことである』と明かに言つてゐるのを見る。

この精神の自發的なる創造の根本的の範式は何かと言へば、『統一(ユニテ)』である。即ち、經驗なるものは、我々を事物の限りなき複雜及び變化のまへに立たせる。然るに精神は、この複雜と變化とを統一する。この統一の觀念こそ、ジョレスの哲學思想を支配する內容である。彼は言ふ。――

『統一の必要こそは、人間精神の至深至高なるものである』

自然のなかに破綻なきが如く、人生のなかに於いても破綻はない。一切のものは一切のもののなかに存在する。一切は一である『時間のあらゆる瞬間は、その後に來る瞬間のなかに無限に響きわたる。而して精神は、一飛びに數世紀を飛び越えながら、なほその立ち去りしまへの古き姿を再現する』。最早生と死との間には深淵はない。何故となれば、『死

は生と交り合つてゐる』からである。『偶然が法則に交り合ふやうに、自由は必然に交り合ふ』。『我々は、一部分は偶然の世界に住み、一部分は法則の世界に住むのである』。

かくのごとくして彼は、萬有の概念のなかに、統一の意義と生命の意義とを諧調すべきことを見出すに到つたのである。この萬有の統一は、均しく萬有の滲透(ペネトラシオン)を生み出して來る。事物と事件とは相互に滲透し合ひ相互に牽引し合ふ。ここに、ロマン・ロランが『何人も感動なしには讀めない、不滅なる頁』と評してゐる文章がある。この萬有の統一、萬有の滲透を說くと言ふも、まさにそれは一篇玉のごとき詩であり莊嚴なる管絃樂である。――

『世に反響なき活動なるものはあることなく、我等が外部の世界のうへに行爲するその範圍に於いて、世界もまた我等のうへに行爲すべきものなのである。而して、若し我等がそがなかに滲透せんことを努むれば、世界もまた我等のなかに滲透し來るのを見る。我等は、この大地を踏みながら、大地自身のごとく靜かに且深い喜びに打たれる時が屢々ある。……あゝ幾度自分は、野を越え小徑を辿りながら、不覺獨語してゐたことであつたらうか、――自分の踏み居るは大地なること、自分はその大地に屬するものなること、而してその大地もまた自分に屬するものであるといふことを。やがて自分はそれに思ひを遣るを止め、更に歩を緩めて進み行く。蓋し、地上を急ぎ行かざるべからざる苦しみもなかつたし、また、一歩毎に自分は大地を感覺し且その大地を全部所有もしてゐたし、また、自分の魂も、言はゞ、深きがなかを辿りつゝあつたがために。あゝまた幾度、日の暮れ方を自分は溝のうしろに身を臥せて、軟らかき緑いろの東邦(オリアン)の彼方を打ち眺めては、不覺强き物思ひに打たれたことであつたらうか、――大地は旅ゆきつゝあるといふこと、また、大地は晝の疲れと太陽の限れる地平とより逃げ出て、すばらしき力をもて今し靜かなる夜と果て知らぬ地平とを目指して赴きつつあるといふこと、さては、大地は自分をもともに伴ひつゝあるといふことを。

かくして自分は、わが魂のなかに於けるがごとくわが肉のなかにも、また、わが肉のなかに於けると均しく大地のなかにも、この旅の震へを感じたのであつた。自分は、この動きもなく起伏もなく囁きもなく自分のまへに展がつてゐる青色の空間のなかに、一の奇異なる物軟らかさを見出した。あゝ、我等の肉と大地とのこの結合は、我等の眼尖と星輝ける空との覺つかない空漠としたる交渉にくらぶれば、何といふ深く且大きなものであるであらう！若し我等にして、星空の夜を眺むるとき、同時にそれが大地に結び付けられてゐるものであることを感じなかつたならば、我等の眼にさまで美くしく映るわけには行くまい。…………』

この萬有の相互の滲透こそ、世の事物を限りもなく美くしくし、また、限りのない變化を與へるものなのである。彼は、それを說くに、次のごときすぐれたる章句をもつてしてゐる。あゝ、それこそ、取りも直さず、たとへばあの『詩技』のなかで詩人ヴェルレエヌが歌つた

『しらべより外は何せむ、
たゞ陰のみぞ、色にあらず、光にあらず、
あはれ、しらべ、そは笛と角、
夢と夢とを愛で和し結び合さむ』
（蒲原有明氏譯）

の有名な詩句にいみじくも通ふものではないか？　自分は、今更に彼の哲學が限りなく美くしい『詩』でもあることを痛感するを禁じ得ないのである。その章句に言ふ。——

『光耀が黃昏を磨き立てながらにそれに混り合ひ、黃昏が光耀を優しく慰め、さては日が月光の仄なき色のなかに夜とともに融け合ふことを、ふせぎ妨ぐる光りの性質のなかには、何等採るべきものがない。若し、空間が一切の等差を、一

切の結合を現はすべきことを光りに許さなかつたとしたならば、若し、伸び擴がれる容貌が生々せる光りによりてその一點毎に種々に飾られたる力の多種多様なる姿をば表はし出すことをしないとしたならば、この世界は空に單に一つの光り、單に一つの價値をしか有さぬものとなり終るのほかはないであらう。……』

ジョレスの見る世界は、夢見る詩人の眺むる世界のごとく、朧ろげな、不可思議な、幻と現との煙り漂ふ『黄昏』の世界であつたのだ。世界を單一な價値に見ること、――たとへば、唯物史觀のみをもつて世界を眺めてゐたマルクスのやうに、――さては、世界を單一な光りに見ること、――たとへば範疇的命令（カテゴリッシェ・イムペラチーヴ）の聲のみをもつてこの世の眞の光と解してゐたカントのやうに、――は、ジョレスにとつては、孰れも偏狹なる『謬誤』であつた。それは、明快であるかも知れない。然し、決して壯美なる世界をなすものではなかつた。世界そのまゝの姿を表はすものではなかつた。世界そのまゝの姿とは、言ふまでもなく、混亂ではない、それは美事なる統一と相互の滲透とによる朧ろなる境地である！

彼は更に言ふ。――

『頭腦は何物をも發明はしない。唯それは正確なる運動を續けてゐる宇宙のミリウのなかに沈められるのである。……意識はあらゆる耀きの顫律が轉移し行くその後にしつかと付き添ふて行く。光線と色彩とに適應する頭腦の運動は、單に、人體組織のなかにエーテルの顫律を延長せしめるに過ぎない。……頭腦は萬有（ユニヴェル）によつて、また、その萬有を動かす諸運動の正確なる形式によつて『滲透せしめられる。即ち、頭腦は、萬有自體（ユニヴェル）の一部となる。宇宙の無限と同じ材料をもつて、また同じ活力をもつて、作られることとなる。從つて、頭腦に結び付いた意識――良心といふものは、世界から孤立したところのものではなく、反對に、世界に結び付いてゐるものである。』

ジョレスの言ふ統一は、かくのごとく動きつゝある生きつゝある統一であつて、死せる氣力無き統一ではなかつた。

絶えず進化して止まぬ統一、絶えず創造して止まぬ統一、——運動と生命とに溢るる統一、それがジョレスの確信せる統一であつた。

『……自分は、萬有（リユニヴエル）を、多くの勢力及び魂からできてゐる巨大なる社會として思惟することが能きるものと思ふ。これ等の勢力、これ等の魂は、善と惡との間を喚びかけられつゝ、しかも矛盾と艱苦の底より、霽らかなる生命の圓滿無碍なる境地を指しつゝ、この世界に於いて永遠に亙つて與へらるる諸々の原素、——熱と光りと電氣と音とを集め行くものである。これ等の勢力、これ等の魂は、この諸々の原素を意識の——良心の光耀の下に喚び寄せる。そして、それを總體（アンサムブル）として一層豐かで一層均整のとれた內部生活のなかに整頓する。……』

しかも、ジョレスは、ベルグソン一派の哲學者が敢てしてゐるやうに、直覺を理性に對抗せしめ、生命を科學に對抗せしめ、有機體を機械に對抗せしめやうといふ風な二元論的な見方は、全然これを斥けてゐた。彼は、直覺の力を認めながら、なほ理性の力をも忘るることがなかつた。生命の自發的な創造を認めながら、なほ宇宙の嚴然たる法則を忘るることがなかつた。

『生命なるものは、世界の如何なる場所にあつても、不定の形を持つものではない。世に法則に從はざる勢力なるものはあり得ない。世に砂床や岩やに痕跡をとゞめざる波浪なるものはないし、また、管のなかを流れざる液體はないし、更にまた、化學の化合式に合せざる香料なるものもない。しかも、これ等の法則に從ひながら、生命なるものは、無限の自由をもつて、生きるのである』

萬有の統一、その滲透、——言ひ換へれば、生命の萬有化（ユニヴエルサリザシオン）は、人間をば人間以上に持ち上ぐることになる。人間を限りなく擴大することになる。人間は最早纖弱なものでもなく孤獨のものでもない。それは、驚ろくべきほど强く、ま

た、驚ろくべきほど美くしいものである。しかも、人間は單なる人間として強く美くしいのではなくて、萬有の實在の表現としてはじめて強く美くしくなつてくるのである。こゝに、ジョレスの生物學的で且進化論的な汎神論が自らにして生れて來ることを、人々は知ることが能きる。そしてまた、彼自身が『感覺世界の實相』(ラ・レアリテ・デユ・モンド・サンシブル)と稱んでゐる彼の哲學思想が、こゝに完全に現出するのを、人々は見ることが能きる。

感覺世界の實相とは何であるか？換言すれば、我等が見、我等が觸れ、我等が生きてゐるところの、この感覺世界なるものは、實在するものであるか否か？更に、この世界は、如何なる意味に於いて、如何なる方法に於いて、また、如何なる深さに於いて、實在するのであるか？これに對するジョレスの思想を要約すれば、略以下のごときこととなる。

我等がある事物を感覺する。それが實相――現實性を有せざる限りは、稀薄にして空漠たる姿相としてより他は映つて來ない。現實性を有する限りは、その姿相は堅固で正確で且持久的であるべきはづである。これが實相の先づ第一の徴候となるものである。次には、この實相の認識が、我等の種種相違せる感覺の協諧に依つて爲さるるといふことである。即ち、眼で見たところのものは手によつても觸れ得ることを常とする。更に進んで、堅いと眼で見たところのものは、手に觸れてその堅さを一層確かに知ることができるのを常とする。かくのごとく、種々の感覺が協諧して、事物の實相を明らかにする。

然しながら、これで盡くるのではない。かくのごとき感覺のみをもつては、尙且我等は充分には現實と夢との區劃を立て難いものである。夢に於いても、兎もすれば我等は、明らかに感覺し、また、種々の感覺の間に錯誤の協諧をば生ずる場合のあることがある。從つて、現實と夢とを眞に分つ標準は更に他に求めねばならない。即ち、それは、夢が人の經驗の法則とその理性の規定とに依つて、人の生命の總體(アンサンブル)の上に結び付けることが不可能であるに反して、現實

は、かゝる一の組織（システム）をば立派に形成してゐるものであるといふ點である。あらゆるものが結び付けられ、あらゆる事實が種々なる法則――就中因果律によつて相互に關係付けられ、あらゆる運動が、必ず他の運動に前行せしめられるところの一の組織（システム）をば形成してゐるといふ點である。換言すれば、魂の働きの有無の如何である。法則を知り、秩序を知り、統一を知る魂の働きの有無の如何が、現實と夢とを分つのである。

事物の實相は、かくして、漸く明瞭になる。實相は、かくして、叡知の全部をもつて、良心の全部をもつて、はじめて完全に把握することが能きることとなる。決して、選ばれたる者のみが持つ特殊の叡知をもつてこれを把握するがごときことはあり得ないのである。

ある事物が、完全なる實相――現實性をもつて、我等の眼に實在するものとして映つて來るためには、その事物が、諸他の事物の聯結し合つた集合體のなかに於いて一定したる明確なる位置を保つものであることを要する。その事物が、宇宙の他の事物とともに一の理想の終詰に向つて協力するものであることを要する。一切の巨大なる調和（アルモニイ）のなかに自己の役割を有つものであることを要する。これを簡明に要約するならば、實相とは、行動する理性であり、生きたる絶對であり、行爲する實體である、と定義することができることとなる。……

感覺世界の實相を右のごとくに闡明し來つたジョレスは、こゝで筆を轉じ、かゝる思索が生み出す當然の論結を次のごとく書いて居るのを見る。見よ、ジョレスの後年のあの勇ましく貴い政治的生活の核心は、些かの補足も必要とすることなくこゝに語られてゐるのを！それは、クロポトキンが生物界の研究によつて得た相互扶助論の思想を、デュールケエムやレオン・ブールジョアが社會學の研究によつて得た社會連帶說の思想を、ジョレスは一の哲學的思索によつて得たものとも言へる。――

『……若し、生きたる有機體のなかにはいつてゐる諸々の要素が、ある一定の動作のなかで消耗してしまふものならば、それはこの動作のなかで不動に膠着してしまひ宛然凍氷のごときものとなり、終に全部の壊滅を來さずには措くまい。その時より、人體若くは生物の形體なるものは、硬直せる要素からなる硬直せる總計に過ぎないものとなる。それは最早一の形體(フォルム)ではなくて、單純な集合(ソンム)に過ぎなくなる。何となれば、形體——即ち、眞の統一(ユニテ)を持つが爲めには、一切の要素が一の固有なる生命を生くると同時に他方形體と典型(タイプ)の統一との諧調に向つて希求する所のものでなければならぬからである。從つて、一切の要素のなかには、それ自體の活動のほかに、存在の資源(エートル)と、形體(フォルム)へと向はんとする希求とがなければならぬのである。卽ち、有限なる活動をなす一切の要素のなかには、存在があり、——しかも常に無限なる存在がなければならぬのである。蓋し、常により美くしき形體に向ひ、また常により擴がれる統一に向つて進まんとする萬有の各要素の熱望をば、アプリオリにこれを制限し得るものは、世に無いのである』

一切の要素は總べて己れの生命を希求し、更に大いなる諧調を希求するとなして、人類協同の理想の基調を示したジョレスは、かゝる實相の認識こそ、總べての痴愚なる人爲的の權威・思想・制度の迷路に彷徨する憐れむべき人々を自らに叫び覺まさせるところのものであることを明かにしてゐる。

彼はそこで言ふ。——

『……思ふに、佛蘭西に於いてはこゝ數十年來、精神的のある諦めの狀態、若くは、知的活力の衰退の狀態が見られるやうである。人々は、事物の核心に徹底し若くはそれを征服するといふことよりも、それを、——しかもその外觀だけで、滿足してゐるといふ風に見える。神とか、萬有とか、無限とかいふものも、如何なる强力の思想もそこには含まれてゐずに、單なる一の文學上の形式となり終つたかの觀がある。現代に於いて人々は、恰かも宗教心の覺醒時期ででも

あるかのごとく、所在に信仰を求めてゐる魂に逢ふのであるが、それ等を見ると、如何にも信仰することを要してゐるやうに見える。世界の空虚に疲れ、科學の慘酷なる否定に疲れて、あるものを信じやうとの熱望を抱いてゐるやうに見える。が、そうした悩める魂の持主のなかに、殆んど一人でも、眞實を探し求め、自己の一切の概念を吟味し、また、不屈の勞働をもつて休息と希望との家を已れ自身建立せんとする勇氣を有する者はあるであらうか？それは、徒らに映すべきものも持たざる鏡が互に反射し合ふに過ぎないやうに、空しき魂が他の空しき魂のうへに俯向いてゐるに過ぎないのではなからうか？人々はこの希求に添ゆるに不安の感情をもつてする。それは、いゝより容易なことであり、またより早道の技でもある。たとへば、何等かの信條が欲しくなつた時には、烏渡中世紀の神秘主義者の許にでも馳け付けて、その教示を仰ぐと言つたやうに。——恰かも、怠けものの空想家が土壤のなかから新らしい富を掘り出す力がないので、昔難船のあつた際の財貨を波の上から見付け出さうとでもしてゐるやうに。要するに、かつてある信仰の必要を感じなかつた者は、凡庸なる魂の所有者であるし、その信仰を支持するために一つのシステム若くは教義を持たねばならない者は、重苦しいスコラ哲學者の亞流である。同様に、この社會秩序のなかに於いても、徒らに正義を語るのを好み、人類愛を夢みる者を好む人々がゐるし、また貧しき者たちに向つては憐憫の高き態度を示す人々もゐる。………」

ジョレスの抱いてゐたこの創造的な汎神論的實相觀は、單なる形而學的の論證として見ても、最も光彩あるものであることは勿論である。その高貴なる人道的思辯の系統は、最初プラトンに始まりスピノーザ、ゲエテを經て、こゝにジョレスに再現したかの觀さへある。然しながら、ジョレスを最も高く位置するものは、かゝる卓逸せる形而學的の研究の結果を著述のなかで見事に發表したといふ事柄にあるのではない。その結果を實に彼自身の生活全部に於いて發表したといふ點にあるのである。彼の一生は、——政治家として著述家として雄辯家としての彼の勇ましい全生涯は、實にこ

の哲學思想の實行それ自身に他ならなかつたのである。萬有の統一と滲透、更に、萬有の連帶と生命、——その爲めに彼の一生が完全に費やされてゐることに對して、我等は今更のごとき崇敬と讃嘆との念に打たれざるを得ぬのを感じるのである。

○

此一小研究を公けにして、せめて偉大なるその思想と人格と功績との片鱗だけでも我國人に、——ジャン・ジョレスの名さへ殆んど知るところなき我國人のために、些か紹介する所あらんことを期して筆を執るに到つた自分は、百枚に近くこの稿を續けながら、尙且依然として本論には遠き序文の邊りを徒らに彷徨してゐるかの感を禁めがたいのを感じる。殊に、『プリュタークと、ミシュレーと、カルル・マルクスとを調和したる』眼をもつて描かれたる『佛蘭西革命史』の著者としての史論家ジョレスについて、さては、『無限(アンフィニ)』の感情を持たしむることをもつて民主教育の眞諦なりと斷じ、更に眞の教育の必要とその改善とを死に到るまで終始呼號して止まなかつた熱烈なる教育論者ジョレスについて、自分は遂に一語のこれに說き及ぼすことがなかつたのである。それ計りではない。最も重要なるジョレスの社會思想についても、——わけて共和と社會主義との關係に對するその凱切なる意見を、さては、國際政策に對する彼の思想についても、——わけて獨逸・英吉利等に對するその極めて合理的なる對策を、または公開外交と國際仲裁制度とに對するその澄徹せる主張を、さては、諸多の國內政策に對する彼の思想についても、——わけて軍隊改革に關する最も興味ふかきその意見を、ソシァリストの政權參與に關する適切なるその意見等を、自分は遂に全くこれに觸るることなくしてしまつたのである。此等のことを思ひ來れば、この一小研究は、拙劣なるカリカチュアではないとするも、尠くとも一の未完成なる素描であるに過ぎなかつたことは自覺せざるを得ない。ジョレスその人が統一の人であつただけに、自分はこの

取捨宜しきを得ない不統一なる叙述に對して、強い自責を感ずるを禁め得ないのである。

然し、自分は、一月足らずのうちに日本を遠く去らなければならぬ身である。旅の荷物の取り散らされてゐるなかにこの筆を運ばせつゝある自分にとり、最早この上仕事を續けて行くことは、到底許さるべくもないことである。自分は、こゝで筆を擱くほかはない。そして、この稿を讀むで呉れる人々のために、――といふよりも寧ろジョレスその人のために、他日の補足を約束して宥しを乞ふのほかはない。

自分が日本を去つて赴かうとしてゐる土地は佛蘭西である。ジョレスを生み、育て、そして無慘に殺しもした佛蘭西である。ジョレス自身があんなにも正しく視、またあんなにも愛してゐた佛蘭西である。今その佛蘭西への長き旅の門出に當つて、わがジョレスについての言葉を、如何にそれが貧しいものであるとは言へ、こゝに書き殘して行くことのできたといふことは、自分にとつて、人の知らざる喜びがないわけではない。自分のこの仕事は、尠くとも自分一個にとつては、決して無駄ではなかつた。……

あゝ、佛蘭西。自分の足が二ケ月許りのうちに再び踏むであらう佛蘭西。自分がいま心から待ち望んでゐる佛蘭西は、ジョレスによつて語られてゐる『眞の佛蘭西』でなくて何であらう。あゝ、今自分は、彼によつて描かれたる永遠の彼女の姿を心のなかにはつきりと浮ばせながら、大洋へ乘り出さうとしてゐる船を待つてゐるのだ。――

『眞の佛蘭西、――一時代にも、また一日にも、太古の日にも、また昨日の日にも、到底要約することはできない、彼女の晝と夜と黎明と黄昏と隆昌と衰頽との一切のなかに於いて始めてその完きを得ることができる佛蘭西！かゝる一切の混り合ふ影、かゝる一切の薄明、かゝる一切の變移を越えて、尚未だ獲得するには到らざるも、既に彼女の思想のうちに充分その微光の耀きを有する、光耶に向つて進みゆく佛蘭西！』

（一九一四・三・四・大森）

總選擧と司法權

今村力三郎

明治政府は、其創業の始に於て佛國流の三權鼎立制を模倣し、之を以て政治の要訣と爲し、官制の改革ある毎に、立法行政司法の三權をして、互に其畛域を守らしめんと努めたのであるが、憲法政治の實施以前にありては、立法權は常に行政權の壓迫を受け、三權鼎立の實を擧げることが出來なかつた。集會條例だの、保安條例だの、其他閥族專横の便利の爲に立法せられた法令が少くなかつた。是等は我國立法史上、行政權が立法權を蹂躙した、醜惡の踪跡であつて、國民として寔に愧づべき歴史である、是に顧みても、權力者が自家の便宜の爲に、不當の立法を企つることは、大に戒しむべきことである。

司法權も、閥族の下に在りては獨立を保つことが困難であつて、治外法權時代の外國人關係の裁判は、外國公使より勝手我儘の抗議が出るので、弱腰の行政官が、外人を憚りて、判決前に判決書を内閲するのが一の慣例となつて、行政官の干渉を如何ともすることができなかつた。或は在野の志士に關する裁判の如きも、往々行政官の干渉があつて、司法權が行政權の爪牙となつた實例も乏しくなかつた。去れど之を立法權に比較すれば、より多く司法權が、獨立の體面を保ち得たことは勿論である。加之我司法官は、明治政府の創業以來、清廉潔白であつて、彼の行政官が、紅燈影暗きところ政商と手を握つたり苞苴に依つて官物を拂下ぐるが如き、醜穢の徒に比すれば、實に見上げたものであつた。

明治五年に俊傑江藤新平が司法卿と爲り、明治八年には大審院が新設せられ、着々として司法權獨立の基礎を築いた。江藤新平が司法卿に任ぜられたのが、明治五年四月廿五日であつて、彼が征韓論に敗れて、西郷等と共に辭職したのが、明治六年十月廿五日であるから、彼の司法卿としての在職は、僅に一年半に過ぎないが、其短い在職中、五年八月三日、司法省官制を定め、同月廿三日、從來東京府に屬せし司法警察權を司法省に移管し、鋭意して司法權の確立に努めた。就中大藏大輔井上

辭を、尾去澤礦山事件に糺彈し、藩閥の背景を有する井上馨をして、大藏太輔の重職を辭するの止むなきに至らしめたるが如き、今にして之を想ふも、猶吾人をして痛快を叫ばしむるものがある。我司法官をして、行政官と對峙し、毅然として敢て降らざらしむるのは、創業第一の司法卿たる江藤新平に負ふところ多きを忘れてはならぬ。後二十年にして、硬漢兒島惟謙が、我司法權の爲め虹の如き氣を吐いた。

湖南事件に於ける、當時の大審院長兒島惟謙の硬直と正義とは、千載の下能く懦夫をして立たしむるの概があつた。

時は明治二十四年五月十一日、露國皇太子ニコラス殿下が、滋賀縣大津市を觀光の際、殿下の通路警衛の任に當れる、巡査津田三藏が突如帶劍を拔き殿下の頭部に一刀を加へたる、非常重大の事變は、實に我國の朝野を震駭せしめた。

宮中府中は固より、民間の輿論に至るまで、朝野錯愕、只管强露の怒を解き、兵端を避けんことのみ是努め、此目的の爲には如何なる犧牲をも敢て辭せざるの有樣であつた。其一策として、犯人津田三藏を死刑に處せんとするの議が起つて、內閣會議まで開いて飽くまで之を決行せんとした。試みに當時の閣員を擧ぐれば、總理兼大藏大臣松方正義、內務大臣西鄉從道、司法大臣山田顯義、陸軍大臣大山巖、外務大臣靑木周藏、遞信大臣後藤象次郎、海軍大臣樺山資紀、文部大臣芳川顯正、農商務大臣陸奧宗光であつて、此內の一人でも偉い勢力であるのに、此人々が津田三藏死刑論を閣議で決定したのであるから、微々たる裁判官なぞ彼等の眼中にない、巨巖が累卵を壓するよりも容易に考へた。

大審院長兒島惟謙は卵子でなかつた、加はる壓迫に反比例して、彼の彈力は層一層强くなつた、當時の日本刑法は、外國の主權者や、皇族に就ての特別の條文がなかつたから、假令露國の皇太子でも、殺人未遂は常人の殺人未遂と同一であつて、之を死刑に處することは刑法が許さぬ。强て死刑に處せんとすれば外國の主權者や、皇族を、日本の主權者や、皇族と同一に解釋せねばならぬ。日本刑法に、天皇と云ふ文字が使用してある限りは、外國の主權者を含まぬことは、疑の餘地が無い。兒島惟謙が、悍然として津田三藏死刑論に反對したのは、一身の利害榮辱を抛擲して、國法の擁護に邁進したのである。天下の事、意の如くならざる無矣と、自惚れしてゐた閣臣も、硬漢一兒島に施すべき手段を見出能はなかつた。其處で彼等は、畏くも詔勅を煩はした、司法大臣山田顯義の傳達に依つて兒島大審院長初め、係判事が天機伺の爲參內したとき、拜謁を仰付られ、今般露國皇太子ニ關スル事件ハ國家ノ大事ナリ、注意シテ

速ニ處分スベシ

との勅語を賜はつた、閥族が事あるごとに、至尊を煩はすのは彼等の慣用手段で、之が爲に累を皇室に及ぼしたことは、國民の齊しく憤慨するところであるが、閥族の罪は、罪として、事爰に及んでは、如何なる硬漢も兜を脱ぐと思の外、兒島惟謙は、詔勅は國家の大事なり注意して、裁判せよとの、大御心であつて、注意に注意を加へ、聖旨を奉體して法律の適用を誤らさることが、詔勅を遵奉する所以であると、抗論して兒島の眼中、西郷も、山田も、陸奥も、一介の塵埃ほどにも映じなかつた。斯く云ふと當時の閣臣は、揃ひも、揃つて、腰拔けのやうに見へるが、畢竟國家の前途を憂慮した、至誠の溢れであつて、兒島惟謙が、此膝一たび屈せば、又伸ぶべからずと、國法擁護に踏張つたのも、閣臣が津田三藏死刑論を貫かんとしたのも、歸するところは同じく國家の爲に忠ならんと欲したのであつて、近來の群小が、名を公に借りて、私利を營むものとは、根本的の相違であることを知らねばならぬ。往年國法曲解の魁首、山田顯義の銅像が、裁判所の玄關前に樹立せられ、兒島惟謙の誠忠を語るものすら無き時代になつたことは、司法權の前途の爲め轉た戰慄を覺へざるを得ない。

明治二十五年は、實に選擧干渉を以て、我國史上に特記せらるゝ歳なり。其干渉の暴戻無道言語に絶せり、然れども我司法官に向つて干渉の抗議を爲したものは無かつた。國民は、寧ろ行政官や、警察官の暴壓より、免れんとして司法官の救の手を俟つほどであつた。

總選擧に於ける、司法官の公明正大なる態度は、國民の信用を博するものがあつたが、何時とはなしに、此信用が漸々薄くなつて、何時の議會か能く覺へないが、議員から司法大臣に向つて、司法官の選擧干渉に付いて質問の出たことがあつた。選擧干渉にも色々の手段方法があつて、時と場合に依つて、之を施すのであるが、萬一にも司法官が、司法權を惡用して、選擧の干渉をすれば、是ほど恐るべく、是ほど有効の干渉は外にあるまい。選擧期日の兩三日前に、選擧違犯の罪名で、幹部や、運動員や、時には候補者自身を拘引すれば、如何に優勢であつた選擧戰でも、忽ち形勢一變して、慘敗の憂き目に遭ふこと請合ひである。夫故、司法官が、間際になつて選擧違犯の檢擧を爲すと、夫れ干渉が來たと大騷ぎを爲すのであるが、候補者、特に聲望も人格もなく、買收一點張の候補者が、自分が選擧違犯を敢てしながら、司法官の檢擧を見て干渉呼ばりするのは、片腹痛い自分勝手の寢言であつて、司法官としては、選擧違犯のある限り、政府黨と在野黨の區別なく、檢擧するのが當然の

とで、是を以て選擧干渉と呼ぶのは、身勝手の說である。彼等買收候補者は、自分の違犯は、見逃がして、相手の違犯のみ、檢擧して呉れと注文するであろうが、夫れが注文通りに行はれたら、司法權も三文の値打が無くなつて仕舞ふ。昔から一視同仁と云ふ成語があるが、選擧違犯は一視同虐でなければならぬ。

江藤新平や、兒島惟謙が、淸廉、潔白、硬直、剛正の範を示した我司法官に、何故選擧干渉の聲が擧つたのか。議員から質問の出たとき、司法省は、統計表を提出して、政友會の候補者何名で、選擧違犯の被告何名、憲政會の候補者何名で、被告が何名、國民黨が何々、中立が何々と、候補と被告事件との比例を示した。夫れに依れば、在野黨のみ選擧違犯の人數が多い譯ではなかつた、議員連も成程と思つたか、問題はそれでお仕舞になつた。

司法官は公明正大であるが、警察官は、知事や警察部長の意の如く動く、或時は硬骨の檢事正が、知事の干渉を怒つて、大衝突を起したこともあつた。檢事は、幾ら上官でも、警察官が送つて來ない事件に手の着けやうがない。況んや、知事や、警察部長の顏色次第に動く警察官は、檢擧に手加減することは、勿論である。謂はゞ警察官の篩を通つた事件のみ、司法官の手に渡るのであるから、檢擧の公平は望み難ひ、一視同虐の目は到底實現されぬ。

司法省の統計は、數の上で平均かも知れぬ。併し其の被告人の顏觸れや、檢擧の時日を、詳細に調査すると、在野黨の被告人には、候補者や、幹部が多く、與黨の被告人には末葉の運動員が多かつたり、一方は選擧前の大切の時期であるのに、一方は投票後であつて、當落に影響の無いやうな、實質上の相違を發見するであらう。議員連が、夫れを知らないで、一片の統計表にて二の矢の繼げないのは、彼等の無識の告白である。

司法省も、前と違つて、新平や、惟謙の流風餘韻が次第に薄くなつた。司法省の政府委員が、滿鐵事件の刑事記錄の提出を請求されたとき、公判に移つた刑事記錄を秘密書類だと曲解して、提出を拒んだなどは、良心ある學者の出來ない藝當である。斯る曲學者の羽振りが利く、司法省が、往時の信用を繫ぐことの出來ないのは自然の成行であらう。

裁判所は、社會の掃溜で、道義や、慣習で取扱ふことの出來ない屑物ばかりが行くところである。一軒の家に掃溜が必要である如く、社會の掃溜たる裁判所も無くてはならぬ、我々辯護士は掃溜の掃除番と比すべきものであるが、掃除番も亦社會の必要の役目である。然るに世間には掃溜が社會の必要なる一具で

あるところから、一切の社會惡を、裁判に依て匡正しやうと考へてゐる、所謂、司法萬能論者がある。此の論者、不識、不知、行政官や警察官の器械になつて、善意の干渉をする虞があるから恐ろしい。江藤新平や兒島惟謙の靈が泣いてゐるかも知れぬ。選擧の公平を使命とする、清浦内閣の司法權が、如何に作用するか、國民の監視を要するところである。

特別議會後の復興經濟

法學博士　堀江歸一

（一）特別議會の意義――民間經濟の復興計畫如何――經濟的危機に瀕せる日本――危機の回避されるやを疑ふ――本年度の募債額――財政と金融との關係　（二）生産者資本と消費者資本との別――消費者資本に對する需要――資本の濫費は政府を以つて最とする――際限なき財政の膨脹　（三）財政膨脹の齎す惡結果――財政と物價の趨勢――金利の高き所以――公債財源の調達と金融（四）外國債募集の必要とされた所以――其實際的效果――圓價値低落の根本的原因――其補助的原因――金禁輸と圓價値低落との關係（五）圓價値の將來――外國債の依頼するに足らざる所以――貿易の將來に對する樂觀論――樂觀論に信賴するを得ない　（六）民間經濟の復興促進策――政府の資金融通法――民間經濟の復興に對する妨碍――局面展開の諸方策――輸入貿易管理說――金融疏通の方策――財政の緊縮を必要とする

一

今や總選擧の期日は切迫し、諸政黨の競走正に白熱化しつゝあるやの趣きである。何れの政黨が能く第一黨と爲り、又政界に如何なる波紋を生ずるに至るやは、吾人の與り知るを得ざる所であるが、兎に角總選擧の後に召集される特別議會に於て、經濟復興に關する政府の計畫が提案されることだけは明白の事實である。其計畫が果して時機に適したものであり、又眞實民間經濟の復興に資するものであるかどうか、又假に斯る正しき計畫が提案された場合に、政權爭奪の關係から、特別議會に於

て、否決されるようなこと〻ならなからうかどうか、私の心許なく感ずる所である。山本内閣の下に召集された特別議會に於ては曲りなりにも帝都復興の計畫は成立したのであるが、其計畫たる、國家が中心と爲つて、直接に復興事業を實行したり、又は國家自ら地方團體に補助金を與へて、團體の復興事業を促進したりするものであつて、最も重視す可き民間の復興事業に對して、國家が如何なる政策を取る可きやと云ふ一事に至つては、今日まで何等の決定を見なかつたのでる。政府が民間の復興事業に對して、全然之を放任する方針を取るものであれば、此事たる、亦許され得るかも知れないが、政府は決して自由放任を事とするものでなく、又昨年の如き震災火難の後を善くするに就ては、自由放任論の如き到底容れらる可き次第ではない。政府が今日に至るまで、民間經濟復興の計畫を講じなかつたのは、政變の結果、已むを得なかつたとは云ひながら、實は緩怠極まれるの嫌ありと認められたのである。

私は四月號の本誌に於て「經濟的危機に瀕せる日本」と題して、我國現時の經濟社會に容易ならざる禍機の包藏されて居ることを論述した。斯る危險の迫れる經濟社會を眼前に控へて、我國の政府は震災火難の善後策として、諸般の復興復舊計畫を遂行しなければならない一方に、民間事業家も亦各自の經濟する事業を復舊し、復興すると云ふことは、甚だしき困難を醸す次第であつて、何としても其處に經濟政策の確乎たるものあることを要する。震災火難に會して、既に七八個月を送迎した今日、未だ經濟復興の機運の社會何れの方面にも現はれたことを認めず、民間經濟社會は昨年の災禍に依つて、打撃を蒙つた儘の狀態に居り、今日に至つて毫も恢復の跡ありとするを得ない。一方に政府の擔當する復興計畫も牛歩緩々たる趣きの著しきは勿論、政府の力に依つて、民間經濟の復興を促進しようとする努力も試みられて居らず、經濟政策の確立は愚か、世人をして經濟上の無策を嘆ぜざるを得ざらしめる次第である。斯の如くして果して經濟的危機の到來を回避するを得るであらうか、吾人の第一に疑を挾む所である。

政府が復舊復興計畫を實行するに當つて、其經費に對する財源を專ら公債の收入に求めることは、世間公知の事實に屬する。而して此種計畫の外に、一般財政に於て、公債を財源として、經營されなければならない事業も多く存する爲めに、本年度以降我國の公債募集額は餘程の高に上り其募集を全うする爲には結局財政を以つて、金融を壓迫することは、免かれ難き所に屬する。誠に本年度の募集計畫に就いて、財政當局者の方針とする所を聞けば、帝都復興事業費大正十二年度年割額一千二百萬圓、

同十三年度年割額一億一千萬圓、合計一億二千二百萬圓は過般成立した外國債の收入を以つて充當するを得るが、其他は大部分內地市場に於て募集することを必要とするのであつて、其金額は左の如くである。

一、各省復舊費 帝都復興事業費 追加及震災地公共團體貸付金	九〇、〇〇〇、〇〇〇円
一、鐵道復舊費	四五、〇〇〇、〇〇〇
一、經濟復興資金	五〇、〇〇〇、〇〇〇
合計	一八五、〇〇〇、〇〇〇

右は公債計畫の一端に過ぎないであつて、此外に前年度からの繰越未募債額七千九百萬圓と償還期限の到來する結果、借換を必要とする公債四億一千九百萬圓とあり、殖民地の事業公債亦三千萬圓の多きに上るとすれば、本年度中新規並に借換の爲めに、發行される公債は七億圓を超へる計算と爲るのである。

二

昨年の震災火難の爲めに、我國の富に幾何の損傷滅失を來したかは、正確なる調査の末だ據るべきものあるを知らない。唯吾人の推測し得る所は帝都と云ふ一大消費地に彼の如き慘害の起つた結果として、損傷した富の內には、經濟學者の所謂「消費者資本」なるもの〻頗る多きに居つたと云ふ一事である。書畫骨董贅澤なる衣服、庭園、華美なる邸宅、奢侈的什器の如きは、何れも「消費者資本」であつて、機械器具、工場、住宅、日用品の如きは「生產者資本」として、人の生活又は營業に必要缺くべからざるものに屬する。復舊復興經濟の計畫を樹するに當つて、第一に復舊、復興することを必要とするものは、「生產者資本」であつて、消費者資本の如きは、國民經濟の狀況に依つて、復舊に若干の猶豫を置いて、何等の差支へなく、寧ろ或る猶豫を置かしめることを以つて、至當であるとする。昨年震火災の直後に於ては、天譴說なるものが一時世間に流布され、最近數年間に亘る國民の限りなき放恣を警しめる爲めに、天が此苦艱を國民に與へたものであるから、國民が勤儉力行を事として、天意を體しなければならないといふ考へが行はれたやうである。果して我國が何時まで斯る殊勝なる心掛けに爲つて居るかは、當時に於て既に一個の疑問であつた。若しも國民が此心掛けを以つて、勤儉力行に勉めたならば、以つて經濟復興の進捗を助けることの少なからざるは勿論であるが、俗に喉元過ぎれば、熱さを忘れると云ふ諺は最も善く、我國民に適用されるものと見へ、震災以來時日の經過するに隨つて、震災當時の國民的覺悟は次第に稀薄と爲り、國民生活の諸方面に奢侈の復活、冗費の流行を見

る傾の著しきものある。現に輸入貿易の如き、政府並に政府の直轄下に居る爲替銀行に於て、極力奢侈品の輸入を防遏する爲めに、輸入爲替取組の上に、制限を加へつゝあるに拘はらず、事實、奢侈品の輸入されるもの甚だ多く、爲めに輸入超過の有力なる原因を爲しつゝある事實の掩ふ可からざるものがある。即ち國民の感情や希望をして其赴く所に赴かしめる限り、消費者資本の復舊は現に我國に於て行はれつゝあるのである。既に一方に生産者資本を復舊することが當面焦眉の急であり、政府としても此點に於て民間當業者を援助しなければならず、當業者亦資本の調達に意を用ひることを要する其際に多數の國民が消費者資本の復舊を急とすることと、今日の如くであつたならば、資本に對する需要切迫して、生産者資本の供給を乏しからしめるの弊に接せざるを得ない。

然しながら資本を濫費し、所謂消費者資本に對する需要を盛ならしめるものは、一部の國民のみに止まらない。資本を濫費し、消耗することの最も甚だしきものとしては、吾人は政府自身を擧げることに躊躇しないのである。即ち我國近年の歳計を通覽して、經費の最も膨脹したのは大正十年であつて、經常臨時兩部を合せて、十四億八千九百八十三萬六千圓の多きに上つたのである。大正十年と云へば、既に大正九年に勃發した恐慌の後を承けて、不景氣の勢の次第に酷烈を加へつゝある時であつた。經濟社會に不景氣の甚だしき以上は、國家の財政も亦之と相應じて、相當の程度まで緊縮されなければならず、又之を緊縮するには、財政なり、行政なりに整理を施すことが必要であるのに、我國に於ては、政府は國民經濟が如何なる悲境に陷つても、殆ど之を意に介せず、獨り財政を膨脹して、不景氣知らずの状態に居らうとする。而して大正十一年以來經費は之を十年度に比較して、多少の減少を告げたに相違ないが、固より少額のものであつて、殆ど數ふるに足らず、大正十三年度の實行豫算に於ける經費は其内に復興費の包含されて居る結果、十三億四千七百十七萬三千圓に上り、若しも特別議會に於て成立する追加豫算の經費をも加へたならば、我國財政の膨脹は殆ど際限なきものであることを知るに難しとしないであらう。

三

或は斯る經費の増加、財政の膨脹に對しては、其復興復舊事業遂行の必要に出づるを以つて、今日の實際に於て、已むを得ざるものとして、之を辯護する説があるかも知れない。即ち論者の説の如く爲れば、震災火難の不可抗力に出でた如く、財政の膨脹亦不可抗力に屬するものとして、承認せざる可からざるに

至る次第である。然しながら彼の如き事變に依つて、國民經濟に大なる混亂を惹起し、國庫の收入の減少したこととの著しき以上は、國家の經費にも亦此收入の減少した以上の削減を施し、些かなりとも歳計上に生ずる餘裕を利用して、復舊復興事業の財源に充て、兩事業の經費に對する財源として、募集される公債の必要額を節減し、以つて財政の金融を壓迫する弊害を除くと共に、政府自ら率先して、冗費節約の方針に出でなければならなかつたのである。然るに政府の爲す所は全然是等の要求に背反して居つた。或は今後實行される財政並に行政の整理に依つて、幾何の餘裕が財政上に生ずるであらうかは、全然未知數である、又今日まで斯る整理の行はれなかつたのは、事變後政變の頻繁であつた爲めであつたと云へるかも知れない。然し財政の全般を通覽して、何れの方面に整理緊縮の加へられた跡があるかと云へば、全然之を見るを得ない。而して斯く我國財政の際限なく膨脹して、已まざることは、三種の方面に亘つて、國民經濟上に不良の影響を及ぼすのである。第一は物價の騰貴する勢を助長することであり、第二は金利歩合の上進を促すことであり、第三は財政を以つて、金融を壓迫することとである。

我國に於て、物價調節の必要の叫ばれるや年の久しきものがある。然も今日に至るまで、調節の效果は毫も實際に擧らず、一方に不景氣の嘆聲の世間に喧しきを耳にしながら、他の一方に物價騰貴の勢の依然たるが如き、矛盾した事相の生じつゝあるは、何故であるか。本來不景氣に際して、物價の低落すると云ふのは、不景氣の爲めに、一般の消費力に減退を來すからであつて、其一般と云ふ内には、政府もあれば、國民もあるのである。然るに我國に於ては、不景氣の結果として商業と云はず、工業と云はず、農業と云はず、總ての產業が萎微し、衰退したのは、爭ふ可からざる事實であつて、斯くて是等の事業に從事する人々の消費力をして減退せしめたに相違ない。此方面から云へば、物資に對する需要は減少するであらうし、通貨や信用も亦收縮して、物價に低落を告げるのが當然であるのに、我國に於ては國民の消費力の減退したに拘はらず、政府の消費力は決して不景氣並みに減退して居らない、否好景氣時代と殆ど異ならざる程度の消費が政府に依つて、營まれて居るのである。而して政府の消費たる、金額に於て、頗る大であつて、多量の物資や、多數の勞働に對して、需要する所ありとすれば、其れが原因と爲つて、或は物價を騰貴せしめ、或は賃銀を上進せしめるのは、必ずしも異とするに足らない。我國に於て不景氣時代に於て、物價や賃銀の高いと云ふ奇異の現象の生ずる所以は右の道理に依つて、充分に之を說明するを得るので

ある。

斯く財政上の關係に依つて、物價が一般に高貴であるとすれば、如何なる事業を經營するにしても、之に要する資本が自ら多額であり、企業家の資本に對する需要の増加する爲めに、金利歩合の騰貴することは、勢の免かれ難き所である。又之を資本供給者の立場から考へると、我國の財政にして根本的に整理緊縮されゝば兎に角、從來の情勢を持して、膨脹しつゝある以上は、將來に於ても、物價は低落する所か、寧ろ騰貴すると見ることを以つて、至當とするであらう。物價の騰貴は一面から見れば、貨幣價値の低落である。資本の供給者は今日價値の尙ほ騰貴して居る貨幣を他人に貸付けて、將來價値の下落した貨幣を以つて、貸付金の返濟を受けようとする。兩者の間に於ける差違は當然資本供給者の損失と爲るのであつて、此損失を補ふには或る程度まで、金利歩合の引上げられることを必要とする。我國に於て、一旦引上げられた金利歩合の容易に低落するに至らない所以も亦自ら道理ありと考へられる。

斯の如く財政の規模は彌が上に膨脹し、隨つて復興復舊事業の財源に於ても、鐵道殖民地其他の財源に於ても、共に公債を以つて、之に充てなければならず、加ふるに年來政友會内閣が漫に積極政策なるものを標榜して、短期公債を發行し、其財源に供した惡結果は今日に至つて、公債の償還期限の到來すると云ふ形に於て、財政上に現はれ來つた。固より此短期公債を償還する財源の見出される道理はないのであつて、隨つて借換に依つて、一時を彌縫するの外はない、然も借換の爲めに、新に發行される公債は償還期限の到來した公債よりも、利廻の高かる可きことは、漸次金融に緊縮を告げる今日に於て、已むを得ざる所であつて、公債の借換は一方に公債償還の苦痛を除き去るものゝ、他の一方には高利公債の現出に依つて、金融市場に對する壓迫を大ならしめるのである。即ち今日經濟社會の安定を期する點から云へば、公債財源の調達を要するものを出來るだけ、減縮することが當面の急務であるのに、政府の爲す所は正に之に反對する結果を齎すことゝ爲る。從來の政策に對して、一新を要する所以である。

四

或は公債財源の調達を要するものには、今日の處容易に削減を施すことを許されない、之を調達して、一方に内國の金融市場なり、或は金利歩合なりを壓迫する效果を及ぼさゞらしめるには、公債の一部分を外國に發行することが必要と爲る。世人が從來外國債の募集を必要としたのは、其目的とする所、必ずし

も最近缺乏し來つた在外正貨を補充して、對外支拂の安全を得やうとすることばかりではなかつた。寧ろ外國債の利子低廉であり、隨つて外國債の募集に依つて、公債財源を調達することが我國に於て低利の資金を利用し、內國の金融に有利なる反應を及ぼすに至る所以と爲ると考へたからであつた。然るに事實は如何であたらうか。過般發行された外國債の如く、紐育に於て七分一厘、倫敦に於て六分九厘と云ふ頗る高率なる利廻りのものであつては、我國は低廉なる利子を以つて、外資を利用する道を將來に杜塞されたものとするの外はない。蓋し是等高利の外國債にして、外國市場に現存するからには、我國が今後外國債を發行するに臨み、其條件を既發公債に依つて、制されるの結果、利率なり、利廻りなりは必ず現存公債よりも高かる可きことを自然の道理とする。而して斯る外國債は同時に民間事業家の輸入せんとする外資の條件をも左右する次第であるから、民間の外資輸入も亦高利外債の發行に依つて、大なる妨害を蒙つたものと認めざるを得ないのである。

外國爲替相場の不利であり、圓價値の引續いて、低落することとに就ては、確乎たる原因があるのであつて、其の原因の如何を考へたならば、今日の事たる、必ずしも異なりとするに値しない。蓋し大正九年以來我國の輸出入貿易は、連年逆調を呈し、年として二三億圓臺の入超を呈せざることはなかつた。唯大正九年の如き、一方に四億圓に近い入超の行はれたに拘はらず、他の一方に貿易關係以外に於ける受取勘定の相當金額に上つた結果として、却つて正貨の在高に若干の增加を呈したのである。然るに同年以後は輸入超過の增加すると共に、正貨の受取勘定にも亦著しき減少を來し、兩者相俟つて、連年國際貸借に大なる逆調を生ずることゝ爲つて、是れが、我國の爲替相場をして一昨年來相次ひで、低落せしめるに至つた根本の原因であると認められなければならない。既に斯る根本的原因の備はれる上に、更に爲替の下落をして其の甚だしきに至らしめる補助的原因も起つたのである。即ち昨年の震災火難に伴ふ結果として、一方に我國は其輸出貿易に頓挫を招くと共に、他の一方に復舊復興材料の輸入增加に依つて、貿易の逆調をして益々大ならしめたことの如き、政府の爲替政策に一定の方針なるものなく、屢々變改されて、或は正貨拂下げの停止と爲り、或は條件付拂下げの實行と爲つたことの如き、更に斯る事情の下に、爲替相場の變動する勢の大なる可きを見越して、爲替の賣買に投機を逞しうする者のあるが如き、何れも爲替相場の低落を招いた補助的原因であると考へられる。

然しながら斯く根本的原因の何であり、又補助的原因の何で

あるを問はず、我國にして正貨の輸出さへ、自由にして居つたならば、爲替相場は正貨現送點に對して、大なる差違を生ぜざる程度に於て、維持されるを得た道理である。然るに大正六年以來我國に於ては、正貨の輸出は禁止され、爾來民間に解禁論の唱へられること、甚だ盛んであつたが、政府は頑として金禁輸の方針を續行して、渝る所を知らなかつた。唯加藤內閣の時代に、爲替相場は次第に恢復し、大正十一年末には四十八弗半に騰貴し、同十二年に入つては四十九弗半の相場すら、出現するに至つたのであるから、當時こそ金の禁輸を解除して、爲替相場の動搖する原因を絕つと共に、正貨決濟の必要を生じた場合には、內國の正貨を輸出して、通貨を縮少し、以て經濟調節の効果を擧げるに至ることを得策としたのである。然るに加藤內閣は當時此決斷に出でるを得ず、纔に在外正貨の拂下げを寛大にする方針の下に當面の問題を糊塗するに止り、而して其の後に起つた震災火難や、之に伴ふ內國經濟社會の動搖に依つて、遂に金禁輸の解除を不可能ならしめたと共に、爲替相場をして今日の如く低落の已むを得ざるに至らしめたことは、吾人の深く遺憾とする所である。

政府の爲替政策に對して、吾人の遺憾とする所は、單に金禁輸解除の時期を誤つた一事のみに止まらない。政府の正貨拂下げ方針亦不徹底であつて、爲めに爲替相場の變動を大ならしめたことも、亦一の事實として、認められるであらう。蓋し爲替場を維持する方便として、最も有効なるものは、正貨現送の行はれることに外ならない。隨つて金禁輸の際に、金の輸出に代る可き方便として、正貨拂下げの行はれるからには、其拂下げの絕對自由であることを要するのは、論を俟たざる所である。如何にも震災直後兩三個月間政府は對米爲替相場を四十九弗半に維持すると共に、此建値に依つて、自由に正貨を拂下げる方針を取つた。是れは政府の方針として、爲替相場の維持に資する所大であると認められたし、又實際爲替相場を維持するには、此方針に據るの外に、出づる道はなかつたのである。然るに昨年來貿易の逆調益々甚だしき一方に、正貨の減少漸く急ならんとするや、政府は遂に正貨の拂下げを中止するに至つた。對米爲替相場が今日の如く暴落する端緒は實に此時に於て、開かれたのであつて、政府が一方に廣汎なる範圍に亘つて、輸入稅の減免を行ひ、以つて輸入超過の大なるに至る可き勢を馴致しながら、他の一方に愈々輸入超過の現實の問題と爲るや、遽に惶惑して、正貨拂下げを停止したことの如き、何としても爲替政策上に大なる矛盾を發露したものとせざるを得ない。既に政策に斯る矛盾があつて、爲替相場の變動すること、大である以上

は、其間に投機業者の投機取引を試みるに至るのも、亦敢て怪むに足らないであらう。

淸浦内閣の成立後、正貨拂下げの制限は多少緩和され、嚴重なる條件の下に、拂下げの行はれるに至つたことは、事實であるが、尙ほ正貨不足の趨勢を目前に控へて居つては、其自由に行はれることの望み難きは、已むを得ざる所である。即ち正貨拂下げの條件として、輸入品の奢侈品に非ざること、比較的必要ならざる物品に非ざること、比較的必要なるものであつても、内地市場に於て、オーヴァー、ストックの傾向ある物品に非ざることの諸條件の付せられて居る上に、拂下げの金額にも亦制限があると云ふに至つては、或は正貨の拂下げは其行はれると云ふに拘はらず、一片の名目に終る虞れなしとしないであらうか。斯る狀勢の下に、輸入超過は滔々たる勢を以つて、殆ど極まる所なく、將來に於ても依然此勢の持續されることの明瞭である以上は、爲替相場が一高一低の間に、今日の低落を招くに至つたのは、當然の事實であるとしなければならない。

五

故に過般外國債の募集の行はれるに當つては、世間には其圓價値に及ぼす影響を考へて、之を樂觀する者が多かつたのである。蓋し彼等は相當條件の下に、政府が外國債を通じて、在外正貨を補充し、其在高の豐富なることに依賴して、正貨拂下げの方針を寬大にしたならば、以つて圓價値の上進を謀り、爲替相場の恢復を期するを得るとしたのである。然るに實際の結果は如何であるか、外國債成立の時期の近づき來つた時に於てこそ、爲替相場に多少の恢復を來すやに思はれたが、愈其成立した曉には、爲替相場の不振は依然として、渝らざる次第と爲つた。何故に斯る絕望的結果を生じたかと云へば、第一外國債が我國に取つて、甚だしく不利なる條件の下に成立したこと、第二今後斯る條件若しくは更に一層不利なる條件を以つて、我國が募債を敢てするや否や、極めて不安であること、第三隨つて將來我國は對外支拂に於て、果して安全なる地位に居るや否や、遽に豫斷を下すを得ざることが相重なつたものと想像するの外はない。即ち外國債募集の圓價値維持に資する所の少ないことは、明瞭である。而して一方に我國の貿易は近き將來に於て、如何に變化するであらうか。昨年中の入超五億三千萬圓に續いて、本年に入つては一月より三月に至る三個月間の入超のみを以つてして、早く五億圓に近づく有樣である。或る者は之を樂觀して、本年三月までには、關稅減免期間であることの關係から、特に輸入が多かつたのであつて、四月以後に於ては、旣往に見

越輸入の行はれたゞけ、却つて輸入に減退を見るであらうと、又或る者は我國の貿易が上半季に於て入超を呈するのは、年々の恒例であると共に、下半季の出超に依つて、之を相殺するに至ることも、亦動かす可からざる例であると、更に或る者は輸入超過に屬する物質の內には、多量の原料品が含まれて居る、是等は內地の製造業者に引取られて、既製品と爲り、轉て外國に輸出されて、今日の入超を補うに至るであらうと。果して斯の如くであれば、輸入超過も恐れるに足らず、輸入超過の決濟難、之に伴う爲替相場の不利、圓價値の低落も共に一時的現象に止まつて、毫も意に介するに及ばざるが如くであるが、吾人は到底斯る樂觀說に與するを得ない。關稅の減免期間に於て、特に輸入の行はれたことも、一の說明たることを失はないであらうが、然らば昨年中關稅減免の當分繼續することの明であつた時から、盛に行はれて已まなかつた輸入に對しては、其原因を何れの邊に求め可きであらうか。下半季に於ける輸出は專ら生絲市場の活躍に基くのである。然も今日の如く米國の市場の沈衰依然たるものある一方に、我國の生絲業も資金融通難や、原料高の爲めに、到底廉價なる物質を豐富に供給するに就て、疑なきを得ない狀況に居るとすれば、果して下半季に於て、上半季の入超を償つて、餘りあるや否や、一個の問題である。若し夫れ輸入された原料品が近き將來に於て、輸出製造品たるを と考へるが如き、机上の空論に止まりはしないであらうか。輸入された原料品は必ずしも盡く製造業者に依つて引取られるものでなく、永く倉庫に停滯することもあらう。製造業者の引取つた原料品亦總てを擧げて、製造の用に供され、製造されたもの亦多く輸出されると見るを得ない。昨今の如く金利步合の高いことは、自ら製造業者の規模を縮小し、其全能力を生產上に使用することを妨げる、一方に金利と賃金と共に高いことは相重なつて生產費を增高せしめて、海外市場に販路を求めることを困難ならしめざるを得ない。原料品が輸入された儘、內地市場に停滯して、何時までも既製品と爲らず、又輸出品と爲らないことは、實際にあり得るのであつて、斯る時こそ貿易の逆調の永く續くことに依つて、經濟社會に最も大なる苦痛を加へるに至るのである。

六

斯の如く考へると、政府が民間經濟社會の復興を促進するに適切なる經濟上の政策を確立することは、當面の急務である。外資の輸入は復興の一策として、重要視す可きものであつたが、其れが政府の外國債募集に依つて、遮斷されるに至つたも

のとすれば、政府が之に代る可き資金融通法を講ずるの必要は益々切迫したと云へる。特別議會に於て、政府は經濟復興計畫を提案し、其資金として、五千萬圓の公債發行に就て、承認を求めるやに傳へられる。五千萬圓の復興資金を以つてして、果して此疲憊した經濟社會に起死回生の效果を奏せしめるを得るかどうか。思ふに政府の爲す所は右の資金を貸付ける場合に、日本興業銀行とか、日本勸業銀行とか云ふが如き特殊銀行を利用することであらうが、金額が五千萬圓に限られ、一方に政府の融通する資金であることの關係上、普偏的に總ての請求者に滿足を與へなければならない事情の存する以上は、政府の貸出は所謂小口貸付の埒を出づる能はざるものであつて、此程度の資金融通が今日幾何の便利を民間當業者の復興に與へるを得るであらうか。政府が財源を公債の發行に求め、斯くて得た資金を民間に融通することも、一の方策たるを失はないかも知れないが、今日の如く政府の經濟政策に大なる誤まりがあつて、其爲めに民間經濟の復興に妨碍を加へつゝある場合に、些細なる資金の融通を試みた所で、何の效果があるであらうか、其れよりも民間經濟の復興に對する妨碍を除却することが今日の急務である。然らば何を以て其妨碍であるとするか。

第一、金融の梗塞、金利の上進共に甚だしく、民間當業者をして資金の調達に大なる困難を覺へしめること、

第二、圓價値の低落、輸入稅の復舊等に依つて、外國原料品の輸入を妨碍し、輸入品の割高である爲めに、內國の製造工業に不便を及ぼしつゝあること、

第三、貿易の逆勢、株式市場の不振、商工業の衰微に脅かされて、市中諸銀行が極端なる警戒を事とし、事業の振興に對して、何等の便宜を與へざること、

第四、斯る幾多の事情に依つて、內國經濟社會の復興しない爲めに、益々輸出品の海外に於ける販路を狹隘にし、啻に貿易の逆勢を招くのみならず、內國に於て不景氣を助長し、失業者を增加する等の弊を生ずること、

茲に於てか此局面を展開する爲めに、種々の方策が主張される。其最も極端なるものは輸入貿易管理說であつて、政府自一切の輸入貿易を舉げて、其支配の下に置き、政府の判斷をて、輸入に不利であるとするもの、輸入しても將來の輸出增進に資するに足らざるものは之を制限し、禁止しようと云ふのである。政府が從來特殊銀行の信用狀發行に制限を加へたり、爲替相場に干涉を施したりした政策に多少の步を進めたならば、自ら輸入貿易管理制度の根據を見出すを得る道理であるが、政府が從來多くの機會に於て、殊に爲替政策の決定に於て示した

經濟的智慮から判斷すれば、政府に輸入貿易管理の權能を託するが如き、危險の甚だしきものであつて、却つて百弊の生ずる源と爲りはしないであらうかと思はれる。

民間の經濟を復興する爲めに、金融の疏通を付ける、之を付ける爲めに、銀行をして活動せしめることは、政府の決心に依つて、如何ようにも行ひ得られる。即ち政府が或る條件の下に、資金の貸出の行はれる方面なり、相手方なりを決定し、銀行が之に對して貸出しを行つた結果、回收不能又は回收遲延の爲めに、損害を蒙らんとする場合に、國家に於て其貸出しに伴ふ權利の讓受に當る保證を設けたならば、金融の疏通は最も簡易に行はれる道理である。

若し其れ民間經濟復興の爲めに、物價の調節を必要とする以上は、宜しく財政の規模を縮小し、經濟を削減して、其目的を遂す可きである。然も今日斯る英斷に出でたならば、不景氣の上に更に不景氣の勢を重ねることゝ爲るであらう。假令ひ此事は一時的事相であつて、結局早く景氣の恢復を促す道程と爲る所以であるとしても、果して此事を爲す勇氣が時の當局者に備はつて居るであらうか。國民多數の輿望を荷うて成立した內閣であれば、或は當局者の見識に依つて、此爲し難き所を爲すかも知れない、成立の當時から其基礎を危まれ、何時崩壞するか、測り知るを得ない清浦內閣の如きものに此事を望むのは、しき間違ひである。而して斯る內閣の存續する限り、特別議會が召集されようが、通常議會が開會されようが、經濟復興に必要なる計畫は單に名義上に於て、成立するばかりであつて、毫も復興の要求する精神に適合したものでなく、荏苒時日を徒するが如き、吾人の忍ぶ能はざる所である。

文明の夢遊病者に向て 再生及び再生人の意義を說く

井上忻治

一、カオスよりコスモスへ

人間的意味に於て——宗教的に、倫理的に——世界發展の過程は、常に光と闇黑との鬪ひである。そしてこの痛ましき情景は、今日まさしく、異常なる程度の緊張さに於て、われわれの眼前に展開する。闇黑は今や全世界を包被する。この混沌から、人間自からを救濟すべき光は、今日絕對に必要なのである。

近代文明は、世界大戰を直接の轉機として、社會組織に、政治に、經濟に、美術に、哲學に、宗教に、教育に、家族に、それのあらゆる機構に亘りて、內部的崩壞の最後の過程に到達した。戰爭の慘禍に直接當面した關係諸國の人々が、旣にいち早くこの事實の前に目醒めて居るのに反して、大戰のために、偶然にも、却つて豐かなる物質的餘德を蒙つたわが國人の大多數が、何時までも近代文明の惑はしの幻想から醒めやうとはしないで、無反省にも、却つてますますその假現の夢を貪り續けようとして居たのは　わが同胞のために　確かに一つの大きな不幸であつた。この意味に於て、眞に未曾有とも言ふべき前年の大震災は、彼等に對しては、或ひは一つの天譴であつたとも言ひ得るであらう。しかし、わが同胞がこの重き試練によりて、若しも、從來彼等が閱し來つた虛僞の生活に對し、眞に力強き反省の機會を摑み得たであらうならば、謂ふところの天譴は、正しくは、一つの天惠であつたのである。そこには明らかに轉禍爲福の妙機が存する。

今や、帝都を中心に、世は擧げて復興に忙しい。そして爲政者や有識者は、一般國民に對して、精神的復興若くは精神作興

の必要を呼號する。しかのみならず、政府は精神作興のために特別の諮問機關を設置しようとさへして居る。洵に時宜に適した勸告でもあり、處置でもあらう。しかし、謂ふところの精神作興とは、そもそも何を意味するのであるか、何を意味せねばならぬのであるか。それが單に、在來の爛れきつた人心の弛緩を阻止せむがための一彌縫に止まるものであるならば、それは餘りに月並みであるばかりではなく、寧ろ今回の大試練によりてわが同胞に與へられた貴い體驗に即する要請として、殆ど意味をなさないと言つて良い。われ〳〵が今回の試練によりて、直接味得した體驗は、生活の如實相であり、生活の內面性であらねばならぬ。蓋し、現代人に取つては、享樂一般が直ちに生活そのものであつた。そこには價値意識が、價値體驗が欠けて居た。現代人は生活手段のために、生活そのものを忘れて居た。そこには生活の內面性が缺けて居た。長夜の夢から醒めて、恰も樂園を追はれた刹那に於けるわれわれの祖先のやうに、今初めて赤裸々なる人生の如實相に面接するわれ〳〵が、先づ第一に反省せねばならないのは、即ちこの根本的事實である。假りに今回の試練に遭遇することがなかつたとしても、われ〳〵は既に、われ〳〵の生活を全然新たな基礎の上に建て直すべき時期に、まさしく到達して居たのである。この反省の下に、われ〳〵に取つての最緊要事は、內面性の回復、即ち純正なる生活そのもの復興である。

この點に於て、トルストイは確かに現代の一先覺たるを失はない。彼れは、人間が今怖ろしい深淵の前に立たされて居ることを、嚴粛に警告した。彼れは、この混沌から脱出すべき道を、何れに覓むべきかを、われ〳〵に暗示した。彼れは、從來人間がその尊い心靈を、それの犧牲に供して來たまやかしの偶像を、いみじくも破壞し盡した。そして、人間に取つて大切な、しかし、人間が久しく捨てゝ顧みなかつた唯一のものゝ前に、同胞の眠れる魂を喚び醒そうとした。そして、その唯一つのものとは、即ち「正しく、眞實に活きること」であつた。われ〳〵は、余りに久しく、われ〳〵自からを忘れて居た。彼の所謂偶像に代へて、自からの魂を讓渡して居た。われ〳〵は、今改めてこの魂を回復するとともに、眞の人間性に立ち歸らねばならぬ。われ〳〵は再生せねばならぬ。當面のわが同胞に取つて、眞の轉禍爲福を意味するものは、たゞ再生の一事のみである。

生活はeither-orであらねばならぬ。それにも拘らず、今われわれの生活は、有と無との、建設と破壞との兩極の中間にぐらついて居る。われわれはこの兩極のいづれかに決せねばならない。コスモスに上昇するか、カオスに埋沒するか、これの何れ

かを擇ばねばならない。嚴密には、その中間の生活は在り得ない。人間の生活に於ては、常に世界の創造か、然らざれば、それの破壞が在り得るのみである。謂ふところの醉生無死の生活は、價値意識の世界には、價値體驗の世界には在り得ない。價値體驗としての生活は、常に不斷の建設であらねばならぬ。絕へざる創造、絕へざる再新であらねばならぬ。生活そのものが直ちに創造の記錄でなければならぬ。そして、本質的に、過去と未來とを、等しく現在價値の一點に統一する再生の歡びは、自己の內に宇宙の本質を體驗し、そこに人格的價値中樞を發見する人々に於てのみ、惠まれてゐるのである。神的創造としての宇宙は、決して單なる存在の混沌態ではない。價値の統一態であらねばならぬ。時空の制約の下に立つ世界が、これを超越する純粹自我の意識內に包攝され得る所以は、實にこゝに存する。そして、人間は、彼れが價値帶有者たり、價値創造者たるかぎりに於て、初めて、神の映像なのである。個々心靈の無限價値に就てのキリスト教的見解のごときも、またこの見地に發するものにほかならない。それ故に、カオスからコスモスへ！これが現時のわが同胞に與へらるべき眞の勸告であらねばならぬ。われわれの救濟は、この意味に於ける宇宙としてのわれわれ自らの最深義の體驗によりてのみ、期待され得べきものであらう。この場合に於て、體驗としての生活は、初めて價値體驗の生活となり、そしてそれの眞義に於て價値創造の生活となるのである。

二、生活の革命

神が一度封じたる「固い眠りの精神」は遂に醒めねばならぬ。自我は崩壞した。世界は今や舊文明の廢墟の中に橫はつて居る。世界の全人類は、今正に新らしき生活を、新らしき文化を、從つて、眞の生活を、眞の文化を要求する。眞に現代に開眼するものにして、何人が革命を必要としないものがあらう。革命は現代の一標語である。しかし、こゝに謂ふところの革命は、敢て政治革命を意味するものではない。また、必ずしも社會革命を意味するものでもない。それは、根本的に、生活そのものゝ革命を意味するのである。世界大戰は、近代文明の總勘定であつた。それは絕對的終末を意味すると同時に、また絕對的創始を意味する。個人としても、社會としても、われわれは、最早、われわれが從來閱し來たつた虛僞の生活を、更らに續行すべきではない。個人對個人、若しくば、個人對社會の關係、並びに、國家若しくは民族相互の關係は、全く新たに規定され、新たに基礎づけられねばならない。一つの新らしい世界感情、從つて一つ

の新らしい宗教が、人類一般を支配しなければならない。この體驗上の正認を目標として純眞なる生活のための革命を追求する人々のみが、まさしく、眞の意味に於ける現代人なのである。

固より、かくのごとき普遍的生活感情は、單に內界の支配にのみ止まるべきものではない。自己形成としてのそれの働きは、同時に、外界に、人類社會に、一つの新らたな形態を投影せねばならない。それは一つの新らたな天國を創り出すだけではなしに、また一つの新たな地國を造就せねばならぬ。それは、利己主義を、科學主義を、官僚主義を、資本主義を、帝國主義を征服すると共に、法律を、經濟を、敎育を、藝術を、そして一般文化を、全く新たな基礎の上に改造せねばならない。この大革命の過程に於ては、固より、デモクラシーや社會主義が、必要な原理として承認されることになるでもあらう。しかし、それは、これ等の原理が從來有つて居たよりも、更らにより深い意味と、より充實した內容とを、われわれの內生活そのものから汲み取つた場合に限ぎるのである。

革命は必要である。しかし、革命の實行者は、政黨でなく集團でなく、直接われわれ自身であるべきである。われわれ自身が革命の客體であると同時に、またそれの主體なのである。そして、それが、眞に人間の本質的必然性に滲透した最高意義の革命となるか、若しくは、單に外的生活形式の變化に止まるかは、一つに、われわれ自身の本質意識に關係するのである。外的形式の更新は、それ自體に於て、毫もわれわれの再生を保障するものではない。例へば、所有關係の更新は、それが人間に對する勞働と所有との本質關係に關聯する場合に於てのみ、再生の一條件となるのである。

革命は敢て暴力の原則に據るべきではない。暴力の加はること多きに從つて、革命は却つてより多く、舊精神に支配されて居る。從つて、それだけ革命の眞精神は遠かつて居る。一つの獨裁が他の獨裁に代ることによりて、われわれの精神に、われわれの本質に、何物をも寄與するものではない。ボルセヴィズムによりて、われわれが將來の幸福を期待せむには、それは余りにミリタリズムと區別するところがない。しかし、それにも拘らず、また人間の幸福が精神の救濟に存すると信ずる多くの宗教家の理想は、それが反對に物質からの救濟に存すると信ずる多くの革命家のそれと、敢て撰ぶところはない。固より、經濟は獨り精神からのみ期待し得べきであらう。しかし、それは物質に於いて實現されねばならない。たゞ、こゝに明白なる一事は、われわれが外面的に自己を發展せむがためには、先づ內面性の深化を必要とすることである。外面生活に於て、若しく

ば社會生活に於て、生活の最大限を實現せむがためには、われわれは、常に、先づ自からの中にそれを實現することをもつて、それの先在條件とせねばならない。それ故に、生活の革命は、個人の再生によりてのみ期待される。そして それは、同時に、社會又は全人類の再新を意味するのである。

三、再生の意義

人間の生活要求は、單に人間が一定の社會的機構の下に統制されることによりて、彼等の勞働生産が、彼等の思想が、彼等の感情が、相互に交換されることによりて、決して充足されるものではない。そこには、就中、共同生活の中樞が成立たねばならぬ。相互の間の人格的交通を、心靈と心靈との直接交感を可能ならしむる力の中樞が形成されねばならぬ。それは即ち責任の原則である。そして、かくのごとき共同生活の原則意識が力強く形成されるためには、先づ各人それ自からの裡に、個人生活の統一的、指導的原理として、純正なる責任意識——それ自體内的必然性として——が定立されることを先在條件とする。責任意識は自由の基礎であり、創造の酵母であり、そしてまた愛の源泉である。若しも純正なる責任意識が力強く個人の生活を支配して居なかつたならば、自由も平等も友愛も、畢竟は、空虚な概念に止まるのほかはない。責任意識は、最廣義に於ける倫理的生活の基調である。若しも個人の生活にこの倫理的基礎が欠けて居たならば、如何なる意味に於ても、如何なる形式に於ても、社會的生活は不可能である。これなしには、家族も、社會も、國家も、その他如何なる集團生活も成立ち得ない。責任意識は個人生活の支柱であると同時に、また社會生活の血脈である。あらゆる形態に於ける人格的結合は、この血脈を俟つて、初めて可能なのである。生活の外的造形が、制度が、個人の生活を充實にするのではない。個人の幸福を保障するのではない。眞に健全なる社會は、各人の間に純正なる責任意識の躍動する世界に於てのみ見出される。社會進步の最根本の基礎は、結局、責任意識にほかならない。そして、社會進步を支配する根本原則も、またこれ以外の何物でも在り得ない。個人の再生と社會の再新とは、こゝにその重點を求むべきである。

アンタゴニズムは、抗爭は、鬪爭は、毫も生活の否定的要素ではない。反對に、それは眞の社會生活を可能ならしむる素材なのである。物質界に於ても、心靈界に於ても、兩極なしには、緊張なしには、そして物理學に謂ふところのポテンシアル・ディフエレンスなしには、何物も生じ得ない。人間の社會にはあらゆる種類の鬪爭があつて良い。人間の社會に行はれる不斷

の闘爭は、それの必然的表現なのである。しかし、若しも人間が正しき方法に於て爭ふことを知らなかつたならば、それは、確かに彼等の過失であると同時に、また一つの大きな不幸でなくてはならぬ。それ故に、われわれの要求するものは、決して無闘爭であるべきではなく、一つの新らしき、より善き、より精神的な闘爭の方法であるべきである。そして、その正しき方法は、各人が自我の本質的中樞から、人格の最内中樞から、從つて、責任意識——後に説明されるがごとき——によりて動力づけられる自我の最内的必然性から、意欲し、行動することよりほかには在り得ない。人間と人間との間には、この方法によりてのみ、初めて最内的關係に於て、直接の本質的結合が實現され得る。しかるに、われわれの日常生活に於ける普通の行動は、殆どその正反對を示して居る。われわれは、余りに多く、隨時の環境的影響に基く情緒に支配される。寧ろ、殆ど動物的素朴の狀態に於てこれに盲從する。そこには、責任意識によりて方向づけられた反省と自治とが欠けて居る。統一的理性我の洞見的、全觀的正認に基く普遍的妥當性の保證が欠げて居る。從つて、相互の間に本質的交渉を成立たしめる余地を存せない。それ故に、相互の關係は、毫も正しき意味に於て整頓されないばかりではなく、寧ろますます紛糾する。多くの社會的紛爭が未解決のまゝに殘されて居るか、または不正當に、若しくは、暫定的に解決されつゝあるのは、一つにこれに基因するのである。これによりて、社會的結合の紐帶は、それが强められることの代りに、却つてますます弛緩する。

暴力は克くわれわれを壓迫し得るであらう。しかし、これは、決してわれわれ相互を結合せしむる所以ではない。それは相互の本質に透徹することから、常にわれわれを妨げる。それは、ますますわれわれの内的混沌を助長する。そして内的混沌は、それの必然的歸結として、更らに外的混沌を招來する。

われわれは、いま痛切に自己を反省せねばならぬ。生活の純眞なる意義に想到せねばならぬ。生活は概念ではない、一つの實在である。そして人間の生活は、動物のそれから本質的に區別されねばならぬ。人間の生活は與へらるべきものではなく、自から與ふべきものである。單に外的環境の支配下に從生することによりて、人間的生活の發展は期せられない。人間生活の本義は、われわれが自から有價値と認識し、自から選擇し、自から希望するがまゝに、全體的調和に於て、それが直ちに實在として形成されることに存する。哲學が、科學が、藝術が、政治が、社會が、われわれの生活を形成するのではない。生活は常に、われわれ自からの價値體驗に即する自己形成でなくては

ならぬ。しかるに、現代文明の物質的機構と、現代社會の機械的統制とは、殆んど極度にまで人間性を壓抑せしめた。現代人の生活にありては、それのあらゆる形相に於て、殆んど凡てが外面的に規定されて居る。彼等の魂は、冷たい機制の鐡鎖に繋がれて居る。しかし、眠れる獅子は一度は醒めねばならぬ。目醒めたる人間性は、先づ第一に、自己の生活そのものに對して、あらゆる叛逆を企つべきである。現代文明の機構の下に從來われわれが閲し來つた生活は、純眞なる生活の本質を表現する何物でもなかつたのである。それの様式は、手段は、悉く不純であり、虚僞であつた。眞實なる生活の擡頭に面接して、近代文明の機構が、現に辿りつゝある急速なる崩壞の過程は、この事實を立證すべく、何よりも確かな證據である。

　人間が人格的存在として、動物から本質的に區別さるべき根本的事實は、人間に特有なる自己意識の能力であらねばならぬ。從つて人間の生活は、それの最も充實せる意味に於て、常に自己認識、自己評價、及び自己決定に基く純内省的規定として、形成さるべきものである。かようにして、人間の生活は、それのあらゆる形相に於て、自我の中樞に結合せられ、倫理的に統一された自我として發展し得るのである。また、かようにして、人間は、彼れの全生活を、現在と將來との無限態に亘りて、單一的に概觀し、實踐的可能性に應じて、これを一般的に評價し、そして、反省的に、これを一つの普遍的意思に服從せしむると共に、意思そのものゝ中に豫定されたる一つの當爲要求に從つて、自由に自からを規定し、自からを指導し、自からを教育し、かくて自治と自己開發との形式に於ける人間に特有なる生活の發展を追行し得るのである。それ故に、純正に人間的なる生活は、外的環境に基く情緒の盲目的支配から脫却して、常住的自己規定の下に、不斷に繼續する自己發展、自己向上のそれであらねばならぬ。從つて、人間的生活は、常に努力の形式に於て發展する。そしてそれは、最廣義に於て、常に價値のための鬪ひである。自由なる獨自的意思に基く一つの絶對的當爲要求を充足せしむべき完全なる價値充實の生活を實現せむがための鬪である。

　しかし、かくのごとき人間的生活の完全なる發展は、われわれの人格生活に、中心的自己拘束の習慣的形態が與へられた場合に於て、初めて可能なのである。そして、それは最も嚴正なる意味に於ける責任意識の覺醒を意味する。純眞なる人間的固有生活を新たに形成せむとする願望と意思とは、嚴肅なる責任意識の槓杆を待つて、初めて生み出される。責任意識とは、自我の本源的統一、若しくは内面的融合の意識そのものに即し

て、一つの絶對的中心、創造的起原として自からを體認する意識にほかならない。限りなき生きた統一としての自覺的體驗の生活は、これによりて、初めて、自由なる純粹活動として、絶對無碍なる生命の流れとして展開する。再生とは、結局、かくのごとき意味に於ける責任意識の創造を意味すべきものである。

今や、個人は、社會は、總ての文化は、等しく崩壞の過程を完成せむとする。事態は極めて重大である。それだけにまた、それの根本的復興のために、われわれはますます堅固な地盤を必要とする。時の警鐘は鳴る。再生へ！再生へ！「再生するに非ざれば、神の王國を見ることは出來ない」――われわれは、今特に、このキリストの警告に目醒めねばならぬ。再生こそは、一度崩壞したる自我を新たに建設することによりて、現にわれわれが在るやうな生活の分裂から、存在の混沌から、われわれ自からを救濟し、そしてまた、われわれの生活自體を、直ちに創造の記錄たらしむることによりて、目的文化から價値文化へ、從つて、純正に人間的なる一つの新たな文化の發展へと、きれわれ自からを導くべく、われわれに殘されたたゞ一つの道である。

四、責任意識の創造としての再生

所謂文明の夢遊病者に等しき現代人の大多數は、單に生活を外面的にのみ理解しようとする。この觀點、若しくば、生活態度によれば、世界に於ける人間の存在は、單にそれの一部に過ぎない。人間の存在乃至本質は、雜多なる無數の現象によりて制約された單純なる一事實に過ぎない。そこには、雨が降り、風が吹き、若しくば鳥が囀ることより以上のどんな必然性も支配して居るのではない。そこには、草木以上のどんな生命も宿つて居るのではない。從つて純正に人間的な文化のどんな酵母も置かれてあるのではない。そこに見出されるものは、單に無數の原因と無限の條件との錯綜した混沌のみである。そこには、眞に人間の存在を表現する何物も存在しない。それ故に、純正に人間的なる生活の發展は、永遠に期待されない。また、幾らもがいたからとて、人間相互の間に、生活の調和と均勢との得られる氣遣ひはない。蓋し、部分の全體によりて生き、全體の部分によりて生きる相互關係にありては、それ自體に全體としてのみ、部分は全體と本質的に結合し得るものであるし、また、人間が自からの世界である場合に於て、世界は初めて人間のものであり得るからである。われわれは、それ故に、われわれ自からの裡に宇宙を體得する場合にのみ、單に直接の隣人だけではなしに、世界全人類の運命を共同に感得するとともに、ま

た、全人類に共通なる眞に人間的なる文化の建設のために、本質的に共働することが出來るであらう。これを言ひ換へるならば、人間が、彼れ自身を極度に明化し、深化して、彼れ自身の裡に、神的存在の源泉を鑿穿し得た場合にのみ、人類の生活と人類の文化とは、初めて正しき精神と、幸福なる形相とに於て、發展し得るであらう。この時に於て、人間はまさしく、彼れの眞の運命と、そして同時に、世界と人類一般とのそれを完全に體認して居るのである。しかし、それは、固より概念によつてゞはない無限に流動する生命そのものゝ力によつてゞある。そして、この生命力を創造するものが、即ち再生なのである。

然らば、再生の過程は如何にして成立つか？それは、結局、體驗の純深化によるのほかはない。自我の無限作用としての體驗に內在する流動的生命の眞の姿は、體驗の反省的自覺によりてのみ顯勢する。そして、それは體驗の體驗として、體驗をどこまでも深化し、純化して行くことである。從つて、無限の自覺作用であり、限りなき自己沈潛であり、自我の純粹統一である。それ故に、再生の過程は、結局、自我から自己を定立する作用に於て成立つ。謂ふところの自我の定立作用とは、自我が極度の純粹さに於て、自己の眞の姿を捕捉せんがために、無限に自我の本源に掘進することである。自我の無限性と、體驗の內的生命とは、この作用に於てのみ見出される。そして、體驗としての生活は、これによりて、初めて自我の自覺的反射となり、當爲の具體的造形となり、內面的に融合する自覺の限りなき生きた流動的統一となる。從つて、そこには、融通無碍なる絕對的自由の世界が展開する。そして、價値と存在との融合統一の可能性が與へられる。蓋し、純人間的努力の究竟目的は、總ての有限性を超越する極限として考へられた神的觀念にほかならないのであるが、人間自からの裡に、極度の純粹さに於て定立された所謂「純粹自我」は、結局、この神性以外の何物でもないからである。そして、この神性こそは、限りなき憧憬の對象として、何れの倫理人もが、若しくば理性人もが、彼れ自からの裡に潜有するものであつて、それが即ち價値綜合としての宇宙そのものゝ眞の姿にほかならない。再生とは、結局、體驗の限りなき內面化によりて、自己の裡に、かくのごとき宇宙としての自己の本質に滲透することである。宇宙の秘密は悉く人間の胸ふかく潜んで居る。眞劍に、純粹に、自己を內觀するものにのみ、この秘密は開披される。そしてこの秘密を掴み得たもののみが、生活の眞の姿を見出し、文化の源泉を直接汲み取ることが出來るのである。

われわれは須らく、眼をわれわれの內部に向けねばなら

ぬ。ベルグソンの說を語りて言ふならば、直接に純粹持續の生活そのもの丶透明なオゾーンを吸ひ、それの限なき明光に浴せねばならぬ。この光を俟つて、われわれの裡に展開する一つの新らしき世界は、始めて如實の姿に於て照明されるであらう。かようにして、われわれは初めて自己の完全なる存在相に接し、自我としての自己の本質を摑み得るのである。そしてこの自我の定立作用によりて、自我そのもの丶裡に、何物の繫絆をも許さない自治の無限力としての、純正なる意味に於ける責任の意識が、自のづから創造される。この力によりて、自我は初めて自からを支配する。從つて世界を支配する。凡てのものを自己の裡に包攝し、初めをも、終りをも、また中間をも、凡て自己の裡に集一し、過去と未來とを、等しく現在價値の一點に統一する。かくて、最早自己以外に存する何物をも有たない。凡てが自己の中に潜在し、統一されて居ることを體感する。こ丶に價値の綜合體系が成立つ。かようにして、內面化されたものは、凡てわれわれ自からの生命の流である。それが、假令表見上、われわれから疎隔したとしても、それは、再びわれわれの內に再歸し、われわれの存在を豐富にし、われわれの力を增大しなければならぬ。この位相にありては、凡てが生きた精神の最高度に統一されて居る、能働と所働とは、對立を許さない一體となる。この境地にありては、それ故に、最深の必然は、同時に最高の自由として意識される。かくて、再生は、常に自己否定と關するところはない。反對に、自己の最高發展なのである。これをもつて再生の價値位相とする。個人と個人、個人と社會、階級と階級との密接なる本質的綜合は、この位相に於てのみ、初めて完全なる調和に於て實現される。そこには、最早相互に交涉なき何物をも存せない。凡てが各自の運命として展開する。かくて、社會生活を統導する責任原則は、また、それの最深義に於て確立されるであらう。

血と肉とに於ける自然的生命が、物質の法則によりて生ずるのに反して、再生の力はわれわれ自からが創造する。それ故に、再生はまた新生なのである。嚴密には、自我の、生命の新たな創造なのである。再生以前に自我があるのではない、生命があるのではない。再生によりて、初めて自我が生れ、生命が形成される。再生我を措いて、一般に自我は存在しない。これ以前には、そして、これなしには、人間は、單に一つの非人格的の或る物、一片の物質、與へられたる將有的一存在に過ぎない。假りに、再生以前に於ける人間が、尙ほ一つの我であるならば、それは、各自の本質とは直接交涉のない一つの他我にほかならないものであらう。再生の行爲によりてのみ、われわれ

は、初めてわれわれなのである。そして、われわれはこの眞實なる不可見的自己に於て、初めて、人間として生れたことになるのである。それ故に、再生を斷念するものは、同時に、自我を、生命を斷念するものである。そして、彼等は、永遠に純眞なる生の歡びを味ふことの出來ないものである。

しかし、この自我の創造は、一つの彫像を創作する美術家のそれではない。われわれが全然われわれ自からの中に沈潛して、そこに全體としての一つの渾一體を形成することである。この心境は一切の說明を超越する。從つて、抽象的言語と概念とをもつて、固より說明さるべきものではない。直接の體驗としてのみ味得さるべき境地である。かくて、再生は、再生自體に於て、一切の矛盾を超克すべき證驗を構成する。

五、理想の構成と自由

個人の自由は近代生活に於ける最も大きな、最も貴重な遺產だとされた。しかし、現代人はこの美はしき自由の名によりて、果して何物を得たのであるか。それは、結局、中世の奴隸的生活から、人間の魂を救濟することの代りに、却つて、現代人に取つては、新らしい、更らに悲慘な桎梏とさへなつたではないか。蓋し、自由は附け燒刃ではない。自由は決して與へらるべきものではなく、自から創造すべきものであつたのである。

然らば、自由とは何か？一定の動機にも理由にも、その他何物にも拘束されることなく、勝手に意欲し、行動し得る力を謂ふのであるか。若しも自由がかくのごとき選擇の無差別に存したならば、凡そ世の中に自由ほど危險なものはないであらう。そして或る思想家が言つたように、「多數の哲學者が意思の自由として表現するものは、その實、意思の狂亂（folie de la volonté）にほかならない」ものであらう。近代生活を混亂に導いた所謂自由放任主義は、まさしくこの意思の狂亂に墮して居たものである。しかし、自由は決して氣まぐれではない。放恣ではない。選擇の無差別ではない。選擇すべきものを選擇し得ることである。自由は常に當爲(ゾルレン)を豫定する。眞善美に關する何等かの觀念の構成を豫想する。これを假りに理想と名づけるならば、自由はこの理想の追求に於てのみ存し得る。それ故に、自由の本質は、意思の絕對的獨立としてではなく、寧ろ理想の不可避的實現を促進する能力、若しくば、當爲要求の充足可能性として、より完全に表現される。自由人とは、かゝる意味に於ける自由を、全幅に享有する人々を謂ふのである。當爲に反する選擇を爲し得ることは、常に最良のものを追求する能力なき奴

隷人に獨特の性質である。そして、それは無理想若しくば理想の低劣を意味するものにほかならない。理想の欠缺は、それ故に、人間に取つて最も大きな不幸とされねばならぬ。しかのみならず、與へられたる觀念を、最早盲目的に信ぜざるだけには開明して居ても、尙ほ彼れ自身に事物を觀察し、彼れ自身に規定して、理想の個人的觀念を創造するには未だ無能力なる人々は、尙ほ完全に解放されて居るのではない。これ等の人々は、遂に一度眞實なる自由の光に接して、彼等自身の主人となり、彼等の生活に確實なる指針を與へる能力を獲得するに至るまでは、たゞ漂流船のように、外部の出來事や、無定見な意思の誤算によりて、常に動搖しながら、何時までも行き當りばつたりの生活を續けて行くのほかはないのである。

しかし、人間は、一般に、眞善美に關する何等かの理想を構成して、兎も角も、凡ての外的諸觀念をこの理想の基準に照らして、それぞれ整理して行くだけの態度を取つて居る。われわれの評價なり判斷なりは、常にこの理想によりて導かれて居る。それ故に、理想は、それが單に盲目的に、何等の檢覈もなく許されてあらうとも、はた鋭い聰明の支配下に開明された意識の共助によりて構成されてあらうとも、兎も角も、それがわれわれの生活の最高基準であることに疑ひはない。

人間はかくのごとく理想を有する。理性的自我としての人間が、先驗的に理想を有することは、また人間の本質である。この人間理想は、自己意識に基く人間的發展の過程に於て、何等かの形に於ける憧憬若しくば當爲要求として、必然的に構成されるものであると同時に、それはまた、人間的自己發展を可能ならしむる根本的條件を成すものである。そして、人間としての幸福は、凡てこの理想の裡に宿つて居る。それ故に、一つの人格的存在としての人間が、彼れの全生活のために、常に一つの最高理想を構成し、實踐的可能性の最大限度に於て、それの實現のために努力せねばならないといふことは、正に人間的發展に特有なる價値要求の然らしむるところである。古代アラビヤの哲學者が言つたがように「人間自からに彩色せしむべく、下繪が人間に與へられて居る」。それの仕上げは人間の義務である「在らねばならぬもの」はまた必然的に實現されねばならぬ。そして、この實現のために、特に人間に惠まれた神秘的能力が、即ち自由である。

しかし、自由は理想を追求するがためにのみ存在する。從つて、完全なる自由は、また完全なる理想を豫定せねばならぬ。絕對的理想を捕捉することなしには、また絕對的自由は在り得ない。しかるに、絕對的合理化の過程に於てのみ成立つべき完

全なる人格的存在の絶對的理想は、純眞なる我自の本源的形態に於てのみ、先驗的に見出さるべき神性の表象にほかならない。それ故に、理想の絶對的構成は、前述するがごとき再生の過程に於ける純粹自我の造形に於てのみ期待さるべきものである。眞の自由人は再生人であらねばならぬ。再生の理想を究竟の生活目標としながら、そこに生活の普遍的法則を定立し、彼れ自からに於て、絶對的に正認さるゝ意思若しくば行爲に於てのみ生活する人々の間に、初めて純眞に人間的なる形式に於ける自由人の生活が發展する。この意味に於て、眞の自由人は常に理想人であらねばならぬ。

六、自由と責任意識

前述するがごとく、眞に純粹無碍なる自由は、再生人の生活に於てのみ惠まれた幸福である。蓋し、人間が彼れ自からと、彼れに終始すべき凡てとを、外部から受取るのではなく、彼れ自からの裡にそれを創り出すのでなければ、人間は決して自由とは言はれない。人間は彼れ自からよりほかの何物でもない。しかし、彼れ自からの一部でも一片でもなく、全的に、不可分的に、彼れ自身である場合に、彼れは初めて自由なのである。この瞬間に於て、彼れは初めて完全に、彼れ自からの姿を發見する。そして彼れが世界の最中心に立つと同時に、世界がまた彼れの存在の最中心を占めて居る。かくのごとくして、人間的要求の全的滿足を伴つた幸福の生活が展開するのである。そして、人間にこの自由を保障するものは、再生の過程に於て自のづから創造される自我の責任意識にほかならない。蓋し、責任意識は、既に述べたがように、結局、一つの絶對的中心、創造的起原として、自我が自からを確認する意識に於て成立つものだからである。人間が自から働きかけ、若しくば働きかけられることに對して、一つの状態若しくば一つの性質に對して、彼れが責任を感ずるといふことは、結局、それが外部から來るのではなく、凡て内的必然性として、彼れ自からが與へたものだとの意味である。若しも、それが彼れの最内的本質と共通なる何物をも有たなかつたならば、それがこの本質によりて、若も制約されてあらなかつたならば、彼れがそれに對して責任を有つといふことは、何の意味をもなさないであらう。彼れが責に任ずるものは、常に彼れ固有の存在内に屬するものであつて、結局、彼れ自身であらねばならぬ。それ故に、責任は彼れ自身に對するよりほかには、決して考へらるべきではない。彼れが單に或る與へられたもの、若しくば或る借り物であるのではなく、彼れ固有の所産であり、彼れ自からの所爲であり、彼

れ自からの創造である場合に於て、初めて責任の意識が成立つのである。責任意識が一切の倫理生活の基礎を成すと共に、またあらゆる人間的行爲にまでの判衡としての價値要求の公準たるべきは、これがためである。責任意識を俟つて、人間の存在を表現する外面生活の内容と形式とは、初めて彼れの存在の內面性と結合される。それ故に、人間が、例へば或る行爲に對して責に任ずるといふことは、行爲そのものに對してゞはなく、直接彼れ自からに對してである。かくのごとくして、われわれの自我は單に或る一つの物、或る一つの目的物たることから解放されて、初めて一つの自由なる人格となるのである。そして、かゝるものとしてのわれわれの自我は、自己に對すると等しく、また世界に對して、一つの無限なる創造力を獲得する。この意味に於て、初めて自由は創造力であり、創造力は自由なのである。

若しも各自の精神に力強き責任意識が支配して居なかつたならば、自由は結局一つの蜃氣樓に等しきものとなるであらう。責任意識を俟つて、自由は初めて生きた創造力となるのである。それ故に、自由が存するが故に、責任が生ずるのではない。責任が存するが故に、自由が生ずるのである。責任の及ぶかぎりに於て、また自由が存する。しかし、人間の行爲若しくば意思が、有責であり、從つて自由であると考へるものがあるならば、それは、明らかに根本的誤謬であらねばならぬ。行爲若しくば執意は、存在の一つの結果にほかならない。それ故に、これによりて制約され、決定されて居る。それが存在そのものに即する場合のほかには、決して自由は在り得ない。自由は、それの直接態に於ける存在そのものなのである。從つて、責任の、自由の、若しくば、自己創造の秘密は、克く思惟の達し得るところではない。それは唯、純一な生きた生活によりてのみ解かるべきものである。即ちそれは Problem として研究さるべきではなく、理解さるべきではなく、Aufgabe として遂行さるべきである。若しも、それが「問題」として取扱はれるならば、その瞬間から、われわれの責任態は、自由態は、直ちにその生きた實在の姿を失つて、一つの空虚な概念と化して了まふであらう。責任と自由とは、われわれの生活そのものを充實する直接の意味であり、直接の力である。言ひ換へれば、われわれの心靈のあらゆる能力と機能とが、理智と感情と意思とが、直接流れ出づる淵源にほかならない。それ故に、それは心靈の分立的働らきからではなく、理智や情意からではなく、たゞ自我の全體からのみ、生命の直接意識からのみ、把捉され得るものである。

人間の生活は要求の發展であつて、單に生きること自體ではない。その要求が當爲であり、有價値であることによりて、初めて人間的生活が發展する。それ故に、人間は意欲し、享樂するが故に、活きて居るのではない。彼れが責任を有するが故に、活きて居るのである。彼れの裡に責任が目醒め、責任意識が活躍する度毎に、彼れは自からを創造する。彼れが絶へず責任を意識することによりて、彼れは絶へず新たなる自己を創造する。それ故に、再生は時間と空間との限定を拒否する。そこには、原因と結果、能働と所働、創造態と被創造態との二つの様相があるのではない。能働的自我と所働的自我とは、責任意識によりて、まさしく同一體に統一されて居るのである。

責任と自由とは、それ故に、自我の統一を意味する。われわれが、自己の本質の最深處に於て、確實に已れ自からを摑むで居ることを意味する。しかし、これにも拘らず、この自己歸入、自己沈潜は、決して自我の分立若しくば生活の孤獨を意味するものではない。われわれがより深く自己に沈潜し、より強く自己を支配するに從つて、われわれは却つて益々、より密接に世界と結合される。そして、そこには、より豐かなる存在と共に、より價値ある生活が惠まれる。生活の存在樹が地上に繁茂して、美はしき價値の實を結ばむがためには、先づ地中に自我の心核が埋められねばならぬ。責任意識の根なき浮き草の手を以て世界を摑まふとすれば、自からと共に、また世界が失はれる。古今を通じて、苟くも大生活者若しくば大聖賢と呼ばれたほどの人々は、一人としてこの體驗の上に立つて居ないものはなかつた。釋迦にせよ、キリストにせよ、プラトーンにせよ、皆悉くそうであつた。

世界の創造の神話は、時の始まりとしてゞはなく、事物の永久秩序として理解さるべきものである。神が宇宙として示現するものであるならば、結局、彼れは内面性であり、純粹自我であらねばならぬ。若しも人間が神を自然の裡に覓めむと欲するならば、彼れは、徐々深く、その存在の姿を潜めるであらう。神は人間自からの裡に覓むべきである。宗教意識は、要するに、責任の下に統一されたる物我一如の體驗にほかならない。人間が彼れ自からを實現する場合には、また世界を實現する。そして彼れ自からを實現することなしには、また世界を實現することは出來ない。かくて、世界と我れとは、最早對立の關係ではなく、相互透徹のそれであつて、個體の原理は、同時に、總體の原理となるのである。個人の再生と社會の再新とは、凡てこゝにその根柢を置かねばならぬ。

七、再生人の生活形式

これを要するに、再生は個體と全體とを、自我と他我とを疎隔する凡ての障碍の克服である。この統一が絶對最高の意識として定立されない限り、部分は常に全體の調和を妨げる。性格の一方的形式は、常に再生の障碍となる。單なる稟性と才能との卓越は、必ずしも、實踐理性の名に於ける純眞なる人間性の完成に資するものではない。純眞なる卓越性は、再性人の責任意識に於てのみ見出され得る。若しも天才と名づけられるものが、眞の意味に於て、人間の卓越性を代表すべきであるならば、彼れはまさしく、再生人の理想的標式として解せらるべきものであらう。そして、彼れが、單なる才能若しくば稟性と區別さるべき一つの現實的意味を、こゝに見出すべきものであるならば、彼れが眞にその名を値する所以は、彼れと大衆との間に存する踰ゆべからざる鴻溝に於てではなく、反對に、彼れの純一なな生命の高調に於けるあらゆる人間性の包容力に存せねばならぬ。若しも、彼れが凡ての人類の運命を、直ちに彼れ自からの運命たらしめるものでないならば、彼れは決してこの名を値するものではない。天才は狂暴であつてはならぬ。天才の無責任を、人格の分裂を認容するがごときは、明白なる矛盾である。彼れの無責任に、天才の本質的特徴を見出さむとするがごときは、誤謬の最も甚だしきものと言はねばならぬ。純一なる人間性から、より深く彼れ自らに沈潜し、還入するに從つて、人間は益々天才の境地に近づくことゝなるのである。

生活の統一は時を超克する。過去も未來も、凡て生きた現在たることによりて、彼れの全存在が不可分の現在たることによりて、人間の生活は、それの最深蒂に於て統一される。人間は期待によりて將來と結合されるがやうに、また記憶によりて過去と聯結されるのであるが、しかし、眞の記憶は、眞の期待は、決して單なる映像の集成であるべきではない。それが等しく生活を構成する一要素たるがためには、責任意識によりて、現實の生血が盛られてあらねばならぬ。過去と未來との現實化は、責任意識を俟つて、始めて可能なのである。記憶若しくば期待は、責任意識の照査を俟つて、初めて現實的に有價値なるもののみに制限される。そして、さうすることによりて、始めて統一的生活の建設に役立つべき、それの本然的使命が果されると共に、眞に充實せる意味に於ける人格が形成されるのである。

かくのごとくして統一される再生人の生活には、最早や自我の存在内に包攝されざる一點をも存せない。彼れにありては時間と空間と共に超克されて居る。そこには各時限、各空限は存

たしない。過去と未來とは凡て現在の一點に統一されてゐる。そして、再生人の責任意識は、また自我の個體的束縛を超克する。彼れにありては、過ぎた時代の同胞も、また來るべき時代の同胞も、悉く彼れの存在内に包攝された一體を構成する。再生人に取りては、それ故に、歴史の特別なる意味が發展せねばならぬ。彼れにありては、人類の自意識としての歴史は、擴大されたる彼れ自身のそれである。歴史は擴大され、純化されたる追想として、深く彼れ自らの體驗の裡に巣喰つて居る。彼れにありては、化成の凡てが歴史的なのではない。人間の精神に取りて建設的意義を有するが故に、生活の記錄として生きのこるもののみが、歴史的なのである。彼れは歴史の流れに於て、彼れ自らを發見する。歴史は直ちに彼れ自身の生きた生活の記錄にほかならない。歴史の超時間的價値は、彼れに於て、初めて正しき意味に於て味得されるであらう。

　再生人に取りては、世界は混沌ではない。責任意識のヴェヒクルを介して、カオスはコスモスに超克されてゐる。世界は、凡ての時空を通じて、それの包攝する内容と意味とに於て、彼れの責任の對境である。この無言の擴充に於て、責任の力は、初めてそれの神的起原を現示する。再生人に於ける自他一如の責任感は、利他の商量によるものでもなければ、また同情に觸發するものでもない。たゞ如實純粹の自己還入にほかならない。彼れは凡ての愛と凡ての社會的結合との基礎を、そこに發見する。彼れは敢て最大多數の最大幸福を道德的信條とするものではない。彼れの目標とするものは、直ちに眞の勝利であり、善の勝利であり、美の勝利である。彼の愛護し、奉仕するものは、直ちに眞善美そのものであつて、そこには、利己も利他もあるのではない。自他一如の生きた充實力は、責任意識そのものゝ裡に躍動する。社會の連帶若しくば人類の連帶は、再生人の意識に於て、初めて生きた實在として、力強き幸福なる形想を展開し得るであらう。

　時空の凡ての限界を超越する責任感は、固より、國境により、民族境により、社會境によりて、毫も煩ひされるものではない。それの對境は全人類である。責任感はそれの對象を生きた實在として理解するのであるから、それは當然人道の觀念に到達せねばならぬ。再生人にありては、彼れの價値を高めるものは、同時に全人類の價値を高めるものであり、全人類の價値量の扶殖は、直ちに彼れ自身の價値量の扶殖である。それ故に、凡ての消極價と凡ての害惡とは、また凡て共通的のものである。凡ての罪科は彼れ自身の罪科である。彼れは彼れと同胞とに於ける過誤の總量を消却せむと努力する。若しも人道が人

間の共同運命の自覺に基く一つの絶對感情でなかつたならば、それは、單に人間界の皮殼を流るゝ一つの微光にすぎないものであつて、それの外延の擴大するに從つて、ますます無力なものとなるであらう。それが人間の中心から放射する光力である場合にのみ、それは固有の强さを獲得する。この場合に、初めてそれは人類の運命を形成すべき現實の力となるのである。固より人道は尙ほ責任の最大限でもなければ、また最高限でもない。何故なれば、責任の素材は決して人間界を以て悉されるものではないからである。責任は、凡ての生物一般、存在一般を包攝する。かの佛陀が遍滿無邊の慈悲の教理を確立するに至つたのは、草木の露の末にまで、尙ほ彼れ自からの生命を認識したがためであつて、彼れの思想は、まさしく、形而上學的に、責任意識を最極度に高調したものにほかならない。宗教の最深の秘密は、實にこゝに存するのである。キリストが救世主と呼ばれる所以は、彼れが一切の罪あるものの責任を、自からその一身に負擔したがためである。それ故に、責任及び救世の事業は、常に獻身愛のそれであらねばならぬ。愛なき責任が死に等しきものであるがように、責任なき愛はまた盲目に等しい。盲目の愛は眞の愛ではない。眞の愛は責任感に滿された生きた愛でなければならぬ。この愛の力を俟つて、内的必然性としての道德的法則は、やがて内的生活の創造的自由にまで高めらる。この力によりて、自我は、それの孤獨から、それの分立から救はれて、初めて世界の凡てと密接に結合される。かくのごとくして、愛は人間の精神を支配する最高の法則となつて、遂に一つの世界的宗教にまで發展することになるのである。こゝに愛の最高發展としての再生人の生活形式が存する。

八、目的文化より價値文化へ

近代文化は凡て目的の文化であつた。近代文化に於ては、物質的造形としての結果が、外界の改造若しくば支配が、殆どそれの絶對的目標とされて居た。近代意識に於ける自然科學の支配的地位は、個人生活に於ける極端なる功利主義、並びに近代的大國家の露骨なる帝國主義と相俟つて、まさしく、現代文化のこの方面を明瞭に特質づけるものである。從來軍國主義として表示されたもの、即ち物理的及び機械的强制手段の終局的意義に對する絶對的信仰は、近代生活を一貫する同一傾向の一變種にすぎない。今日世は擧げて、軍國主義の所謂「力は權利に優る」の原則を呪つて居る。しかし、それにも拘らず、現代文化と現代生活とは、凡て力の無條件崇拜を以て一貫されて居る。現代文化のこの特性を理解せむがためには、單に日々の新

聞紙に一臂を與へることを以て充分とするであらう。蓋し、それの一般的内容は社會的に集團化された個人的利益の追求よりほかの、殆ど何物をも表現しない。しかのみならず、それが假りに、一定の理想若しくば合理的要求の假面の下に於てゞあらうとも、そこでは力が凡てを解決する。目的は常に手段を神聖にする。しかし、純功利的にたゞ結果をのみ目的とする文化は、結局、生活の無政府に到達せざるを得ない、何故なれば、それは要するに凡てに對する凡ての闘爭として考へられて居るからである。假令、憲法や國際法や乃至國際聯盟が存在しようとも、それは毫も革命と戰爭とを防止するに役立つべき安全瓣ではない。この文化傾向が繼續するかぎり、個人間と國際間とを問はず、生活範圍のための闘爭が合理的に整序され、生活關係の安定が回復され得る時期は、恐らく永久に期待されぬであらう。

かくのごとく、近代文化は、凡て目的の王國に於て動いて居る。若しも來るべき時代の要求する文化が、純粹に人間的なるそれであるべきならば、それは、まさしくこの目的下の奴隷狀態から、人間性を救濟することに、それの重點を見出さねばならぬ。しかるにこの解放は、目的を價値に高めることによりてのみ、價値意識の擴充と深化とによりてのみ、期待され得る。價値意識は、しかし體驗である。價値は決して客觀的結果ではなく、常に生活と體驗とである。そして體驗は個人のみが有ち得る。しかも個人は一つの秘密であつて、彼の裡には、彼れ以前に決して世界に存せなかつた、そして彼れ以後に決して再び存せざるべき、凡ての概念的說明を超越した非證驗的の或る物が宿つて居る。そして、それは人間性の最も純正な内容を化身するものである。若しも、われわれがこの非證驗的實在に於て見出さるべき、嚴正に個人的なる體驗に即する生活價値を實現しようとするならば、そこには、即ち價値と生活との、要求と充足との、自己の法則と他人の法則との階調を豫定せねばならぬ。そこには、自我と世界との、主觀と客觀との分離に先在する一つの統一を、あらゆる可能的不調和の先在條件をなす一つの調和を豫定せねばならぬ。そして、それは、心靈としての價値意識が、その本原に立ち戾つて、個々の生活内容から區別される形式である。純粹に人間的なる文化はこの形式に於てのみ發展する。絕對に外面的に方向づけられた。近代の目的文化から純正なる價値文化への轉化は、それ故に個人的再生の過程に於ける體驗としての内面化によりてのみ、達成され得べきである。

この點に關する詳細は別論に讓らねばならないが、

は、しかし、いま率直に結論として主張する。それが人間であれ、社會であれ、國家であれ、文明であれ、文化であれ、これ等の凡ては、それが再生に、自他の調和に、神性の表現に役立つものでないならば、恐く單なる偶像にすぎないと。それが苟くも、創造に、價値に、若しくば本質の問題に關するかぎりに於て、また恐くこの見地から判斷さるべきものである。殊に、凡ての種類の形而上學は、常に人間の裡に形成せらるべき宇宙の統一的意匠を豫定する。美術にせよ、哲學にせよ、文化にせよ、それの純正なる意味に於ては、恐くこの法則に服せねばならぬ。假令、それが存在の觀念上の正認であるとしても、しかし、眞の觀念は、無から形式されるものではない。それは先づ直接の實在として經驗されたものでなければならぬ。それ故に、觀念によりて世界及び人間を正認しようとすることは、結局、不可能のことであつて、正認は常に實在からのみ求めらるべきものである。理想主義の眞僞を判別すべき公準は實にこゝに存する、それが、若しも現實からではなしに、理想から、本質及び基本としての自我とそれの再生とからではなしに、思索と感觸とから、若しくば哲學と藝術とから出發したものであるならば、あらゆる種類の理想主義は、最も粗笨な唯物主義にもまさりて、人間の誤謬を表現するものにほかならない。われわれは、

哲學により、藝術により、文化によりて再生し得るのでない。再生はわれわれ自からの本質に滲透することによりみ、責任意識の成深化によりてのみ可能なのである。われわれが再生するかぎりに於て、眞の藝術は、眞の哲學は、眞の文化は、自の内からわれわれの裡に生誕する。眞善美の統一は各自の心髓の裡にのみ宿つて居る。もしもわれわれが内的に美でなかつたならば、われわれは決して眞に純粹の美を享樂し得るものではない。虚妄を芟除し、混濁を濾過して、われわれ自からの心根が明澄に淨化されて居ないかぎり、決して正當の思想が構成されようはずがない。われわれ自からが惡性から解放されて自からの情緒が善性に傾いて居ないかぎり、われわれは決して一般に善事を追求し得るものではない。そして、われわれが、自己と世界との本質をしつかりと掴んで居るものでないかぎり、自から本質的に指導されて居るものでないかぎり、われわれは決して、美であり、眞であり、善であり得るはずがない。固より、われわれは哲學を、藝術を、文化を否定するものでもなければ輕視するものでもない。しかし、われわれは望むべからざるところに、それを覓めてはならない、たゞわれわれが正しき領域に於てそれを覓むる場合にのみ、それは初めて生きた繚亂の姿に於て見出さるべきものであることを、わたしは言はうとす

るに過ぎない。

現代文化の空虚なる偶像の前に禮拜することを已めよ、それは既にあまりに多くの犧牲をわれわれから要求した！觀念の形成としての文化は、現實の生活から觀念の素材を汲み取らねばならぬ。そして、生活の本質は、生活の永遠性は、責任意識の深化による再生に於てのみ見出される。本質的なるものは、常に、眞をも、善をも、美をも、凡てそれ自からの中に包藏する。光は內部に點ぜられねばならぬ。

人類の墮罪は永遠に解きがたき一つの神秘でもあらう。しかし墮獄なしには復活はあり得ない。墮罪は人間的生活形式を發展せしむべき先在條件である。樂園は如何なる文化をも有たない。そしてまたそれを必要としない。墮罪と共に、初めて世界との對抗、認識、勞働、文化が初まる。文化の世界は闇黑との不斷の鬪ひに於ける再生の彼岸にのみ展開する。そして、この運動の意義は、失はれたる調和を再び發見し、失はれたる樂園を再び創造することのそれである。この認識は今日特に必要とされねばならぬ。



現政府の御味方黨と所謂護憲三派對比觀

護憲三派をして普選の實行を

安部磯雄

政友會の分裂は我國の政界に非常な波瀾を捲き起したが、之れが爲めに政治の局面に新しい何物かゞ展開されることが豫想された。政友會の分裂は悲しむべきであるといふよりは、寧ろ賀すべき事であると思ふ。それは多く云ふまでもなく、我國の現在の狀態では、一の政黨が絕對的多數を占めるといふことは、自然に政治の腐敗を來す原因となるので、其點から云つても政友會の分裂は國民の之れを慶賀する理由がある。今後政友會の分裂に依つて捲き起された波瀾がどう收まるかといふ將來の事は兎に角として、目下の問題として、政友會と政友本黨とが、總選擧の結果、どういふ風になるかといふに、それに對して今日あらかじめ明白に答へるといふことは容易ではない。第一私共は政友會の分裂が如何なる事情に依るかを知らないのであつて、恐らく其內情に至つては何人も之れを知ることが出來ないであらう。又黨內の人にしても各々其意見が異つて居て、之れに對して適確な說明をすることの出來る人はあるまいと思ふ。從つて、外部の者が此間の事情に對して適當な判斷を下すことは困難であるが、只極めて表面的な觀察を下すと、實は政友會と政友本黨とを比較して、感情の上からも、其孰れを非とし、孰れを是とすることも出來ないが、唯人物といふ一點に就いて、其處に多少批判の餘地がある。私は政友會の首腦と呼ば

れる人達に就いては全く知る所がないが、併し政友本黨の方の人達には親く會つて話したといふ譯でもないが其人の演説を聞き、或は他の人と談話をして居る處を見聽きしたことがある。政友本黨の人で一番私が感情上好きになれるのは床次氏である。それから他の一人は中橋氏で、此人の演説は二回聽いた丈けであるが、其時の感じは如何にも肌觸りの好い、きび〳〵した人のやうに思はれた。其他の山本とか、元田とかいふ首腦株の人達は人物としては皆同じやうに立派な人達だと思つて居る。其點からいふと政友會よりも政友本黨に人物が多いのではないかといふ感じもする。又もう一つ玆に云ひ添へれば、或は一の團體が分裂する場合には、それから別れて行く方が、そこに留る者よりも一層元氣があるやうに見える。何となく殘留組の政友會の方に秋風落寞の感があつて、政友本黨の側に却つて活氣があるやうに思はれる。併し私共の注意しなければならないのは斯かる瑣末な點ではない。寧ろ政黨としての政友本黨と護憲三派とを對照して見た時に、孰れに同情を寄せることが出來るかといふことを考へると、政友本黨に肩を持つことが出來なくなる。その理由は誰も考へて居るやうに、政友本黨が清浦内閣を援助して居るといふ點にある。現在清浦内閣が如何なる政治をやつて居るかといふことは大した問題ではない。若し單に比較的善い仕事をして居るといふ點から云へば、清浦内閣は決して惡い内閣とは云ひ難い。併しながら政治上の純理論から云へば清浦内閣の成立に就いては大々的に反對しなければならない理由があるのである。清浦内閣は啻に政黨といふ根據に立つて居ないばかりでなく、過去に於て現れた官僚内閣の中でも最も徹底に官僚臭味を露骨に現して居るやうである。即ち世人の云ふ通りに清浦内閣は貴族院内閣であつて、斯かる看板を掲げて内閣を組織した例は今迄になかつたであらう。立憲政治の立場から見れば今の内閣は最も非立憲にして最も劣惡なる内閣と云はなければならぬ。斯くの如き内閣を援助する處に、政友本黨に對して同情のないのは當然である。然るに政友會が分裂した時に、政友本黨側の人々は、清浦内閣を援助することの辯護として、常に斯ういふことを云つて居た。それは政友會は既に加藤、山本の兩内閣を援助したことがあるのだから、今更清浦内閣を排斥するのはおかしな話であつて、我々が清浦内閣を助けるのに何の差支がないといふのが彼等の云ひ分であつたが、これは一の詭辯に過ぎない。何故なれば、それは一度ならず二度までも犯罪をやつたから三度目にも罪を犯しても同じであるといふ論理に陥るからである。政黨内閣でない内閣を援助するのは政黨として不面目には相違ないが、併し政友會としては種

々な事情のために加藤や山本の内閣に反對することは出來なかつたが、政友會自身は決して自分のやつた行爲を善いと考へなかつたことは明かで、惡いと知りながらやつて居た時に愈々清浦内閣が成立したので、もう佛の顏も三度で、今度は清浦内閣を排斥する決議をしたのである。これは兎に角從來の政友會にして此決心を爲し得た處に價値があり、政友會が自覺して彼自身の本然の性に立ち還つたのは喜ぶべきである。然らばそれに對して政友本黨が政友會を兎や角批難するのは全然見當違であると云はなければならない。元來清浦内閣が生れた時に、政友會、即ち分裂以前の政友會の執るべき途は二つより外になかつたと思ふ。第一の途は、絶對多數を占めて居る政友會は奮然起つて清浦内閣を排斥すべきであつた。あゝいふ絶大な勢力を持つた政黨が何時までも政黨の上に基礎を置かない内閣の成立を默認するのは不合理であるから、一擊の下に清浦内閣を倒す意氣を示すべきであつた。其意氣が政友會にあつたならば初めから清浦内閣は生れなかつたらうと思はれる。畢竟政友會に隙があつたからこそ此度のやうな馬鹿々々しき貴族内閣などが出來上つたのである。併し政治界のことであるから種々、さうすることの出來ない複雜な事情もあつたであらうし、殊に政友會の側から云はせれば、若し政友會が清浦内閣の正面攻擊をやれば、或は憲政會が清浦内閣を援けて、當然今年行はれる總選擧に内閣の援助を得て憲政會が政友會よりも多數を議院に占めるやうになりはしないかといふ懸念もあつたに相違ない。若しさういふ危惧があつたならば當時の政友會の執るべき第二の手段があつたと考へられる。それは立憲政治の爲めに斷然憲政會と手を連ねて清浦内閣に當るといふことである。併し或人はそれは要するに理想論であつて現在の政界に於て行ふべからざることであると云ふであらう。けれども政友會と憲政會とは絶對に聯合することが出來ないといふ理由はない。現に此度のやうに政友會と憲政會とは革新俱樂部と共に護憲運動に携はつて居る位であるから、此兩政黨の提携が絶對に不可能であると斷言することは出來ない。尤もさういふ場合には政友會が寛大な度量を示す必要がある。それには憲政會と妥協する以上、政友會が政權を他に讓らねばならぬ場合には、必ず憲政會の總裁を次の總理大臣に奏請するといふ一の固い約定をしてそれを實行したればならぬ。斯ういふ固い約定が兩者の間に成立したならば、如何に藩閥や官僚閥が焦つて見ても、清浦内閣の如き不自然なる内閣が出現することは出來ない。此事を考へると今の政黨が孰れも駄目なことを思はせるが、殊に我國に於て政黨政治の行はれない主なる原因は之れを政友會の責任に歸しなければなら

ない、嘗て原内閣が出現した後に高橋内閣が生れて、日本に於ても立憲政治が順調に向つたことを思はせ、最早藩閥政治は没落してそれが再び勢力を持つ機會がないであらうと豫期された時に當つて、偶々政友會の分裂を見るに至つた。勿論政友會の分裂其物は悲むべきことではないが、其分裂の爲めに再び立憲政治の進歩が暫くでも逆行しなければならなくなつたのは甚だ遺憾である。若し此分裂が單なる分裂に止まるならば先に云つた理由に依つて寧ろ喜ぶべき現象であるが、政友會の分裂が、そこから離れた政友本黨の後に殘れる政友會に對する不平の爲めに、それが分裂したといふよりも、清浦内閣を援助することが動機となつた分裂であつて、總ての政黨が互に相扶けて行くことに依つて其態度を決定すれば、政黨内閣を確實に樹立し得た瞬間に於て、政友本黨が政友會の分裂の原因となつたことは大に悲むべきである。それと同時に正に立憲政治の確立せんとする瞬間に於て、之れに裏切つた者は政友本黨であるといふことが出來る。其結果從來見られなかつた官僚的内閣が頭を擡げる機會を與へた。併し政友本黨の罪は猶之れ丈けに止まらぬ。といふのは、若し政友本黨が清浦内閣を援助する態度を執ることが、彼自身の主義に依る場合にはそれも一の態度として差支はない。實際に清浦内閣を援助する目的が日本國家の爲であるとか、或は又現在の我國の状態では、藩閥や官僚と提携しなければ政黨は成立しないといふ信條に基く主義に依つて居るならばそれも一の考である。併しながら政友本黨としては、我黨は飽く迄も元老や官僚と提携する者であるといふことを天下に標榜することの出來ない立場に在る者である。若し果して政友本黨の眞意が其處に在るとするならば、政友本黨は單に五月の總選擧の爲めに暫く清浦内閣と提携することに依つて、其報酬として現内閣から多くの便宜を得たいといふのが其本音であらねばならぬ。それに依つて政友本黨が成功し、議會に過半數を得た曉には、彼等は最早清浦内閣を援助しないであらう。斯ういふ事を考へても、政友本黨が餘りに官僚を利用することが露骨であり、其意味から云つても此度の總選擧に於て同情を得ることは出來まい。若し有權者の多數が政友本黨に投票するやうであつたら、それは我國に於ける政治思想の幼稚なることを物語るものでなければならぬ。

次に普選問題に關する各派の態度を見れば、云ふまでもなく護憲派は無條件で普選案を提げて、即時に之れを實行しやうとするに對して、從來の政友會は多少制限を附けて普選案に賛成しやうとする根據はあつた。茲に興味のある問題は今後分裂後の政友會が普選問題に對して如何なる態度を執るかといふこと

である。若し分裂前の政友會、即ち今の政友本黨のやうな制限普選案を固執するならば、護憲派の足並はたしかに亂れるに相違ない。政友會が今日に至る迄普選案に對する態度を決しない事は非常に遺憾なことであつて、三派が聯合する以上は此問題などに對しては夙に政友會の態度は決して居なければならない筈である。然るに選擧期日の切迫して居る今日になつても猶政友會が依然として普選問題に對して態度を決して居ないのは、或る人の說に從へば、若し政友會が無條件普選案に贊成した時には、政友本黨側から政友會は危險思想を抱くものであるとか、或は赤化したとかいふ風な宣傳をされる惧がある故であつて、其場合の總選擧に於ける不利を考へるが爲めであるといふのである。若し此想像が當つて居るならば隨分滑稽な話であつて、如何に日本國民が無智であるからと云つて、普選を以て直ちに危險思想なりと考へる者があるであらうか。假りに普選が危險思想を伴ふものであるとするならば、暫く外國の例を見ても、亞米利加や濠洲に於てはそれは何うであるか。斯くの如き宣傳は要するに小供騙しの宣傳に過ぎない。私の信ずる處では、總選擧後に於ては政友會も必ず無條件の普選案に贊成するやうになるであらうと思ふ。斯くの如くにして、三派が聯合することになれば、總選擧後に開かれる臨時議會に於ける政黨各派の旗色は極めて鮮明になる譯である。政友本黨は其中で最も時代遲れの、極めて保守的な傾向を有する政黨と認めらるゝやうになり、護憲三派は比較的進步的な政黨としての地位を占めるやうになるに違ひない。又同時に淸浦內閣が提出せんとする普選案は護憲三派の爲めに一蹴され、無條件の普選案が議會を通過することになつて、淸浦內閣の辭職の止むなきに至るかも知れない。

　普選問題に就いて私共が常に懸念したことは斯ういふことであつた。兎に角此問題は重要なる問題であると同時に、非常に人氣ある問題である。所謂普選が日本に實施される曉には、其實行者は我國の歷史に於て大なる榮譽を擔ふことになる。此事は如何なる政黨と雖も考へて居る處であるから、機會さへあれば其名譽を擔ひたいといふのが多くの政黨の希望して居る處ではないかと思ふ。此點から云へば革新俱樂部の如きは第一の功勞者と云はねばならぬ。それに次ぐ者は憲政會であつて、今日は此兩者が普選案を擔つて立つて居る譯である。然るに今迄多くの人の考へて居た事は、何時か時機が來れば、政友會が普選案を突然議會に提出して、自分の手で普選を日本に實行したといふ名譽を擔はうとするのではないかといふことであつて、私共にもさういふ懸念があつたが、思ひがけない淸浦內閣が自分で此榮譽を擔ふ野心を起して來た。之れは一種の皮肉である。

私共國民としては斯かる重要な、又民衆的な問題を貴族内閣に依つて解決され、實行されることを好まない。勿論政友本黨などが其名譽に與るべき筈のものではない。若し政友會が總選擧後に大決心を以て革新俱樂部や憲政會の普選案に贊成することになれば、普選實行の名譽は當然其得べき者の手に歸することになる。此意味から云つても私は何處までも政友本黨が此總選擧に於て、其議員數を增加することを好まない。無論國民もさういふ風になることに反對するに相違ない。出來るならば此政友本黨に大なる打擊を與へて彼等をして悟る所あらしめなければならぬ。私自身に就いて云へば從來選擧の度に、誰を選擧すべきかに就いて迷ふことが屢々あつた。或場合には候補者の人物が面白くないので棄權したことさへもある。併し此度の總選擧に於ては、私は少しも迷ふ所なく、必ず私の一票は護憲派の爲めに投じたいと考へて居る。

動機の内質的無差別

杉森孝次郎

政治家の、したがつてきた政黨の第一要件は、動機の公だ。いはゆる護憲三派も、その三派間に、多少の質別を有することとはあきらかだが、動機の公を標準として觀察されれば、三派ともに、それをあまりに私的なものにして持つてゐるといふ判斷は、國民の大部分にすでに成り立つてゐ、まだ成り立つてゐない小部分にも、わづかの反省をまつて容易に成り立つ。政友會はいはずともの事として、憲政會だつて、それの多年の不遇は、理想ゆゑにではなく、むしろ實に薄志弱行ゆゑにであつたことを、なに人か知識を備へて否定しえよう。その薄志は、しばしば、薄操を適稱とするものでさへもあつた。

黨首加藤氏をはじめとして、あるひはすくなくとも黨首加藤氏は、及び氏に代表される全黨は、政友會ほどに低級な現實主義の積極力をば曾つて示さなかつたが、善にかけても、同樣に底ぢからを缺いたものであつたことは、周知にして眞知だ。加

藤氏が、夙にみづから衆議院に打つてでなかつた一事を見ても、政變の前夜ごとに、元准元老、樞府、貴院、官僚、軍閥等に對して、よそ目に齒がゆい多少の行動を暗示したらしい一事を見ても、氏の内政論、たとへば普選論の如きにしても、氏の外政論、たとへば對露論の如きものと、要するに同樣の不自由を奧深く脫却してゐないものであることを、すなはち、氏の現代日本の國民政治家としての資格にある不充備の要點があることをつづいて意識しないことは困難だ。

革新クラブ内の或るわかい人々を、いささかの程度に於て別として、要するに護憲三派なるものが、政友本黨との對比に於いて、動機に於ける内質上の差をほとんど示さず、偶然の境遇に屬する差、外緣、事情の上の差を代表差として公平なる注意眼にはあやまたず明示することは、不幸にして再思の餘地もない。

動機に於いて純粹に公でない政治的行動には、勿論政治言論をそのうちに完全に含めて、國民のまじめな興味は湧からやうがない。先づ動機に於いて純公であり、しかる上に、知識に於いて最新であることが、現代政治家、現代政黨の最低限要件だといふ平明理を、いはゆる護憲三派を意識するにあたつて、再び最直續の結論として意識せずにすむ人は、政治に對する批判的生命を現に持たぬ人のほかにはないと直ちに明確に考斷されることを、研究の增進はいよく\完全に然定するだらうと信ずる。

片や政友本黨、片や護憲三派

文學博士　三宅雪嶺

蓋を明けたところで蓋しと說明するものの、蓋を明けるまで、芋の煮え加減もはつきりせず、選擧の結果などなかなか判りやうが無い。約三倍の候補者が競走し、中に番狂はせもあり、可なりの變化を待ち受けずに居れぬ。それでも結局四六四の數に限られ、その間に勢力爭ひするに止まり、何としても其の外に出る事が出來ぬ。勢力爭ひとて今に初まつたのでなく、幾年の事情が着き纏ひ、根本的變化と言ふに至らぬに極つて居る。舊政友會二百八十が政友本黨百五十、現政友會百三十となり、

其處に憲政會百が控へ、殘り八十幾名中、革新倶樂部が何十人かを占めたのであり、其の比例が如何に變るかが希望又は憂慮を以て待たれて居る。

或る政黨の擴張は、他の或る政黨若くは准政黨及び無所屬を侵略する以外、他の或る黨派と聯合するを意味し、現に三國鼎立し、互に他の領分を削るに努めて居る。何黨が第一黨と成るかと問ふと同時に、第一黨が何名を占めるかを問ふべき事になつて居る。前議員の比例から推せば、政本第一、政友第二、憲政第三と順序づき、それが其の儘で維持されるか又は順序が變るか、變るとして如何になるかが噂とりどりである。三黨の孰れもが第一黨たるの可能性を以て居り、政本と憲政とが兩々相並んで驅け出し、或ひは赤が先になり、或ひは白が先になり、稍遲れて政友が必死に驅けて居ると見える。前例に據れば、憲政が最も後れる譯であつて、それが第一着を爭ふところが、現總選擧の異色であり、それだけ政本も政友も聊か惑ふところなきを得ない。

從來政友會が絕對多數を制し、他の黨派の追隨を許さなかつたのは、舊自由黨が主體を形造りつゝ政府黨と成つたところが最も多く與つて居る。舊自由黨員も一概に云へず、中に資本家も加はつたけれど、金の無いのが多く、其の癖、金を得れば撒き散らすを厭はぬ。政府の與黨となり、引き續いて唯一の政[illegible]黨となり、凡そ得べき限りの利權を得るに努め、金を得れば[illegible]々に使つたりした。幾分か博徒めいた肌合もあり、泡く錢が[illegible]に這入るところもあつたが、いざ競走となれば如何なる手段でも勝たうとし、買收ならば買收で勝たうとする。選擧區を腐敗させたのは、種々の事情よりするものの、舊政友會の泡く錢を[illegible]ラ撒いたのを、有力なる原因に數へずに置けぬ。バラ撒かねば吝つたれと思はれ、バラ撒いて肌合ひを見せるところもある。何にしても幾年か政府黨として金の融通がつき、吾黨でなくては此の眞似が出來ぬとなつて居つた。

ところが其の政友會が二派に分れ、互に本家爭ひするが、舊自由黨の肌合ひを承け繼いで居るのが政友側に多く、泡く錢を得てバラ撒かうと思ふに於いて變りがない。只幾年も政府黨として慣れて居り、萬年政府黨のやうに心得たのが、俄に反對黨として起ち、聊か戸惑ひするを免かれぬ。有繫に古い看板を掲げ、若干の倉を押へて居つたので、多少の餘裕があり、舊自由黨の素寒貧と違つて居る。若し第一黨と成つたならば、內閣を組織し得るとし、此處が奮發の仕どころと考へ得るが、絕對多數を制した時と違ひ、思ふやうに金廻りの着かぬところがある。或る大銀行との關係あつても、前のやうに威勢よく金をバ

ヲ撤く譯に行かぬ。此處で負けてはとか、此處で勝たねばならぬとかで大奮發し、相應の運動を爲し得るが、反對黨の不自由を感ぜずに居れぬ。

其處へ行けば、政本側は比較的金持ちも居り、政府黨として立つて居るところもあり、金に不自由ない筈であつて、ない筈と思はれる所が、金の使ひ惜いところとなつて居る。金はあればあるだけ、無ければ無いだけ、頗る彈力の強いので、其の程合ひを決するに苦しむ。金が貰へると見込んで本黨側に成つたのも少くなく、當人が金を當てにせずとも、運動員が當てにし、金が出ると知れれば、何程あつても足らぬ。金は出さうで出ないものと云ふを知らさねばならず、之を知らすだけでは、選擧が危くなり、出すべきところに出さねばならず、金の出し入れする者の苦心一通りでない。金のみを目がけて忠義立てする者が、失望する姿になつて居つても、何と云ふても金廻りが善いに相違なく、自ら第一黨を以つて居るのも、其處に恃むところあるに出で、世間でもさう考へて居る。

然し現在の一五〇を一八〇とするのは、政友の一三〇より削り取るのであつて、政友會から取れねば見込違ひになる。憲政會は辛うじて一百名を有し來つたにせよ、その辛うじて維持し來つたのは、最低極限とし、他から最早削り取り得ないのを示し、且つ自ら進んでいくらかを開拓するを得、場合によつて大いに開拓するの希望がある。舊改新黨員は舊自由黨員程貧乏でなく、少くとも貧乏を標榜するを欲しなかつたが、性分もあり、泡く錢を得るの少いところもあり、例外を除いて金離れが可くなく、比較的金の使ひ方が少くて、現在の位置を占めて居るのが、其の强味と云へば云へぬでない。舊政友會に負けぬ程金を使はなかつたので、絶えず受け身になつて居り、それでも大隈内閣當時の如く、如何なる手段でもといふ事になれば、一百の政友會を一百に叩き落すに難くなかつた。今は反對黨であり、當年の如きを得べくもなけれど、第一黨として、總裁に大命の下るべき希望を繋いでは、能ふ限りの奮發せずには居れず、後援者も奮發するところがあらう。

奮發して第一黨に成るに努めるとて、何處で數を增すべきか。政友との競爭も免かれぬところとし、護憲運動協調もあり、如何に地方は地方としても多少遠慮せずに居れず、無遠慮に競爭すべきは政本に對してである。他の弱い黨派又は無所屬より引き入れるところもあらうが、目指す戰場は政本を敵とする所にある。憲政が多くなればなる程、政本が勢を殺がれるのであつて、憲政が第一黨とならずとも、現在より擴張し得る限り、政本に於いて思ふさま多數を制することが出來ぬ。政本が現在の

一五〇より以上に出で得るか何うか。憲政會が同數に上らぬ間、それで政本が第一黨たるを得るが、單に第一黨たるを以つて大命の下るを待ち設け得るか何うか。假に大命の下るとし、如何に多數を制するか、萬年與黨と共にしても數が足らず、三派の何れかと妥協せぬ以上、豫め解散を覺悟せねばならず、其の解散でいよいよ多數を制し得るかが疑はしい。今の政友會から馳せ加はる者が多からうと見込むけれど、さう思ふやうに行けるものでなからう。今のところ先きの先きの事は何とかならうと多寡を括るに過ぎない。

憲政會又は政友會が第一黨と成れば勿論、さう成らなくても必ず大命が下らぬと限らぬ。前に大隈板垣の二人に大命が下つた事がある。一名に下つても兩名協同の前提に於いてすると承知すべきである。政憲革三派が協調を保つ間、内閣の死命を制するとして妨げない。三派協調が難しいと云ふけれど、二大政黨の慣例は其の本場なる英國に於いて變兆を呈し、小黨が妥協して政務を擧げ得るやうになつて居る。欧大陸で普通の經過と知られ、如何に若干小黨が妥協するかを肝要の點とす。之に比べて日本は小黨分立の甚だしきに至らず、甚だしきに至つたとて必ずしも心配すべきでなく、其の甚だしきに至らねば猶更らである。いよいよ絶對多數黨が消滅し、若干小黨の協調を要するとなれば、それ相應に道が開かれやう。

護憲三派の一に大命が下るとし、差當り協調を維持し、聯立内閣を造らう。間も無く紛擾が起ると言はゞ言へ、さう搬ぶべきであり、又案外長持ちせぬと言へぬ。政本黨に大命が下つても直ちに解散を考へる程野暮でなく、憲政又は政友との聯立を試みぬでない。彼の如く烈しく爭つて、仲直り出來るものかといふけれど、それ位の事を斡旋する人がないではない。今泣いた顏で今笑つてゐるといふのは小兒のみでなく、事によつて大人にも珍らしくない。いよいよ小黨分立となつては、合從連衡の驅引が忙しくなる。前に絶對多數を制するの方針を取つて之を實現するに至り、今後も之を企てるにせよ、それのみを目掛けず、小黨は小黨で連合して多數を制するといふ新たな局面を開くやうにならう。第一黨とて一五〇、それが一六〇、一七〇になつたとて別段に變りはなく、一五〇より下に落ちれば、小黨分立の時代と心得、如何に之に處して宜しきを得べきかを慮るべきである。二大政黨主義と聯立主義とが總選擧の後に控へて居る。

政治の近代的進化と日本の現狀

長谷川如是閑

政治は宗教や軍事と相並んで特別の階級的構造を有つた生活である。宗教、軍事、政治の三者は孰れも集團の生活に伴ふ機構であつて、生活組織から必然に現はれるものであるが、組織の發達に伴つて此の三者は一樣に階級的特殊の生活態度を取るに至り、一般社會生活者は右の三者の生活とは全く異つた構造と組織の下に生活してゐるのである。政治家、軍人、宗教家といふやうなものの生活は、決して一般生活者のそれと一致することは出來ない。それはこの三者が歷史的にさういふ進化を取つたからである。

政治が生活を離れる必然性を有つたものであるか何うかは別として、歷史的に成立つてゐる政治は、全く一つの特殊生活である。それは決して所謂分業と全然同じ要素的性質を有つて分れてゐるものではない。分業は同じ生活の目的を達する爲めの分擔であるが、政治が生活を離れたのはさうではなく、――一般的生活者の目的と同じ目的を達する手段としてではなく、――一般生活者の目的を壓迫して、場合によつてはそれを犧牲として、政治階級の階級的生活の目的を達する組織なのである。

歷史的に見ても、それ故に、政治階級と一般生活者の階級とは、過去數千年間殆ど敵對關係に立つてゐたのである。數千年前の都市國家には既に君主政治とか、共和政治とか、民主政治とか、金權政治とか、軍人政治とかいろいろの形式の政治が完成されたのであるが、併しその形式は如何樣であらうとも、凡ての政治階級の生活は一樣に、一般生活者の生活と對立し、之を壓迫し、之を支配し、時には之を無視し、之を犧牲としたのである。

集團の生活の機構として何等か管理の形式を必然の過程とすることから考へれば、さうして政治がこの管理形式の一つであるとすれば、必ずしも右のやうに政治階級といふ特別の階級が一般生活者の階級と對立するといふやうな關係に立つべき筈の

ものではないのである。それが一般生活階級それ自體の組織でなく、之と對立せる階級の組織であることになつたのは、全く一樣の社會的變態である。數千年の政治史は、即ちこの變態組織の歷史であつたのである。

近代の政治的進化はこの變態に對する矯正運動であると認められてゐる。その動因にはさういふ社會的動機が含んでゐたのである。併しその意味から言へば、敢て近代政治ばかりでなく、封建制度のやうなものでも、他の種の變態に對する矯正だつたのである。封建制度は古代的帝國主義の變態的發達に對して起つた分權主義であつたのである。軍國的であつた古代帝國は、同じく軍國的の封建國家に分割されたが、而かもそれは古代國家の經濟崩壞に伴つた現象であつて、その封建國家が經濟的に崩壞したのと同じ社會的動因によつたのである。古代の國家が宗教的であり、次第に軍國的となり、近代に至つて、經濟的に赴いたと云はれてゐるが、古代及び中世の宗教的又は軍事的優越は、實はその根柢を經濟的優越に置かねばならなかつたのである。宗教も軍事も實は經濟的優越を造り上げ、それを維持する精神的武器であつたのである。

故に政治階級が一般的生活者の階級と離れた特殊の階級的世界であつたといふことは、即ち此等の階級的權力關係に依存してゐるのである

この事情に基いて考へて見ると、近代政治が政治を特殊階級の組織から一般生活者の階級の組織に持ち來すものであるといふ考には、錯誤を含んでゐる。近代政治の特徴は宗教國家又は軍國國家を經濟國家に持ち來たした點にあると言はれ、而して經濟國家は即ち人民の國家であるといふ風に考へられてゐるが、前言つた如く、宗教國家並に軍國國家といふ假面の下には、權力を經濟的優越の槓杆たらしめたといふことに、その優越の生命を置いてゐるのだとすれば、或る意味で、宗教國家も軍國國家も實はそれぞれ特殊の經濟國家だつたのである。言ひ換へれば、宗教國家は單に迷信の國家、軍國國家は單に腕力の國家であつたのではなく、何れも富の國家であつたのである。故に政治を經濟的優越階級に持ち來すといふことは、決して政治を一般生活階級に持ち來すといふことにはならない。

この意味で近代政治は古代並に中世の政治と本質的に一致した要素を有つたものである。故にこの要素は常に近代政治の中に、時には顯はれて、時には隱れて働いてゐる、而して政治階級が一般生活者の階級を離れて、特殊の階級的生活目的を實現せしめようと努力してゐる點に於いて、凡ての時代の政治的生活と一致してゐる。

然らば近代政治の進化的意義は何處にあるかといふに、、それは經濟的優越と結びつく權力關係の機構が次第にその中心を經濟生活の中心に移動せしめつゝある點にある。詳しく言へば經濟的優越は古代に於いては宗教的迷信、即ち宗教的權力と結付いた機構の下に成立した。富は國家的首長で同時に宗教的首長である人格の權力と結付いた。それが進化して軍事的機構が經濟的優越を造り出す權力關係となつたのである。軍國國家は即ち軍國的權力と富との結合から成立つたのである。之が近代的に進化して、經濟的優越は僧侶又は軍人の手から産業管理者の手に移つた。何れの國家の歴史を見ても、近代史は皆地主や商人が軍人を征服する歴史でないものはない。經濟國家とは即ち斯くして出來上つた經濟的權力の國家である。

この進化の意味は、經濟的權力が迷信とか軍事とかに基く、産業より隔絶した機構に依存することから、次第にもつと産業に密接した産業組織そのものの機構に依存することになつた點にある。言ひ換へれば、權力が次第に産業組織の機構そのものの動因と接近して來たのである。近代政治はこの産業組織の實權者の方へその政治的權力の中心を持ち來たしたのである。この進化の傾向は、近代國家生活の上に重大の意義を有つものである。

斯くの如く、權力が産業組織そのものの實際の機構に密接して發生するとなると、結局それは生産者の方へと移動する運動である。古代國際に於ては權力者と生産者と、一方は高く天上にあり、他方は低く地下にあるやうな隔絶を保つてゐたのであるが、この權力の所在が經濟的機構そのものの中心に近づいて來るとなれば、結局は、權力は經濟生活の中心、即ち經濟的渦動の中心點に移動すべき筈である。經濟的渦動の中心地點は即ち生産の生活である。故に近代政治は要素的に傳統的政治の本質を保つてゐるが、併し傾向としては、權力の中心を生産階級の方に移動させるやうな進化の過程を追ふてゐるといふ意味で重大なのである。

そこで日本の現在の狀態を見ても、數十年前に勃發した近代政治の運動は、その後の反動傾向で壓迫されたが、今日でも尚依然としてこの世界的の大勢を追ふて近代政治を完成せしめようとしてゐる。言ひ換へれば經濟國家を建設せしめようとする過程にある。而して世界的に明かである通り、この過程に於いて最も有力に立ち働く動力は、政治的自由主義である。この自由主義の中間過程が權力の中心を軍國的から經濟的へと有機的に押し進める有力の作用を有つてゐることは、英米その他に於ける政治的自由主義の運動の證明する通りである。

日本の長老政治の復活はこの世界的形勢の間に往々起り得る一時的の反動現象であるが、併しこの反動勢力も、イタリーのそれと同じく、強烈に自由主義的色彩を帯んでゐる。故に自由主義の大政黨が分割した場合にも、一方がこの反動勢力と結び着くに一向差支へがないのである。普通選擧も、欽定憲法と同じ筆法でこの自由主義的反動政府が實行しようとしてゐるのである。

そこで之れに對する護憲三派なるものの立場は極めて困難である。反動主義者も亦自由主義者であるとすれば、所謂三派は保守主義か否らざれば一層過激な自由主義者でなければならないが、彼等はその孰れでもあることが困難らしい。勿論保守主義では生存も難しい。と云つて急進的であることは高橋氏の宣言によつても不可能であることが分る。この意味から日本の政黨はやや米國の二大政黨に似て來たのである。即ち政黨の分野は全く因襲的又地方的感情關係に止まることとなり、所謂政見は孰れも似たり寄つたりであつて、その一つを特に政見によつて撰び取ることが出來ない。これは各國の政黨に於いて多少類似の現象である。イギリスでも勞働黨がやや判然とした區別を有つてゐるだけで、他の政黨は次第に區別が曖昧となりつつある。――同國で有名な自由貿易と保護貿易との見解さへも保守、自由兩派の間で混亂してしまつてゐる――日本の政黨も自由主義の機構をもつと押進めることによつて、將來一層急進的な政黨が現はれた場合に初めてやや區劃が判然するのであるが、今や各政黨がそれぞれ無意識の間にさういふ過程を取つてゐるとも見える。

從つて今日のところでは、日本の政治的鬪爭は全く政見よりは惰性的因襲と地方的感情とによる鬪爭である。尤も地方民は政治がかやうに因襲であり、感情である場合に却つて政治を漠然と自分達の生活に密接したもののやうに考へる傾きがある。今日の政治的興味は全くこの程度である。從つてさういふ因襲的乃至地方的感情のないものには、今日の政爭は何等の興味を惹かないのである。

かういふ停頓した狀態から推移るには、何處の國でも皆所謂普通選擧によつたのであるが、日本もさういふ過程を取らうとしてゐるところを見ても、日本の政黨政治が無意識的に何ういふ風に推し進んで行かうとしてゐるかを察しることが出來る。政治的局面の展開はその後のことである。

政友本黨と護憲三派の對比觀

法學博士　堀江歸一

國家の憲法は國民の力を以つて、擁護しなければならない。憲法の條章を蹂躙する政治家が出現したならば、國民は協力して、其人を倒さなければならない。然しながら昨今世間に現はれて居る所謂護憲運動なるものに對しては、私は餘りに眞面目に之を取扱うことに苦むものである。清浦内閣が貴族院を背景として、組織されたと云ふことは、如何にも政黨政治の主義に反するに相違ないであらう。而して其閣僚なるものは人物に於て、閲歴に於て、推稱するに足らない、其懷抱する經綸に見るものもない、内閣の品位から云へば、三流四流にも墮するものであることは、天下の盡く認める所であるが、偖斯る内閣が何故に組織さるるに至つたかと云へば、其れは政黨の無力、不信の然らしめた所としなければならない。如何にも清浦内閣成立の當時に於ては、政友會は衆議院に於て、絶對多數を占めて居つたが、其後忽にして二派に分裂する位に、統一の脆弱であつたものであり、憲政會革新倶樂部共に少數であつて、到底政權を掌握するに足らなかつた。而して其絶對多數であつたと云ふ政友會も往年の總選擧の下に、無理矢理に是れだけの勢力を占するに至つたのであつて、必ずしも國民の輿望を荷つて居つた次第ではない。然らば政權が是等微力の政黨を素通りして、超然内閣に赴き、超然内閣も段々組織する人物が少なくなつて、世間の意表に出るやうな人々を閣僚にするに至つたのも、亦止むを得ざる所であると解される。

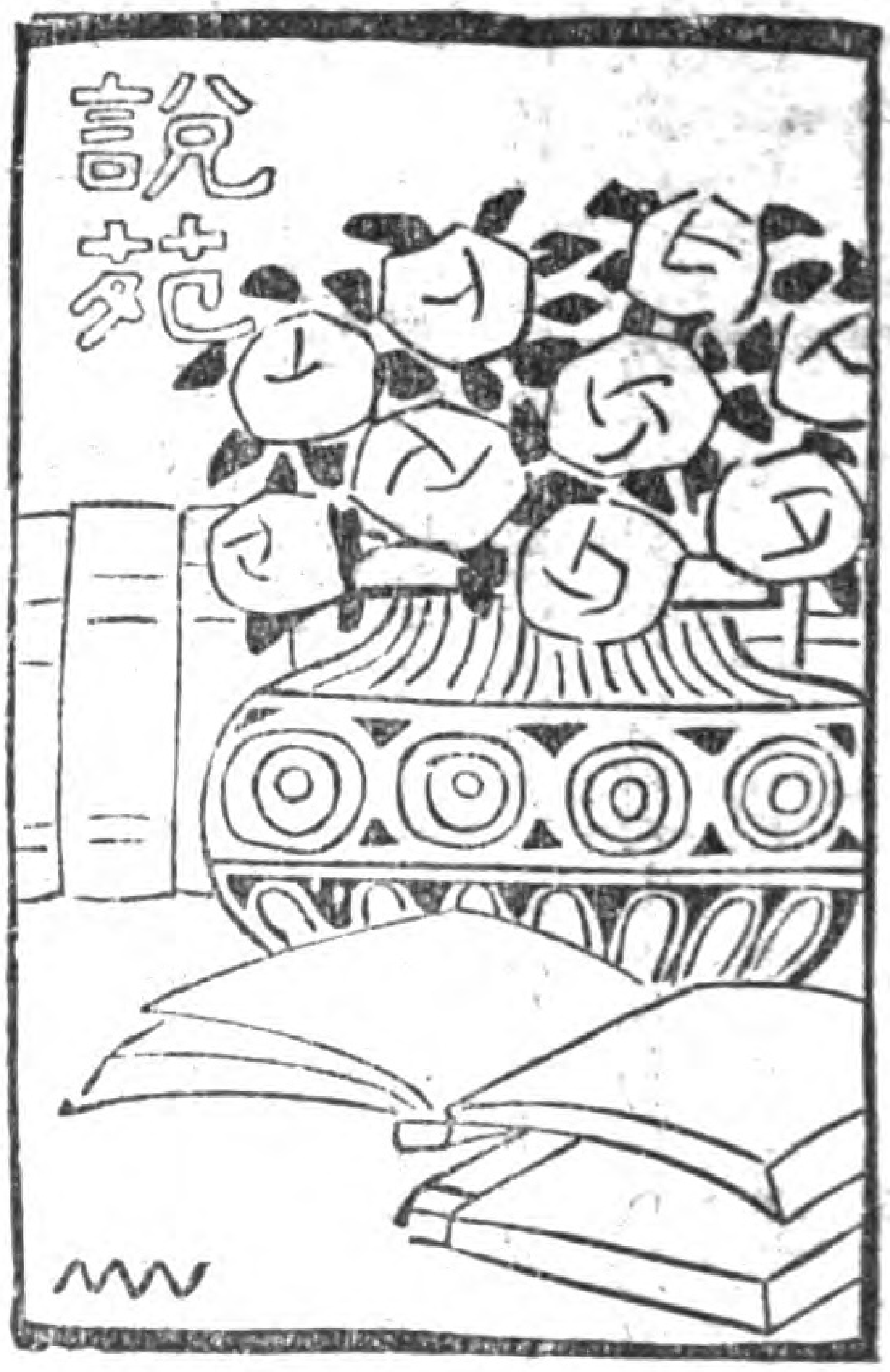
故に政黨者流にして斯く政權によつて、全然見棄てられるに至つたことを心外に感ずるならば、宜しく内に顧みて、實力を養うと共に、國民の信望を收めることの工風を爲す可きであるのに、一旦自己の意に滿たざる超然内閣が成立すれば、恰も痩犬が肉屋の店頭で咆吼するが如く、昨日まで互に敵視して居つた者も直に聯合し、名を憲政擁護に藉りて、政權爭奪の運動を

試みるが如き、何としても道義に外れた擧止であるの非難を免かれない。彼等に何れだけ護憲の誠意があるであらうか。政友會の如き往年寺内内閣を助けたこともあれば、加藤内閣の與黨と爲つたこともある。兩内閣共に何等の基礎を衆議院に有せざる超然内閣であるに拘はらず、政友會は或は政權の保護下に其黨勢を擴張する爲めに、或は擴張された黨勢を何時までも維持する爲めに、是等の超然内閣を援助したのみならず、外交調査會なるものが組織されゝば其黨首を會員に列せしめて、内閣の爲めに、犬馬の勞を到さしめることを辭しなかつたし、革新倶樂部にしても、一人一黨を以つて、主義として居るとは云ひながら、其領袖の一人は超然内閣たる山本内閣の一員に列した事實の頗る生々しきものがある。三派中超然内閣を助けた最近の記錄を持たないものは一の憲政會あるのみであつて、他の二派の既往に於て爲した所、斯の如くである。自家の都合に依つては、寺内、加藤、山本の諸内閣を助けたが、自家の都合に依つて、清浦内閣だけは助けない、其助けるのも、助けないのも、一に自已の政權慾から割り出すのであつて、唯世間の體裁を繕ふ爲めに、護憲の旗を擔ぎ出すに至つては、擁護される憲法其ものが大なる迷惑を感ぜざるを得ないであらう。現に三派は護憲と云ふ題目に於て、一致して居るかも知れないが、政黨の生命とも云ふ可き政綱に於ては、何等の一致も、協調も保たれて居らない。三派互に第一黨たらんことを期して、爭鬪して已まざると云ふが如き、何たる醜態であらうか。三派が總選擧後ま致して、清浦内閣を倒し、續いて政權を獲得するに至ることは三派に屬する一部人士の希望する所であるかも知れないが、斯る夢の如き考が果して正夢と爲るであらうかどうか。三派の内、何としても政界の中心的勢力と爲るを得ない一派が如何なる活劇を試みて、三派の協調の無意義なるものであつたことを實證する時が來らないとするを得るであらうか。

政友會から分離した政友本黨と云ふものに對して、世人は何處まで信頼して居るであらうか。財政經濟と云ふ見地だけから云へば、山本達雄氏の識見は確に高橋是清氏の其れに勝つても居れば、正しいとも云へる。私は政友會が第二次西園寺内閣に於けると同じく、常に其内閣に於て、山本氏を大藏大臣に据へて置き、黨弊に左右せしめずに、財政の處理に當らせたならば政友會内閣に對する國民の信望をあれまでに傷けずに濟んだらうと考へて已まない。政友本黨に對して實業界の方面に繋がれて居る信用も山本氏の財政意見に基いて居ると認められる。故に山本氏なり、其他の信頼する人士なりが集まり、適當の機會に政友會内の健全分子を糾合して、新に政黨を組織したと云

ふのならば、私は此政黨に對して好感を持つ。然しながら政友本黨の成り立ちは如何であるか。黨員の多數は何れも原内閣以來政友會の政弊を助長した人達ではないか、其政友會と分離したのは高橋總裁一派に壓抑されて、自家の榮達を謀るを得ないと云ふことが重なる原因と爲つて居ると云ふではないか、分離した暁に、何をするかと云へば、清浦内閣を助けて、總選擧に便利を收め、續いて政權に接近しようとするのではないか。而して是等の所業を粉飾するに穩健着實の名を以つてする。三派の護憲運動も笑はせるが、政友本黨の穩健着實も滑稽味に富むと云はざるを得ない。我國に於て政治運動の不振なること、亦當然なりと認められる。而して今度の總選擧に於て、何黨が優勢と爲り、何派が第一黨と爲つた所で、政界の安定せざること、今日に比して異ならないと思はれる。

私は最近二三の地方を旅行した。一の地方に於ては、政友憲政の前議員に對して、新に政友本黨から候補者が現はれ、結局政友會と政友本黨との競爭に爲つて居り、他の地方に於ては、政友會の前議員に對して、政友本黨から新に候補者を立てたのであつた。然も是等の地方に於て、從來政治運動に相當の因緣を持つて居る人々は孰れか一方の黨派に力瘤を入れて、其勝利を祈つて已まないようなものゝ、純眞なる青年に至つては、考への置き所が餘程變つて居るようである。彼等は本黨が勝たうが、政友會が多數を占めようが、其れとも憲政會が珍らしく第一黨に爲らうが、自己の私的感情たる贔負慾を充すことはあるとしても、此以上に我國政治の實際には大なる相違なしとして居る。即ち是等青年の間に於ては、早くも既成政黨に愛想を盡して居るのであつて、一方に政黨が何時までも舊來の型を逐うて居つたならば、結局次代の國民に對して、大なる間隔を生ずるに至らざるを得ない。黨弊を一掃すると云ふことは、年來の懸案であつて、新政黨の組織される毎に、必ず此事が揭げられるようであるが、實際の效果は殆ど擧つて居らない。各政黨に籍を置く青年で、比較的新しき思想を持つた人々が横斷的に一つの聯盟でも作り、新主義を標榜して、政界の革新運動にでも從つたならば、如何なるものであらうか。政黨其ものに關かあり、階級があるようなことで、政弊の革正を唱へるが如き、片腹痛き沙汰であるとしなければならない。



集團バラックの生活記錄

—風紀、衛生、人道上の大問題として當局及び江湖諸彥に愬ふ—

竹内大三位

一　どん底に蠢く者

新聞紙を一通り見て了ふと少し眠む氣を覺えるので有つた

立春も早く過ぎて、丁度其日は雨水で有つた

長屋は何の棟もどの棟も皆靜かで、朝の炊事頃の賑やかさと言ふよりは騷がしさを、けろりかんと忘れてる風で、日は暖かに差して、極上等の梅見日和だつた。もう恁うして春になつた。大震大火以來何時の間にか半年を經過した

机上の一輪生けにはフリイジヤーがゆかしく匂ふ、美しい其の葉の綠よ、美しい其の花の白よ、そして其の姿の可憐さよ。と、今日まで見た事の無い物かなどの樣に、むさぼり眺め入る彼の心も、その間は穏やかに無邪氣で有つた。老父の筐の、古代七寶の一輪生けは、貰つてから既に三十年近く、彼と共に海外にまで數度の長旅もして、地震に逢つて、火事に逢つて、何時何所でかも知れない負傷して。呉れた老父も永眠して。重ね重ねの紀念品と成つた。松も昔のと歌つた古人はいざ知らず、自分には大事なお友達である、小瓶若し靈有らば聞け、汝を限り無く愛する者いま汝の前に在り、と生活の敗殘者たる彼は感慨に耽つて居た。

その一輪生けには例年きまつた樣に水仙を挿して正月の始めを飾り、寢乍ら其匂ひに浸つて本を讀んだりした。そして飽くまで眺めた後がフリイジヤーに生け代えて、その大同小異な

喜んだ。が、大震火災後の此の正月は、水仙どころでは無く、第一花瓶を置く場所をさへ知らなかつた。また花瓶も何所ぞの偶に詰め込まれて居たのを、一月末に九段バラックの棟割り長屋へ這入り――それも頼みに頼んでやつと入れて貰つたのである――二月半から少し心も落ち付いて、何所をどうして出て來たか、思ひ出深い小花瓶が、今斯樣して彼の机上に飾られて有つた。南面してる入口の障子上半分部――下半はトタン板を張つてある――一杯に日光が差して、公園では風無きに櫻が散るかと思はれるほどの暖かさである。軍用堅パンの空箱（あきばこ）を其のまゝ應用した、手製長火鉢の湯沸かしに、湯氣がむんむと揚がつて、急須を採る彼の袂の風にもフリイジヤーが幽かに匂ふ。

やさしい花よ。淑雅な匂ひよ。

それにしても今年は水仙が見ず仕舞ひであらう、惜しいことだ、世界第一とかいふバイオリンの名手を、聞き洩らす事よりも殘り多い事に彼は思つた。

それにしても爲まじきものは貧乏である、錢さへ有れば小ざつぱりした郊外の二室位は借りて居たらうものを。と言つて現代の社會は東角貧富の差の甚だしく成る樣に、不合理だらけに組織されてるので、それを年內や來年中にどうこう改めるといふわけにも行かない。普通選擧さへ出來て居ない日本に、あいにく大地震が有るんだから困つたものである。などと彼彼自身の欠點や不運を忘れて、現代社會にばかりに罪を着せたりして居た。

長閑に耽ける空想を、輕く破るものは隣家で內職の製本の紙折り、兩手で何十枚かを取つて板の上に尻を揃へるらしい洋紙の音である。隣家と言つたとて紙より薄いトタン板一枚の仕切りに過ぎないから、壁一重の隣室といふものよりも未だ手近く物音が聞える。娘が懷中時計の龍頭を卷く音までハツキリ聞えるのだから、此方（こちら）もうつかりした事は言へない。尾籠（びろう）な話だが屁まで聞えるのである。屁も嗅ぎ合ふ夫婦の中といふ俗諺は、是れまでたゞ滑稽にのみ聞いてゐたが、こうして嗅ぎ合ふ事から聞き合ふ事までも餘儀無くせねばならぬ假小屋の狹さに住んで見ると、つくづく悲慘な俗諺であると思つた。笑ひ事では無かつた。

全然人間の住めない所に住んで居るのである。某華族とか某富豪とかいふ者の自動車小舍、厩舍、犬小屋よりも粗末な住居である事はいふまでも無い。五十四郡の領主とも有らう御身が犬の如き畜生を羨み給ふ事かと、女丈夫政岡が熱い涙を寄す一くさりは、芝居にも義丈夫にも見聞して、名人上手には彼も幾度か泣かされた覺えも有る。それが今日、文化の聲高き聖代に。

誰有らう彼れ自身、畜生の犬や馬を羨まねばならぬ境遇に居た。それはどう考へて見ても動かすべからざる事實で有つた。肯定せねばならぬ實在であつた。

彼は九段のバラックへ這入るまで救はれて居た――といふを比較的穩健とすべき事實が其所に存在する事は、口惜しくても恥かしくても如何とも出來ない――Mといふ華族の軒下を、もう往つて下さいと、追ひ出される時、それは正月が目の前にある師走の二十八日で有つた、彼は其邸の門の側の自動車小舍へ置いて貰ひたいと願つて許されなかつたのである。厩舍と等しい自動車小舍に住むをさへ許されないなどは、一寸噓の樣にも聞える話だが、口惜しくとも彼れ自身に在つた事實で有る。事實畜生よりも情ない今日の彼れで有つた。

九段の集團バラックには獸穴式と鳥巢式との二通りの家が有つた、彼の這入つたのは鳥の方で、獸のやうに暗くは無いが、寒くてどうにもならぬ。暖い獸穴式の家でもM華族の自動車小舍より寒い事は言ふまでも無かつた。

昔支那の詩人が猿を檻から放してやる時の詩に『汝を放つ千山萬水の身』と有つた樣に覺えてるが、今は動物園の獅子の檻よりも狹い家――どうしても家とは言へないものである、人が住むなら家と言ふべき樣に見えて、其實は一種の箱、又は一種の檻、或は一種の納屋即ち物置小屋とでも言ふを適當とするであらう――の内に猿に劣らう筈、無い五尺何寸の身が、目に見えぬ鎖で繫がれて居る。こんな狹苦しい檻の中に誰が居たいものか、半日住むのも迷惑だが、繫がれてるからどうにも出て行けない。白銀の鎖や黃金の鎖で、十重二十重に縛られてるから足も腰も立たない。蕭秋の野末に泣く虫ぢやないが、何時の間にか、もう働くべき手足が捥ぎ取られてあつた。から身動きも出來ないで、どん底に蠢めく人か獸か一寸わからぬ者共の、多數の末路は卽ち獸穴的か鳥巢的の箱入りであつた。

バラックは隣家の屁まで聞きわける。

二　燈火を持たぬ家庭

そんなに言つたたつて彼などは未だ／＼善い方で有つた。本所の或る小さい集團バラックでは、場末の夜の露店で使ふ臭いアセチリンガスや、石油の火屋無しランプをくすぼらしてるのも有る、蠟燭を上古の樣に、ほんの臺所の取片付や寢床の整理などの間だけ使用して、あとは燈火を持たぬ者が有り、甚だしいのは全然無燈火の家屋も四五軒有つた。其家の人達は梟の樣に暗夜に物が見えるわけでも無い事は勿論である。而して其の家は、一頃簑蟲小屋と言はれた、簑蟲の着物の樣に不揃ひで穢く

蓑蟲の着物よりは遙かに寒い、小鳥の巣よりも寒いものに出來て居るのである。それで彼等居住者が小鳥の毛の樣に輕い暖い衣服を着て居ない事は、又勿論だが、一坪につき千圓からかけた、風雨は愚か、外からは針一本這入る穴も無い立派な御殿に、厚さ凡そ一吋も有るほどな氈子を敷いて、電氣ストーブまで据付けてある室に寢る華族などいふ人達は、小鳥の着物を何枚も合はせて、輕い柔かい暖かい羽蒲團を着て休むのだから世の中は不思議に出來て居る。恵まれない事の餘りに甚だしい友達よ。樺太では夜具が凍るといふのを誰しも一應は承知出來ない樣に、人一倍熱い涙をこぼす君達の涙が寒の此頃の夜更けには直ぐ凍ることを、内閣の各大臣も、樞密院の諸公も人として知る者が無いのである。

燭の蠟涙が一滴ほたりと落ちた樣に、その熱い涙も直ぐに水晶の秒釘の頭を木枕に止めるのである。常に濕氣に滿ちてるその床下は、夜具共に凍てゝ居る事が多かつた。それがつひ五六寸の下に過ぎなかつた。

無燈火の寒い寂しい悲しい家の人達は、多くは信仰も無かつた。從つて些かにても慰むすべを知らなかつた。本所安田邸跡のバラックに居る五歲の小供の唄ふ『青い目玉の人形は、アメリカ産れのセルロイド、横濱港に着いた時、迷子に成つたら何んとせう』といふ歌を聞いた事があつたが、その無燈火の家屋から、こうしたいたいけた悲歌をも聞く事で有らうと考へたりした。

然し九段のバラックとても無燈火と異る所は殆んど無い位まあ月夜ほどの明かるさに過ぎなかつた。燈火が有るといふだけの話で、何んの仕事も出來ないのは無燈火と選ばなかつた。卽ち二戸に對して十燭が一燈づゝ備へ付けられてある。十燭と言つても電燈會社は眞實の十燭光を送電せないで、精々七燭位なものである。それが甲乙兩戸の中間屋根裏の、高さ凡そ七尺ほどの所に笠無しで吊されてある。元來天井の無い小屋だからトタンの屋根裏は濃鼠色の上に黑く煤氣て居る、それに笠の無い七燭は火屋が塵まみれだから五燭光位に減じて、平均八尺以上の高所に在るのに四壁がかドス黑いトタン板だから、其電燈の光りが席の上に達する所は漸く三燭位なもので、星月夜よりは少しは善からうかと思はれるに過ぎない。

此暗い燈火の下に、袷も褞も揃はぬ、不秩序に垢づき破れた着物を重ね、怪しげな襟卷や奇しき頭巾に、蓬頭亂髮の奇怪な人が居るわけだが、全市の集團バラック生活は大小百二十ケ所八萬五千人を二月末に於て算し、其内の稍や半數は病人で、二千人以上の不具癈疾者が居る。そうした薄暗がりに蠢ごめいて

居るのである。

勿論新聞紙も讀めない、急ぎのハガキが來ても少し細かく書いたのは矢張りいけない、強いて讀めば目が痛く成る。だから女の縫ひ物、編み物を始め、內職だの夜業だのといふものは全然出來ない。無理に爲れば甚だしく疲勞すると共に眼病に罹るのである。大震以來今日までに、大方の小供等は近眼となつて居る。故に四五年後から六七年の間は、徵兵檢査に際して東京市の壯丁には、著しく近視眼を增して來るであらう。平常敏感な陸軍當局が、其所へ氣の付かないのも可笑しいが直接の責任者たる市の當局は不親切か怠慢か無能か淺學か、衛生思想の殆んと絕無ででも有るかに見えるのは驚くべきである。歐米では近年『健康第一』の標語さへ行はれて、衛生上の用意設備は到れり盡せりであるのに、ビックファイブの一たる日本國の首都では、悲慘な元始人類的生活を、倂ても久しく續けて居るのが何萬人といふ。

十月頃から新年へかけて二月までは、夜が永くて困るのである。日が短くて何事も出來ないのである。から何人も夜業を爲る、貧乏人は尙更爲る、爲ねばならぬのである。左樣に夜業を爲ても未だ夜が永過ぎて、朝は早く目が醒めたりして夜永を持て餘す人も少く無いのであるに、その日の短い眞最中、その永い夜を半年の久しきに亙つて、生活難の貧乏人に、働いてはいけない、と仕事の手を封鎖するに至つては、如何に不生產的なるかは、不衛生と相對して最早問題外である。そんなにして居ても復興は急ぐといふので有らうか、當局者の復興計畫や帝都計營方針が、まだ確定せぬ今日は、そんなに市民が働いては困るといふのであらうか、既に食料品を配給してやつてあるからそんなに働くなといふのであらうか。

戶外は寒いから多くは室內に居る、その室內の不潔さは又話の外である。煮炊きも多くは室內だから七輪の團扇バタ／＼で蓆の上も棚の上も灰だらけである、夜具から出る塵も衣服から出る塵も、粉炭を長火鉢へ流し込んで朦々と立ち上がる黑烟りも、蓆の其の一目每に何千百、毛布の裏表などは申すまでも無く、久しい間の分が皆喰ひ込んで潜んでゐる塵も、行李を出すとか、固くなつてる蒲團を敷くとか、人が步くとかのドタンバタンで、それ等種々樣々の塵が春の霞の樣に或は降り、秋の霧の樣に或は上がり、それに加ふるに炭火から上がる有毒な炭酸ガスやら、鰯を燒く匂いやら、漬物を出す糠味噌の臭みやら、小供の有るのは便器が其邊に作つての惡臭やら、一上一下の塵と塵との間を、臭氣も毒ガスも一漲一縮して縱橫上下に渦く所は、丁度風の落葉とその落葉より生ずる風とが兩々相亂れ接つ

が如きものである。その塵に無數の黴菌が培養されて居やうと思へば兎ても猛烈な光景である。その證據として、障子の棧は二三日にして約四五ミリメートルの塵を積み上げ、白綿ネルの夜具の衿は五日を待たず毎度結構な鼠色に染められる。更に鼻の穴に至つては一日に何度でも指さへ入れて見れば必ず黒く成つて居る。剰さへバラックの半數は終日日光の差さないものなのである。又況んやバラックの小供等は、一升に對し塵を匙に半杯位混じつて居る箱の饅頭やきんつばや乃至は砂糖、黄粉、福神漬、味噌、鹽の類及び職工が麻紐を口で嘗ては切り〳〵した飴玉なども喰ふのであるから、不衛生は通り越して死なないのが不思議なわけである。

それのみならず閑居して閑談に耽ける。無駄話にはあまり善い話が無くて間食といふ不衛生が伴ふ、鹽煎餅とか煎り立て豌豆とか不消化至極なお茶うけを四五歳の小供にまで平氣で喰べさせる。又毎晩酒に醉つた人が必ず何人か有つた、それが馬鹿な事を聲高に言ふ、長屋の妻君達や小供等は面白がつて聞く、益々猥褻な言葉を連發する。猥褻な歌を唄ふ。聞くまいとする人々までが聞かされて仕舞ふ。六七軒先きの事でも家が小さいから、近く手に取る樣に聞える。之れが十二三歳から十六七歳まで位た少年少女等に甚だ善くない感化を及ぼす事に言ふまでも無い。彼の直ぐ近所にも猥褻語を口癖の樣に連發する小供も居る、其母も亦時々言ふ。

此猥褻語猥褻歌も手傳つて、永夜の早寢は少年少女をしくも性的に目覺めしむるのは、如何とも仕樣のない困つた問で有つた。三つには狹い室内に五人も六人もが一緒に寢て居ることが、身體の接觸其他に依つて性的に或る徴發を餘儀無くされるのである。終には自瀆といふ樣な不自然にして最奇怪、最害毒の罪惡が行はれる樣にもなるのである。身體がそれ程勞れてゐないのに夜が永いから、夜明け前に目が覺める、起床には未だ早いのに床中では爲すべき事も無いのが、性に目覺めかゝつた少年少女の好奇心から病的に走るに不思議は無い。

それ位の事は市の當局者にもわかつて善い筈なのである。日本にも近年性に關する雜誌まで出來て、隨分斯うした樣な事は注意して呉れる樣に思ふが、前の市長は醫者で、今の市長は其の部下であるやうに聞くに係はらず、事實衛生上の注意の足らないのは少々情無い。一體東京市ほど不衛生に出來てる所は世界の文明國の何所に在らうか。他國の街路は水で洗はれ雜巾で拭かれて鏡の如く美しいのに、東京ばかりは晴天には砂塵を吹き上げ、市民は丁度灰神樂の中を泳いで歩き、其塵を喉が痛いぽと吸つて、その反對に雨が降れば泥深くして鮹が居さうで

ある、路か泥田かわからぬ所を輕業師が綱渡りでもする様に平氣で歩き廻はるだけの度胸と訓練が必要である。その泥路を馳驅する自動車が用捨無く泥を跳ね飛ばして、往來の人の着物を汚す。それは痰唾を無遠慮に吐き散らした泥であり、又夜は畜類で無くとも放尿した泥である事は改めて申すまでもない。到る所の堀川には腐つた泥汁を湛えて、夏は甚だしく惡臭を放ち、電車の中は砂塵が舞ひ上がり、共同便所は殆ど悉く不潔を極めて居り、錢湯は最初から濁つて居り、殊に市の公設浴場が一層不潔である。又極少數貴族富豪の外の家は皆空氣の流通が惡く日光の射入が不充分である。それなのに一般におすわりをするから足部の發育不充分の影響として、男も女も概して外出嫌ひが多く、遠足や旅行の趣味に乏しい。たまに山間や海濱の温泉にでも行けば、美食して寐轉んで居る、然らずんば婦女子と共に骨牌遊び位に耽る。宿を出て山に瀧を見るとか、川に魚を釣るとか小船を漕ぐとか、運動を競ひ、屋外の遊戯に汗を出すなどは好まない。紳士とか貴族とか言つても室内に閑居して不善に近づくのが滔々皆然りと言つた風である。

それで運動不足と過食から胃病が起り、山海の鮮氣を捨てゝ室内の汚氣ばかり呼吸するから肺病に罹り、不品行病なども湧いて來る。オリンピックの競技に世界の檜舞臺で、あんな悲慘な結果を見ても未だ出來過ぎた好果と言ひたい。それは一般人も惡いであらうけれども、先づ市當局者の不親切を攻めねばならぬ。何所を眺めて見ても惡い方へは都合善く行ける様に出來て居るにかゝはらず、衞生的とか更に積極的に健康增進などの善い方面に行くには、何等の設備も勸誘も無いからである。

運動場でも音樂會でも水泳場でも繪畫館でも、圖書館、講演會、博物館、公園　動植物園と數へ來つて無いものだらけ足らぬものだらけ不完全だらけである。斯うして不衞生不完全だらけな東京に、就中不衞生不完全に出來てるのは市で世話して居る集團バラックである。そのバラックには身も心も傷ついた多數無告の良民が居る。

大震大火のため大負傷の姿となつた市民に對して、當局其後の施設待遇は、正になま殺しにして居るのだから溜まらない。住むべき家が無いと言つて家を建てやうにも、復興局で都市計畫を定めないから家の建てやうが無い、建つべき家も建てらるべき土地も半年後の今日尚ほ且つ宙に浮動して居るからである。家が出來なければ會社も商店も工場も營業が出來ない、營業が出來なければ店員も職工も失業又は半失業の形である。收入は減つても衣食の費用は中々減らない、のみならず反對に罹災のための家具や衣類を、氣候とその日々々は否應なしに補充

せしめやうとする。神經衰弱も起る筈である。曾てロンドンが大火にやられた時、その二十日程後にはもう一般の復興計畫を發表したといふに比べて其違ひの餘り大きいのに驚かされる。

五燭で宵寐夜中に腹が減り。

三　五方トタンの小屋

『九尺二間の棟割長屋……』など俗謠にも聞いて居たが、又そんな所へ這入つてどんな底生活者の友となり師となつてどうこうして居る知友も有つたので、彼も一度は這入つて見やうかと唯だ物好きに靑瓢簞をでも貰ふやうに左樣思つた事も無いではなかつた、が、今日現在九尺二間に這入つて仕舞つて居るのを思ふと、其れが墮落か向上か幸か不幸かは別の問題として、唯だ何とは無しの悲みに陥ることを禁じ得なかつた。

この九尺二間は八戸で一棟なのが三列又は五列並んで招魂社前廣場の、南側と北側に細長く、九段の坂の上り口『別格官幣靖國神社』の右の大杭から、神社境內前通路まで三百メートルほどの間に續いて居る。

棟と棟との間は横には背中合はせの所はほんの二尺しか空いてゐないが、向ひ合ふ所は七八尺あけて、中央に細い下水溝がある。すると一軒の小屋の前には凡そ三尺何寸巾で九尺の空地がある、之れが鹽や酒やビール箱石油箱炭俵四斗樽などの[illegible]であつて、倚ほ且つ炊事場であり洗濯場であり朝は洗面場[illegible]る事は勿論だが、正午から夕方へかけては米を洗ふのも此所、するめ烏賊や飯魚の鱗を取るのも此處娘が髪を梳くのも此所、便器や草箒塵取器のやうなものも有櫃も左の箱の上に乾され、便器や草箒塵取器のやうなものも有側の屑捨バケツの傍に置かれる。中央の溝の上には流し臺流しを架して釜の尻を磨き、バケツや洗面器も置いてゐる。から人の通らうといふ場所は甚だ狭く、混然雜然たる僅か一二尺の間を、豆腐屋、八百屋、魚屋などが物を擔いで賣りに來る。

又屋根から屋根へ竿を架け檐から檐へ繩を張渡してシャツや腰卷やおしめの樣な小さな洗濯物を乾す、一寸萬國旗を聯ねたやうだ。それに兩側から二三尺の庇を燒トタンの手製で出してるのが多く、それは棚の樣に低いから山高帽では通られないとか、屋內も暗いとかいふ缺點も有れと、一面に於て黴びた餅を干したり、ピタンコの坐蒲團も脹らましたりするに丁度都合が善い。雨上がりは下駄やゴム靴などは無論洗つて此所へ乾す。

耐震耐火として鐵骨鐵筋コンクリートの家の善い事は言ふまでもないが、彼等の九尺二間は木筋金屬製であるから火事も安心である、鼠も無ければ天井も無いから夜具でもの外は殆ど燒える物が無い。地震にしても太古の民族か地震に驚かなかつた

に、倒れる心配も有るまいし有つても死ぬ樣な事が無い。まことに安全結構な住居である。彼等は斯る善き住居を與れた當局者に深く感謝すると同時に、草を敷き寐の露營に野末の星を仰ぐ事は、鳥の巣や獸の穴以上に震火に安全である事を教えて進ぜ度く思つた。地震や火事は毎日有るのでも無い、けれども二六時中絶え間無く彼等の身を圍り攻むる寒氣と病氣とは野末の露營を何十日も何百日も許すものでは無かつた。も少し地震と火事の心配な家が善い。

上と前後左右との五方がトタン板で出來て居る、床は勿論隙だらけの屑板の上に、極めて粗末な疊表の縁付きが唯だ一枚敷いて有る。四疊半一室と臺所道具や炭薪の置場とも下駄の拔き場とも置場とも玄關とも兼ねて三尺に六尺の土間が有り、三尺四方の板敷で厠所のつもりで造つたものかとも思はれるものがある。兩便所が無い押入れも無い棚も無い、雨戸が無い、庇が無い天井が無い、無い物だらけである。一種皮肉な風流がある。

言ふまでも無く椽の下は吹き拔けで、四方八方隙だらけの、屋根のトタン板はなまこに出來てるから、其の波狀が棟木に當る所、波峰と波谷に依つて直經二三吋の半月形の空氣拔きが、前方に四十幾つ、後方に四十幾の合せて九十個に近いものがある。總て空氣の流通の善さと言つたら少し誇大だが鳥籠のやうだ。其所へ持つて行つて金屬製の家だからその冷える事といつたら話は無い。毎年夏千何百貫の氷で室内を冷涼にするといふカフエーライオンの納涼會は今年一つ九段バラツクで開かせたい。

被服廠の燒跡を本所くんだりまで視察とやらに行く事が、山の手の奧樣お孃樣間に一時流行した程だから、日比谷公園や芝公園へ、散歩がてら好奇心も手傳つて、バラツク見物に行く人も隨分多かつた。が、そんな人達は集團バラツクの外側を廻つたり、中央を通り拔けたり、一二軒内を覗き込む、と内から厭な顏の視線に追はれ、其邊の居住者からも同樣まごついてるだけに變に眺められるので、其れ位で視察を切り上げて去るのが普通で有つた。親しく小屋の内へ這入り、ほこりだらけの茶碗から水の杯も貰つて飲む勇氣を持合はす者は甚だ少い。況んや二三軒に就いて其の衛生狀態や教育風紀などの狀態を、親しく觀察して行く者は殆んど無いと言つて善い位、お役人樣方が調査に行つたとて中々眞實の事は聞かさない。だから知つ居らねばならぬ筈の人達でも案外眞相はわからぬらしい、から茲に些か詳記して置く。

日比谷公園、芝離宮、宮城前、青山の神宮外苑、芝公園、上野公園、淺草公園、九段、被服廠、安田邸、深川公園など數へ

て總計百二十幾つ。收容人員始めは十五萬と言つたが二月末には八萬五千と統計された。彼らの居住する九段は比較的遲れて出來ただけ、內最も優秀な建築で有つた事を此邊で承知して置いて貰はねばならぬ。

入口六尺は戶である、板戶もあるが彼らのは下半分はトタン張りで、上部が紙だつた。其の戶が開閉每にガタピシヤ、ギクシャクしてたてつけの惡い事は申すまでも無いとして、庇が無いために紙の下半が雨每に濡れる、風が有れば直ぐ破れる、風が無くても二三度雨にうたれゝば矢張り破れるのには閉口の外は無かつた。その破れから空ビン貰ひなどが怪しげな眼で覗き込むのにも每度不快千萬で有つた。長屋の障子に破れないのは極めて稀で、何かの包み紙や古新聞を汚く張り繼いで松下の禪尼を驚かす樣なものばかりが多かつた。後方は六尺幅四尺五寸の窓、之れも板戶のと一枚だけ板戶のと二枚共障子のと三通り有つたが、彼らのは障子を裏表の兩方から、障子紙、厚い西洋紙古新聞紙の三通りで混ぜ張つた所を更に雨の跡が幾つも付き、雨で破れが幾つも出來て居た有樣は正に乞食小屋此所に在りの金看板に等しいものであつた。之れが北風の雨天には全部濡れる、吹き込む、流れ込むのであつた。

それに天井が無いために每朝屋內で雨が降つた、霜や雪で冷え切つてるトタン屋根に、人體の溫度から水蒸氣が凝結して、それがベタ〳〵落ちるのである。落下する場所は大體一定してゐるが、每朝必ずしも確定して居ない、時には女の衿頸へでも食事中の鍋の內へでもバタ〳〵と多量に這入つて來た。一回に凡そ杯に小一杯なのが三分間五分間十分間と間を置いて稍や三十分以上一時間位は續く。その間は疊半枚位なのが二三ケ所は使へないのである。始めての人は誰でも一寸吃驚して、一寸眉を顰める。彼の妻は殊に之れを厭がつたものだ。しかし馴れて見れば、乞食三日すりゃの例へのやうに何んとも無かつた。が一層馴れると其れは言ひ知れぬ寂びしい音で有つた。深夜の芭蕉の雨の樣に細かい音で無く、百一發の弔砲のやうな太い悲しみを含んだ音でも無かつた。

內で降りや額の下も雨宿り

四　道傍の砂利に寢て

集團バラックの生活を寫す前に、彼らがバラックへ這入るまでの道筋を簡單に少しばかり記せねばならぬ。

忘れもせぬ九月一日、正午に近い大地震が、ドドド、ガラ〳〵〳〵グラ〳〵〳〵と來た時、彼らは玄關の三疊まで出て家からは出られなかつた、門まで四間ほどの間が隣家の屋根瓦の落ち

るを恐れたからである。若し家が潰れたら死なゝい迄も傷位は免れなかつた所だ。二千五百八十何年以來の地震國で、世界の一等國で、文化の聲高き今日まで、陛下の御膝もとの東京でさへ、地震に對する設備は何んにも出來て居なかつたのだから、不思議な話であり又恥かしい話であつた。大臣とか政黨首領とかいつて肩で風を切つて歩く人達は一層恥かしいわけなのだがその當時は何んな顏をして居たか。之れだけの事でゞも內閣も市役所も總辭職の價は充分なのだが、日本では責任內閣は每度無責任內閣で、官公吏などは何時もヅウ／＼しく鐵面皮で不得要領であれば先づ勤まゝと言つた風だ、それが人間の道に逆(さか)うとも正義で無からうとも、一向おかまひ無しである、即ち世界の各國いづれへ行つても鼻つまみな人達が日本では悧巧な官吏として賞められる。

第一震が終つてから門前へ出たが、僅二三間幅の街路の上に電線が今にも切れ相にゆらいで、絕間無き地震の不安を目前に啓示して居るので、小半丁先きの南條先生前庭へ逃げ込んだ。其所は鐵筋コンクリートの塀(へい)が道に倒れて、百坪位な小奇麗な芝の植込みが、丁度避難者を待迎顏であつた。

その庭へ這入る前、丁度其所に悲泣して居た女の、通行中その塀(へい)に打たれて重傷を受け、歩行もならなくて唯だ悲泣して居たのを、彼の性質として見過す事は出來ず、抱き起して小一丁後方の野田醫院まで引きずる樣にして連れて行つた、女は若い美しい盲であつた。氣の毒でならなかつた。それから、先づ恰構な避難所を得たと見て取つた彼は、彼の隣家の渡邊醫師が臨月の妻と五歲と三歲の二幼兒を殘して大學病院へ研究に行つて居る、その三人を彼と彼の妻とで手を取り連れて行つたのである。其時始めて老先生の顏を見た、佛教の畑では有名な先輩で彼が近所へ來てから七年も經つてるのにまだ知らなかつたのである。羅漢の樣な老先生は石の羅漢の樣に一言も口はなかつた。

南條邸から三四軒西へ出れば其所は麹町六丁目から市ヶ谷見附へ出る大通りであつた。其れへ行つたり、自宅の門前まで行つたり、更に六丁目に停まつて居た空電車を覗いたり、自宅の座敷や臺所も一寸見たりして、地震のおひま／＼を危險を冒し乍ら色々に視察して、追々に近所の模樣やら銀座や丸の內邊の慘狀なども聞いた。それを女達にも聞かして警戒注意した。その內渡邊醫師も歸つて來たので、本鄕神田邊の混亂狀態が略ば推察された。さアもう一刻もぢつとして居られなくなつた、夫婦で自宅へ取つて返し、飯を一杯半ほど玄關に腰かけながら喰ふといふよりは咽へ詰め込み、手廻はりの大切な品をカバンに

入れて抱えた。妻君は衣類の方を布呂敷包みにした。買ひ立ての納涼レースのカーテンにも何かゞ包まれてグイと無殘に縛られたりした、一刻も爭つて手早くして、大通りを市ケ谷の方へ小一丁行つた所に、左は南條邸を十倍したほどの松平伯爵邸、その向ひに五六百坪の空地があり、空地の前の道傍に砂利が八坪ほど積んで有つたので、その上を今夜の宿と定めた。夥しい人達が、見た樣な顏の人達が矢張り其邊へ段々避難して來た。鍋や米の有る者無い者、漬物桶まで携えた者、ほんの現金と樂器だけらしい者、千態萬狀、其邊は勿論、何所も皆鼎の沸くが如き混雜で有つた

一先づ本陣を其所に定めて、重ねて自宅から荷物を運び、或は市内各區の模樣を聞き、或は六七丁先きへ來て居る猛火の模樣を視察し、更に落ち延びて行くべき最安全の地を物色したりして居る内に何時日が暮れたか、何時夜が明けたか殆んど係はり知らなかつた。食事なども勿論めちや〳〵で、郷國の名物黑部水瓜の四五貫もある大物四個を、咽の乾く度切割いては顏も名も知らぬ人達にも分けて快喫した。それでも三十分間位は砂利の上に寢た。蚤が澤山砂利に居ると女や小供が言つたが彼は蚤どころでは無かつた。

新聞の號外は待てども〳〵來なかつた。火の模樣も死傷の數も水や飯の事も知らせて呉る者は無かつた、一一自分で行つて見聞して來るより外は無かつた。市役所區役所巡査消防など凡そ役人じみた者は皆一時に全滅した樣な姿だつた。新聞號外は實に待遠しかつた。

二日の正午には一旦火事が兵隊に消し止められたので、町内の人人は夫れ〳〵自宅へ荷物を運び返した。喜び乍らつぶやき乍ら。

勿論彼も運び返した。其時家中を見廻はつたが慘憺たる狀態で、壁落ち障子倒れ、棚や机の上の彫刻の美人も花の瓶も倒れ傷つき、酒もソースも川と流れてビンの破片八方に飛び、殆んと手の付け樣がない。

猫も不安を感ずるらしく特殊の哀調で啼き乍ら其の混雜の間を妻の裾にもつれつゝ訴え願ふ事頻りである。鷄は鷄で二羽が二尺とも離れないで、聲高に屢々不安を訴えては油斷無く警戒して居る。それは實の我兒で有るかの樣に不憫至極なもので有つた。猫にも鷄にも抱き上げてキツスしてやりたい樣にも思はれるので有つた――昨夕砂利の上へは二つの行李へ別々に入れて、猫も鷄も連れて行つた、行李へ入れたいものは外に澤山有つたのだが、飼ひ馴れた生き物は情として捨てられなかつたからだつた――猫も鷄も舊居へ歸つた事を喜びながら倘ほ逃だし

く不安の姿で有つた、其點は少しも人間と變りは無かつた、寧ろ人間より以上に敏感であるかに見えた。人間が若し鳥や獸の言葉がわかつたら、その言葉を稍や完全なものに制定して、鳥獸を適度に教育したら、爲めに受ける人間の利益は多大で有らう、と考へるだけの餘裕は最早彼に出來て居た。

一日燒殘された家が二日の午後二時頃又火が出た、二ケ所から火を付けたといふので、それ又逃げるんだと上を下の騒ぎと成つた、勞れ切つた身體で亦復た家財を砂利の上へ運んだ、此度は雄鷄は狂氣の如く逃げ廻はるのでどうしても捕へ兼ねた、その内火が近づくので不憫だが見捨てた。

砂利の上の行李の中では猫が彼等の聲を聞く毎に不安を訴へて泣き止まなかつた、食物を與へても喰はなかつた、少々うるさいのと彼等を離れて何所へも行きはすまいと思はれたので、妻の不賛成に係らず彼は出して膝へ取つた、が何時か居なかつた、自宅へ歸つたかなと危んだ。一二時間の後にはその自宅は猛火の中に包まれて仕舞つた、多分臺所か椽の下などで燒死んだらう。

夜の八時頃だつた、丸七年住み馴れた宅の燒けるのを近く彼は眺めて居たい、滿天の火粉の中を鷄の狂ひ飛ぶ悲壯な光景を頭に描かれたりした。

三毛の猫は四年前大地震で東京市の水道が七日間斷水した時四五ケ月の小猫で有つたのが何時からか彼の臺所へ來て、そのまゝ飼はれたもので有つた。以來凡そ四回に十四ほど兒を産んで、其の度毎に色々の世話を燒かせたものだつたが、今度また大地震で斷水で何所かへ行つて歸らない。

猫を飼ふ時三年でも四年でも年季を切つて飼へは猫は其の年限りで何所へか出て行くものだと老婆が言つた、三毛は餘り度々子を産むので彼は戯談半分に、お前は來年は何所へでも行つて吳と言つた、其時猫は無言で謹聽して居た事が一年前にあるのを彼は思ひ出して不憫がつた。一ケ月ばかりは妻は毎日のやうに猫の話を爲た、猫の聲さへすれば夜中でも起きて出て見た。捨猫でも迷子猫でも寒風に二三十分間も晒され乍ら、呼び寄せて喰ひ物を與へた。それ等の猫は恐る／＼寄つて來て喰つて去つた。

四十萬戶九分は燒けるをたゞ眺め

五　笠置山の雨路凌ぎ

間も無く知つた染物屋の紹介で向ひの松平伯爵邸自動車小屋前へ荷物を入れた、それは砂利の方よりは火難にも盗難にも比較的安全で有つた。邸内は見るが内に人と荷物の山を築いて、

甚だしい混雑で有つた。兎角する内もう砂利の邊には人が居なく成つた、皆四ツ谷見付、市ヶ谷の士官學校、招魂社などへ逃げたのである。火が漸次に近づいて最早半丁と無い邊まで來た時、松平邸でも人は多く逃げ去つた、ほんの貴重品だけを身に付けて折角出したピヤノなども捨てゝ行つた。此邸の伯爵も郡部の親戚へ避難された。數萬圓の書畫古器物も後醍醐天皇が先祖に賜はつた濃墨の綸旨など多數の家寶はそのまゝ捨てられて居た。

夜の十時十一時頃には松平邸へも火粉は雨の様に降つて來た、火の粉の下に端坐して野狐禪も一寸試みたが、少しも落付かないで死を目前にした様な不快をさへ感じた。さア逃げませうと皆を誘つた時は廣い〳〵邸内に人といふのは殆と彼等だけだつた。

彼の舊門前宅に三年前から居た大山君と、震災同時に知り合つて直ぐ親友に成つて、その兄の月川君が平河町で早く既に燒け出されて家族五人で、弟の所へ避難して來て居たのと合して八人を、砂利の上へ誘ひ松平邸へ誘つたので有つたが、此二家族を三度誘つて市ヶ谷方面へ逃げた。その途中大山夫人から渡邊醫師の小供の五歳の方を預けられた。預ける渡邊君、預かつた大山君、それを更に預ける、預かる大山君も彼も隨分無理な橋を渡つて居る。彼は預つて仕舞つてから直ぐ馬鹿な心配の種を蒔いたと氣付くので有つたが矢は既に弦を離れた、如何にもならぬ、賴れゝば何でも引受けるのが彼の病氣で有つた。

その小供が邪魔に成つて困り切つた、殆と泣かされた。取り散らされた惡路が更にポンプの水管の洩りに濡れて、不快千萬な間を、右手にカバンとステツキを持ち、左手に小供の手を引き、背には火の粉の雨を負ふて走ると、一足毎に息が切れて蒲柳の質の彼は幾度か倒れさうに思つた。胸は不安と恐怖を作ふ不快感に滿ちて、もうどうでも成れといふ氣に成り、その泥路の眞中に火の粉を浴ひつゝ坐らうとさへ爲た。でも妻は一足先きに走つて居るので其れに引かれて走つた。

見付近く來て身の置所を尋ねたが其所も此所も不安であり危險である、勿論其邊に人も居ない。その内大山君月川君にも離れて居る事に氣が付くと一層不快でならなかつた。

市ヶ谷見付の堤の櫻の下に妻と他の小供とカバンを置いたが其邊も餘り安心出來ぬ所だつたか人は甚だ稀だつた。

此日午後やつと手に入れた手傳人と共に夜具を取るべく再び松平邸へ引返した。火の粉は一層激しく降つて居る、それは悲痛な壯美で有つた。天は眞紅に金粉を散らし、地には伯爵の大きな邸宅が眞黑に默して居て、今にも破裂しさうに思はれた、

火の粉は足下へバタ／＼落ちて來る、夜具の上へも落ちる、それを踏み消し帽子で毆り消して、大山君の來るを待つた。が中々來ない。來ない心算の人を待ち乍ら火の粉を消して居ると、風向きが少しづゝ變はり、間もなく火も亦工兵隊に依つて略ぼ消し止められた。それで始めて大山君が來た。結局どう成つた上は此所が一番安全で有らうと議一決、亦夜たカバン小供を携へて松平邸へ逆戻つた。それは午前二時頃だつた。他の人達もぼち／＼戻つて來た。

　地上は小砂利を薄く布いて有つたので皆其の上へ蒲團を敷いて寐た。彼だけは正面玄關の石疊の上に蒲團を敷いて寐た。一時間ほど經て小雨が降つた、人の二三が石壘へ來た、彼も夜具を二尺ほど內へ入れ、端坐して神佛に祈るでも無く靈異をおろがむ太古の人の様な心で默して居た。直ぐ勞れで昏倒するかのやうに寢た。

　三日朝、北邊に人の二十も居たらうか賢さうな顔は一つも無かつた。玄關の戸を開いて內に這入るを許された時、始めて蘇生の思ひを爲た。許す人も嬉しさうだつた。

　松平邸へ辷り込んだ罹災者は四五日の內に二百名近くまで增加した。結構な御殿に罹災者の荷物の汚いのが遠慮しい／＼運び込まれた。彼は最初の一人として多數者の爲め色々世話をしたので自然世話係りとなり、仇名村長さんで通つた。

　伯爵家では隨分親切にして呉た。五日目十日目位には、米、牛肉、菓子なんど度々貰つた。それは實に嬉しいものだつた。

　十月末米國大使の歸國に際し罹災者として大使に感謝狀及び花束贈呈すべく、九段や日比谷の主任を誘ひ相共に發起人として全市の重なるバラツク四十餘ケ所の人々と共に其それを實行した、大使は深く喜びバルコニーに出て感激に滿ちた答辭を述べた、そして大使の出發を萬歳裡に送つた。でも其頃はまだ一點も米國の寄贈品を貰つて居なかつた。彼としては此擧は當局に對する催促であつた。次で罹災外國人のために慰安會を開き罹災支那人の死傷者にも弔慰の方法を取りなど六七ケ條の計畫を立てゝ、バラツク村長會議を骨折つて召集附議したが、當局者は『他の畑へ生意氣な』とやうに喜ばぬし種々邪魔が這入つて　村長會議三四回で彼は氣を腐らして拋棄つた。

　十一月も過ぎて十二月に這入る頃殘る者は七八戸卅人位に減少した。鄕國へ歸つた者、郡部へ室借りした者、燒跡へバラツクを建てた者など皆四方へ散つて行つた。

　伯爵家ではモウ行つて呉る事を希望するのが稍や露骨に成つた、無理からぬ次第と知つても彼等には中々行先が見當らなかつた。でも二週間後の師走廿日には一同退散と申合せた。

廿五日に成つても行先の無い者は彼と大山と月川だけだつた。伯爵家からは廿八日迄に必ず出て呉、行先無い者は自動車小屋へ這入つて呉と申渡された。大山月川は澁谷の方へ行く事と成り、彼は自動車小屋へ這入る事ときめた。それが廿七日夜遲くお前一人なら邸外へ出て呉と懇談された。始め助けて貰つてるからには情として其れは承知せざるを得なかつた、そして命の瀬戸際で他人の子を預かつた樣に、廿八日限りで大山等と一緒に出る事まで強ひられるまゝに約束した。正月を前にして明日中に家を尋ね當てねばならぬから其れは非常な無理だつた。彼は自分を感服したり冷笑したりした。さして行く笠置の山の御歌を想ふたりした。

　行先を尋ねて見ると少し當てにした家は皆だめだつた。伯爵邸内には家令以下の家が五六戸と無關係者に家賃を取つて貸してある家が五六戸と有つた。暫時それ等の何れかへ收容して貰ふ事も、屋賃の取る取らぬに係はらず面白く無さ相なのを思つりして不快に堪えなんだ。でも背水の陣は一生懸命に尋ねて、近い元園町に四疊半一室と、九段バラックに獨身青年と同居で一戸を借り得た。

　都落ちの平氏の如く腹で泣き

六　燒藷屋の玄關物置

十一月始めから罹災失業の彼の所へ老婆が一人居候に來て居た。九段へは其の老婆をやり、彼夫婦は元園町に寢る事として荷物を分けた。

　元園町の家は路次を這入つて二軒目の燒藷屋で、彼が多年取付けの米屋の裏口に對して居た、藷は女房の内職として最近始めたらしく、主人は洋服仕立職だつた。六尺四方の土間の内一尺は下駄箱兼用の板敷が在るのに、直徑三尺位な新式輕便と肩書するらしいブリキ製の藷燒竈が二つ有つたから、外套の裾がすれ／＼に人が出入りし、下駄の二三足も有れば後から來た者は、足唯だ一本の入れ場も無い位狹い玄關に隣る、北向の汚い暗い古い天井の低い四疊半が、彼の辛うじて借り得た大切な室で有つた。が、押入れも床も無かつた。箪笥二つ木箱一つ机一つ、夜具三包み行李四つ米一俵炭一俵を持込んで見ると、此室はもう猫の兒の坐る席も無さそうに見えた、普通の四疊半より狹かつた。

　それを兎にも角にも積上げ片寄せて、其所に寢起き爲やうといふのだから大變である。まるで八疊室で二間鎗を使ふやうな始末だ、箪笥の上へ夜具を上げ、承塵と箪笥へ六つ折り屏風を

棚に掛けて、其上へ帽子箱の樣な輕い物を載せるなど、苦心慘憺して天井に屆くまで積んでも、寢るだけの疊一枚ほどがあかなかつた。けれども越し得る筈の無い大晦日を越す樣に、兎にも角にも彼等は其夜其室に寢た。

明くる朝は早く起きて凡そ十一二丁を九段まで飯食ひに行くので有つた。此室には米一粒水一滴も無い、無論炊事は無ぬ約束だつたけれども、顏も洗はずに此室を朝毎に出て行く事は愉快なもので無かつた。殊に此附近は米屋でも八百屋でも魚屋でも皆彼の家へ通帳で御用聞きに來たし、其他も大方の店では顏を知つて居るので、縕袍の上へ時代遲れの古まんとを着て寢ぼけ面で通る事は、女で無くても嫌で有つた、が妻は不運とあきらめて居るらしく彼の考へた程不平がましいことは言はなかつた。一つは老婆が妻の關係者で有つたからといふ事も有つたらうか。之れも松平家に對して餘計な義理立てを爲し、無理に男を通すからだと妻は解釋して居た。時々知人に逢つては妻も時々きまりが惡かつたであらう、屢々にして其不快らしい顏を見て慰むすべも知らなかつた彼は、こんな罪な事をする者は自分で無い松平家でも無い、爲政者の罪だ現代社會の罪だと考へて、僅かに不平をやるより外は無かつた。彼は九月二日三日頃の『身の措所の心配』を四ケ月後に再び繰り返して居るので有つた。

顏を洗へないばかりか、此家では夜中小便に行くさへ困難を感じた、彼の室の隣の六疊には、箪笥や長火鉢や何かの在るのに三つの床を敷いて一家九人の者が寢て居る。其の間を通らねば便所へ行かれなかつた、誰かの枕を蹴らない樣に誰かの夜具を踏まない樣にと、一足一足、拔き足差し足うかゞひ寄る事芝居で見る太閤記十段目の光秀宜しくで有らねばならなかつた。時々は夜具の裾を踏み枕にも觸れねば如何しても通れない事も有つた、氣の小さい處女などには、とんだ安宅の關で一寸通れさうにも無い。

斯うして此室を通る前に戸を三遍開けて三遍閉ぢて、又戸の開閉で此室を椽へ出て始めて便所の戸を開ける、ギイーと大きな音が吃驚させる。其の便所は甚だ不潔で、手洗水も到底使ふ氣には成れなかつた。彼の室は獨立させて使ふなら物置きり外は無いので、それを無理に寢起きしてゐるから窮屈は當であつた。こんな所に半月以上寢起きした。

此家では朝寢なので毎朝玄關のがたぴしの厄介千萬な戸を開けるのは彼等の仕事であつた。彼等が七時に出て行くと、此家の女房は八時に起きて十時頃竈へ火が這入るらしく、その烟は濃厚に彼等の室に溜つて正午頃には疊の上まで一杯に詰まつて

居た。それを久しく知らなかつた爲め、自慢の簞笥がスツカリ煤氣て仕舞つた、妻は其れを惜がつた、彼は火事で燒いたと思へば何んでも無からうと慰めたが、妻は勞苦した火の中から出したのだから一層惜しいと言つた。そしてナゼ完全な行先きの定まらぬ前に松平家を出たかと言はんとするものゝ如く見えた。しかし彼は男だけに其れも此れも餘裕の一種としてあきらめて居た、あきらめて居るより外は無かつた。西を向いても東を見ても不快なものばかりの中に彼は甚だしく健康を害して居たから、簞笥の善惡よりも彼の生命を問題にして居た。生命よりも死の前後始末を考へさせられて居た。彼は斯うして重ね〴〵の不運、不快から、輕症微患から、結局底知らずの死の谷へ落ちて行くものと考へさせられたからである。

立ち乍ら眠る夜瀬の小半月。

七　九段假屋ホの卅六

彼等の寢具や机などを元園町へ附ると同時に、茶棚、長火鉢其他の臺所用品、米や漬物などの外に、老婆が寒く無い樣にと粗品だが上下六枚の新らしい夜具を九段へ運んだ。行き着いたバラックは、この卅六號といふので、北側の一番後列に當る西の端の八軒長屋で、東から二番目の一仕切りだつた。

來て見て可也に驚かされた。大抵覺悟して來たけれども、餘り非道いには閉口の外無く、手入れして直す事位は承知の儀、合點の筈だが一寸手の付け樣が無かつた。妻は苦笑を見せた切り物も言はぬ。

入口の戸は戸締りが無い、下半はトタンの燒板に上半は濃黄色のザラ紙を亂暴に當て、破れは二重三重に色紙短冊を張つた上へ雨の跡が四重五重に地圖を畫いて居る。その上まだ御叮嚀に六七ケ所破れてゐる。トタン板は凸凹で繼合はせ目は口を開いて居り、最下部に在る六寸程の腰板まで念入りに三分四分位の隙が三四所出來てる。戸の柱へ當る所は上で一寸五分位あいて、柱は鉋かけずだから時々刺が差さる。

敷居の下は外で一二寸内で二三寸隙いてゐるので可也善い風が這入るばかりか、雨の日は水が流れ込んだ。昨年のまだ暑い頃造つた假小屋だから、尤と言へば尤な譯だが、日本は常夏の國でもないと愚痴も出る、或は此邊がバラックのバラックらしい所かとも考へられぬでも無いが、ほんの數時間の休憩所や數日間の假寢の山小屋類とも少からず違はねばならぬ筈だ、それを夏の姿で霜にも雪にも、小寒大寒餘寒までを越させる當局者の大膽不敵な亂暴は驚くの外ない。

庇は唯だ四五寸で、無いといふを穩當とするの有樣だつた。

家と直角に降つて異ない事を普通とする雨は、入口の戸の紙を大半濡して時々破るのが毎度の事だつた。それが垂れ下がり流れ込んで或家は椽の下に溜まり或家は椽の下から小川を造つて流れ出た。彼等の小屋では炭や漬物桶の下に周圍三尺位の凹みが在つたのへ雨水が一二升も溜つた、それを塵取りと草箒で掃き上げては取り掃き上げては取りして十編程に取り盡した。跡は深さが四五寸あつた。更に新聞紙に入れて濕氣を取つたりするのが屢々だつた。僅か篠の腰椅子一つ這入らぬ位な所に、下駄脱ぎの凸凹と共に山あり川あり湖水ありて、苦笑された。

電車路などは砂塵濛々とあがる快晴續きでも、長屋の前は何時も泥深くて下駄が穿けないから高足駄を用ゐたが玄關の凸凹で内へ這入つてから轉ぶ事がちよい〱有つた。

床は地上一尺二寸淺草や本所邊のに比べて結構であるだけ素晴らしい寒風が床下から出て、足や手は骨まで冷え切つた。隙間の多いほど寒いほど上等のバラツクと大工が思つて建てたらしい。

凡そ一週間程に亘つて彼は隙間々々に新聞紙を張つた、それは數へて七十餘ケ所も有つた。後方の窓の障子は一層非道かつた。それを開閉出來ない樣に十何枚の新聞紙でスツカリ張て仕舞つた。それでも未だ深夜に障子がガタ〱動いて何所からか寒氣が差し込んだ。風が生きてるのか障子が生きてるのか抑も寒氣は惡魔なのかと自分の貧乏を泣いた。寒さは左程で無い日でも雨の夜などのわびしさは彼等に於て殆ど話は無かつた。昔西行法師が陸奥へ旅した際『風荒き柴のいほりは常よりもねさめぞ物は悲しかりけり』と歎つた事などを思つて彼の寢覺めは一層悲しかつた。バラツクへ來て當坐十日ほどは寒くて殆と眠られないから 老婆は夜具の外に毛布を二つ折りにして頭を包んだ。

塵取りへ箒で雨を取つて捨て

そんなにしてあらゆる隙間を防ぎ止めたけれども、まだ〱夜になると寒さが骨を刺す。之れはトタン板が冷えるからで有らうと、今度はトタン全部四壁悉く新聞紙を張つた。それを床に七尺以上にまで張る事は、何んの經驗も道具も無い彼には非常な骨折りで有つた。額に油汗をにじませ乍ら手先は眞黒にして顏も着物も汚してる事が何日も續いて漸く出來た。出來上つて見ると何んだか貧乏たらしく乞食小屋じみて、薄暗い小屋の内を一層薄暗いものに爲た、そして其の糊が乾いても如何程も暖かに成つたとは思はれなかつた。で、紙の一重よりは二重は暖かい道理、それに室内を明るくしたいと考へて、西洋紙の白いのを再び全體に亘つて其の上に張つた。之れも隨分厄介な作業

だつた、手の屆かぬ所は例に依つて積み夜具に登つては危く倒れんとし、長年持古した茶棚や空箱應用の長火鉢を踏み臺にしては、潰れるか／＼とハラハラし乍ら辛うじて張つた。然し張り終つて見ると流石に明るく美しく成つた。幾分冷たい感じは免れなかつたが日を經て卵黃色と成るを豫想され、一方乞食小屋じみた物汚さが大に減じた事を、勞力だけの價は有つたとして彼等は喜んだ。それにトタン板の冷えを稍や免た事を近所の人までも祝福して呉た。其れは獸王の獅子が十尺位な檻へ入れられて居たら、冬の日の光りを受けて日和ぼつこに四肢を延ばし、短い日脚が直きに落ちて行くまでの小一時間に過ぎない暖かゝ快さを、其の身體の爲めに祝福して居ると五十步百步であらう事を考へては、彼自身の生活は勿論現代社會をも呪ひたくさへ思はれた。が妻は只は機嫌善く檻の獅子と同樣に無邪氣で有つた。

金屬製の家は一變して紙の家と成つたわけだが、紙と言つても火事の心配も無かつた。其れをつく／＼見れば如何にも下手な張り方がして有つた、皺の無い所も無いのだが或所は地球儀の如くエベレストやアルプスの大山脈を走らせ、或所はトタン板が少女の乳房の如く膨れて居たり、又或所は深さ八分巾二尺長さ四尺の空隙を紙とトタンの間に造つて居た。更に十何本かの柱や腕木のやうな物は飽かゝらずで紙に包まれてグヅ／＼て居たり、又他の柱などは譯のわからぬ汚い物が付いたまゝ出されて、巾一二寸又は四寸位の太い汚い線が、汚い屋根裏や汚い承塵から一直線に床へ下がつて居た。

柱や承塵などは內へ出て居るので、九尺二間と言はれても室內は決して九尺二間で無かつた。後方の窓も障子が二枚なら六尺と言ひたいが、左の上と右の下が一寸程づゝ隙くゆがみな別にしても、中央は馬追蟲の背中の樣に障子が三四寸重なり合ふて窓巾も五尺四寸位しか無い。そんな風だから外法だけは九尺二間かと思へば、それも危い、唯だ此八軒長屋が二間巾十二間ある位は確とも考へられるが、こんなバラツクの事だから一尺や二尺は保證も出來ない。況んや基礎工事も地ならしも無いのだから、床にも高い低いあり、承塵や柱にも太い細いあり、一本の承塵一本の柱にも細い所と太い所とあり、一つの室內でも眞中が低くて四隅が高い。彼の机の上の鉛筆は每度左方へ走り出して、長火鉢といふプールへ夏の水泳連の樣に直ぐ飛び込む。若し震災前の樣に猫が猫板の上に居たら、其の度吃驚して居るであらう。彼等が東側へ置いた僅か三つ重ねの簞笥で下は二寸も空けてあるのに上部は物尺が落ちないまでに拜んで仕舞ふ、一面から言へはバラツクは直線の並行しない世界である。彼等

の室の北西偶は三尺有る筈だが二尺六七寸の本箱が這入らぬで北西偶は夜具を積んで東北の多分むつかしからうと思つた所へ本箱がすつくり這入つたは却つて驚かされた。凡そ家とし言へはピサの斜塔でも直線が基本として建築されてるのにバラックでは。

直線が並行したで不思議がり

八　慘憺たる防寒作業

古新聞紙を二三枚宛重ねて床へ敷き詰めた、それには夜具でも机でも行李でも簞笥でものの悉くを動かさねばならぬので、非常に厄介な事で有つた。邪魔な物は一寸屋外へ出せば善さ相なものだが、前は女の帯程な狹い通路だから出せない、後方は此長屋だけが幸に二拾坪ほどの空地が在つたけれども、其所は雨の日の水溜りで、晴天の日でも泥々して居たから矢張りいけない。仕方ないから總て室內でやると、丁度細い口のビンの底で人形や手毬が出來てるビン細工といふ物でも造るやうに馬鹿々々しいものであつた。それを了つてから更に又その上へ澁紙を敷いた、それは六疊間一杯に出來て居たのを一疊半だけ折り曲げてから、三尺敷いては茶棚を運び、五尺敷いては夜具を移しして、最後に柱や腕木の八ケ所ばかりは三四寸づゝ剪で切り込ませるまで、それはしんき臭いビン細工で有つた。それへ以前から在つた胡蓙も敷いて行く事は勿論で有つた。で少からず暖かに成つた、坐つて話して居ても膝の冷え方が違ふと妻は彼に話した、大分違ふことは彼にもわかつた。氣分だけでも可也暖かゝつた。之れまでの粗惡な胡蓙を隙だらけな板敷の上へ、たつた一枚置いただけでは、笊の上に坐つてると似たものだから寒いのが當然だつた。

既に隙間の張りふさぎから四壁の紙張りと、床に新聞と澁紙を入れたので三大防寒事業が終つたが、まだ戸障子の破れや窓の下や天井が殘つて居た。

椽の下には薪だのコークスの箱だの梅干や味噌の大樽だのを收容して、成るだけ風の流通を妨げたつもりで有つたが、針ほどの穴からでも棒ほどに出て來る寒風に對しては、それは何違ひも有るもので無かつた。之等集團バラックの百軒に二三位は何所かで見る樣に、土間にも板を敷き椽の下も板で塞げは善いのだが、それは多くは戸主が大工か又は親戚に大工を持つ人達の家の事で、普通人としては板も無いし道具も無いし、大工に高い賃銀を支拂ふとしても中々來て吳ないし、何所に居るものかさへわからぬ大工を、しかも來て吳るか吳ぬかさへわからぬのに尋ね廻はる樣な面倒は一寸出來なかつた。一番簡單で

誰にも出來るのは、ボール紙を切つて釘で打ち止める事だつたが、それでは薪其他の出し入れに困ると、色々考へた末、ええまゝよと當意即妙式に新聞紙の暖簾を裾長に土間へ垂れた、不完全だが其れでも椽の下は塞ぎ得た、その紙暖簾が一兩日で破れゝば一兩日で取り換えて、破れ新聞紙は毎朝竈の炊き付けとした、如何にも乞食じみて情ないが事實それが一番手輕に濟んだ。それで寒い／＼一月を通した。二月に這入つて板を得た、でも大工を雇はねば出來ない事なので、枚のまゝ兎に角當てがつて風の流通を閉塞して居だ。で一層暖かに成つた。

次いで汚い桃茶色の破れ障子を奇麗に張り換えた、其の夜にも雨が降れば下半は濡れて破れるのだが『やがて死ぬけしきは見えず蝉の聲』で、明日の事は明日に委せて、明るく氣持ち善く成つた事を喜んだ、勿論幾分暖かくも成つたのである。

入口の戸と柱の間に上部一寸五分ほど隙くのは、ボール紙を切つて當てがつてピンで壓へ止めた、それは度々落ちた、落ちる度直したり取換えたりした。戸の下の敷居の下へはコークスの焚き殻を拾つて來て詰めた、それで、どうやら風は止め得た様だが少し強い雨にには若干の水の流れ入る事は免れ得なかつた。

こうして凡そ一ケ月ほどの間に防寒作業はロビンソンの無人島經營の様に、毎日々々少しづゝ歩を進めて、漸次に設備[illegible]施設やらが出來て、大層暖かく成つたが一番大事な所で有[illegible]ら如何にもならないものは天井だつた。一日に米俵の炭を焚いても夜深くなれは家は水の様に冷えた。それに左右の兩隣りは兩戸共不完全な厚紙の天井が有つたから、兩隣りの屋根裏にも在る半月形八九十個の風通しまでが、彼の家の温氣を奪ひ去るので、同時に冷氣を吹き入れるので、或は彼の長屋八軒分六百何十戸の半月風通しが皆彼れの一室に向つて働いたらうから、如何とも手の着けやうが無かつた。

まだ臺所の板敷は水切り臺の様に三四寸巾の小板を三分五厘置きに並べて有つたので其所からも風が出た、何の意味で其の様に造つてあるかはわからなかつた。更に其れよりも澤山の寒風を吐くものは柱や腕木の下の横が塞いで無かつたのである、巾二三寸で長さ一尺二尺三尺以上なのが合計九つ有つた。其れらも新聞紙なり、ボール紙なり、板屑なり、拾つて來た焼けトタンなどで、色々に苦心して閉塞し得た頃には、天井も出來た。尤も張れば後から直ぐ破れたり、塞いで間も無く鼠や何かの響きに傾いたり、閉塞と云つても不完全至極な閉塞だから依然として風は通したのだが風穴が甚だ少く成つた事は爭はれぬ。

奇拔なのは四枚の障子である、此障子の上下左右から風が這入つた、戸の上から風が這入るなど一寸普通の人にはわからない、況んや戸の下即ち戸と敷居の溝との間から風が這入るなどは、集團バラツクにして始めて見る光景である、障子は左右の親骨二本で走つて居て、腰板の下一分位は隙いて明りがしてゐる。上も亦同樣である。

まだ此外に此小屋へ風の這入る所は澤山有つた。後方窓の戸などは二重にも三重にも紙張りして絶對的に風は通さぬ筈だけれども幾日かの後には其れが怪しくなる。水の力が石を切るやうに、糊や紙の力は風の力の敵で無かつた、日ねもす夜もすがら戸をかさかさ言はして居る内に、風は遂に糊の間を潜つて笛を吹く、雨の脚は屋根のトタンに太鼓を打ちながら紙をすつかり濡らす、とやがて障子は舌を出す、紙の裾が跳ね上がる、舌が踊る裾が舞ふ、笛である。太鼓である。

關東小大名の高頭たる松平大和守の御殿に雇いて貰つた頃はそんな舞樂は夢にも知らなかつた それは一千坪圓からの建築これは坪二十圓位のバラツクの棟割長屋、正に月と鼈である。

加賀國の山奥から出て來た金澤なまりの大工が天井を造る時彼も手傳ひを仰せ付けられた、次手に節穴に紙を貼つて上へ揚げたりした、が四五日すると釘で止め忘れた板が四枚プロペラの如く曲り返り、其他の板もも思ひ〳〵に反り返つてすなほなのは一枚も無かつた。バラツクは板までが凹凸である。

防寒作業は之れで一通り出來たわけだが、凡そ木だらうと金だらうと苟も物の接合點には必ず隙が有つて其所から風が這入り、日本國の大寒は之れだけ冷えるぞ、いゝかわかつたかと念に念を押させる樣に出來て居る。バラツクだから如何にも仕方が無かつた。

バラツクは餘震大方知らぬなり。

九　濁川の鮒同樣な塵

たつた四疊半が一室だけなら、掃くにも世話が無くて、嘸ぞ小奇麗に、片付いてるだらうと考へる人も多いのだが、事實は甚だしい間違ひであつた。

五室一軒の家で出るだけの塵は、家族の人數が減らない限り一室一軒の家へも出るから、一室としては五倍の塵が出ると見て大差無い、それが十倍十五倍の塵が出るから驚くの外は無い。

自分の小屋へ彼が始めて這入つて見た時、一隅に夜具と通草のバスケツトが在つた、唯だそれだけの外に物も無くて、ガランとして薄暗く、幽かに塵の匂ひがして屋根裏に若干の蛛

巣の煤か塵に太つたのが僅かにゆらいて居た。克く見廻はして始めて玄關に箒一本糸一本などを認めた。炊事道具も無く火鉢も無かつた。これで風邪にも罹らずに居る人なら一寸變つて居るとも考へられた。蓋し、過去百有餘日が間はその手箒で、正四角のその室を丸く掃く事が三日に一度位も有つたであらうか。彼が箒を持つに及んで、掃いても掃いても掃き切れない澤山の塵が砂烟りを上げて出て鯨波の聲を擧げぬばかりのすさまじさで有つた。所に依つては一二分も積んで居り、所に依つては敷物の中まで泌み込んで居た。であるから少し塵の出方が少くなつたと思はれるまでには、毎日十回以上も掃くことが半月以上も續いての後で有つた。

先住者武崎巡査部長といふのが十日ほどしか住まず、妻君の腰が冷えるとかで本郷邊へ行つて仕舞ひ、其弟の市役所へ勤めるといふ三十歳位な男が、夜だけ此所へ寢に來たので有つた。新築の小屋で然もたつた一人の人さへ錄々内に居ない住居で塵がそんなに出やう筈は有るべくも無いが、鼠が暴れるのか風が持て來るのか、砂塵の爲めに室内のあらゆる箇所が悉く鼠色で有つた。そうで無いものがたま〳〵有れば其れは煤けて狐色であつた、茜色で有つた。それならば巴里といふ花の都で一時大流行の衣服の地色なのだが、其の不氣味さは洒落どころでは無かつた。

彼は此室へ這入ると一旦脱いだ帽子と外套を再び身に着けて箒を持つたのである。一箒二箒三箒四箒すればもう鼠色の塵が濛々として立ち上がり息もつまるやうで有つた。掃いても掃いても出る塵に負けないで何度も〳〵掃けば、冷え切つた手が遂に痛くなつた。それ位で切り上げたが、何度掃いたか覺えられなかつた。

掃くには隨分掃いたのだが、何人前かの夜具や家具などが轉がつて在るので、隅から隅まで清める事は出來なかつた。まだ〳〵拂塵のかけ所や箒の入れ所も有つたが、塵の亂舞も程度と思つて善い加減に切り上げた。それに先住者の荷物に手を觸れる事も出來なかつた、から後は追ひ〳〵に掃き出さうと一旦長火鉢の前へ座つた。そして灰を掻きならすと其の灰からも塵が立ち登る。五分間たつかたゝぬに最早茶棚の上が霜のやうに白い。

餅で濟ませる夕食の用意をし乍ら、まだ見ぬ先住者の歸宅を待つ。彼等が此日來る事は承知で有らうけれど、彼等の荷物が先住者より多いので、遠慮すべきを逆まに巾を利かす樣に見える事を、相濟まぬ樣にも思はれたりして居た。

逢つて見た武崎青年は溫厚な人で彼は好都合だつた、滿洲の

各地で零下三十度位な寒さに馴れてるといふ立派な體格の男だつた。威張るけしきは少しも無いのみか反つて遠慮勝なので、彼等は氣の毒に思ひ、さア火鉢の傍へ、さア餅を一つ茶も熱い所と出來るだけ親切にした。

が老婆は無頓着に數日の後には早く行つて欲しい樣な事を口外した。尤も一兩日中には出る事を事務所から彼等は聞いて居た。で老婆は青年に喜ばれなかつた。

寒いから火鉢へどし／＼炭を入れる、自然灰を掻く、一方に又煮物の七輪を團扇でバタ／＼煽ぐから之れも灰が立つ。煽がない時でも入口の戸を一寸開けると冷い風がサッと來て、牡丹雪でも降つた樣に眞白な灰を一室一杯に撒く。

先住者時代の塵は胡蓙の目へ喰ひ込んで居て其下の板も鉋無しだから、其のザラ／＼の膚へ又數千萬の塵が這入つて居た、こんなわけだから胡蓙の上だけ掃くには何度掃いたつて塵が泉の如く湧き出る筈だつた。

バラツクは客が外套を脱がぬなり

十　お濠より汚い浴槽

先住者武崎君は通草籠一つ持つて一月の七日に去つたが二三日中に取りに來る筈の夜具などは一月經つても二月經つても取りに來なかつた。狹くて困つてる四疊半は其のため半以上を塞がれ、其所へは手も付けられない事が掃除其他に甚だしい苦痛だつた。

殘つた四疊に老婆と老婆の客とが泊つた。一月十二日には客が去つたので彼夫婦も泊つた、半月が間寒い朝夕を元園町から通つたので有つた。九段に居續けて見ると、手廻りの物が元園町なため甚だしく不自由だつた。で、ぽつ／＼一二點づゝ運んだが、其の手數厄介不自由は神經衰弱を增させるには充分だつた。四疊に老婆と三人の起臥も頗る窮屈なものだつた。

朝起床すれば夜具をたゝむで高く積み上げ、寢衣を拔いで和服に着換える、外出するには洋服に着換えて、歸つて來て和服と成つて、夜は又縕袍に成つて夜具を延べて其の中へもぐり込む。これだけでも稍や十回の脫いだり着たりが彼の身體一つに有る。小一里も歩いて來た時の靴下やヅボン下などは、ボウと烟の如く塵の出るのが目に見える事もあつた。古着だから多く出るのでも有つたが、どうしてこんなに塵といふものが何所からでも澤山に出るのが不思議な位だつた、一枚の着物が全く着古されるまでに何十億の塵が出るのかと考へて、塵の這入る筈も無い袂に袂糞の溜る事や、三尺四方の大便所が二三日掃かないと鼠色の綿と成つて、澤山の塵が溜る奇怪ささへあるに、西

洋人に言はせれば木綿織物は毛織に比べて何十分の一何百分の一しか塵が出ないと羨んで居る。蓋し衣服も机も雀も人間も遂には塵と成つて終るので、大地は塵の大集團である。地に最も近いごみ溜、ごみ溜に最も近い集團バラツクに塵の多いは寧ろ當然の事で、其所に住む市民も亦市民中の屑即ちどん底へ落ちてる襤褸に外ならなかつた。紅塵萬丈の都會といふが其の都會人は農、樵、漁などに比べて汚い人ばかりだつた、都會の人は心の汚さを蔽はんが爲めに、シルクの帽子エナメルの靴、髮に油顏に白粉を塗つたに相違無かつた。

夫婦と老婆の出す塵の外に、冷たい風が電車道から砂ほこりを吹き込んで來た、金が敵の世の中とも言へど、金のため命を取られたものは百人に一人位も有るものが無いものか。バラツクの世界では塵が敵である、百人が九十九人までは塵のため命を取られて居る。唯だそれが一寸氣付かれないだけの事である。氣付かない樣に當局者といふ者が教へて居るからに過ぎない。

長屋の人達は多くは其小屋前で炊事をする、それより外に場所が無いからだが、其の竈の烟と煤と灰とを、例の軒下のなまこトタンの半圓形何十個の穴から吹き込む、向三軒兩隣の分が風の都合で二三軒分は屹度這入つて來る、天井の無い彼の家では烟の中から綿雪の白いのと黑いのが雜つて降つた、黑い方は新聞紙が焚き付けと成つた分である。北風以外の日は無風でも必ず毎日這入つて來た、閉口の外無い來客であつた。

それ以外に於ても色々塵が立つので机の上や茶棚の上などは毎度白かつた、涕をかめば黑かつた。頭も塵だらけ衿頸も塵だらけ。殊に手の屆かぬ簞笥の上や、其の上の包み夜具の上などは十日ほどすると掃塵のかけ樣も無く手の付け樣も無く、見るばかりでもぞつとした。爲めに彼は室内で帽子を被つて居る事を屢々した、バラツクでは室内でも外套を着たまゝ帽子も着たまゝなのが禮議に叶つてると彼は考へて居たからだ、が妻は其れを不平がましく抗儀し遂に頼むやうにして取り去るので有つた「それでは家で無い樣な氣がしますから……」といふ。餘りみぢめな住居を辛うじて忘れてゐるに其んな姿で坐られては、一層不快に思ひ起こされるからで有つた

新聞紙の報ずる統計に依れば、今年は寒氣が非常に多く血腦炎が多くチブスが多く、小供にはヂフテリヤが多いといふ、皆寒氣と砂塵のために起る病氣であつた。然るに此の集團バラツクに附屬した東京市の公設浴場は、頗る不完全不清潔且つ不親切なものだつた、色々の方法で注意する人達も有つたが遂に改まるべくも見えなかつた

殆んど毎日十人位の女や小供が辷つて轉んだ、コロリバタリ

と倒れて持つて居た桶の水を他人にかけたりして危いのであつた。浴槽の内も外も膝頭が觸れるとべとりとぬめつて不氣味であつた。それで彼等は成るたけ早く行くので有つたが、盥を取つて直ぐでも湯が濁つて居た、そして時々は前日の汚れ湯が半分以上も煮返されたかの如く甚だしい惡臭を放つた。寒い夜更けに場末の路次など通る時、湯屋の捨湯の匂ひが足下の小溝から來る事がある、それの稍や強烈なのである。湯から上がつてから手拭を四五偏洗はねば其の臭氣は毎度取れなかつた。それから人の垢が木から出る油に凝るとでもいふのか、夏のお濠の青みどろの様な塊りが幾つも浮き沈みして居る。或日は一尺以上の糸が垢に太つて毛糸二筋ほどにも成つて游戈してゐたり。或日は水を入れて掻き廻はすと男とも女ともわからぬ毛が澤山に出て來た。或日は黑い細かい塵が白いタオルを鼠に染めた。惡臭に多少こそあれ惡臭の無い日は無かつた。岡湯でさへ頭を洗はれない汚さの事が度々有つた。岡湯の甚だ少い時も多かつたが、其んな時は水垢のやうな物が艾の如く繭の如く底に動いて居て汲む勇氣は如何しても出ない。從つて水を使へば從つて嚏が出た。風邪をひいた。

尤もバラックの人達も不作法で有つた。が其の不作法を戒め取締る方法はいくらでも有るのに、そんな事はせずして、不親切に應ぜなかつたりけんつくを喰はせたりした。取りわけ教育の無い女と見られたら叱り飛ばしたりした。でも新村入りの彼としては當分沈默を守るより外無かつた、が十日廿日と通ふ内にバラックの人全體が浴場に對して甚だ不平で有る事が充分わかつた。が皆は其時ブゥ〳〵言ふだけで一骨折つて清潔にしてやらうとする親切が無かつた、彼は先づ新聞に投書して訴へた、それに對する市社會局の答は「そんな事は無い筈である、皆が喜んでゐるやうに聞いてゐる、尙ほ注意させる」とあつた。其後四五日は少し善かつた、が又元の通りに歸つた。で或日は番臺へ注意した、或日はバラック事務所へ注意した、再び新聞に投書した。でも舊態依然で有つたが、二月末日から藥湯に改めた。成る程藥湯なら濁りも臭氣も誤間化し得る。考へたものだ。

其頃は東京で天然痘が流行したので、バラックなど老幼一人殘らず强制的に種痘せしめたのだが、其痘の痒さを大人でさへ痒くのだから痒かずに居られる小供も無かつた。中には痘を痒き落して尙ほ浴槽内で痒いて居る小供も少からず有つた。彼亦夜中袖に引きかかつて痛く落ちた痘の跡を、頗る氣にし乍ら入湯するので有つたから濁つた腐敗した湯は恐ろしかつた、と言つて這入らずに居られぬほど毎日塵にまみれた。止むを得ず

んば水で洗ひ拭ふのだが、水では垢は落ちないし又餘りに寒いし、蒲柳の彼には水浴するは好んで病氣に罹るやうなものだつたから共れは出來なかつた。

それにバラックでは鉋のかからぬ柱や板である上に、やれ棚を造る、それ釘を打てなどと馴れない事を爲るため小傷の斷間が無かつた、傷口へ惡臭の浴場では丹毒といふ特に恐ろしい病氣を氣づかはずに居られなかつた。自分が左様なら一般の人も左様と考へて柄に無い憎まれ役を勤めたので有つたが、多少の甲斐は有つた。それに貧民共は安値で入れてやるのだから遠慮勝ちで居れ、と言はぬばかりの傲慢の態度や、闘湯の缺乏を訴へる時など從來亂暴に怒鳴り返したりしたのが少しづつ改まつて來た。脱衣場が何時も泥だらけで足の裏が不氣味千萬だつたのも亦いくらか淨く成つた。

元來ならは一般錢湯の模範たるべき、市の公設浴場が之れの時、之れの所で之れなのであるから一等國の首都も有つたものでない。千九百廿四年の今日傳染病流行の防止に汗水垂らして居るなどは世界に對して不面目千萬な次第だが、其原因は當局の淺學無能怠慢にあるらしい。

バラックは小傷の絶え間無いくらし

十一　元日は煤掃後午睡

長い旅路に唯だ一夜の旅籠屋でも、這入つて泊る以上は直ぐに其家の方角、非常口、便所、電話口など聞いて置くべき事があるのに、年越を鼻の先にして廿九日に這入つた元園町の家の狹い暗いごみ臭い中に、主婦の外は家族の顏も知らず、便所も臺所も知らずに寢た。明くる朝は未だ家人の起きぬ内、矢張り便所も臺所も知らずに家を出た。一夜の眠りにも未だ勞れの取れ切らぬ身體を、刄の様な冷たい風に吹かれて蹈踏み乍ら歩くと『楫手の腕のかよはさに浮世の海を恨みわび』などいふ句を思ひ出したりして捨鉢氣味にも成るのを、咳が頻りに出て苦しかつた。

九段まで近途すれば十丁に足らぬ所だが、千坪二千坪の大邸宅の燒跡が幾つも有つた。噴水獨り空しく枯小松の枝に注いで氷柱を垂れてる庭の跡もある。雜木林の中に稻荷と見える赤の鳥居の小祠が殘つてゐるのも有る、十萬廿萬四十萬八十萬と大金をかけた家も此通りと切實に思はせる。今更『富貴浮雲の如し』や『地に寶を貯ふる勿れ』でもあるまいが、事實此通りなのを白骨のお文の様にあはれに目の前にまざまざと見つゝ行つた。

それを毎朝見て又毎夜月明から星明かりに見て、殊に夜は怪

しげな人や犬にも逢ふて、都遠き村里の冬枯の岡を越す心地がして、決して東京の眞中に居るとは思はれなかつた。

三十三十一日の兩日に元園町の宿は少し片附いたが、九段の方は相變らずで心も身も落付かない。同居者武崎君の顏さへ能くも覺えぬ内に年越の夜と成つた。僭越な樣だつたが、非道い破れや隙間に紙張りしたりして樣々の準備設備に十時過ぎてから夫婦で買物に出た、内とても寒いのだが外は寒くてどうにも成らぬ風だつた、須田町で暖かい物を喰つたが矢張り寒くてどうにもならなかつた。九段へ歸つて明日の雜煮を整へたが一向大晦日らしい氣持もせねば、百八梵鐘が間も無く鳴つて明ければ正月元日などゝは何ぼ以て思はれない。何か急がはしい樣で馬鹿々々しい樣で、寂しい樣で、唯だ吹く風のみがべらばらに寒かつた。老婆が夜中に凍死しはせぬかと心配もした、で毛布を又二枚渡したが其時は既に元日へ這入つて居た。考へて見れば元旦早々の問題が死で有つた。それに對する同情であつた。

松など立てゝる家は百軒に一軒も無かつた。稀に有つても遠慮勝ちに門內玄關傍に小さかつた、正月らしい氣分せぬ事は市民一般であるらしい。でも晴天無風おだやかな日和だつた。八時半に元園町を出て何を考へる間も無く九段へ來た、顏を洗つても若水を汲んだ氣もせず、雜煮で腹は拵へたが屠蘇は勿論酒さへ無かつた。賀客の來る筈も無く年賀に行くべき先も無かつた。明治神宮は是非と思つてゐたが其れも二日にやつと參拜出來た。元日は十足程歩んで招魂社で濟ませた。

雜煮を喰べ乍ら若干の餘裕を以つて小屋の內を見廻はすと、屋根裏にまだ蜘蛛の巣が澤山有る、風を防ぐにのみ急いで氣付かなつたのである、で食後勇ましい姿で煤拂を爲た。顏や手が汚れたから直ぐ又湯屋へ行つた。それから床屋へ行くつもりだつたが甚だしく勞れてるので、髭面のまゝ夜具をかぶつて寢た。身體も勞れてるが氣苦勞は更に大きかつた。目覺めたのが午後三時頃で、もう夕方近い景色だつた、火鉢一つを頼りに身動きも取れないので、やつと編物か何か仕て居た妻や老婆にも氣の毒だから、大急ぎで蒲團を片附け火鉢を元の位置へ直し、茶を一碗啜つてるともう日暮に近く、暗い狹い汚い新家庭は一種言ひ知れぬ寒さに滿ちてゐた、妻の顏と老婆の顏もたゞ寂しかつた。ずつと話は絶えてゐた。

彼が少年時代故郷に於ての大晦日元日二日などいかめしい體式が有つて、士農商工の屏風は例年廣間へ飾られ、其前に三寶が二つ、眞中に小松を立て米榧勝栗結昆布などが入れられた。小供の室には天神樣の幅の前に鏡餅や昆布や密柑や白柿などが置かれた、皆でそれに禮拜をした、雜煮の終る頃から賀客は日の

暮れる迄續いた、臺所だけの賀客も澤山有つた。從つて神聖な元日には滅多に笑ふ事をさへ謹んだ、一家謹嚴高尙な氣風の中に鉢の梅が薫り籠の鶯も鳴いた、都會に比べて質素だらうが優美なものだつた。

それをだらしないにも程の有つたもの、髭剃らずに元旦から午睡する煤掃きする。屠蘇酒も無ければ鏡餅も無い。言語道斷と思ひ乍らも仕方が無かつた。東京市が重傷で彼は赤貧で住居が乞食小屋では、鏡餅は貰つても飾る所が無い。佛壇も無い神棚も無い、謹嚴なりし父は昨夏永眠したばかりであるだけに申譯の無い樣な氣もする。

元日が果して善き日であり幸福なるべき日であるならば、貧乏人の勞れた者は湯へ這入つて寢るが何よりの樂みであり喜びである。三月に這入つて或る長閑なる戶外で長屋の妻君達の話に『夏になつたら午睡しませうね』と言つたのを彼は聞いた事が有つた、どん底の悲慘な人々が顏剃る暇も無く休憩に安眠に急ぐのは頗る自然な事で、一寸變に思はれたら思ふ人が惡い。平常心身過勞な人には『寢正月』ほど善い正月は無い。

斯くて寂しいつまらない三ケ日は矢の如く過ぎ去つた。

　バラツクの元旦湯だけは入りぬ髭未だ。
元日は煤掃きの後ひるねなり。

十二　四疊に二家族同居

九尺二間と言つても正味は四疊半一室に過ぎない、それに二家族の夜具なり鍋釜なり炭薪なりが這入らうか。早い話が四疊半に寢床を二つ敷けば、其の室に夜具以外何物も無くても、もう夜具と夜具とが相觸れずには濟まぬ。これを二家族と言へば少くも四人、多くは五六人である、簞笥もあらう味噌もあらう雨具も有らう竈も有らう。半數は椽の下か棚の上にでも乘らねばならぬと何人も考へる、が集團バラツクには此の一室に二家族の居住が少からず有るから驚く。又一家族だが六七人が一室に居るのも少くない。

彼の近所の婆さんと娘の家は、若い夫婦の一家族が同居して居た、又近所の或る家は夫婦に娘二人と小供三人の合計七人だつた。これに大きな長火鉢も有るといふ簞笥もあるといふ、勿論釜や鍋の臺所道具もあるであらうから如何して寢てゐるか一寸見當が付かぬ。

一月の二十日近く老婆が去つて彼等は夫婦きりだつたが、間も無く元園町の荷物を九段へ取り寄せた爲め、一人が起きて便所へ行くとか、一人が早起きするとかには夜具の裾か袖を踏まずに行く事は出來なかつた。妻君を十時に寢させて彼が心靜か

に長丈の手紙を田舍の姉に書く時などは、坐蒲團は高く棚へ上げて、妻君の寢床の裾が彼に坐蒲團の代りを仕てゐた。即ち一人が寢れば他は坐る席も無いのであつた。

それなのに二夫婦に小供など一緒に四疊半に住めやうか、八疊間で二間鎗を振り廻はす藝當を通り越して、一昔某の源水といふ獨樂廻はしとか、齒科醫某所退けの居合拔きとかが、六尺豐の長刀をヤツと掛聲諸共、奇蹟的に拔いて御覽に入れる手品の樣な類である。彼は每朝每晩の寢床の始末にさへ、甚だしい厄介さを感ぜずには居られなかつた。妻が夜床を敷く時は彼は必ず其の十五分間ほどを雨にも雪にも招魂社へ參詣した、中門は勿論、神苑まで垣に鎖されて、千木堅魚木の下の暗に火が二つだけ見えた、顧ると世界第一の大鳥居の傍に大村益次郎が毅然として立つて居た。彼は其等を每晩見た、それは每晩些少の變化も無い靜物だつた。たゞ月は每晩變つた、星も少しづゝ變るのがわかつた。彼は見乍ら何か考へた。考へつゝ寒さに逃げ歸るのであつた。

朝の臥床取片附は彼が其任に當つた。妻君は其時戶外で炊事をやつてゐるのが規則のやうに成つた。どうしても二人は居られなかつた。從つて二家族の者や七人の者に衷心同情を禁じ得なかつた。彼の隣家の小供は——まさか娘や老夫婦でもあるまい——每晩必ず二三度は壁のトタン板を足か頭かで打つ、靜かな夜深けなど可也善い音がする。そのトタン板が凸凹なのだから——或は絶えず打たれるから凸凹に成つたのかも知れない——ドンと當ればドンボコンバカンと一蹴にして二三音を發する事も珍らしくない、田舍の樂隊のやう賑やかで、京都智恩院の鶯張り廊下と共に建築上の名所とするに善い。それも狹い所に澤山の人が寢るからである。

彼の知つた某伯爵は夫婦に若夫婦と幼兒が二人の六人だから九段のバラツクなら四疊半一室へ寢起きするわけだが、三千坪といふ廣い邸内に三百枚といふ夥しい疊を敷く、六尺七尺九尺の廣い廊下や椽が又百數十間それに附隨して居る。從つて一年に精々二度位しか使はぬ大廣間がある、一年に一度も使はぬ室もある、其大廣間も使はなくても立派に濟むので行つて、新參の下男など稀に奧へ呼ばれると、戻り道は屹度迷ひ子に成つた奧女中からけんつくを喰つたり、家令家扶から眉を顰められたりする。それで若夫婦と小供は別の洋館に居るのだから、結局その廣い〳〵家は伯爵唯だ二人の住むためのものに過ぎぬ。市民は住宅が無いため營業が出來ずに泣いて居る昨年の十二月に、伯爵家へ逃げ込んで居た九月以來の罹災者を皆出して仕舞つたといふ。

こうして一小室に多人數が、魚河岸へ着いた鮪の樣にゴロゴロと無造作に、一つ夜具を引張り合ひては濁川の鮒の樣に、塵を吸ひ吸ふて塵に醉ひ乍ら寢入つて仕舞ふ。之れが衞生上に善からう筈はなく、百の病患も此所から出發してゐるのである。之れを密に窺き見て、氣の毒に思ふのは、三千大千世界に唯だ天の月ばかりである。

その月をガラス戸越しに賞め乍ら、北海の珍味は蟹とやら雲丹とやら、南洋の美果はマンゴーとかマンガスチンとか、佛國のボートワイン英國のココアなどあらゆる美味珍饌に舌皷を打つてる人が皇室の藩屛とある。

床一つ敷けば坐席の無いお家。

十三　雨の日の穴熊生活

情ない集團バラックの生活でも晴天續きで風が無くて、月の善い夕方などは自ら悲慘を忘れて居る何時間かゞ有るのである。檻の猿が空腹時に梨の一個を與へられて、殆んど一切を忘れて快喫してるやうなものであらう。『結構なバラツク日和ですな』『好い具合に旦那樣日和です』などいふ樣な挨拶をかはし合ふ人達の顏の輕き喜びの微笑は、寧ろ悲劇に屬すべきものであつた。

善ければ善いにつけ惡ければ惡いにつけ人は昔を思ふ。反に雨の日となると一層な悲哀に沈む。震災前の彼の庭を憶ふ。の無花果を憶ふ。仲善く其葉蔭を散歩する純白な鷄の一羽ふ。無邪氣なりし仔猫を憶ふ。明日は他に與てやる小猫に虫がわそうだとセメン圓を飲ませた事もある。泥棒猫に嚙まれた跡が膿んでデルマートルを散布してからデルマと名に呼んだ小猫も有つた。など思ひ思ふて輕き哀愁を眉間に滿えるのは彼ばかりで無かつた。妻君の方は何時までも猫の事を言つた。月の宵、星の夜更けにも猫の聲が何所からか聞えると、直ぐ内の三毛(みいや)はどうしましたらうと言つてあはれがつた。それは愛した三毛猫をあはれむと同時に自己をもあはれむものなので、良人を悲み自分を悲む賤の苧手卷くりかへし、昔を今になす由の無い事はわかり切つて居ても矢張り出る人間の愚痴言で有つた。

雨といふ自然の大なる手の壓迫には如何する事も出來ず、バラックの人達は殆んど皆純然たる穴熊の生活に變はる。

窓や入口を堅くメ切つて、唯だ雨水の吹き込む事ばかりを恐れながら、薄暗い箱とも穴とも言ふべきもの丶中に、何事も爲さず唯だ無駄話位をして、時間の經過するのを待ち、晴天の來るのを待つより外は無かつた。そんな時殊にあはれなのは小供で有つた、元氣の無い顏をして本も讀ます歌も唄はず、物の僞

などに小さくうづくまつて居た。丁度軒先へ出した籠の目白に氷雨が降りかゝる様な姿に見えた。

言ふまでも無く前の入口も後の窓も板戸なので、締切らねば雨が這入るし締切つて仕舞へば暗くて新聞紙一枚見られない。夜に成つての電燈は兩戸へ分けて五燭宛、塵まみれの火屋を通して胡座の上まで來る所は精々二燭位、晝の暗さと先づ似たものである、矢張り衣服のほころび一つ縫へない。その代り塵が目立たなくて善いと言へば善いに相違ないが、痒きを痒いて指先で捫る虱取りは出來ても指に摘まんで眞の虱か塵かゞわからない。暗くて何も出來ないと言ひつゝ何事も爲すにも居にくいから何か爲る、目ばかりで無く他にも惡影響を及ぼす、それが後日醫藥を必要とする事も知らぬでなくて知りつゝやつて行く。陰欝な空氣の中に塵や有毒ガスを呼吸しながら爲る話の半分は相も變らぬ震災當時の自分や親戚や被服廠や淺草公園やの慘話のくり返へし、近來は屋主の兇暴も少し出て須田町裏通りの路次で六疊一室の家が月卅圓、三崎町で四疊半と三疊が二十五圓と例を擧げてその不當を攻撃し、平常でさへ亭主にけんつく喰はすを何とも思はぬ長屋の女房などに何かしら心がいら〲するので相手の出様に依つて勘癪を起して擲り飛ばし兼ねまじき者も、青ざめた元氣の無い顔の中に一つ位混つてゐる。

多くは陰鬱と寒氣に氣がいぢけてゐて、何時頃からの事か、何を爲んとの心も起らず、火鉢にばかり噛ぢり着いて、炭火ばかり掻き廻はすから頭は灰で白く成つてる。

小人閑居して、何所かの小屋ではパチリ〲骨牌遊びをやつて居り、何所かの小屋では新宿へ遊びに行つた時女に持てた話で笑はせて居る。何所かの小屋では神田のバーで教はつて來たといふ下劣な俗曲を歌ふ。それらの席に少年少女の混じつて居る事は言ふまでも無い。雨の日は仕事に出ない勞働者の小屋では毎度そんな事で、夕方から酒宴などが始まる。大きなだみ聲で猥褻な歌を唄ふ、時には猥褻話を連發して機關銃の如く續く、恐らくそんな席にも子供や娘は居るであらう。居ないにしても其の大聲は附近十戸から二十戸位までには聞えるのである。厭々乍ら聞かされて行く、馬方三吉が泣く〲歌唄ふやなものかと苦笑されたりした。

彼は雨の日何をして居たか、朝から火鉢と差し向ひで、火な上手におこし、餅を上手に燒いて、それをあべ川にして見たりしるこにして見たり、紅茶を出して見たりチョコレートを嘗めて見たり、絶え間無く飲んで喰つて、漫性胃病の彼としては當然といへば當然なのだが、腹一杯といふ慾求を滿足させては胃を虐待して居た。その滿腹が甚だしく腦に惡影響有る事を彼は

充分に知つて居て偖て改める事も中止する事も出來なかつた胃の爲めに記憶の悪い穴熊は快晴の梅日和と成つても、日向ぼつてをするか靖國神社の境内を散歩する位が精々で、何事を爲すの勇氣も無かつた、既に善事をさへ爲すに懶しと言つた格構に老け込んで居た、いぢけて居た。胃病も神經衰弱も彼に有つては二十年以來のもので有らうが　昨年十一月十二月の毎夜、寒い夜風に吹かれ乍ら夜警の任に當つて熱い饂飩を喰つたので、新年以來極度に胃を害して前齒七八本の外は殆んど全滅したので一層胃を悪くして居た。

彼の友人某がホの卅六をヲの卅六と聞き違へて、御免と一聲開けた戸の内は暗く爺さんが一人變な顏して熊の様な格構で居たといふのだが、愛國婦人會其他から貰つた不揃ひな着物をごて／＼重ねて、腰卷きの様な襟卷をしめ、新聞紙で鼻をかむのであらう薄汚い髭面に、目ばかり光らせて大形の褞袍を頭から着て居た相だが、それはやがて彼にも當てはまる形容だつた。

五軒先きの子が泣き止まぬ夜寒なり

十四　物賣物買巡査救世軍

華族一人の邸宅よりも狭い程な土地に、其の兩側に鮨詰と成つて帶の如く五百戸が居流れて、内に無垢の罹災民が二千五百數十名住んで人間の生活とは名ばかりの、どん底に蠢めいて居る。

其所へ色々の物賣りが來る。様々な物買ひが來る。巡査が戸口調査に來る、醫者が種痘に出て來いと呼び出しに來る。區役所か市の社會局から赤兒が無いかと聞きに來る。救世軍からは今晩の音樂會を聞きに來いと知らせて來る。何者とも一向わけの分からぬ人までが、何か不得要領の事の調査らしいのに來て行く。鼓を打つて來る者。笛を吹いて來る者。太鼓を叩いて來る者。それは千種萬別である。

之等が十人の内九人まで長屋の小屋々々を無斷で開ける、開けてぬッと顏出して始めて

『おかみさん今日は何か買はないかね、善いのが有るよ』何の事か一向にわからぬ、之れが魚屋と後に知れた。

『此方は何名です』顏を見れば何所かの小役人で有るらしい。

『抽籤でバケツと着物を上げますから、三時前に救世軍へ來て下さい』善く見れば屑屋でも營業するらしい男。

『こちらに病人は居ないかね』之れは醫者の代診か藥局で有らう。

『佐藤さんでしたね』『違ひます』『では佐藤は前居たのですね』『違ひます』『此所はヌの十六號ですね』『夫れの通りヌの十六

號の淸浦です』『あなたは何時來ましたご』『昨年末です』『そうですかお邪魔致しました』こんな風でフイと來てフイと去る、何者が何所から何の爲めに來たのか一向わからぬ。其の服裝と大きな蟇帳とは可也立派だが、お頭と蟇帳の內容が可也お粗末らしい。表札の通りかと聞けば一言で盡きてる事なのだから、洋服も和服も無敎育面も生意氣顏も、皆無斷で戶をグッと開け、顏をヌッと出すのだから內に居る者は少からず面喰らふ。中には御叮嚀に土間まで這入り込んで、

『御免下さい、優秀品の文化納豆でございます、今日は特別に勉强して有りますから、御買下さい』類は小賣店の御用聞きに似て服裝は學生である。

斯うして稀に聞く、御免なさいの聲も入口を開放してからの事で、開けない先きに言はず、家人の許諾を待つてから開けるなどは藥にしたくも無い。尤も開けないで御免と言つたのでは向三軒兩隣と自分の家との何れに向つて言つてるかゞ一寸分らなくもあらう。

多少敎育でも有る人なら尙ほ更だが、無敎育な御用聞きなどにしても、少しは考へて貰ひたい、如何に集團バラックでも餘りに見くびつて居るではないか。

彼等の內には從來五室六室位の門構への家に居た者も有らう。今日バラック長屋に住んで見れば、應接室にも臺所にも、居間にも寢室にも、食堂にも書齋にも、化粧室にも仕事場にも、天にも地にもタッタ一室で、押入れも無い、便所も無い、物置きも無いのである。だから時と場合に依つては、着物や膳手道具が足の踏み入れ場も無いまでに撒き散らされて居る。それ程まで、無くとも食事中だつたり、食後の喰ひ殘された椀や皿が散らかつて居たり、或は女が片膚押し拔いでふくら乳あらはに化粧して居る事もある、其所を無斷で引き開けて、餘り人相の善くも無い顏を突き出されて溜らうか。

女として他人に見せたくも無い箪笥の中を擴げて居る事もある。中には善過ぎて見せたく無い物もある、粗末過ぎて見せたく無いものもある。稀には殼空きのため見せたく無いのも有らう。それを突然戶を開けてジロリと睨み廻はされたのでは何やり切れない。

それが洋服でも着て光つた靴穿いて、少しは物の道理がわかり相な人程物言ひが橫柄で無警告襲擊の手荒な狀態なんだから世の中は逆まである。

物賣は五月蠅い程澤山に來る、豆腐屋ばかりも五六人來る、小商人等は番町邊なら十二三軒ほど廻はる距離で、此所のバラック五百戶は殆んど全部廻はり得るのだから、買手が纒まつて

居て見て甚だ都合の善い次第である。プウ〳〵と豆腐の笛吹けば、婆さん妻君、娘。少年と、一度に四五人は容器を出して、此方へ一丁此方へ二丁、此所へがんもいゝ三つ私は揚げが四つよなどゝ一時に來るから随分世話が省ける。

八百屋が來る、煮豆屋が來る、魚屋が來る。皆三四人は來るのである。下駄屋、納豆賣り、空ビン買ひ、有名な何某屋の海苔大安賣、干鱈と鶏卵。七色とうがらし。飴屋も來る。花屋も來る。下町や河向ひは死人が多かつたか花は可也に賣れるであらうが、九段では家具をさへ相當に持出してるのが少くないのだから、それに佛壇も神棚も無い小さな假小屋だから花は僅しか賣れない。

汚い萬國旗の下へ來る之等澤山の人達の中で比較的親切で叮寧なのは巡査で有つた。近年一しほ親切になつた樣で、殊に麹町邊では理解の有るのが多いとも思はれた。親切で有るべく考へられて居て反つて不快に感ぜざるを得なかつたのは救世軍で有つた。

音樂會だから聞きに來いと知らせて來たので、ベトウベンのソナタとか歌劇のカルメンとか、其他無邪氣輕快な有りふれた所で賑やかに、長屋の妻君や少年を喜ばす事かと考へ、殊に故ブース大將の髭深い暖か味の溢れる肖像を嬉しく見た彼が行くと、救世軍々歌や神の讃美歌が大部分に聞かされ、其他に本人に殆んど無意味なやうなものを若干聞かされて失望！司令者は黄色の皮膚を白色ならしめやうと苦心する者の如く聽衆へ屢々合唱を強ひ、拍手を要請した、彼も亦ハレルヤ〳〵と幼稚園の生徒の如く何度も合唱させられた。それは一種の侮辱のやうにも感じたが一面熱心と勇氣の賞讃に價する司令者等は左樣せねばならない樣な立場に在るらしく思はれて、反つて無智にしてひがみ根性の多い貧民を教化するの困難を同情したりした。

彼は元來英國佛國は好きで米國の排日は悪辣極まる沒道義として大の米國嫌ひで有つたが、大震災に對する米人の厚意を喜ばぬ譯にも行かず、殊にウッヅ大使にはすつかり感服し悉く感謝して居た。然るに好きな英國の好きなブースの救世軍には少からず豫想を裏切られた。

彼の住居が門内に引込んで居たゞけ、御用聞きが來ても勝手口で有つたゞけ、彼が善意の解釋を以て眺める時、種々雜多な物賣り物買ひなどは多少の興味を以て觀察された

障子だけがさゞえの蓋の住居なり

十五　假裝行列百鬼夜行

バラックの人達は皆感心に朝が早いと賞められるが、其實は寒くて寢て居られないからで有つたとは上野池の端集團にかける噂話である。九段に於ても亦復た大體左様であつた。一つには電燈が暗いから夜永に曾寢するので早く目覺めるでもあらうが、兎に角皆感心に朝は早かつた。

神田の神保町小川町邊で朝の開店は大概九時であるのに、神田は愚か日比谷公園の三分一も賣れない九段の小商店は、八時には大方店を開いて居た。で商ひが有ると言つても初年兵や田舍から來る貧乏な人達に、國旗の杯か被服廠跡猛火の錦繪を賣る位なもので、それで無ければ同じバラックの人達を相手の十錢に十二個の精進揚げとか、勞働者客に時々歡聲を聞く蛤鍋かおでん燗酒か一寸一杯釜飯の類に過ぎない。斯うした小商店は兩側で百五十軒ほどだらうが、それでも床屋が三軒繪ハガキ屋も三軒、小間物屋電氣具屋牛肉屋湯屋酒屋と、大抵一通り有つて菓子屋などは十軒も有つたが、大方は屋賃や地代を拂つて居ては引合はないものらしい。此商店側よりも裏通りの方が遙かに賑やかで、朝の一しきりは銀座通り以上と見られた。魚河岸を彷彿させるものが有つた。

狹い路次なのに長屋の人達は男女老幼殆んど全部が、顏を洗ふとか小便に行くとか、掃くとか拭くとか齒を磨くとか、飯を炊くとか菜を切るとか、水を汲むとか湯を捨てるとか、用たり這入つたり間誤ついたりに、豆腐屋が來る新聞配達が來る、郵便配達が來る。

一番早い人は四時に起きて炊事にかゝる。勿論夜明けにはまだ〱早いが大きな電燈がついてゐる。良人が電車々掌なのもある、娘の事務員が電車に乘るに困るからとて割引を利用して早く行くのもある。五時から六時半までの間が一番混雜する。互に顏を知り合ひ挨拶を爲合ふのも此時間で、昨夜の火事の噂するのも此時間で、昨日貰つた五もく鮨の禮言ふのも此時間である。由來貧民窟の女房達には不思議にエライのが多いものだが、それらが此時間に敏腕を振ひ雄辯を振るふ。而して其のエラさ加減を遺憾無く發揮する。

七八尺の間を置いて向き合つた長屋が凡そ三百何十メートルに續いて其中間に下水溝が在る。溝に跨つて四斗樽の天水桶が、約廿四メートル毎に六個づゝ在る。桶の間々に水のバケツや流しや足高流しなどが行列する。溝の左右三尺程づゝが炊事場洗面場で又一般人の通路で、尙は且つ焚き付けの木ッ端や鉋屑、或は殘つた野菜を入れるビール箱石油箱炭俵などの置場である。其所を八百屋魚屋豆腐屋など荷物をかつぎ乍ら通る。その混雜は大したものである。但し人の往來で混雜する事は、十

阪にも有る、上海にもある、東京とても別に珍らしいのでは無いが、場所が集團バラックだから變つて居る、人がどん底生活者だから一寸他所に見られない假裝行列である、百鬼夜行の圖である。

その着物の奇拔な事、小供の夜具を着て出る親爺もあれば、妻君の赤い腰紐で帶した若い亭主もある、洋服に足駄で顏洗つてるもあれば、和服に長靴で水汲みに行くもある。全然女の着物を着てる四十男もあれば、確か男物だなと見當の付く衣服の女房も居る。或る中婆さんは花嫁のやうな赤い美しいタオルを襟から肩に掛け、一本齒かと思ふ樣な高足駄の大男もあれば、煎餅のやうなペタンコの低下駄で泥道を行く小女房もゐる。上より下着が二三寸長く出た裾の人なども幾らでもある。毎朝十時頃フロツクコートに山高帽子でキツドにエナメルの皮の靴光らせて出る男が、おん襤褸の銘仙の褞袍で蓬頭亂髮のまゝ、青い顏に齒磨粉で口は蟹のやうに泡吹いてる所など百鬼の内の一怪たるに叛かないものである。毎日愛國婦人會へ編み物習ひに行く時は、眞白に塗つて金時計を腕に飾り、貴族の令孃とまでには行かずとも立派な紳士の娘さんと見えたのが、着物の尻を高くまくつて、下には色褪せた腰卷を見せ、寢亂髮に鉢卷してバケツと箒を兩手に持つて行く所はアマゾンの樣に勇ましくもあり又、ギリシアの何とかいふ女神が劍と計量器を兩手に持つた圖にも似る。而して其バケツが念入りにも女神の計の樣に高くさゝげられてるなど實際奇拔なものである。

但し爰に一つの秘密が有つて其のバケツの内に潛む。バケとは何を入るるの具かと問ふを止めよ、之等のバケツは、時に其の朝の食膳に上ぼるべき豆腐の味噌汁が這入る、又時には雨風激しかりし前夜の尿が這入つて居る事もある。而して皮肉にも豆腐汁のバケツは美しいが汚る。尿のバケツは汚いが汚らない。バケツを高く捧げて行くは豆腐汁や菜の汁が這入つてる時、往來の人と擦れ違ひさまに塵の這入らん事を恐れるのである。

豆腐汁がバケツに這入つたつて禪寺や孤兒院では時々見る所、溲瓶の新らしいので酒の燗するよりも穩當らしく必ずしも珍としないが、尿の方は多少の說明を必要とする。其れは何の家でも共同便所へ行かねばならぬが、家に依つてはそれが一寸遠い――ほんの一寸だが家を數へて七八軒の先方である――寒いのに下駄まで穿いて家を出てわざ〱出掛けるのはおつくうである。その上雨とか風とか雪とかの夜は、外套や傘や高足駄をも必要とする。寒いのに其んな面倒な事も出來ない、出來ても一寸見當らないとか、强風で傘が差せないとか、足駄も齒が

が欠けてるとか絆が切れてるとか、入口の戸を開けばドッと吹込む雨が床の中まで浸入るとか、其風が如何にもならぬほど寒いとか、種々様々の事情が因を為して、結局軽便を貴び不衛生を我慢(がまん)して、朝鮮じみた土間の隅のバケツに尿を済ます。小供の有る家や病人の有る家などは實際それより外無いのも有ることは勿論である。而して翌朝それを捨てに行くと言つたやうな譯であつて、他人が一寸見てもバケツの内の液體がビールやら紅茶やら分からない。無論之れは極内々の話である。

數十の竈が皆盛んに烟を上げる、數十の七輪がパタ〳〵と團扇でやられる度に白い灰を上げ、中のコークスはパチ〳〵音を立てゝ之れも鄰の竈に負けじと、焰を上げる烟を上げる。其の間を縫つて猫も杓子も顔を洗ふ、歯を磨く、小便に行く。娘も老爺も跛足(びつこ)の婆さんも、身體が半焼けの少年も、四五歳の幼年もひよろ〳〵と、行く、歸る、と混然雜然たる中を、豆フイである、納豆々々である。新聞配達である。何である蚊である。殊に足元のぬかる時などは非常な賑はひやら混雑やらである。到底他所には見られない。

バラックの鶴神樂の孝妓とか

十六　便所を中心として

塵溜の役は御用捨、話は便所へ落として行く事に許して貰はねばならぬ。

彼等の長屋を去ること東へ四尺何寸にして三尺巾二間の便所が在る。それを小一大三に仕切つてある。其れは彼等の長屋八軒の共同便所で有つて、そんな便所が其所に七つ有る。卽ち一棟の長屋に四つ一組の便所が附屬して居るのである。而して七棟に對して水道が一つある。所に依つては九棟に對して一つである。平均八棟三百二十人に水道が一つで、便所は四十人に四つである。

人間は上の口から入れるよりも下の口から出す方が液體としては多いものか知らねど、實際水道が少きに過ぎて便所は多過ぎてゐる。便所の多過ぎるのもいけないが、水道の少過ぎるは更にいけない。甚だ悪い。便所は半分以下でも宜く水道に一倍してもまだ足らぬ。

便所の一戸に大小各一個は附物といふ考が從來頭に有るから、こんなに澤山作つたであらう、けれども三十二個の大小便所は如何に混雜する時でも、先づ三分の一の客有るに過ぎない、日中は其の又半分位、夜も八時九時から先きは來る人は甚だ稀に成る。便所以外の放尿を恐れるにも程度がある。

水道は貧民窟などでは從來十戸十五戸に一つの共用栓を使つ

たのも少くなかつたからなのと、値段の有る水を澤山には使はせたく無いといふ考も手傳つたものらしいが、皆が食事は一緒だから、朝と夕方は中々混雜する。之れに反し便所の方は大體不定期であるから調節が取れて行くが、水道の共用栓なるものは從來とても相當混雜したので、貧民街の不潔は上水の不足が其の最大原因と見て決して差支無いのである。

斯く其陋を厭はず詳記するのは、大國の首都ともあらうものが、衞生思想が如何にも幼稚で、衞生設備が如何にも不完全で衞生當局の無定見と怠慢とを詰めて市民に警告したいのである。到る所の濠や溝には腐つた水を湛えて、春夏秋は惡臭を放つ夏は殊に堪え難き腐臭である。その臭水腐泥を街路の砂塵を防ぐ爲めとは言ひ乍ら、街上に散布して巡査も咎めない。路次口では糞も放尿され、大路でも夜や雨天には放尿され、青啖は街路の眞中で吐かれて居る。それが日に依つて乾き、風に依つて砂塵と共に舞ひ上がり、無數の黴菌を伴つて何人の庭へも飛び込み、幼少年の衣類に着き四肢に着き目や口へ這入る。こんなに非道い不衞生は世界の何所に在るのか。惡臭と病菌を盛んに散布させて居て防疫も殺菌も有つたもので無からう。

上水を惜むに至つては二等國三等國の人達にも恥かしい。愚昧も沙汰の限りである。丁度商店の客が少いからとて商品の仕入れを減少するの愚に兎かけて居る。上水を惜むのは一種の菌養成である。それで無くてさへ汚氣を呼吸し塵を被ぶる事、普通家屋の五六倍な集團バラックの棟割長屋住居に、十月末から四月始めまでは、水が兎角冷たくて使ひ切れないのに、霜焼けやらひゞやら、皸やらで水の使い難い事夥しいのに。

一寸した事だが寒い夜更けは植木の根や溝へ放尿したり或は小供などで隣家の前に垂れて來るもある。此邊の砂塵は衣服にも着く鍋へも入る。日光消毒のつもりで干してゐる夜具の衿へ、洗濯の腰卷の雫が落ちる。塵だらけの福神漬や、鼠糞も交じつて炊かれた飯、曰く何、曰く何と一々數へ切れない不潔千萬なバラックに、上水が不足で如何するものか。百千の病は皆此所から出る。

折惡く水道栓が混雜するからツイうかうかと洗ふべき物を洗はないで濟ませた時、三度洗ふべきものを一度で誤間化す、米研き桶一杯の水で茶碗の十個も洗ふ、など〻粗略をした結果は食器にも衣巾にも塵が殘る、殘れば病菌培養所と成る、菌は身に付く腹へ這入る。街路から吹込む病菌と一緒に成つて如何なるかは言ふまでも無い、病人は次から次と絶間無くなる。

今日市中に施療とか無代診療とかの立派な看板が有るけれども、他方にどし／＼病人を製造して居ては罹災失業の窮民を、

更に病に罹らせ苦めて、富者階級の餘澤者たる醫師を一層肥して居るのである。罹災窮民の救濟でなく醫師の餘澤補助である。

其の施療も所に依り人に依り時に依つて色々で有らうけれど、罹災者側で實地見聞する所は甚だ不親切不徹底なものが多いのである。齒が惡くて齒醫者に就けば單に齒を消毒して洗ふだけである。それが當局者の門前に居たのだから醫者も治療も設備も模範的で無いにしても決して不完全粗末な設開化しもので無い事を裏書きして居るものでは有るまいか。目が惡くて目醫者に就けば三通りほどの液體で目を洗つて呉た。それは東京の眞中の人が一番澤山に集まる公園での事だつた。一一其の病狀や原因や經過に就いて詳細に尋ねるでも無ければ、周到た療養上の注意を與ふるでも無く、引續き來いなど〻は滅多に言はない。從つて根治的手術などは痴人の夢同樣出來る相談では無かつた。一寸した病氣にも機械が無い、藥品が無い。恐らく醫者に其手腕も無かつたらう。普通の小醫院で容易に出來る事でも直ぐに其れだつた。羊頭をかかげて狗肉を賣つて居た。實際陸軍の看護卒が爲る位か、看護婦産婆で出來るほどの事しか精々仕て呉れないので有つた。

大正も十何年、しかも此際の東京市にも日本國にも其んな馬鹿氣た事に支出する經費は有るもので無い。剩へ醫者は欠勤し乍ら出勤簿に捺印して給金を盜み、高價な藥品は故無く自宅へ持ち去り絶えず看護婦と戯ふざけて居るといふ醜聞が盛んに傳へられた。丁度市役所の道路工事とか電車とか電燈とかガスとかいふものの樣に、外國への聞えが恥かしかつた。單に一市民としてもである。

一方集團バラックの便所は甚だしい粗製濫造で有つた。それはいくら集團バラックにしてもチト非道過ぎて居た。內からの戸締りが出來無かつたから時々他人に開けられた、人が開けないまでも風が來て開けたり、風が開ければ必ず蝶番が外れて戸が地に倒れた。這入つて居たものは唯だ〱閉口する、若い女などは眞赤に成る。そんな所へ通り合はしたものもきまりが惡い。凡そ汽車でも電車でも四輪又は六輪なのを、千圓が普通、車を七百圓で造るのだからとて三輪又は五輪に仕立てたやうな當局の仕方である。其の汽車や電車が直きに轉覆したがるのは當然の話である。

便所は粗末な割合に掃除は行屆いた、長屋各戸順番に毎日掃除するからであつた。が波取人が中々來ない爲め時々溢れるので、掃除には水を少く使ふやうにと帖札が出てる。水が少くては清潔は困難である。何故波取人を呼ばないか一應は誰も思ふ

が、來ぬものは如何にもならなかつた。稀に來れば汲取口を閉さないで行くため、糞壷の中は極度に明るく、糞は積んで尻へ三四寸の所まで來る、尿は既に後方へ汎濫して居る。言語同斷な次第だから、彼等の長屋では止むなく賄賂して汲取人に頼んで些か助かる樣に成つた。

その便所の前から彼の隣家及び彼の家の背後へかけて雨さへ降れば一面の溜水と變つた、翌日は晴れても急に水は引かなかつた、で便所の前には煉瓦塊の碎石四五個を飛ばして足場として在つた。これが枕言葉として萬葉集に屢々見受ける岩橋で東京には小石川植物園の池に在る外滅多に見ぬ珍物である。黄金の花に對して昔の風流も對照である。

雨の日や雨の後は長屋の附近一帶に甚だしく泥濘つた、其の所々に欠け煉瓦を拾つて來て敷き詰め、叉は米俵など敷かれたが、それでも其邊を通る事は難澁且つ不快なものだつた。其れ位な事が不快なら貧民窟に住む資格が無いといふ人も有つたが集團バラツクを直ちに貧民窟と定めて仕舞ふのも無理だし、汽車が走つても飛行機が翔つても、貧民窟だけは德川封建の時のままで置くといふわけもあるまい。歐洲では鷄小舍から豚小屋に到るまで近年は頗る清潔なものに成つた、鷄も豚も元は清潔な所に居たので、不潔と成つたのは人間のお蔭である、から其れを清潔にするのが人間の義務であつた。便所などには坐してサンドウヰツチを喰つて差支無い程清潔なのが今日は殆んど普通となつて居る。だから極東の一等國ではせめて貧民窟だけでも封建時代よりは少し善くせねばなるまい。

當局といふ人達の仕事には屢々にして此の樣に逆まの結果を現はしてるのが有るのである。獨り施療や公設浴場のみの事では無い。罹災者に對する救濟物資の配給などでも、そんな風で、二三十日もすれば充分なのを二百日以上も乞食の眞似をさせて、良民に懶怠の風を養成し、内實は過半に貰になくて善い者が貰つて居り、三割位は規定上貰ふ事を許されない者が貰つたりして居た。そして一番大切な職業の紹介とか、副業の奬勵とか、勤儉の美風養成とか、小資本の融通とか、公營住宅の建築とかいふやうな事は、殆んど忘れた樣に顧ないし力を入れない。

だから市や警察の方で何んなに騷いでも、病菌の方ではどし〳〵繁殖して行く。チブスばかりも一月中に七百九十何人で昨年の三倍の多數を出して市民を驚かし、二月へ這入つてからは廿五日までに六百五十何人といふ更に驚くべき激增を示してゐるでは無いか。之れに對して當局は大慌てで蚤退治を企てた、人夫三百人に醫者巡查市吏區吏と總かかりで、塵箱や便所に消

毒劑を撒いてる。根本の不潔と不行屆を忘れてそんな齊藥撥治が何に成らう。いくらクレシンや石油乳劑を散布しても、一匹の蠅は一年で七千二百八十兆八百六十萬五千六百八億餘に增加する。それを何時までもチブスのペストのコレラのと、恥かしくも無く追つかけてゐる。宵の明星が夜明けの明星を戀する樣なものだ、いくら焦れて逢はふと追つかけても顏の見られる筈は無い。曩には宮城前テント村の流行病が、宮城內の舍人數名に傳染したのも未だ忘れたではあるまいに。

蠅や蚊は協議の上で罷り出で

十七　大寒より恐い病氣

引越しが終れば夕方で內へ坐れば暗くて寒くて悲しかつた。老婆が七輪の下を煽ぎ、妻が餅を出して居たのは、活動寫眞か何かで別の世界の事が見えて來る位に思はれながら、彼は人生を想ひ亡き父母を憶ひ田舍の姉妹の厚意を思ふにつけ、自分の腑甲斐なさに悲凉を感じて戰慄て居た。

死は悲慘だが死よりも悲慘なものに、死を前にして如何にもならない斷末魔がある。昔頻死の重患者が如何しても死ぬのが厭だと言つた、親兄弟が傍から、どんなに言つても死なねばならぬのだから奇麗にあきらめて靜かに神の國へ行けと言つた然るに病人は如何にしても死なねばならぬと思ふと如何しても死ぬのが厭だと言つた慘話がある。彼は昨夏父の臨終に侍して、白骨のお文は何ほ記憶に新たで有つた。然るに死よりも斷末魔よりも更に悲慘なものを彼は目の前に見詰めて居た。

こんな事では結局自滅である、野たれ死である。と知りつゝ病膏肓に這入つて如何とも爲し難いもの卽ち其れである。或種の戀愛腐因緣の如く、二の足踏み〳〵深くなるのである。一度阿片を喫して止み難きが如く、一種のなぶり殺しを我れと我か身に加へるものである。然るに彼が今日のやうな生活を續けたのでは、營養不良ばかりでも一年ならずして斃るべきは明白であつた。その間は眞綿で頸といふやうな事で有つた。

昨日は小指一本を切取られ、今日は耳の半分を削り去られ、明日は足の親指の爪を剝ぎ奪られる次第。だが彼等どん底の人達は目に目立たない所でそんな風にやられて居た。粗食で不潔で、あらゆる方面から迫害と侮辱を受けて、何の慰藉も快樂も安心も無く、身體は日々に瘦せ衰へ、其の精神も亦漸次衰弱して、元氣が無くなる記憶力が減退する、歯も惡く目も惡く一つの身體に澤山の色色な病が出て、兎角うすれば善いと思つた事でも其れをやつて見る勇氣も出ない。自分が正義で有り乍ら不道理な亂暴者に對してさへ、言ひ爭ふ言葉が咽喉から出な

い程貧して鈍する、唯だ口惜しい齒嚙み位はせぬでも無い、無念の涙位は落ちぬでも無い。が淺間しい淵の深みへ愈々從々這入つて行き消極的に考慮し退嬰的に行動する。

彼等は最早猫の口に在る鼠であつた。けれども猫は中々鼠を喰つて呉ない、鼠の逃げ隱れ出來ない壁の側や、廣場で其の鋭い齒から無傷のまゝ放して三尺五尺と走らせては、其の鋭い爪で上手に微傷で捕へる。而して又放しては逃がし、追ひ廻はしては口にふくみ爪で撫で、鼠の恐れ戰慄のを喜んで抱き樂んで甞め、何時まで傷らしい物も付けず上手に手遊にして弄り、遂に張も氣も盡きて精神が朦朧となり、身體も極度に勞れて動けなくなる。が其れでも未だ鼠に息の根のあると認めると、今度は猫自らの手で押し動かし、爪を引きかけて投げ上げ、口に啣へて振り廻はし、其れを追ひ其れを爪割き、鼠が苦悶して少しでももがくのを更に強く爪割き深く嚙み、全く息の根の止まつた最後の最後に至つて猫は始めて、鼠を喰つて尻尾の半分も殘さない。缺陷だらけの現代社會が彼等無告の貧民に對する殆んと悉くが之れに似て居た。殊に極東の半開國日本に於て著しく其んな傾向があり、日本でも首都に於て如實に痛切に、それを實現して、それは如何とも爲し難き實在である事を彼は思つた。

彼は脳から肛門に至るまで目とか肉とか胃とか腸とか、數へて十指に餘る病症の持ち主で行つた。が其れを如何手當てするといふだけの時間も金錢も無く、見す〱病患を重らせつゝ富豪の馬や自動車よりも粗惡な小屋に、嚴寒と酷暑とに苦て不快な悲慘な生活を續けねばならなかつた。彼等は萬人の水や空氣をさへ濁らして與へられ、區切つて少く與へられ、鳥や獸にさへ充分な日光までも不充分だつた。終日日光の差さぬ小屋は九段五百戸の內二百戸以上を占めた。

當局者の無能と惡德の爲め、粗惡を極めて殆と水田の樣な雨後の街路を、彼等は僅か何錢の電車賃さへ無い爲め徒歩して甚だしく疲勞し、惡路を不快がり其原因に立腹して、いら〱し乍ら道行く時、遊蕩と亂倫に日を暮らす華族の自動車が風を切つて來て、彼等の鼻の頭に臭い屁を放り彼等の衣服から顏にまで汚泥を浴せて逃げ去る。彼等は之れに對して怒髮天を衝いても如何にもならぬし、家へ歸れは逆まに妻に怒られねばならなかつた。然し一面から考へて見れば汽車や電車に殺傷されないのがまだしも感謝すべきであつた。實際毎日何十人の市民が汽車や自動車に殺傷せられて居た。

斯うして奇怪千萬な事が獨り交通機關のみに有るのでなくて、各方面に澤山有つた。郵便局へ行けば郵便局は彼等を苦め、銀行へ行けは銀行は彼等を悶へしめた、華族や名士の名で

出來る會社は彼の血を吸つても罪せられなかつた。或るものは彼等を泣かしめ、又或るものは彼等を悲ましめた。殊に日常食用品の高價暴利には、毎度彼等は多大の困難と迷惑と苦痛を感じて居た。

日本人の住宅はマッチ箱の如く粗末なるに於て世に有名で有つた。其の粗惡に甘んぜねばならぬ原因は大部分食用品の高價に在つた。日常食用品の日本ほど高價な國は亦世界の何所にも無かつた。國民は毎日孜々汲々として尊く働き乍ら、唯だ食ふ事にばかり追はれて居た。

日本橋々下の水はロンドンに通ずれども、東京で一斤の食パンの價は丁度ロンドンの倍額である。世界の何れの大都市でも中央驛からは大體五十錢か一圓出せば行かうとする所まで馬車でも自動車でも行つて見る、けれども東京では其三倍四倍、時としては十倍も取られる事がある。パリーでもベルリンでもロンドンでも十錢か十五錢出せば、上等のコーヒーを飲んで設備至れり盡せりのカフエーに、輕便愉快な慰安を數時間享樂する事は出來るが、東京では粗惡なコーヒーに同額以上を貪(むさぼ)り乍ら五分間も過ぎれば、何故菓子も注文せぬ何故料理も喰はぬ、喰はぬなら早く出て行け邪魔であると言はぬかりの目で、ウエーターやウエートレスに見られる。牛肉だ牛乳だ鶏卵だ砂糖だ野菜だと言つても皆悉く日本が一番高價で、凡そ各國の二倍三倍である。それなのに收入の方は巡査と電車々掌で比べると、各國の二分の一、三分の一、四分の一に過ぎないのである。から市民が苦勞に瘦せるのも當然である。

一方に又無邪氣高尚な娯樂機關は全然缺亡して居るのに、僅かに在る所の劇の類は、各國で五十錢から三圓位で見られるものを、東京では五圓十圓十五圓とべらぼうな入場料を取る。可笑しいのは同じ人が舞臺に立つて居るのに、歐洲の各都市では五十錢から三圓位の入場料を、東京劇場では十五圓取つた。

市民が段々瘦せて青瓢簞に成つて、氣を腐らして神經衰弱を起して、變な考へを持つやうになるのも一面無理からぬ事で有つた。それに隨分非道い税金などゝ取られてゐるから僞政者を怖惡した。それは實際誰れの罪といふよりは山師のやうな[illegible]のやうな僞政者が有るからで、或る大政黨の如きは日本の多くの大會社を喰ひ物にして殼ばかりを國民の前に殘して居た。國民はそれに相當の憤(いきどほ)りを發し、相當の處分をするだけの氣力も無かつた。明治天皇かん去りまして僅に十數年の間に日本は著しく、墮落して居た。

大震火災に際しても幾多の寄附金品を分配するに當つて無數の奇怪事を見聞した。海外寄附の物品などは僅に一小部分しか

配給せらず、多くは行先も不明で或罐詰は市價の三四分の一で拂ひ下げられ、間も無く市價で市場に現はれたりした。更に帝都の復興に關し五億十億の大金が支出される時　恐らくは砂利やガスや水道や電車以上の醜態を演出するのではあるまいか。

その悪徳に依つて富む者は益々富み榮えて不義の快樂に耽けり、正直なる貧者は更に削られ奪はれ盗まれて愈よ貧乏に陥り、泣くにも泣けないやうな姿で塗炭の苦みにのたうち廻はるのではあるまいか。

貧窮生活の中で一番恐いものは、虎狼よりも借金取りよりも雨漏りと寒さである。その大雨や大寒よりも恐ろしいのは病氣である。粗食と不潔と苦悶が原因と成つて、濕氣を寒氣とが誘介と成つて。

雨の漏つたり吹込んだりには古新聞紙、雑巾、バケツ、破れ毛布等あらゆるものを使用して尚ほ室内で帽を被ぶり外套を着て居る。偶々來訪者が有れば、其の人も亦帽子外套のまはりに對座して、手袋のまゝの手を火鉢に翳し乍ら話したりする。考へて見れば随分悲惨な不快な生活である。貧民窟に喧嘩の多い原因も此の不快に出發する所が多いらしい。

寒氣に至つては小屋が始めから寒い様に出來てるので、古新聞紙で張るだけ張るより外に施し様が無い。火鉢に炭を如何程入れても精々手と顔を暖めるに過ぎない、頸筋から全身に亘つ冷脚はどうにも出來ない。足は足袋が有つても無感覺に冷え切つて居る。そんな時は足袋のまゝ着物も着たまゝ、或時は外套をも重ねたまゝ夜具の中へ這入るのである。而してそれが衛生的で有るや否やは考へて見る暇も無いのである。

唯だ病氣だけは泌々厭だから成るだけ罹らぬ様に、罹れば直ぐ往生出來る様にと其ればかり願つて居る。

簑虫のみのに能に似た住居なり

十八　救濟物資の御配給

九段へ來てから色々の物を貰つた。或時は棟の代表が火消だるまといふものを配達して呉た、或時は近所の女房達に教へられてバケツ持つて總代の所へコークスを取りに行つた、或時は救世軍から貰ひに來いとの通知で抽籤で慰問袋があり鉛筆石鹸タオルが在つた。傷んだ毛布も一枚綿ネルの腰卷、兵隊の古洋服一着も總代が持て來て呉た。何所からかバケツも一個貰ふ。内二點は一月中他は二月から三月三日までに受取つた。ナゼ二月三月の遅い時分に配給するのかナゼ一月にせぬ十二月にせぬ、何故十月九月にせぬのか、愚も甚だしい譯だが芝浦で寄贈品を澤山腐らせた様に、手が廻らなかつたのであらうか。

古洋服は畑を耕す時にと思つたが受取つて見ると、農耕にも一寸使へ相に見えなんだ。近所の女房達が抽籤で古浴衣を貰つて、洗ひ張つても到底も手が　せませんからマア雜巾ですと言つて居たのを思ひ合はす。當局者は屑屋へ出しても一錢二錢に買ふといふ腹らしいが、一錢や二錢の品の配給係に立派な役人は無用である。實際手の通せない衣服は衣服として無價値のものである。現在當局は罹災民を貧民と見たがる、甚だしきは乞食と見たがる。それで自分は乞食にも恥づべき行爲なのが多いのは以ての外である

海外から寄贈物品の如き申譯だけに軍用堅パンか綿メリヤスシャツ位を配給して、他に普過さると言つて商人に拂下げて、其錢で必要品を求めて配給した相だが、お蔭で御用商人に拂下げと買込みと二重に儲かつた。それでは各國寄贈者の同情を蹂躙したものでは有るまいか。其拂下げの値や買入れの値が罹災者の氣に喰はぬ値なのだから、何れ英米佛伊の寄贈者も七千萬國民も氣に喰はぬ値か、思はれる。

長屋の女房達は分配の任に當る事務所の小使とかバラック總代とかに對し、左も其の人から貰ふやうに叮寧に謝禮した、物を言はれる方も其の心で威張つた。而して與へる者も受ける者も其品が佛蘭西から來たか福岡縣の婦人會から來たか北海道の婦人會から來たか、乃至は麴町區內の燒けない人達の同情に依るかは知りもせず聞かうともせず、從つて謝禮のハガキ一枚出さうとも思はず、後日其れ〳〵の地方に天災の有つた時金品の寄贈を忘れない樣にと考へる者などは無論一人も無かつた。

係員には無教育とか貧乏とか女とか見れば隨分橫柄な口を利き亂暴な言葉で脅迫的に命令したり叱つたりしたのも有つた。それでも御無理御尤樣で泣き寢入られた、少し恰悧な者は幾何かの賄賂物を贈つて難を逸れた。

市中で四疊半か六疊を十圓廿圓出して借るよりはと菓子箱か反物を贈る所へ持つて一戶をバラックで借りた者も少くなかつた。從つて全然居住の資格無い者や罹災者で無いのまでが混つて居た。二人か三人の一家族で二戶借りてるのも有つた。

區役場の配給係に到つては寧ろ滑稽で有つた。白粉氣の多い女には米の二升は三四升も與へ古浴衣も柄の善い所を選ばせ、普通人が行くと叱られ、火の傍へ寄せて居所を尋ねて揶揄つたりした。獨り九段のみでないがバラックには十二階下を始め各所の巢を逐はれて、又は街に男を尋ねて來て居た淫賣婦が少くなかつた。それに料理屋宿屋待合等の女中乃至娘の樣な半淫賣的なのが來ると、直ぐ何所のバラック何號に居ると聞いた。無論米屋の丼が多かつた。

其邊の呼吸を呑み込んだ九段の一老婆は仲間の四五人から錢を集めて、三人の配給係に酒食を饗應し女まで世話した。後で警察へ招喚されて小ツ非道く叱られて泣いて謝罪して老婆も配給係も漸く許された事もある。配給の人達は毎晩のやうに酒を飲んで議論喧嘩して居たといふ。

長屋の女房達の話に依ると入口で帳簿に印押す人だけが善い人で他の六七人は皆我が物を與る様に威張つたり、屁理窟を並べて無學な女をいぢめたりしたといふ。『どうせ私共は乞食のやうな者ですが全くの乞食でもありませんからせめてお宅の女中さん位な言葉に願ひませう、餘り叱られると之れでも腹が立ちますから』と或る女房が言つたので係員一同沈默したといふ話もある。無論係員中に女中など使つてる者もあるまいし、反對に其女房の方は震災前まで女中を使つたであらう。

バラックで係員に面白く無い噂は上野も日比谷も芝もで、上の好な所下之より甚だしきは無しの感があつた。或日九段事務所の小使が大阪へ行くから五錢でも十錢でもと餞別を求めて來た。近所の人に聞くと小使に特別の世話に成つた人が有る筈ですから其んな人達だけで善いのでせうに、といふ事で十錢宛出したが、彼等の向ひ長屋では卅錢宛、南側では五十錢宛出したといふ平均廿五錢と見ても百何十圓に成る。三圓五圓で充分だらうにと彼が言つた折柄居合せた客が、他に一緒に成つて飲ひする者も有らうぢやないかと笑つた。

最近に事務所主任井上君が轉任した時は何事も無かつた、が井上は米國大使に贈つた花束其他の費用に自費を出して居た。今度主任が去る時は又五六百圓も集めるであらうか。救助を受ける罹災民から錢を取る事は少くとも問題であらねばならぬ。

そんな風で今日まで無給で世話して來てる棟代表とか總代とかには如何な謝禮を爲るのか。二月末日には事務所主任から自治會は本日限り解散すると通知して來た、從つて代表總代の資格も消滅した。之れにこそは金品は贈るべきであらう。彼等が仄聞する所では事務所は新たに代表者を指名推選するといふ。即ち自治會の民選代議士會を一蹴して、勅選の特權階級を造るらしい。自治會を突然解散の權利は事務所に無い。指名の代表も亦住民の承知し難き事は勿論である。

先住者に一應の交渉も無く一室に二家族の同居を命ずる事など思ひ合せて見れば帝都の復興も遲れる筈である。市役所の頭にはまだ封建時代の春風が吹いて居る。然るにバラックの罹災民は失業やら疾病やらの中に大寒餘寒で寒さに泣かされて居さる。

全世界からのを件內ゴ配給

十九　一室二夫婦の迷惑

集團バラックには種々雜多な人が居た、可也理窟を並べる人も有つた、そんな人達や紹介名刺など持つて來る人には事務所は比較的寛大だつたが、一般に對する態度は決して親切で無かつた。寒い時分でも一時間二時間三時間位平氣で人を待たせた。新聞紙にも三四度不平が出て居たが相變らずであつた。

二人三人位な少家族の小屋へは二三人位な少家族は同居を命じたが、前以て一應の照會さへ無くて命令强行された。けれども同居の許可證を貰つた方で、其の家を見るに及んで無理とわかり、有耶無耶の内に引込み去るのも少くなかつた。或者は實際這入り切れないのを知ると共に數日又は十數日間小供だけ位を預けて、程なく小供を引取りに來るのもあつた。

彼の室には先住者が去つて二ケ月以上も過ぎてるのにまだ其の夜具以下が殘つて居た、彼の荷物は比較的多かつたから箪笥の上まで蒲團などを積み上げても、夜寢る場所は四尺數寸に六尺數寸しか殘らなかつた。で一人が寢れば一人は坐る席も無いのに、突然それへ、夫婦に十三歳の兒の一家族が同居許可證を貰つて尋ねて來た。彼は驚いて事務所へ行く、棟代表やバラック總代へも行つた。事務所主任は逢ふを避けて隣室で彼の言ふ所を聞いて居た、代表や總代は『石川さんは七人、後藤さんは九人居るから無料で置いて貰つてれば餘り强い事も言へまい』規則としては四疊半は六人、六疊は八人で賣店を營む筈だといふ。けれども彼は其れを無理として詳說した。

七人九人といふのは不思議だつたから調べて見ると、成る程彼の隣家の石川は七人だが老主人は役所の小使として隔日に宿直した、娘二人も役所へ勤めた、あと五歳七歳十歳位の小供が三人、内一人は兩親が本所邊に居るのを預かつてるのだが、朝娘等と前後して學校へ行けば、殘るは老婆一人だつた。夜は同じ棟内に婿夫婦が三歳に當歳の子と居るのへ二人だけ泊りにやつた。そんならば大した事も無い筈である。九人の後藤といふのは三人しか居ないで他に時々藝妓して居る娘が泊つて行く位に過ぎなんだ、最初は九人居たから九人と貼り出して有つて、九人は昨年九月の事で有つた。同時に神田區に米屋と自轉車を二軒も新築の店を數ケ月前から持ち乍ら、規則を無視して依然居住して居る一家族を發見した。

彼は新來者に詳細な實情を告げて米屋を立退かせて其所へ這入るやう希望し且つ多少の盡力をも約束した。新來者は事務所で重ねて希望したが要領を得ない。で彼は新來者に之れ〳〵の手續で紹介狀を貰つて之れ〳〵せよと教へた、新來者は其の通

りした。すると直ぐ六疊間で待合の女一人居て其れも五六日中に去るといふ小屋へ這入る事が出來た。

で屆出や標札には五人六人七人と有つて事實二三人しか居ないのが殆んど過半數位あると思はれた。罹災者で無い友達に自分の名儀を貸してバラックへ入れたので、後に自分もバラックへ這入りたく成つたがと彼の妻へ内々で同居を願つて來た婦人も有つた。事務所に屆けず本人同志の内約で人の縫つてる小屋も有つて、事務所で發見をして立退かせたのも何軒か有つた。若し事務所から調べに來れば今日は二人ですが三人は一寸田舍へ行つたなどゝお茶を濁すのが少くなかつた。

昨年九月十月には實際四人五人六人居たが燒けた家の半數は建つた二月末までに追々に下町や郡部に散つた。散つて行かねば喰ふ事が出來なかつた。住居の悲慘はまだ第二第三だつた。

彼の筋向ひに相澤といふ四十歲位の後家と十四歲位の娘が居た、それへ突然二十二歲と二十歲の若夫婦が同居して來た。此若夫婦が震前一戸を持つて居たらうか震前から夫婦であらうかと誰もが危ぶんだ。若夫婦は每晚歸るのが十二時一時で朝は午後二時に起きるのが普通だつた。若い者が二人並んで寢た姿は娘に見せて善い圖でも無く、客が來れば客も苦笑した。相生の松の若夫婦は每晚仲善く騷ぐので、後家自身も不快だし年頃に近い娘の爲めにも迷惑だつた が其れを如何抗議するわけにも行かなかつた。若夫婦は益々大膽に、活動から歸つて來ては小が栗鼠の如く競く戯れて、翌朝は鼾聲高く熟睡した。十四の娘はやいの〳〵も擦れつ縺れつも皆知つて居た。唯だ若夫婦が寢具や食器をだらしなく取り散らすのに時々注意を與へて後家さんは僅に胸中の不平を慰めた。

同じ六人七人でも一家族で小供が三四人たら、安火を中心に一つ夜具を引張合つての雜魚寢といふ事も忍ばれやう。が夫婦二組となると、衣類寢具世帶道具が伴ふて室を狹ばめるのに、其の職業や趣の異るやうに其の性質も習慣も違はねばならぬから、佛教熱心家が父母の命日忌日などに一方で鰯や鰤などをぢり〳〵燒かれたりしては、早寢朝寢の相違以上に迷惑する。兎と猿を同じ檻へ入れるやうたもので何時か何所ぞで衝突するより外はない。

凡そ四疊半には五尺の身體は一人より起臥出來ない事は、神田の下宿屋に書生さんを見るまでも無い。それも炊事拔きなのに、炊事の伴ふ三人四人五人が置かれる事は既に立派な人間虐待である。況んや二家族をや。昨年の九月十月ならば知らぬ事、當局者も何時までも玄米の握り飯を喰つてるでもあるまいに、半歲の後尙ほ震災直後の六人八人は這入るものでない。試

に英人佛人米人の何れでもを、一家族三四人此の四疊半に住ませて見るが善い。何日居て何といふかを。思ひ半に過ぐるであらう。

一方に空けてある小屋は九段でも二十餘戸を算する。前通りだから貸さぬといふが、東京は曩に於て燒けた四分の一しか回復して居ない時、救濟の爲めに救濟すべき金で造つた家を建朽れに空けて置く理由は無い。本所とか深川とかには雨の日毎に水が這入るとかで住み手の無い集團バラックも有るやうに聞くが、何故そんなものを改善して困る人を收容しないのか。それでも家が足らねば差支の無い土地で新築するが善い、救護資金はまだ殘つて居る筈。麴町區內有志が罹災者に寄附した六萬何千圓の內、牛ケ淵バラック中止の爲め殘つてる九千何百圓もある。

一室二夫婦事に依り知り知らず。

二十　餘寒すぐ蠅が蚤虱

彼は田舍の姉達から鄕國名物の寒小鯛や干鰯を澤山に貰つたので、毎日のやうに魚を燒いて居たからでも有らう、大寒の最中から大形の蠅が羽を鳴らして音づれ來る事が屢々だつた。黠い て捕へんとすれど彼らの手に捕へらるべく蠅は餘りに敏捷且つ强健だつた。一つには日當りも善かつたからには相違ないが、蠅といふ虫が何所にも居なければ來る筈はない、近頃に幾つか居たればこそ來たので、既に居た事が先づ問題である、四邊の不潔が問題である。

今日現在事實不潔である、けれども其れよりは昨年九月以來甚だしく不潔にして來たバラック一帶の地域には、便所は勿論、石の下にも木の根にも落葉の蔭にも砂の中にも、蚤、蠅、蚊以下不潔に集まる多數昆虫の卵と及び無數の黴菌が潜在するに相違ない。

既に大寒から蠅が横行する、立春雨水の候で地が濕ほひ木々の枝がしなやかに成る、續いて三月に這入れば啓蟄の候で土の中から穴の虫がそろ／＼出て來る、となると其の先きが思ひやられる、豈夫れ春分淸明穀雨を待たんやである。三月二日には四谷の某商店が新聞紙中に挿入して蚊帳色揚げ破損修繕の廣告札を散布し、八日には日本の某大商店も蚊帳の廣告を新聞紙上に出した。之等は今年は特に早いものと見て集團バラックの樣な所だけを眞先きに出したのかも知れぬが、其手廻はしの善い事は、化文的施設で毎度社會の進歩から尻をつゝかれてる市の當局達が爪の垢でも煎じて飲むに宜しい。

彼は二月の末に蚊を見た、其れは弱々しく飛んで居た。三月

へ這入つてから蚊に似て蚊にあらざる小虫が二つばかり飛び行くのに逢つた。そして日本の飛行機よりは確かだなと思ひ乍ら彼は見送つて居た。

本所深川の或る所では從來櫻が散ると間も無く蚊帳を吊らねばならなかつた、今年は果してどんなものか、恐らくは早まつても遅れるやうな事はあるまいと一般に豫想されてゐる。更に日比谷は如何か九段は如何か、今後尚ほ若干の月日を餘すから其の間當局者と居住民の努力如何に依つて大差を生ずるであらうけれども、兎に角昨年よりも早くて多い事だけは免れないであらう。芝公園芝離宮淺草公園などは九段や日比谷より更に早く更に多いであらう。其の何れにしても集團バラックでは比較的狹小の土地に、比較的多數の然も比較的不潔に無關心な下層民が、幾多の無理に無理を重ねて犇めくやうに住んで居るのだから、必ず蚊や蠅が多く、その蚊や蠅に依つて傳染する幾多の悪い病症が盛んに出て來るであらう事は稍や明白である。要は特殊事情なる本年の蚊蠅增加率マイナス市當局の豫防努力プラス市民の衛生注意、で差引決算の結果となる。

別に當局者も心配せねばば新聞の漫畫家も見のがしてる者に蚤がある。バラック居住者としては直接身に降りかゝる問題にして廉多いだけ心配に堪えない。何れ椽の下からも上がるであらう、天井からも下りて來るであらう、湖瀬の目からも産れるであらう、廉が綿の如く積んでゐる簞笥や本箱の間とか背後とかからは尚ほ澤山に隊を組んで出るであらう。其の程度は一寸分からぬけれども昨夏の彼の住宅よりは三十倍又は五十倍の多數を覺悟せねばならない。弱り目に祟り目である、貧に痩せて神經衰弱な人々へ、蠅と蚊と蚤の三者が揃つて敏腕を振るふ事縱横、可也辛辣な悪戯を始めて、夜は中々眠らせない以外に尚ほどんな事を仕出かすか。どん底の病人は之れからなぶり殺しに逢はふ、バラックは實にその組である。

虱に至つては蚤よりも更に個人的で、其の人の充分なる注意に待つより外は無いが、新年早々虱征伐をやつてゐる老婆は集團バラックに於て決して珍らしくない、今や春の虱に羽が有るとさへ言はれる、其の春と成つて「着る物の縫ひ目〳〵に住をひり」虱の神代始まりにけり」はバラックには何十人であるのである。東京市學務課が本年二月の調査に依れば、日本橋區の某小學校に於て五百五十人の生徒の内五十三人まで頭に虱を持つて居た、無論從來はそんな者は一人も居なかつたのである。

更に大問題の南京虫が居る。之れも時期を待つて多少は必ず出で來るに相違ない、まだ噂に上ぼらないのは偶に有つてもその人が内密に殺り去るのではあるまいか。長屋で天井傳ひに蔓

延された日には大變である。バラツク解散と共に全市に廣がるで有らう事を恐れずには居られない。

その蝿蚊蚤虱南京虫よりも恐ろしいものは此夏のトタン屋根の暑さである。樺太のギリヤーク族が昆布といとう鱒の皮と木の葉木の皮で葺いた屋根に異ならぬ天井が有つたとて、如何ほどの遮ひもすまい、庇の無い南面は矢張りトタン板だから隨分きびしく燒ける事であらう。その苦熱に乘じて六足の先生達がどんなに活動する事か、世界名物の惡路は尚一層の惡路として砂塵と黴菌を吹き賂るであらう。來る夏にどんな病氣が流行するだらうと考へるだけでも寒けがする。

當局を蚊や黴菌は責めて居り

二十一　妻の內職と華族樣

九段へ起臥する前から知つて居た事だが、何侯爵未亡人は昨年十一月から罹災婦人達に、その內職たるべき毛絲の編物を教授し、その編み上げるに從つて其の工賃をそれ〴〵に與へて居た。未亡人親ら其の任に當つて願つて來る者には誰にでも教へた。多數婦人の中には小娘も女學生らしいのも妻君も中老婆も有つたが、一と月とたゝない內にもう一日一圓以上二圓三圓の働きをする女さへあるに至つた。場所が直ぐ隣りなだけ九段バラツクから習ひに行つてるのが少からず有つた。長屋の人達は善い事を教はつたり儲けさして貰つたりで大に喜んで居た。

彼が彼の妻に何侯爵邸へ通學するやう勸めたのは、まだ下二番町の松平邸に居た頃であつた、が妻は行く氣が無かつた。九段へ移り住んでから重ねてそれを勸めたが、矢張り行かうともしなかつた。彼がヒポコンデリーであるやうに妻も亦ヒステリーに罹つて居たらう。兎に角心も身も落ち付かないのであつたから、面倒なものを教はる氣や、厄介な仕事に働く考が出なかつたのであるらしい。丁度彼が震災以來何の仕事も爲ずに居たのと同じやうなわけであつた。

然るに隣家の娘二人と相知るに及んで二人が何侯邸へ通ふ事も知り、更に何邸では四五日後にミシン部が新たに設置さるゝ事を知り、直ちに願書を出して二月十四日から通學するやうに成つた、二人の娘も最早毛絲物流行の時季も過ぎたからとミシン部へ轉じた、で三人毎日一緒に行つて見ると、バラツクから行つてる人が幾人も分かり、色々な人達とも口を利く結果、樣々な浮世話を聞き、就中九段バラツクに於て隱れたる半面の出來事なども聞き知るやうに成つた。

何侯未亡人は音樂や美術にも趣味を有する才人且つ美人であつた。こうして幾多の經費も時間も惜まず市民に良好の副業を

習得させるその心懸けは眞に敬服に價する。巨資を要し乍ら何程の事も出來ない或る婦人會などは顏色無いわけである。未亡人は嚢に九段バラックの五百戸に對し特に困窮せるものにとの條件付で三百枚の毛布を寄贈した筈だが、之れが九段の罹災民として貰つた毛布衣服夜具の最初のものであつた。それは昨年十月だが遲い遲い市當局の配給とは其の間に千里の差がある。斯くあつてこそ皇室の藩屏である。バラックの人達は皆未亡人の賢明を侯爵家のために祝福して居る。

日米何とか會なるものが、肉飯幾皿でも十錢、それは米國々民の同情寄附金に依るものだといふ看板を日比谷邊に立てたので、這入る人も可也多かつた、彼は三度まで這入つて見たが、毎度南京米の三角四角五角の塊りだらけな飯の上へ、黄色のどろ〳〵汁をかけて有るだけで、肉などは無く、申譯のやうに玉葱が時々あつた、とても不潔でまづくて喰へなかつた。從つて漸次客を減少し昨年末には其のテント店も消滅したやうだつたが、彼が最後に這入つた時などは、極度の不潔とだらしなさを見せ付られて不快でならなかつた。其所の主任らしい人の談に依れば、此會の會長は水野子爵で補助が帝國ホテルでの舞踏會の收入全部も會へ寄附されたし、一方米國大使の希望に依り錢が無くなれば新たに日本で募集して、依然來年も繼續すると言ふことだつた。

それから華族會館に在つて華族同情會が、綿ネルの襦袢を罹災者に分配した事と松平伯爵其他麴町區二三華族等が門内へ逃げ込んだ罹災者を充分の同情を以て迎へた事の外、今回の大震火災に當つて日本の華族達が仕た事は、彼としては見聞して居なかつた。

歐洲大戰に當つて英國の貴族が國民の前に示した立派な働きぶりと比べて、其所に百千里の差を認めねばならなかつた、英國の貴族は尊敬するだけの價値が有るから尊敬を受ける。けれども日本では其價値絶無にして尊敬を求めて居る、甚だしいのは強いて求めて止まない、それで欲望に添はない時は金力や權力を利用して社會の秩序を紊亂することなど朝飯前なのが少くなかつた。中には貴族の名に依つて詐僞會社の發起人に連なり良民に迷惑の及ぶ事を知りつゝ平氣なのも有つた。

彼の妻は三週間ほどしてシャツやヅボン下もどうにか縫へる樣に成つた、そして僅か乍らも其工賃を貰つて來た。二人の娘は一週間ほどで止めた。間も無く他へ勤めた。

廿二　沁々と貧乏を味ふ

震災を後の後まで逃げて居り

彼は甚だしく貧乏だつた、震災前から失業者で有つたし、震災後未だ會て仕事らしいものに鑑て居ないし、收入も無かつた。だから顧て過去半歳は如何して喰つて來たかは不思議にさへ思はれた。

それが二月へ這入つてからは湯錢や豆腐錢にさへ不足を訴へる事が屢々にして有つた。無論電車などは殆んど乘らないで多くは徒歩だつたから、吹き卷く砂塵の狂風や自働車の跳ね飛ばす泥水には貰ひやうの無い程難やまされて居た、其の度毎に砂利喰ふやうな當局者を憎み、傲慢無禮な富豪や貴族を憎んだりした。我輩に若し金が有つたら全市道路の鋪裝を寄附する、品川千住間だけ鋪裝しても市民はどの位助かるか知れぬ、と二十年來言ひ續けて來た彼だつた。

何度か工面しては質屋から錢を取つて來るのだつたが、其間何度か一文無しに成つて居た。二月廿日には又々一錢も無くなつた上に尚ほ且つ支拂ひ殘された電燈代が有つた。三月八日まで引續き無一文で有つた、其頃葱を五錢買ふと十本程有つて二三日間の汁の身に成るのだが其れが買へず、平常は彼等の喰ふ物とも思はぬ程な十錢に十二個の精進揚などは喰ひたいと願つたが無論買へなかつた。湯にも這入れなかつた。髭も剃れなかつた。從來度々八百屋や豆腐屋から買つたのに、最近一向買はないのだから、勘の善い近所の者は大概想像が出來たであらう。それを恥かしいと思はぬでも無いが、それよりも爪に黒い垢が溜まり身體も垢だらけ、衣服も垢だらけ、鬚髯は延び放題に髮は蓬々亂れてるのが恥かしかつた。痔の悪い彼として便通後は大抵入浴するの習慣だつたが、それの出來ないのが多大の苦痛だつた。

更に一層の苦痛は砂糖の欠乏であつた、彼は毎日規則のやうに三四杯のココアか紅茶の濃厚なのを飲まねば居られなかつた。見舞に貰つたココアは有つたが、砂糖は屢々無かつた。粉ミルクの糖分稀薄なので間に合はせて見たが寂しい味であつた、悲しい心に成つた。大好物の菓子などは其のずつと前から品切れだつた。

彼が甘味を斷たれる事は酒好きが酒を斷たれると同じ苦痛だつた、彼は物の偶から濕氣に流れたドロップを少し發見して來て、それを摘まんでは苦い茶を啜つた。そして苦り切つて居たがそれも四五日で盡きて、後は唯だ苦い茶だけを啜つては溜らなく寂しかつた。二三日して米國の軍用ビスケット二三斤を發見した。無論糖分は無い、せめて支那のだと鹽味が付いてるのだがなと殘念がりつゝ一つ喰つて見たが矢張りいけない。ですぐ甲を脱いだ。止んぬる哉と長嘆息した。

それらの事は克己心さへ有れば如何にか切り拔けられる事で有つた。その邊まで窮乏すれば克己心の有り無しに關はらず、切り拔けられた形で有つた、が殘念だつた。

困るのは電車に乘れない事だつた。停留所の五つや六つは無論歩いたが其れでも雨の日などは骨が折れた。砂塵の日、寒風の日に二十丁も三十丁も歩く事は苦痛且つ身體が疲勞して馬鹿々々しかつた。

衣服が徒歩の爲めに傷むのは又堪え難き苦痛の一つだつた、それは僅に火災から取り出した彼の一張羅で有つた。無論足袋も何ケ所か破れ、下駄も何ケ所か欠けた。

官署や會社などへ行く時は洋服を便利とする爲め彼に唯一の洋服フロックコートを着たが舊臘新調の品が二月には裾が切れて、質草と成るにさへ困難なものと成つた。

困るのは來客の時に出すべき茶の無い事だつた。客に依つては善い加減に誤魔化したが客に依つては茶さへ出さぬといふ言ひわけにまごついた。冷遇すると思はれはせぬかと心苦しかつた。

更に困るのは友達と同行する時だつた。君だけ電車に乘り給へ僕は歩きますとも言へなかつた。とは言へ一緒に乘つてから。僕は電車賃は無いも變だし君が拂つて呉も可笑なものだつた、

されはとて乘る前に今日は電車賃が無いのでも具合が善さ相ない。それが相手に依つて甚だむつかしい事だつた。郊外の五反田といふへ友達と一緒に行つた時なども恐く閉口した、途中で別れたりすると一里も二里も歩くのかなと考へさせられたりした。

質草も最早屑ばかりだし、そう〳〵頻繁に顏を出す事が質屋へも遠慮された、と言つて多年持つた品、殊には大震火災にも出した品を賣る氣にも成れなかつた。すさじきものは貧乏だつた。どうにもこうにも働かねばならぬといふ結論直ちに必要を痛切に察知し得たが、勤め口は中々ない、多分善いと思つた口までだめだつたし、健康はすぐれぬし、兎角引込思案に成つた。

食事に際しては一層困つた、屢々にして鍋の中へ入れる物が無かつた。

『ノー、ナッシング』妻の唇を洩るゝ音響の寂しさ。恥かしい話は小聲で言つてもバラックでは隣家へ聞へるので魚菜の事など常から『あれを斷らしませう』などゝ話すのだが、とうもすべきあれさへ最早無かつたのである。直ぐ一二丁先の富士見町には金錢を湯水の如く使ふ人が毎晩何百人。一時間三圓五圓の自動車が約一萬臺は夜晝と無く全市を飛走つて居るのに、鍋へ

のノート、ナッシングは餘りに情ないと涙もこぼれた、梅干唯だ一つで三杯半の飯も喰つたりした。

或時澤庵漬を切つて煮たら、煮ても〳〵柔かく成らぬので其半煮えの如きものを喰つた、で澤庵はふろふきに成らぬと友達に話した。わかり切つた話だ高野豆腐が絹漉しに成る筈も無いと友達は笑つた。けれども驚くべし喰ひ餘つては煮返してると四五日目には柔らかな煮大根と成つた。

或日彼は牛込の飯屋で友達に天プラを馳走されたが烏賊のは歯が悪くて喰へなかつた事を話すと、妻は懐紙に包んで持つて來れば善かつたといふ。具合が悪いよと言へは妻は重ねて猫にやると言つて持つて來て呉れは善かつたといつた。妻は猫を羨んで猫たる事をも得なかつた。又或日妻が行つた先きで餅菓子が出て美味しかつたといふと彼は一つ持つて來れば善いにと言つた、皆様の見る前でそんな事出來ませんと言へは、彼は重ねて一寸喰べかけて懐紙へ入れゝば善かつたと言つた。彼は他の喰ひ殘りを得んと願つた、然しそれも許されなかつた。

三月八日に妻がミシンの工賃一圓何十錢を貰つて來た、で葱や豆腐や久しぶりの豚肉も喰ひ浴場へも行つた。夜に成つて氣が付くと最早電燈屋に支拂ふべき半額も殘つて居なかつた。彼等の喜び元氣づいたのは僅かに半日に過ぎなかつた。

大正十三年は何時までも寒く彼岸が近づいても零下三度何分を毎朝の様に示して居たが、それでも寒さには最早恐ろしくなかつた。と同時に貧苦はひし〳〵と身に迫つて來た。彼は風邪に罹ると共に歯も亦痛んで困つてるのに、妻も亦毎日のやうに腹痛で而して鼻から血を交へて悪臭の涙が出た。

集團バラックには失業者が多かつた、彼の長屋と向長屋の十六戸には七戸まで失業者だつた。失業者達の生活は彼程でなくても彼と略ぼ同じ傾に在るのが大部分だつた。又勞働者にアブレといふ休業もあつて、働き乍ら甚だしい貧乏の人も有つたし、高利貸に苦められてる人も有つた。（終。一三、三、八）

奥様は其れを英語で平氣なり。

ルーアよりラインへ

林久男

ライン河畔とルーア河畔には
きら〳〵ぴか〳〵する軍隊がゐる。
ライン河畔とルーア河畔には
葬ひの哀泣のやう、鐘がなる。

引け、兄弟、鐘の綱を引け、
兄弟、葬ひの鐘の爲だ。
俺の大事なもの、お前の手離せるものは、
けふは葬場へ行くのだぞ。

炭と鐵との國に今まさに煉獄の苦しみを受けつゝある勞働詩人の一人は斯う歌つて居る。過去に自ら蒔いた種とは云へ、今や四海の有らゆる宗教家にも詩人にも見離されたる此地の民は、僅に自ら最後の聲をあげて葬ひの鐘の歌を叫んで居るのである。

十數日の間、ルーア地方を中心に、餓鬼道を巡るやうな旅をつゞけて、そこに住む人達の活き方を具に觀てまはつたのち、若き詩人のBと共に更に大ラインの溯航の旅に就いたのは、もうリンデンの葉が黄に散りはじめた十月の下旬であつた。

アルプスの谿谷の雪に融け、明眉なる瑞西の湖水を湛へ、獨佛の間を貫いて遠く北海に注ぐ大ラインの沿岸は、古へ羅馬文化とゴティーク文化との相落合つた處、遠くシャールマン時代以來日耳曼文化の花實を養つた處、幾多浪曼的英雄的傳説を宿す處、近くは世界に誇る大工業の發展によつて獨逸全國の生命的大動脈とまで謂はれたところで、游士の旅情を引かないではおかないが、自分が此度この長途の旅を企てたのは、その壯麗明眉なる山容水様の美を賞するよりも、この一帶の長江を挾んで國と國人種と人種との戰ひが如何に今も尚續けられて居るか、そこに働き活きつゝある者どもの心は如何に虐げられ歪められつゝあるか、人類の生活活動に戰禍によつて如何なる斷面

を見せて居るか、それ等を窺つて見たい志からであつた。

出發の前夜はBの兩親兄妹等一眷族が寄つて、別れの宴を張つて名殘りを惜んでくれた。親しい仲の此町の音樂長も娘をつれて特に參加してくれた。彼が强いコニヤツクで唇を潤しながら、勞資問題やライン共和國などに就いて滔々と予に論じたてる時には、その瞳は燃えるやうに輝いてゐた。老父は始終にこにこして居る。母親も浮かれてか憂さを紛らす爲か、昔の小唄を高く歌ひだした。樂長が手風琴を彈き、その娘がヴイオリンを達者に彈き出すと、十餘人の兄弟姉妹は土地の歌を合唱して賑かにこれに和した。自分はその純な鄙びたメロデイーに耳をすまして、その若き者どもの輝かしい瞳や、ほてつた顔を見入つて居ると、窓の外の暗い世界と想ひ合せて、何とも云へない深い、いじらしい感動に襲はれた。Bの長兄のPと三兄のTとは頻りに亞米利加へ渡つて新しい運命を開きたいといふことを自分に繰り返してゐた。昨夜酒の上で許嫁と喧嘩をしたとかいふ次妹は、今夜は珍らしくおとなしく隅の方に控へて、孤兒の娘と一緒に小犬をじやらしたりして居る。この地方では男も女も、酒と音樂を好むかはりに、性來熱し易いと聞いて居るが、あのマドンナのやうな顔をしてその大事な許嫁の人といさかひをするといふ事が、如何にも此土地のをなごらしく思はれた。

何と云つても一座では長妹のFが花形であつた。ミロのヱヌスを思はせるやうな希臘式の横顔(プロフイール)を蔽ふブロンドの髮の毛が美しく蓬(ほほ)けて、燈火を浴びて燃えたつやうに輝いて居る。頰をほてらして賑やかにはしやいで居たが、急にリケーレの杯を朱唇から離したかと思ふと、睫の長い兩眼から珠のやうな淚をはら〳〵と落して、さめ〴〵と泣き出した。きつと瞳をすゑて、自分のそばに居る兄のBに向きなほつて、

『兄さん。あなた方は明日はもうお立ちになるんですねえ。兄さんはこのお方と長い旅を一緒にして、やがては遠い日本へまで一緒にいらつしやるんでせう。どんなにかお嬉しいんでせう。――で、わたし達はどうするんです。こんなコールタや油地獄のやうな中にいつ迄斯うして居るんです。わたしどもは何を惡いことをして、こんな餓鬼道の苦しみを受けなけりやならないんです。若いものはまだしも　あの年をした親達までが明日明日(あすあす)のパンに屈托つくなんて……』

と、兄の膝に顔を埋めて、肩をふるはせて泣きじやつくりをして居た。それから頻りに、どうしても此土地を拔け出したいと繰りかへして居た。ラインの旅は一緒でなくとも、どこか別な都、別な國へ連れていつてほしいとくどき立てるんであつた。

自分は其シーンをじつと見つめながら、戰爭の餘禍がこれ等小き美しい魂をさへこれ程までにいたましく挫いて居ることかと、それがしみ／＼と痛ましく感じられた。戰敗國にとつて最もいたましいのは、次の時代人にまで及ぼす怖ろしい痛痍である。獨逸の今の老壯者が受けつゝある痛苦は、彼等が其大部分の責任をもつ應報としたところが、寧ろ其怖ろしい結果は次のジェネレーションに著しく現はれて來るのではあるまいか。現在獨逸の學生界に於ては苦學と營養不良とが如何に多くの有爲の青年から攻學の途を奪つてしまつたか。如何に彼等の多くは餘業と過勞との爲にその邁進の途を阻まれつゝあるか。如何に心ならずも彼等はその聽講席の多くを低能なる富豪の子弟や語學の貧弱な異邦學生に讓らなければならなかつたか。又中小學の子女の幾割が營養不良の爲に日々の學課を缺き、或は不治の病にをかされつゝあるか。又如何に多くの無垢なる女子がその自活自營の爲に日に夜に魂の隨落に近づきつゝあることか。

自分は今Bの膝に泣き臥すをとめの嗚咽にふるふ髮の毛を見ながら、その虐げられたる小き魂や、その背景たる全國民の呪はれたる運命を思ひやつて、これ等可憐なる人間苦が全人類の煉獄に對して如何なる意味を持つものであるかといふ冥想に陷つてゐた。

翌朝皆に送られてオバアハウゼンの停車場を立つた。Bの長妹は、せめてケョルンまで見送りたいと繰りかへしてゐたが、もう其準備をして來たものと見えて、素ばやく乘り込んで來た。いよ／＼汽車が動き出すと、暗い運命を負つた男女の人達の姿は、刻々小くなつてプラットホームに殘された。老母は泣きくづれて皆に救けられてゐるのが僅に見える。

この客車の座席の革も佛兵に剝ぎむしられて軍鷄の臑のやうな醜さをさらして居る。車内には青服を着た佛の士官達が居並んでゐて、暫くして其うちの一人が澁々立つて長妹に席を讓つたが、長妹はわざとそれを受けずに、いつ迄も立つたまゝ、窓硝子に頰を押しつけてゐた。

郊外のアルスタアデンを通ると、彼女は指をあげて、あれが小供の時通つた學校、あれが日曜毎に詣つた教會だと云つては、頻りに其頃の事をなつかしがつてゐた。

馬鈴薯の葉はもう枯れちゞれて居る。その平坦な田野の中を一時間半ほど走つて汽車は、數日前に訪れた、ハイネの生地デュセルドルフに着いた。ケョルン行きの連絡にはまだ四時間餘もあるので、兎に角降りて市內を見ることにした。

廣いアドルフ街から、ケーニヒ並木の方へ曲ると、靜に流

れる堀川に沿つたリンデン其他の古木が、いつも乍ら美しい。兩替をしようと、あたりに列なる銀行や兩替店を戸毎にたづねても、獨貨暴落の際とて、何れも紙幣を持たぬので更に應じない。厳めしいビスマークの銅像の後ろに立つ佛蘭西がはの銀行で僅かに事を辨じ得たのは、時節柄殊に皮肉に思はれぬでもなかつた。

この市がライン河畔の通商港とし殊に工業地として下ラインの樞要な中心地であることは云ふ迄もないが、一方選定侯ヨハン・ギルヘルムが多くの藝術家を招致し、又繪畫堂を建設して以來、この地が西獨の藝術的中心となつたことも注意すべきことである。殊にゲーテが口を極めて賞美した由所ある古雅な庭園をもつた「マルカステン」今も[illegible]藝術家の集合所として創作的方面にも重い意義をもつて居る。

歴史博物館や、工藝博物館や、一二の畫堂を[illegible]なほして停車場に引きかへすと、ケ・ルンへ通ずる汽車は今日はもう此處からは出ないといふ。廣い待合所は失業者や、もぐりの兩替屋などでうよ〱して居る氣味わるさに、直にそこを出て、占領區の境であるベンラートまで電車に乘ることにした。途中Bは又關所の通過に頭を惱ましはじめた。ルーアの住民が占領區から脱出することは今は絶對に阻まれて居る。難病の故に他郷に轉地療養するとかいふ口實のもとに醫師の診斷書を添へて一々佛の官憲の許可を得なくてはならない。Bの妹はをかしさを押へて、

「あたしその朝、わざと頬臙脂をつけないで出かけていつたの。すると醫者の奴じつとあたしの顔を見つめて居て、あなたどこがおわるいんですと云ひますから、血の道なんですと答へてやつたの。だつてそんなにいゝお顔色ぢやないですかと云ふから、ではどうか氣違ひとしておいて下さい。實際氣違ひなんですから、と云つてやつたら、それでも笑ひ乍ら判を押してくれましたわ」

と如何にもをかしさうに笑ひこけた。過日郷里に入る際、關所から突き戻されて徒歩で非常線を突破つたBは當時の難苦を追想してか、只默つて眼を輝かして居る。

やがて小一時も走ると、突然右手に蒼茫と廣く緩く透つて後の日に輝いてゐるものが並木を通して眼下に隆顯する。

「Ach, Rhein! O, unser Rhein!」

とB兄妹はじめ、他の乘客も總立になつて窓へつめよせた。實際その大江の姿は、ぞつとする程美しいものであつた。大形に張られた帆が半ば風を孕んで靜に滑つて居る。

この瘋狂な騒ぎに車掌は鈴を引く手を忘れてか、一つの停留

場をとばしてしまつた。それと氣付いた彼は周章てゝ急に停めようとしたが、もう遠く其村を過ぎてゐた。

「Ist sie Passgrenze schon vorbei?（關所はもう過ぎたの？）」

と一人の客が高く叫ぶと、車掌は、さも大なる失策をしたやうに、而も一種捨て鉢的な語氣を以つて、

「Ja, schon vorbei（えゝ、もう過ぎました）」と云ひながら苦笑して居た。Bも妹も地團駄をふんで喜ぶと、他の客連もそれに和した。それにしてもこれは餘りに呆氣ないものであつたが、寧ろ車掌の臨機の處置が何となく氣味の惡いほどに思はれた。

ベンラートで汽車に乘りかへると、汽車はラインの大河を右にして、秋の廣野をまつしぐらに南へ走る。牧場には家畜の影さへ見ないが、畑には百姓の男女が夕暮近い時間を惜しんで貴い糧の爲にせつせと働いて居る。ミユールハイムに入る少し前から、ラインの長江を隔てゝ、行く手遙かの右手よりに、名だたるケ・ルンの大伽藍の塔の一對が、恰も巨魔の角のやうに夕燒の空に聳えてゐるのが見えた。

二人の間代三千二百五十億マーク（一磅餘）を約してモノポールホテルに一旦行李をおろした後、更に角大伽藍の雄姿を仰ぐ爲に、夕暮の町へさすらひ出た。

聳立百五十七米突の高塔は天を突いて、そこに小山の如く橫はる大バシリカの壯觀は、何の言葉を以て表はし得よう。前後六百年に亙つてこれを造り上げた人間の力と、その藝術的精神の壯嚴とに對しては、そゞろに畏敬の念に打たれざるを得ない。これこそ獨逸高ゴティークの最大傑作と云はれて居るが、彼のマイランドのドームにも增して颯爽たる雄姿である。中堂は十四世紀初期の作で、アミアンの伽藍に則つたものであると云ふが、上部の壯麗な高ゴティークと下部の典雅な初期のゴティークとが如何にもよく調和して居るのが目立つ。人間の手に成つた石材の大シムフォニーとしては最も偉大なるものの一つではあるまいか。これが仰瞻と凝視とは、吾々の精神に言ひがたい畏敬と崇嚴の感を與へ、それが人間の精神生活に對する甚深なる意味を滲がずには措かない。殊更黃昏の空に無限の高をを突く尖塔を仰いでは、そゞろに古人の宗教的感銘をも偲ばさるを得ない。その一瞬の崇嚴と雄偉とに打たれては、幾多の彫像や花模樣等の巨細の裝飾の美に目に移す遑も無いほどであるが、メンゲルバツハの手に成つたといふ北側のブロンズの扉は、フローレンツの洗禮堂を思はしめる程の雅致を具へたもの

である。

併し一歩堂内に歩を入れて、その宏濶なる聖堂を仰いだ時は寧ろ悚然として畏驚の感に打たれざるを得ない。その太しく雄々しくそゝり立つ列柱、高く天空を限る高廊、この神秘境に僅かに光を透す極彩聖堂の窓硝子、正面遠く純白い聖像を拘く神壇——自らの足音さへこの聖寂をみだすを怖るゝばかりである。「太古の森の如く天を突き、上は枝々の梢に分かれて」と嘗てフォルスタアが形容した數十本の大列柱に支へられた六十餘間の尖弓形の大穹窿は、仰ぐからに崇厳の感に打たしめる。周圍の窓硝子の極彩畫は多くは十五世紀頃のものであるといふが、殊に北側の窓に掲げられたマリヤとクリストの聖龕が夕暮の微光をとほして金色に紺青に光るその神々しさは、えも言はれない。

そこを出てからも、夕空を高く突く巨塔の方を幾たびも顧みつゝ、堂前の廣庭を過ぎ、ラートハウスの前から古市場、新市場のあたりを漫歩しホーエ街へ出ると、靄を欺く明るい大通りに行きかふ賑やかさは、ルーア地方には夢にも見られない所である。ここは英國の占領區に屬して居るが、夜目なればか、英兵なども碌に見えず、ましてや銃劍をつけた黒奴兵などは影さへ見えず、失業者や乞食のうよ〱も無く、見るからに健全な繁華な商業地らしい。そのむかし彼のフォルスタアが嘆いたやうに最早や「陰氣な物がなしいケルン」ではなくて、あの元氣なラインの歌にあるやうな生氣ある姿である。

ただ夕食をしたためやうと、目ぼしいレストランをたづねて見ると、何れも共扉に「獵人お斷わり」とれい〱しく書いてある。パッサーヂの「フィシヤア」といふ處で名物の魚料理を賞美すると、一食の價二千八百億マルクで、魚の鱗の數の數千倍の紙幣を償した。

翌くる日は再びドームを訪うて、祠堂(カペレ)や祭壇をはじめ堂内の諸彫像や細かい裝飾を見まはつた後、高さ百五十七米突の共の高塔に攀ぢて見た。案内の寺男が重帽をつけて居るのもをかしい。昇るに隨つて刻々展望の雄大は加はつて、いよ〱登りつめると、眼下に廣がる人口六十萬の大都の家の海、寺々の尖塔、遙か南にかすむ七嶺(ジーベンゲビルゲ)のあたりから白く光りつつ大きくうねりうねつて、脚下に並ぶ大橋をくぐり、幾百千の船を浮べて、やがて北海の方へと消える大ラインの壯觀は何の言葉をもつて譬へてよからう。アルプスの麓より恰も大陸の動脈の如く獨佛の間を貫ぬくこの長江は、二千年來の人間の歴史を共の水

に映しその水に消して、今も變らぬ色に悠々と流れて居る。「ラインの守り」をたのんだ日耳曼民族の矜りも今ははたどれだけの力を持つて居ることか。そんな瞑想に耽つて、ふと脚下を見ると、欄干のきはに鳩の屍が二つ落ちて居る。鷲鷹に食ひ割かれてか何れも片翼を失つて居る。軍帽の寺男が、微笑みながらそれを眼下の人の世へと投げ落してやつたのも何かの象徴の如く思はれた。

その皮肉な寺男は降りぎはにも、何萬斤と云ふ大きな鐘を指して、まだその幾倍大きいのが砲彈を作る爲に鑄つぶされたとか、その昔ここから落ちた何千斤といふ振子が今も地中に半沒して居るとか話してくれた。

ドームに近いワルラーフ・リヒャルツ博物館には十四紀から十七世紀に亘つて伊太利や西班牙や獨逸やニーダーランドなどの繪畫の目ぼしいものも見られるが、此館の特長は寧ろ「哲學者のモザイック」をはじめ大小の羅馬風のモザイックや、この地方で發掘されたといふ紀元四世紀頃迄の彫像神壇等の馬羅文明の遺物や、中世やルネツサンスの美術品であつて、それ等が吾人の目を強く牽くと共に、此市が逸早く羅馬文化に浸つた上古より、十一二世紀の僧俗爭鬪からハンザ同盟時代を經る迄の榮枯消長を偲ばしめて殊に味深いものであつた。

Bの妹は、名殘を惜しみながらも、それから一人又ルーアの餓鬼道鄕へ引きかへしていつた。それを見送つてBと共にホーヘンツォルレルン橋の袂からボンまでへの電車に乘ることにした。暫し待つ間に大ラインの上にどつしりと横はる其橋の姿を見て居ると、その結構裝置が、間近に聳える大伽藍のそれと巨細に亘つてよく調和して居るのが目立つて嬉しく思はれた。今や同じく敵國の配下にありながら、この市の住民の心が左程に挫かれず沮喪もしてゐないのと思ひ合せて、それが此寺靱強な向上的ゴティーク藝術の象徴するやうに、やがては天空に迫るやうな新しい力に活きかへつて來る日がそゞろに目の前に見えるやうでもあつた。

ベートーヱンの生地

獨墺の大音樂家は、ハイドンとシューベルトとが何れも墺太利の一家村に生まれたのは例外として、何れも代表的な都市に生れて居る。ヘンデルはハルレに、バツハはアイゼナハに、ワグナアはライプチツヒに、ブラームスとメンデルスゾーンはハンブルヒに何れも其の呱々の聲をあげて居る。併し自分が彼の景勝無比なザルツブルクにモツァールトの生家を訪れて以來

は、音樂的天才の生地として最も大なる期待と憧れとをもつて居たのは、樂聖ベートーヹンの生家のあるライン河畔のボン市であつた。

併し自分が僅か五ケ月以前の秋の末、葡萄の葉の黄に散りしく頃、ケルンからライン河畔に沿うてこのボン市を訪れた時の第一印象はどうであつたらう。

時は丁度獨立ライン共和國の企ての八發しかつた頃とて、ライン河畔一帶には嚴重なる戒嚴令が布かれてゐた。先づ停車場へおり立つと、その構内にも廣庭にも、黄褐色の服に赤い土耳古帽を着けた佛領アフリカの植民兵が、獰惡な黒い顏に凄い眼をぎよろつかせ乍ら、銃劍をがちやつかせて群れ歩いて居る。市内の店さきに人が三四人立つて居ると、直に突つかけて來て追ひちらしてしまふ。道行く人も恟々として、市中が何となく殺氣だつて不穩である。こゝにも十數人の若者がその植民兵の劍に脅されながら護送されてゆく。そのうしろに少しでも見物の人だかりが出來ると、黒兵は疾風の如く引かへして來て、恰も本能的の憎惡をもつものゝやうに、厚い唇に白い齒をむき出して打ちかゝつて來る。可憐な女子供も、一歩を逃げおくれたら、その處刑斧の如き臺尻の下に血にまみれなくてはならない。逃げ迷つては泣き叫びながら、「あゝ、もう駄目だ」とか、「もう堪へられない」とか絶望の聲を放つて居るものもある。狐が酷いのか、そのかげの虎が酷いのか、何れにせよ爪牙をもがれて逃げ迷ふ家畜の群のあはれさは、實に目もあてられない。より人道的なる政策にこの問題の解決は向けられないものであらうか。人間の最後の理想の爲め、人間愛の最後の大調和の爲に幾多の大交響樂を造り成した樂聖の生地にあつてこの光景を眼のあたりにするのは、人類の究極の理想に到達する道が如何に倚遠く如何に險しいものであるかといふことをしみ〴〵と思はせるのであつた。

マルクトへ出ると、ロコヽ式の櫓十が目だつ正面の議事堂（ラートハウス）の屋根には佛の三色旗が高く飜つて、青服の兵士が前を堅く守つて居る。その前の廣場には市民の群が屯して、今にも襲うて來る嵐でも待つやうに緊張した不安げな顏をして小聲に囁いて居る。

河畔に出てラインヱルフトといふ逍遙の並木道から眼の前に長蛇の如く横はるライン橋を望むと、豐かに下ゆく水の色と相俟つて大ろかな調つた景を呈して、この大河の美しさがいよいよ此あたりから始まつてゐることを思はせてゐる。

ボン街に入つて樂聖ベートーヹンの生家を訪れようと、靜に歩を運ぶに從つて何となく胸もときめいて來る。おもては大き

な所のある三階建の家であるが、目ざす生家はその裏にさゝやかに立つ、小窓をもつた二階だての家である。壁には蔦葛が這ひまとつて、黄や赤の葉が殘り少なに莖にこびりついてゐる。その庭前に立つ、ロシヤの彫刻家アロンソンの手に成つた石像は、新しいながらに天才の面目をよく髣髴せしめてゐる。

足の不自由な立派な男が親切に案內してくれる。父母の居間だつたといふ二つの部屋がある。その陰氣で、穢く、質素極まるものであるのを見ても、如何に其家が貧困であつたかも偲ばれる。アントワープから出た祖父は樂師長(カペルマイステル)、父も中次唱歌者(テノリスト)で、代々音樂家の家であつたが、生來病身の彼は貧窮荒凉たる家庭に育ち、飲酒の父に酷使され、十二三才からはオルガン師として自活しなければならなかつたといふ。

さて古い粗末な階段を上ると、そこに二坪にも足らない狹い穢い屋根部屋がある。天井は頭がつかへるほど低く、右手の小窓から僅かに日光がさし込んで居る。それこそ我が樂聖の誕生の室である。その薄暗い部屋には正面に唯一つフォスの手に成つた一基の像を置き、二つ三つ供へられた桂の輪の葉も枯れしぼんで居る。九大交響樂(シムフォニー)や莊嚴彌撒(ミサ)をはじめ、所謂「たましひより靈火を發せしめる」音樂の幾多を成して神韻の秘を啓いた大天才が一百五十年前にこの陋室に呱々の聲をあげたことかと思ふと、一種崇嚴の氣に悚然とせざるを得なかつた。かの第九交響樂(シムフォニー)の結末の合唱(コーラス)にあるやうな、人間の運命や理想に對する深刻にして雄渾な瞑想がこの一室に其一生命を得たこと想ふだに奇しく感ぜざるを得ない。

別室にはベートーヴェンの生前を偲ばせる幾多の貴い遺物が列ねられてある。彼自身及家族知人等の肖像や畫像――中にもフランツ・クラインの手に成つたといふ、樂聖が其創作力の盛期四十二才の時に型どつた面像や、彼の面影を最もよく髣髴せしめて居るといふ、シモンの畫像等には、その廣い額、その沈痛な眼、その締まつた口もとに此天才の特色を最もよく讀みとることが出來る。維納の公園を飾つて居る有名な石像のモデルも置かれてある。更に興味の多いのは、彼が「永遠なる戀人」と崇へて其死に至るまで抱持してゐた伯爵夫人テレーゼ・ブルンスキックのあでやかなる畫像で、その裏面には夫人の自筆を以て

「稀なる天才へ、
大なる藝術家へ、
善き人へ、
テレーゼより」

といふ署名があるといふことである。イフィゲニイやヘレーネを通してゲーテの意中の人が吾々に郁郁と香を放つて來るが

如く、ベートーヴエンのソナタやシムフォニイを通してこの「永遠たる戀人」のたましひは、如何に漂渺とおでやかに吾々の心へ滲透して來ることであらう。

なほ彼自身が常に用ゐた小形のピヤノや、四部合奏(クワルテット)に用ゐたヴイオリンもそこに置かれてある。その他彼の手跡、音譜、殊に田園交響樂(パストラルシムフオニー)の、全部その文机の上には常用の鵞ペン、インク、鋏、眼鏡をはじめ、眞鍮製らしい粗製い聽音器等が彼の生活を躍如たらしめて居る。殊に、彼の筆耕生が彼の音譜に加筆したのを憤怒して全紙面を抹殺して「天下の大馬鹿」と書きなぐつてある秘冊は、いよいよ彼の藝術的良心と其潔癖とを躍如たらしめて興味あることであつた。斯くてこそ「英雄交響樂(エロイカシムホニイ)」の如き力と、熱情と、自由とを體現したやうな偉曲が成されたのであると私かに貫くも領かれるのであつた。

それ等彼自身の遺物を眼のあたり見ることは、恰も其「運命(フアーテ)」交響樂(シムフオニー)以下全曲を聽くにも劣らない深い感激と讃歎とを吾々の胸裡に喚びおこすのであつた。

ベートーヴエンの生家と共にボン市が「ミューズの市」として尚誇るものは、雅趣ある四つの塔をのせて前に禁苑の蓊欝を控へて居る昔の宮城今の大學である。これこそライン河畔の景勝によつて、自由の學風と浪漫的詩想との淵叢である。

想ふ一千八百十五年、維納の大會議に於てライン諸邦が再び獨領に歸し、そこに學府を設けるに方つてケ・ルンと此のボン市との間に選擇の難論が生れた砌、時の文相シュックマンは一日ゴブレンツ門の丘上に立つて其山河の美を展望した時、「これこそ我等の場所、これを措いて他には無い」と叫んで即刻此地をトしたといふ。やがてはフリードリッヒ皇帝や、近くは先の皇太子等も自ら進んで此處に學び、終に彼等をして「獨逸の王冠の寶石」とまで此學園を讃美せしめるに至つた。

併し今は何事ぞその前の禁苑には威嚴令のもとに佛の植民兵等が劍戟をつらねて立ちふたがつ居る物々しさ。モーリッツ・アルントや、カール・ジムロックの如き獨逸魂と自由とともに此處に畢世の研究を傾けた碩學名等は地下に如何なる感を抱いて居ることであらうと、つれだつたB君は繰りかへしてゐた。

大學の裏手のミュンスタア廣場(プラッツ)にはエルンスト・ヘエネルの手に成つたベートーヴエンの威嚴ある大立像があるが、その礎石の四面を飾る「空想」、「寺樂」、「交響樂」、「劇樂」を象徴した女人像は、この天才の樂徳を永遠するには無比にふさはしいものであつた

そのすぐ側には八角の高塔をのせた有名な伽藍がある。十一

二世紀の交に成つて、羅馬スタイルのものとしては最も雄偉なものゝ一として崇へられ、こゝで二度までも皇帝が即位式を擧げたことがあるといふ。

一時催して來た雨も霽れあがつたので、ポツペルスドルフの美しい並木道をそゞろ歩くと、兩側には別墅風の小じんまりした閑靜な住宅が並んで居る。この邊で落付いて一二年も勉强したらばなどと空想的な話をしながら步を運ぶうち、古い濠あとを渡ると、それがポツペルスドルフの離宮あとで、回廊閣に圍まれた闊い中庭に稍その趣が殘つては居るが、今は動物や礦物の標品室になつて、庭前の植物園と共に大學の所屬になつて居るといふ。

それから少し引きかへすと、停車場の裏手に地方博物館（プロヰンツ・ムゼウム）といふものがある。階上階下にわたつて陳列せられたローマ、フランクゴーティーク、ルネツサンス等の大小の遺物は流石に此學都の名を耻かしめないものである。併しこゝを一步出ると、もう街道には巡邏の黑兵が屯して居ることと思へば、他日それ等劍戟のひらめかない日に、この「自由の湧き出る、明るい詩を生む、うるはしい」ミューズの都を訪うて靜に天才の跡を探ねたい念を禁じ得なかつた。

有馬の猫騷動

鳶魚

今日も水天宮で知られて居る有馬伯爵家、江戸の昔は十八國主と云はれて大名の中でも威勢が凄じい、其の筑後御井郡久留米二十一萬石の殿様、大名には孰れにも御家騷動が附いて廻る。此の珍しくない御家騷動は出て來る役者さへ略同型で、其の經過も大團圓も大概似たものである、それは小説講談演劇が與へた型式なのだからでもあらう、事實は千差萬別であつて、同じやうでも違つて居る、けれども全然噓なのは無いらしい、然るに久留米の猫騷動だけは事實無根なのだが、此の噓譚は如何にも巧妙に構造されて居るのを感心したい。

有馬の猫騷動は講談に依つて傳播したものだが、一體講談といふものが段々繰返されながら、幾人かの辨舌に洗錬される、此の洗錬は事實や理窟に於てゞなく、專ら興味の上に於て行はれる、それ故に面白い講談は頻に複演されて、十分に洗錬されて愈々面白くなつて往く、殊に有馬の猫騷動の原作は、天明寛政の時世に久留米家の持つて居る總べての材物を悉く利用してある、さうして久留米藩は七代則維、八代頼徸、九代頼貴、十代頼徳と打續いて奇矯豪宕な殿様を御目に掛けたから、江戸のみならず日本中で大有馬の殿様振りの平凡でないのを驚いた、其處を覘つて新しい講談も創造されたらしい。

下屋敷の怪獸退治

蜀山人の書いた半日閑話明和九年四月の條に、此節有馬中務殿の屋物頭安部郡兵衛、怪しき獸を鐵砲にて打しといふ評判なり、其圖などを板行し、讀賣等是を賣るとある、誰も有馬の騷動の事實の無いことを知つた者は、此の讀賣などが構話の根據になつたかと思ひ附くだらう、しかし寶暦以來珍話珍説が喜ばれたことは甚しい、寶暦三年の落首に『近年は無き事咄林道其御役御免と俄評定』といふのもある程で、町々を『是は今度』と大聲に呼び廻る讀賣が盛に無い事咄を撒布した、從つて讀賣の記載は容易に信用されぬ。

伯府家では士分以上に安部郡兵衛などといふ者はない、當時江戸で召抱へられた犬上軍太兵衛のことであらう、それにしても物頭を勤める程の身分ではなかつた、讀賣に傳へられた話に似たことは下屋敷にあつたらしいが、赤羽根の本邸の出來事ではないと云つて居る。其の下屋敷は何處か、本所邊だといふが、明和武鑑で見ても上屋敷が三田町、中屋敷が元矢之倉、下屋敷が高輪と千駄谷とにあつたのが知れる、有馬家の下屋敷が本所にあつたことは此の前後にもない、それに怪獸とだけでは狐か狸か何だか知れぬ、何であつても怪しい獸として、其の怪獸退治の武器が鐵砲だつたのは請取れない、高輪にしても千駄谷にしても江戸四里四方の内で、發砲は嚴禁なのであるから、犬上軍兵衛が若しズドンと遣つたら大變、直に二十一萬石の身上に關する事件になる、怪獸よりも發砲の方が遙に大騷動にならなければならない。

關口流の正統派といふ柔武卿の著した柔話の中には、犬上軍兵衛を犬神軍太兵衛としてある、さうして犬神について如何にも武藝者らしい策略を遣つた挿話を傳へた、その策略が講談向きに小刀細工でなく、鉈細工とでも云ひたいやうなのを嬉しく思ふ、犬神、師匠は瀧野專右衛門貞孝といふ人で、號を遊軒といつた、此の瀧野は大阪で楊心流の山本爲左衛門に學んで、後に起倒流といふ一派を起した人である、瀧野は久しく大阪で稽古場を取立て丶居たが、自分の武藝を天下に擴めたい念願から四十一歲の享保二十年に江戸へ出て、下谷三筋町（今日は淺草區だが、當時は下谷）へ柔術指南の看板を揭げた、彼も一派を創始する程あつて、才氣もあれば文筆もあつた、先づ江戸へ出る數年前から心掛けて、種々の傳書を拵へ、其の免許の一卷へ瀧野遊軒と署名し、華押やら印章やら立派に仕立て丶江戸へ廻し柳原山下淺草愛宕下等の大道露店の古本屋に賣らせた、江戸は諸國の武士の集る處、殊に元祿からは柔術が大分行はれ出した際でもあり、瀧野の傳書は大道の古本屋から方々へ擴る、誰も起倒流は京坂に勢力のある流義であるのか、瀧野は門人も多く免許を取つた者も夥しいと見へて、傳書も遠く江戸の古本屋へ出るのだと思ひ、讀んで見ると捕手の工夫に珍しいのがあり活と云へば直ぐに柔術と合點させる渠の死活などゝいふことが、其の頃は未だ目新しく見られたので、瀧野は苦歷な武藝者なのだらう、起倒流とは如何なる新手の柔術なのだらうと、幾分か噂されるやうになつた、彼は巧妙に自家宣傳を遂行した後に江戸へ來たのである、其の時三筋町の道場へ一番掛けに弟子入りしたのが、犬神軍太兵衛富永執貞であつた、起倒流は其の後日一日と盛んになり、門人も殖へるばかりであつたが、犬神も去

る者、武藝の師範をする身で自家宣傳の新按を憚らない瀧野の弟子だけに、又た其のうは手を徃かうとする。

或日犬神は三筋町の瀧野の道場へ來て、拙者の家には扱心流といふ柔術を傳へ居る、依つて今後は家傳を以て指南いたすに付き、是迄足下に學んだ事は一切用ゐ申さぬと、諸門人滿坐の中で、起倒流の傳書殘らず突き戻した、習ふだけ習つて置いて傳書を突き戻す、隨分酷い奴もあればもあるのだ、流石怜悧な瀧野も是には呆れたのか、暫時は沈默して居たが、ズックリ起つて奥へ這入つた、やがて十徳に着替へた瀧野遊軒は、大熨斗を載せた白木の三方を捧げて悠々と出て來て、三方を靜に軍太兵衛の前へ直し、扨其の元の家に扱心流といふ流儀これ有るに依つて、それを此の後とも指南いたさるゝよし、むの事也、然しれながら此の儀は先年より噂にも承らず、其の元は初心より某に學ばれ、扱心流の家傳はこれあるにもせよ、其の元の手足の働きは拙者が附けたるに相違なし、因つて家傳のことを知らさる人は軍太兵衛は遊軒が起倒流を盗みたりと申さば、定めて其の元にも無念でござらう・それ故今日改めて遊軒より其の元へ扱心流の免許を進じ申すと、口讀鮮に大熨斗の附いた書き物を渡した、斯う出られては初めの擬勢何處へやら、犬神は雖有しと一禮して授けらる書き物を請取るより外はなかつた、横着くらべでは到底犬神は瀧野の敵でない、けれども扱ふ流を吹き立てゝ間もなく犬神は有馬家へ有り附いた、して見ると怪傑といふものよりも、犬神の方が何程怪しいか知れぬ。

猫騷動の梗概

演劇のも講談を脚色したのであるから、爰で講談物の有馬の猫騷動の荒筋を述べて、大體の布置配合を辨じたい、

久留米藩の九代賴貴の夫人は、雲州松江十八萬石松平出羽守の娘であつた、お里から附いて來た家來高尾其の妹は、奥方き女中であつた、或時奥で御酒宴の最中に、猫を追掛けて一疋の犬が暴れ込んだ、追はれた猫は殿の後に避けた、猛り狂つた渠の犬が殿様に噛み附かうとしたので、お側に居た渠の女中・手早く犬を打殺して了つた　殿様が當坐の褒美に何なり所望よと云はれたのに、彼の女は逃げ込んだ猫を拜領したいと願つた、殿は今更に機敏な彼の女　恬淡なのを其の上にも嬉しく思はれ、それから何時とはなく彼の女を寵愛されるやうになつた、然るに嫉妬深い奥女中は、同輩の一人が殿様の御寵愛を受けるのを只だ眺めては居ない、まして彼が他藩から來た者でもあるから、久留米の家中から上つて居る奥女中等が一齊に攻撃同盟を拵へた、彼の女は煩悶懊惱に堪えかねて遂に自殺した、

新しい此の寵姿の婢は、主人の非命な最期に憤激して、日常虐待苛過を加へた女中閣の首魁某といふ老女を殺して、復讐をする積りで目指す老女の部屋へ斬り込んだが、先方も流石に嗜みのある者で、薙刀を揮つて渡り逢ひ、既に返り打ちにならうとした時に、寵姿に救はれた猫が飛び出し來て老女の咽喉を嚙み切つた、二人の變死で有馬家の奥向は大騷動を遣つたが、結局寵姿の實弟に金子を與へて、萬事を内々で濟すことにした。

猫は又た一人の足輕を火の見へ引き上げて喰ひ殺した、此の足輕は自殺した寵姿の實弟が、屋敷から金を貰つて歸るのを知り、その男を殺して金を奪つた奴である、猫は妊娠して居る殿のお妾と其の附き女中とを喰ひ殺した、猫久留米の家來山村典膳の老母を喰ひ殺した上に、其の老母に化けて居た、それを典膳は知らずに居たが或時殿樣にお附き申して御庭へ出た處へ、何か怪しい獸が現はれた、典膳は拔く手も見せず一刀を浴びた、さうして歸宅して見ると老母の眉間に金創がある、それから典膳は老母の擧動に注意すると、何分にも怪しい事が多い、典膳は辛くも猫が老母に化けて居るのに心附いたから、退治しようとしたが妖獸を取逃して了つた、其の頃久留米の抱へ相撲小野川喜三郎は、雷電爲右衛門に負けたので、御前を不首尾にした、御詫の爲めに何か手柄がしたいといふので、典膳と協力して潜伏して居る火の見で怪猫退治を仕遂げたといふのである。

幕末まで興ぜられた三題噺といふものは、文化の初めからと聞いたが、此の有馬の猫騷動は幾題噺なのであらう、お妾、猫、火の見、柔術、相撲取、ザツと見ても五題はある、算へやうによつては八題にも十題にもなりさうに思はれる。

赤羽根の高火の見

有馬の猫譚は果して犬神軍太兵衛の怪獸退治からの思ひ附きなのか、否かも知れないのである、讀賣の如きは容易に信憑されないものなのだから、有馬の下屋敷の出來事さへ疑しい、まして鐵砲などをブツ放す等は決してない、それでも浮說でも何でも讀賣を根本として有馬の猫騷動は構成されたらうか、さうでなく何かの機會に久留米藩で著名なものを寄せ集めて此の話を製造したのであらうか。

賴貴夫人が松江から入輿したといふのは大間違ひだ、賴貴夫人は安永武鑑にもある通り、松平太膳大夫重就娘、長州から來たのである、松江から久留米へ來たお嫁さんは五代賴元の夫人である、此の頃久留米も名物の殿樣が續いたが、松江でも逸品な藩主が續いた、南海といつた宗衍、不味といつた治鄕の二君は、當時のみならず今日でも世間で知つて居る、興味だけで往

く講談で見れば先づ、名物集逸品集を拵へようとしたのであらう。

有馬の火の見、是は江戸に二つないものと番附にも載せてある。今は、海軍造兵廠になつて居る赤羽根の久留米邸は三田濠を背負つて居た、有名な火の見櫓は背後の高地に建つて居たのである、江戸の武家屋敷では萬石以上でないと火の見を建造することが許されぬ、それだから大名の屋敷にだけしか高火の見はない、大名ならば孰れの屋敷にも高火の見があるのかと云へば、さうでもない、松平越前守(福井)、松平阿波守(蜂須賀)、松平土佐守(山内)、松平隠岐守(久松)、松平肥後守（保科）の五家に限つて、特許された火の見がある外は、方角火消を命ぜられた大名の家でなければ高火の見はないのである、方角火消は大名火消とも云はれた、幕府が大名に特命して勤務させたからの名稱だ、町町の抱へ人足（鳶の者）から組織した町火消や、弓組鐵砲組の旗本衆が十人づゝ任命される定火消の外に、此の大名の方角火消があつたのだ、方角火消は一般の火災についてゞはなく、大平方、櫻田方、二の御丸、紅葉山、吹上、淺草御藏、本所御米藏、増上寺、上野、聖堂、猿江御材木藏、と各分擔があつて　專ら幕府の爲めに常備されたのである、方角火消を命ぜられた大名は、定火消の役屋敷にある火の見と同様に高さ三丈の火の見を建てるが、さもない大名は二丈九尺以上の高さに火の見を構造することを許されなかつた、其處で高い火の見の數が尠い。

大名は例の參勤交替で隔年に歸國する從つて方角火消の任務も在江戸の期間だけであつた、けれども其費用は夥しいものであつたといふ、戰爭といふもの丶ない太平の世の中に、花々しい打扮の火事裝束で出馬するのは、殿樣に似合はしいお晴れであつたらう、新に抱へたガヱンと稱する多數の消防夫なども加はつて邸内も別して賑はしい、方角火消の警戒地域も定つて居た、擔當方面の火事なら假近いのでなくても同勢を繰り出すのが例である、其の度毎に凄しい景氣を見せるのだ、江戸の市民は方角火消を勤める大名を、大名の中の大名だとも思つた、余り威勢が好いので別段なもの丶やうにも見へたらう、火事が江戸の花ならば、方角火消も大名の花でなければならぬ、それ故ではあるまいが、殿樣のお晴れに、一代に一度は方角火消を勤めたやうだ、然るに久留米八代中務大輔賴徳などは一代に四度増上寺火消を勤めたといふ。

方角火消の建てた邸中の高火の見は、勤役中の使用であつて、歸國した不在の間は勿論のこと、假令江戸に居ても御役でない時には締切つて置くのであつた、一度方角火消を勤めれば、

使用するとは許されないでも高火の見が殘る、さうすると大名の高火の見も方角火消を勤めた標示までのものだが、有馬家のは邸後の高地へ建造したので、規定に依つて同じ三丈の高さであつても、久留米藩邸の前面から仰ぎ見ると、他に類例のない高さであつた、有馬家の火の見は何時建てたのか、今の伯爵家でも知らないといふ、しかし寶暦八年版の冬至梅寶暦に『赤羽根といふては火の見のやぐらより名が高い』といひ、安永二年版の出頬題に『赤羽根の火の見が日本一』など丶あるのを見ると、一代に四度方角火消を勤めた殿様の時代に建てたのらしい、是も名高いものだから怪猫の住み場に採用したのであらう。

晴天十日の勸進相撲

犬神の扱心流も新しい柔術で、有馬家へ召抱へられた名物の一つだが、小野川喜三郎は久留米の抱へ力士で、是は又た當時の評判男に相違ない、天明寛政の際が何故に勸進相撲の中興期と云はれる程に盛な興行振りを示したか、それを簡單に說明することは困るが、從來晴天八日の興行であつた勸進相撲は、安永七年三月廿八日深川八幡の開場から十日になつた、斯く興行日數の多くなつたのは、何よりも見物との關係であつて、明白に相撲の人氣を卜すべきものだ、それから二年を隔てた天明元年十一月の冬相撲が本所回向院で興行され、翌年の冬相撲も同所であつた、未だ此の頃までも相撲に本場所といふはなく、引續いて一定の場所で興行することはなかつたのに、寛政になつて回向院が略々相撲の本場所のやうになつた、此の際の兩大關は谷風梶之助と、小野川喜三郎とで、別けても谷風は力量體格が優れて居たばかりでなく、人物も傑出して居たらしい、『わしが國さで見せたいものは、昔は谷風今伊達模樣』と、後來に唄はれる程の人氣力士であつた、渠の横綱といふものも我等は谷風梶之助以來のことのやうに考へて居る、世間では谷風の前に明石志賀之助、兩國梶之助、丸山權太左衛門等を算へるが、それは相撲の記錄で認められぬ、谷風の横綱も寛政元年からといひ、又た同六年からともいふ、孰れにしても彼の横綱は目醒しいもので回向院が相撲の本場所になつた時代の輝かしい事實である。

其の好敵手として立つた小野川喜三郎も、當代の名力士であつて、寛政三年の將軍上覽にも谷風と光榮を共にした、雷電爲右衛門が小野川の弟子にならうとして訪問した時に、無禮を加へられたので、谷風の門下になつたといふのは根據のないことらしい、雷電爲右衛門は浦風林右衛門の部屋から出た力士で、谷風の弟子ではない、それ故に小野川雷電の兩人が遺恨の角力

などゝいふことは肯定し難い、從つて小野川が雷電を牛ヶ淵で要撃したのも、其の調停者として犬神を出す便宜までのものであらう、斯うして久留米藩の名物逸品を寄せ集めるのに、相撲取と柔術の先生とを結び附ける爲に、牛ヶ淵の幕を出したのに過ぎまい、しかし相撲と柔術とは切つても切れない因緣のあるもので、角觝術の成立した元祿の前後に、紀州力士が有勢であつた、和歌山藩は關口彌六左衛門柔心が捕手の拳法を一新した新心流を創唱し、八郎左衛門、萬右衛門兄弟よく父の遺業を繼いで、至藝と稱せられた、紀侯の力士鏡山沖右衛門、卷の尾津之助は、魯伯先生（關口八郎左衛門氏業、柔心の長男で、澁川伴五郎の師）に習つて、折衷したから四十八手の裏表といふやうになつた、表裏九十六手、相撲の手は爰で倍加した、實に鏡山等は永祿以來の角觝を變革して、始めて技術化したのである、元祿の白山新三郎は鏡山に學び、享保の八角楯右衛門は卷の尾に習つた、此の八角は『待つた』の開山と云はれる力士だが、彼は氣の練りといふことを工夫し、立ち掛かつては取らずに必ず土俵に手を下した、彼は容易に立たない、汚い相撲振りだと云はれだが、行司の木村庄之助も八角から呼吸を合はせることを傳はり、綾川五郎次、七ツ森折右衛門、源氏山住右衛門等の名力士も皆八角の流儀で、手を下して仕切つた、天明寛政には全く古い相撲振りはなくなり、名もない前相撲でも立ち掛かつて取る者はないやうになつた、小野川なども盛に『待つた』を用ゐて、殊に谷風との立合には隨分隙が入つたといふ、だが角力取に關口の柔の手が殘つて居るといはれるのも決して偶然ではない、小兵で强力でもなかつた鏡山が關口氏に學んで、專ら鍛錬に依つて名力士になつて以來、角觝は全く技術になつた　大兵强力だけでは何としても優勝者になれないやうになつた、更に益々技術化して八角の汚い相撲振りとなり、小野川が又た其の上を往つたから、相手さへ立てば待つたを云はずに奇麗に取組んだ宮城野丈助は、當時の好角家から宮城野流と云つて勝負以外の賞讃を受けもした。

相撲を汚くしたのも面白くしたのも關口の柔術からであつて見れば、其の因緣は相應に深い、態々小野川雷電の遺恨角力などゝいふ虛譚を拵へて、犬神を牛ヶ淵の喧嘩の仲裁人に引出すまでもないのである。

大名行列の鬼犬

材料調べをして見ると、皆それ〴〵に當りは附くやうだが、却つて主題の猫が見附らない、寛政十年に書いた與甜瑣語といふ隨筆に『厭勝の法は唐の史堂にはじまる、鍋島侯は夜々大般

若を鎮誦して妖を除く、有馬侯にて直宿する犬あり、其妖、目に遮るものならず、犬あれば虞なし、故に大守の臥し給ふ外に二頭の犬を置く、犬もなれて曉まで眠らず、斯の如し、今年藩(秋田)の仙北はよき犬を産すとて懇望あり、贈られしも久しき事ならず』とある、是では何か知らぬが有馬の殿様の寝所に怪しいことがあるので、二頭の犬が宿直する趣で、久留米から請求にまかせ秋田の佐竹家は良犬を贈つたといふのだ、此の話の引合ひに出された鍋島家も猫堂建立記だとか、佐賀夜櫻怪猫奇談だとか、有馬のと殆ど同型な猫騷動が傳へられて居る、黑甜瑣語と略々同時に書いた翁草にも『肥前佐賀の屋敷は山下御門の内、正面にあり、屋敷の鬼門、隅の長屋にて昔より今に至り一日も怠りなく僧來りて日護摩を焚く、其所以は昔大奇怪ありし故なりと、今も折々怪異あり、是太守在府の中ばかりなり、歸國あれば怪異ある事なし、故に屋敷中の男女、太守の歸國を悅て、有濟めば安眠す、毎夜の事には非ず、小雨など降て物淋しき時は必有り、或は庭中に火柱立、或は器動き踊り、又は家鳴などす、此火柱を見たる人の語りしは、大さ二圍許、長さ三間程に立つ、あはやと思ふ内に忽消失、又それよりも增りて四五間も立登る、元來怪物なれば、自ら身の毛立て凄かりしといへり、又屋敷中、夜中雨戸を鎖す事なし、如何なる構をしてもおのづからひとり開くなり、又太守登城御佛參等、出門の事、表門よりとあれば裏門より出らるゝ、裏門と合せらるれば何時も表門なり、是等も有怪異に寄る事と見えたり、其外種々異說あれども實否を知らず、凡此異事は江戶中に知らぬ人もなきとなり』とある、怪物の正體は何であるのか、それは知れないけれども佐賀侯の御祈禱は、當時の大評判であつたらしい、久米邦武翁の如き同藩出身の學者も、鍋島の猫騷動を否定し、恐らくは鍋島直大侯の姉君が大の猫好きで、手許で生れた子猫を他家へ遣はされるのに二つの駕籠を命じ、一つには猫と鰹節を乘せ、一つには食物と鞠その他の玩具を載せて、人間の嫁入りのやうな騷ぎであつたから、貰ひ受ける方でも鍋島の猫を貰つたといつて評判された、それから思ひ附いて猫騷動を仕組んだのであらうといはれたが、今の直大侯は鍋島侯爵の先代で、ツイ先年逝去された御方なのだから、其の姉君の話は嘉永安政を世界としなければなるまい、我等は些少も鍋島の猫騷動へは手を觸れて見ないので、何とも云はれないが、寬政に江戶の大評判となつた御祈禱を根柢にしたものであることは、有馬の猫騷動の様子から十分に想察し得られる。

久留米の六代有馬筑後守賴貴が、寶永三年四月八日に二十一歲で卒去された、年の若い殿様だけに嗣子のあらう筈がない、

當主が死んで嗣子がないとなれば、二十一萬石の有馬家も斷絶しなければならぬ、哀れ一藩の浮沈に臨んで、例の御澤美濃守吉保の斡旋によつて、分家の有馬宮内則政の子忠之助に、本領恙なく相續といふ恩命を得た、是が七代の玄蕃頭則維である、幕府の制度では當然絶家する筈の有馬家は、僥倖にも潰れずに無事で濟んだ、是等が厚の恩命といふのであらう、其處で幕府への忠勤振りも他の諸侯とは違つて、目立つやうにもしたらう、綱吉將軍も特に待遇を加へ、准國主であつた有馬家を、一等引上げて國主格にした、國主の格式になれば行列の模樣も違ふ、久留米藩は武門の面目、一家の光榮を何程喜んだものか、卯花園漫錄(文化六年撰)に『有馬家にて犬を御愛しなされ候事、元來常憲院公(綱吉將軍の謚號)御取立にて國守に相成、御恩御忘れこれなく、右君御代の如く、犬を大切に成され、御參勤御交代ともに御つれ候犬は御拜領のたねのよし、今以て御つれ成され候、あしき評にて化物出候樣に申候へども左樣にはこれ無くよし』、此の記載に見て一藩の深く滿足した樣子が知れる、犬公方を記念するために、綱吉の與へた犬の子孫をまで大切にし、寶永から文化といへば百有餘年、殿樣で算へれば則維、頼徸、頼貴、頼徳の四代に亘つて、綱吉將軍の恩命寵遇を忘れない表章として、江戸と久留米との往來に、海陸二百九十二里の距離をさへ犬を曳いて上下した、二百六十四を算へる諸侯の參勤交替、それ〴〵の格式先例によつて持たせた伊達道具、孰れも耳目を惹く大名行列の中に、是は又た牽き馬の外に曳き犬のある久留米侯が何で注意されずに居らうぞ、誹傳も評說も其處から發生する。

曳き犬は有馬家の特有で、實に大名行列の中の無類の名物だ、さうして珍型な殿樣の噂の高い久留米藩、それを見掛けて釋師が創作慾を動かしたのも無理はない。

京極宮から御降嫁

則維は享保十四年に隱居して、六十五歳の元文三年まで、品川の下屋敷で頗る我儘氣儘な生活をした、二間四方の備前擂鉢を拵えた見たり、寒いといつて素裸に緋縮緬の犢鼻褌一つたり、侍女の肌の見へる樣に紗の一重帷子を着せて置いた、大名も國守大名になると殿樣ではない、太守樣と云はれ殿樣でも赤裸々などゝいふ行狀はあつた話でないのに、是は又た太守樣が雲助のやうな往き方で、各方面の人間を引見されたから、有馬の隱居の行狀は世間の噂の種子になつた、其隱居の子は頼徸といつて、大變な人物であつた、大名は借金では家が潰れないが、子供が無いと斷絶すると放言して、美しいのを十

八人も蒐集した、その癖に子供は男女各一人しか拵へられなかつた、しかし借金の方は思ひ切り拵へた、此の頼徸は珍型の殿様であつて、頗る世間に噂の材料を供給したのである、大名の名君振りは大抵儉約から出掛けるとに相場が極つて居る、さうして家來などを大事がつたやうな顔附きをしながら、物は呉れないで口の先で丸める、處を其の手で往かずに、享保十四年に家督相續をして、七十二歳の天明三年に世を畢るまで、儉約拔きで暮した、贅澤もすれば女も好物といふ有様、それで國鶴を三度貰つた、國鶴といふのは御拳即ち將軍が自身に鷹狩で取つた鶴の肉を、本國に居る大名へ送與されることで、面目此の上もないものとしてあつた、諸大名の一代に一度の國鶴も家譜に記載して、其の光榮を後昆に傳へる程であつたのに、頼徸は家治將軍の時に此の光榮を三度累ねた、又た六十を越へて公事に精勵するとあつて、安永元年には左近衛權少將に進められた、有馬家の家格として侍從を極官とする、代々四位の少將にはなれない例なのを、破格の叙任があつたのみならず、明治四十四年十一月には贈從三位にもなつて居る、此の殿様の生涯を詳しく調査すれば奇態な事が多からうが、我等の知つて居るだけでも案外な話のみである。

一二三の將軍家の傳へた京極宮の婚書、是は寛保二年九月二十六日に有馬家へ御降嫁になつた際のものである、其の第一

有馬中務大輔と申男え、豐與宮緣談之儀、本意に非ずといへども取組まれ候、此段相違せらるべく候

京極宮

關東 公方え

といふので、幕府へ豐宮御降嫁の公式通達なのだ、有馬中務大輔と申す男とあるのも目立つが、本意ではないが嫁に遣すとあるのが不思議に思はれた、如何にも身分から云へれば大名にしても臣下に相違ない、御降嫁なればこそ斯うもあらう筈である、更に第二は、

關東代官願に依り、本意に非ず候へども、有馬中務大輔と申男え、豐與宮緣談の儀、取組はせ候趣、相心得らるべく候以上

京極宮

有馬玄蕃頭え

是は有馬家への御沙汰書である、中務大輔は頼徸、玄蕃頭は其の父則維のことだ、幕府を關東代官と云かれたのは何程江戸時代に此の文書を拜見する者を驚したらうか、兎に角幕府の申請に依つて御降嫁なさるといふのである、第三は頼徸よりの呈書で、

中務大輔申上候、姫宮様之結納御祝儀進上致候、幾久目出度存候、此段宜敷御上げられ下されべく候、

中務大輔

といふので、名宛はないが宮の家司に送る形式らしい、今日の如く上々の御事にさへ、御大婚とか、御成婚とか申して、入内といふ言葉も意義も忘れたらしい時世からは、此の婚書の珍しさを何程増加するか知れぬ

皇族の降嫁は有馬家には初めてゞあつたが、將軍はじめ尾紀水の三家、田安清水一橋の三卿又は國守大名にしては其の例も多いけれども御沙汰書などの世間に傳つたのはないやうだ、それが有馬家だけ何故に好事家等の手に落ちたらう、無論一般に發表される性質のものでもない、有馬家では御降嫁をお迎へ申上げ、江戸の本邸に登輿宮様の御殿を營作した、賴徸が其の夫人の爲めに新に建築した建物を宮様御殿と云はせた、是も民間の匹夫匹婦の上から比較すると餘程妙な氣持ちもしよう、其の宮様御殿の表御門も御玄關も、藩主のとは別に拵へられ、殊に御玄關正面に十六瓣の裏菊の御紋章を附け、御玄關前には幕番所が建つ、此の御紋章を附けることゝ幕番所を建てることは、幕府の親類の三家でも許されない事柄なのである、有馬家は先代則維が國主大名に列せれたが、他の同列には家々の先例故格があつて、それぞれ榮譽ある特徴を銜ふ中に、新しく國守の列に入つたゞけに久留米藩には、それが不足して居た、此の御降嫁によつて漸く他家にない名譽の規模を得たのである、太平の世の大名の榮譽は行列に持たせる鍃長刀とか、挾箱の數をさへ算させる時世に有馬家が新に獲得した光榮は實に莫大であつた、大名への御降嫁は普通將軍の養女となり、其の後大名へ輿嫁されるのだ、それが御守殿様といふのである、皇族であつても將軍の娘になつての御縁談では、裏菊の御紋章は附けられない、中務大輔と申す男が京極宮家仁親王の御女を直接に御降嫁を願つたのも、新しい國守大名の家に箔を附けたい爲めに他ならぬ、さうして終始非常な勞力と莫大なる金力を費し、盛に幕閣の御機嫌を取結ふことに忙しかつた。

斯う見て來て思ひ當るのは賴徸の孫で、久留米十代の藩主となつた賴德が、水天宮を流行させてお賽錢を稼いだ、其事は詳細に拙著大名生活の内秘に書いて置いたが、水天宮の宣傳の巧妙なことは、到底殿様の業とは思はれぬ、渠の調子なら大名が賣藥屋化粧品屋を開業しても成功しさうである、それには拔け目のない家來が居たにも相違ない、水天宮宣傳の手段は既に裏菊御紋章について行はれて居たのでなからうか、新しく昇格して國守大名になつた有馬家の外聞を無徴に粧飾すべき皇族の御

降嫁は、さもなくても家門の光榮であるが、此の際狂喜して吹聴したかつたらう、宮家の婚書も或は故意に世間へ流布させなかつたらうか、それは怪しからぬ推察としても、邸外に漏洩するのを止めさせなかつたのではなからうか、さうなら如何にも珍しいものでもあり、變つた文章でもあるから擴まつて行くのは云ふまでもない。

賴徸は菊御門だとか、國鶴だとか、四位の少將だとか、其の家に先例もない榮譽に郎いたもの丶、高良山の富突興行を始め若津町へ遊廓を取り立てたのみならず、領民に六匁づ丶の人頭税を賦課した、彼は一代の中に兩度まで暴動を惹き起すほどの苛政を行つたのである、享保の暴動は家老稻次因幡に依つて鎭定され、寶暦の擾亂も家老有馬石見に依て靜謐に歸した、幕府の受けもよく世間でも評判のよい人であつたが、領内は苛斂誅求に苦んだ、彼は非常な手腕を持つて居て、享保十六年に幕府から一萬五千兩借り出し、其の上に幕閣を操縱して當代希有の榮譽を享受する働きをさせ、二度の暴動についての譴責を免されて居る、我等は今賴徸の傳記を述べる暇はないが、斯うした手際の好い大名は、約三百年の江戸時代に恐らく二人とはあるまい、只だ彼が本邦數學史の重要な記載を充すべき人であることを云はう、彼は關孝和山路主任に從學し、藩士豐田文章の名で、寶暦十二年に盈朒起遂法、同十四年に斷連續局術、明和元年に「[illegible]三要、同三年に方圓奇巧、同四年に拾璣算法を出版した、が我邦での點竄術刊行の最初のものだといふ、彼が科學的守様であり、頭脳の好い大名だつたのも容易に想察されやう、其の子が賴貴、其の孫が賴徳、此の賴徳が水天宮の御賽錢稼ぎに成功した人である。

オツチヨコチヨイの猫濕病

久留米では往き方の變つた藩主が續いた、其の家には行列に犬を見かせた、その犬から猫へ聯想されたらしい、だが猫が化けるといふことは、手近な近松の傾城富士見る里や下關猫魔達にもある趣向である、それが文化文政度の隨筆を見ると頻に怪しい猫譚が書いてある、何故に急に多數になつたのかは知らないが、湯島の圓滿寺前の煎餅屋へ泥坊猫が來て度々障を爲す、亭主が腹立紛れに打殺して夜に櫻の馬場へ死骸を捨てさせた。其の夜から女房が猫の身振りをして、ニヤア／＼フウ／＼遣り出したとか、日ヶ奉行支配山中左四郎の妻が久しく病氣であつたが、此の頃起臥が猫の樣子であるのみか、飯を喰ふにも茶椀の中へ顔を突き込んで食ふやうになつたとか、四谷大番町の大關雲峰の老母が猫に喰ひ殺されたとか、浦賀奉行内藤外記の家

所へ夜な〳〵怪獸が來て魚類を食ふ、遂に納戸へまで往つて與方の名を呼ぶ事もあるとの騷ぎで、陷穽を拵へて怪獸を生捕つて見たら狸ほどもある大猫であつたとか、事の眞僞は極められないけれども、丁寧に點檢したら同じやうな話が十件以上もあらうと思はれる、或は狐憑の他に猫憑とでもいふ精神病が流行したのかとさへ考られる、衆の『猫おや〳〵とおしやますが、猫が絞りの浴衣で傘さして足駄はいて來るものか』といふ俗謠も、享和度の流行唄であつた、さうして有馬猫騷動の構造されたのもオツチヨコチヨイの流行する頃なのではあるまいか。

田舍記者・田舍政治家・田舍藝者

——たつた五ヶ月の主筆生活から——

松崎天民

◇

瀧田樗陰兄足下——拙い落語の三題噺めいた標題を、先づ以て咎め給ふこと勿れ。あの大震火後にホツとして、匍匐の甲州へ行つてから、八ケ岳颪冷たい二月の上旬、復興途上の東京市に歸るまで……。足掛け半年、滿五ケ月の地方新聞記者生活に、私は何を爲て來たか、何を視て來たか、何を經驗して來たか。思へばあはたゞしくも、夢の如かりし甲州の生活よ……なんかんと、こんなことを書いて見るのも、自ら嘲り自ら笑ふ果敢い慰めであるに過ぎない。僕、四十を過ぎて六七年、未だ安住の棲家を得ずして、あちらこちらと手さぐりに似た漂泊の旅をつゞけて居るのも………。人生わづか五十年、浮き世おや苦界おや、錢やしやんせ、の唄の文句にも似たるかなと、我ながら寂前のホロリとして、胸の疼きを感ずる次第であります。「新聞記者懺悔錄」を書いてから、新聞界には未練の無い筈、たゞ有緣の衆の一人として、見もし識みもした心易さから、何うして

再び「編輯室氣」の中に、沒頭するに至つたのか。それもこれも、あの大震大火にグヮッとして、一時の逃げ場所を編輯の園に隱れたかと思へば、人に感謝あり、世にお禮心こそあれ、更に少しの悔る所も無い。今はなか〳〵に忘れ難い貴き體驗の一つとして、過ぎて來た自分の足跡に擬うちつゝ、更に此の後の「私の生活」を立直しませう。親愛なる瀧田樗陰兄足下、「田舍記者・田舍政治家・田舍藝者」などゝ、拙い落語の三題噺めいた標題を、先づ以て咎め給ふこと勿れ。（三月二十六日朝）

一　甲州落ち

「地震當時から、ずつと東京でしたか？」

と、今でも、乘合自動車の中などで、久し振りに逢つた知人から、聽かれることがあります。

「いや、五六ケ月ほど、田舍の方へ行つて居ましたよ、甲州と云ふ所へ……」

「へえ、それは又、妙な處へ……」

「原操六氏と云ふ少壯辯護士がね、山梨民聲新聞と云ふのを創刊したので、その新聞の主筆と云ふ格で……。一寸道草を食つて來た形ですが……田舍も面白いですよ……」

「奥樣やお子供達も一緒に……」

「いいえ、私一人だけで、宿屋住居を遣つて居ましたよ」

「それは、それは……。あなたのことだから、隨分・發展したことでせう。酒の方にも、女の方にも……」

「何うしまして……。朝は九時か十時に出社して、晩の五時六時頃まで、殆んど萬年筆を握りづめですからね、そんな餘裕などはありませんでしたよ。地方新聞の編輯局は、忙しいと云ふことを承知して居ましたが、實際、好い經驗をして來ましたよ」

「主筆でも、そんなに忙しいのですか」

「第一面の方をも、受持つて居ましたからね、論說を七十行書く、署名した興味記事を百行書く、婦人欄を九十行書く。その他、萬年筆と題した三四十行の拾い集め物も書けば、三面の方へは匿名で、情死みたいな物を書くといふ風で……。多い日は一日四五時間に六百行、少い時でも二百七八十行から三百行ですからね……」

「精も根も疲れたといふ譯ですか」

「それほどでも無いが、杉村楚人冠兄から手紙が來て、凡そ新聞記者なるものは、そんなにベラボウに書くもので無いと叱られたことがありましたよ。一月に一回、五六日東京に歸

つて來た時だけな、ほんとの骨休めといふ氣持がしました……」

「さうでせう、さうでせう。でも、お達者で、何より結構ですね……」

と、瀧田哲太郎兄足下、こんな昔話をする程に、すべての月日は過ぎて行つたが、私にとつては、それは又、餘りに近い生々しい思ひ出の一つなのであります。

二　これ宿命

「松崎天民も、遂に都落か……」

東京から僅に六時間の汽車路にせよ、妻や子供は東京に殘して、單身で出かけて行つたにせよ、さすがに、一寸、厭な氣持がしました。何處へ行つたつて、住めば都と云ふ比喩があるに一體、私達は此の東京と云ふ都會に、執着を強く持過ぎて居る――など〻、勝手氣儘に片附けやうとしても、心持の何處かにチョッピりと、厭な暗い念がきざして居たことを、否む譯にいかなかつた。

田端の御殿と云はれる宏壯な原孫六邸で、百圓の旅費を受取つて、愈々甲州へ旅立つた時には、それでもホツとした安らかさがあつた。妻や子供達には濟まいなことだけれど、實を云ふと、私は一日も早く東京を出て　何處かへ行きたい氣持で、一杯になつて居ました。又しても脅かされる餘震や、三日目に當番となる不愉快な夜警や、ろくに美味い物を食べられないやうな、其の頃の東京の生活が、私には厭で〱堪らなかつた。折角、甲州へ行つても、一ケ月で歸るやうになるか、三ケ月で詰めるやうになるか、そこにも不安はあつたけれど、そんな事を慮る餘裕は、少しも有りませんでした。まだ濃厚であつた「地震氣分」の東京から、遮二無二と逃げて出たい心持で、落着かぬ日を送つて居た私は、泣き笑ひに似た妙な感情を抱いて、生れて初めての地方新聞記者生活に就いたのであります。

瀧田兄足下、あの大震火の前から、私には殆んど同時に、三つの耳寄りな仕事の話があつて、その一つが、此の地方新聞行なのでありました。他の一つは、フリーランサーとして、九の某新聞社から、一二ケ月ほど旅行をしてくれといふ話で、それにも私は心を動かされて居た。他の一つは、大阪の小林一三翁が、私を寶塚の少女歌劇に迎へて、そこの圖書館で、半生を靜に送らせやうと云ふ、同情ある志しでありました。舊友の近藤泥牛兄が、小林翁の旨を受けてその事を私に知らせてくれたは、あの大震前二日のことで、その手紙には、私が中央公論に書いた「新聞記者懺悔録」を讀で小林翁が深く同情されたこと

を、力強く書いてありました。

此の三つの中の一つを選んだことは、私の宿命であつたと共に、時節でもありチヤンスでもあり、同時に新聞紙に對する私の未練と執着とに因つたやうに思ふ。――

三　創刊氣分

山梨民聲新聞社は、甲府驛に近い橘町に在つて、平家建の日本家屋と、二階建の洋館と、一寸した構へに見えた。原、古屋、沖田など三氏の山梨法律事務所と合體で、裏の方に庭園を挾んで、バラツク式の工場が建てゝあつた。古い甲斐新聞を繼承したもので、十月三日に初號を出したが、もう六千六百何號かでその活字なども、甲斐新聞時代の古いメツ物が、澤山ケースの中に見えて居ました。

「秀英舍の奴、ほんとに怪しからんよ。十萬本から鑄造させたのに、發送を遲らせたものだから、臨留驛で震火をくらつて、初號の間に合はないぢやないか。愚圖々々して居ると縣會議員の選擧も濟んでしまうし、社は大損害を蒙つたよ。……構はないから、今日、第一號を發行しませう！」

社長原孫六氏は、東京から來ると直ぐさう云つて、愈々二日には第一號を編輯し、勇ましく產聲を揚げることになりました。編輯室は洋館の二階で、地震のため四面の壁は落ちた儘であつたが、東西南北とも硝子窓で、南の方に富士山の上半身が見えるのが、私には何と云ふことなしに嬉しかつた。甘い葡萄の食べられることゝ、富士山を初め、いろんな山の容を眺められることゝ、此の二つだけは、最初に感じた私の幸福でありました。

椽陰見疋下・同じ田舍新聞でも、社長の他に編輯が三五人、事務が二三人と云ふ、極めて規模の小さい社もあるが、民聲社は田舍の小新聞としても、記者の數は十名から居ました。私の他は何れも土地の人達で、政治部長の山岸活州君も、社會部長の村松察雨君も、土地では一流の名記者として、名實共に有して居ました。他には市役所を受持の駒井絲州君や、縣廳を受持の小澤痴呆君や、若い人々が四五人も居て、編輯の方の獻立だけは、十二分のやうに見えた。若い婦人記者をも入社させて、第一面に「婦人の生活」欄を造つたり、二面には「民笛」と云ふ投書欄を設けたり、今日新聞としては、割合に整つた紙面が出來ました。

「これで、活字さへ好ければなァ！」

と云ふほどに、紙面の凹凸だけが、私達には氣に入らなかつた。割合に新しい輪轉機の調子は良かつたが、紙型も印刷の方

も、僅に三人で始末をするので、日に依つて出來不出來のムラがあつた。それでも兎に角、氣分の變つた新聞として、世間からは注目されたやうであつた。

四　宿屋の飯

錫町の古名屋旅館に泊つて、私はそこから毎日社へ通つて居ました。大震の東京から、それ程の被害もなかつたらしい甲府へ行つて、久し振りに宿屋の飯を食ふ生活が、私には何よりも嬉しかつた。妻や子供達に別れて、仕事と遊びとのみに沒頭し得られる境涯が何となく自由で、ノンビリして何だか「生活の檻」の中から、放たれたやうな氣持がして居ました。

月給は三百圓と云ふ極めで、社から百五十圓、社長から百五十圓を受け、宅の方へ二百圓送つて、私は百圓で生活すると云ふ段取でありました。古名屋のやうな宿屋に居ては、とても小遣ひ錢も殘らぬだらうと、心配して居たが、最初の一二ケ月は、宿泊料も社長の方で拂つてくれた。私の生活を本位として云へば、決して高い給料ではないが、創刊早々の田舍の小新聞として、一人の主筆に三百圓も四百圓もかゝつては全く、遣り切れたものでは無からう。それも紙數が大に出て、廣告料の收入も澤山あれば、何の心配も無いけれど、一本の卷取紙を二日に使つたり、二本の卷取を三日に使ふやうたことで、何うして算盤が取れませうぞ。

「何うも、私一人に澤山の金がかゝるやうで、心苦しく思つて居ますが……。何うでせう、私は東京へ歸つて、原稿だけ送るやうにしては……。その方が第一社の經濟でもあるし、私も心持がラクなのですが！」

と、原氏に一再ならず云つたことがあつた。

「ま、何うかなるでせう、そのうちには……」

と、元氣潑溂たる少壯の社長は、心持の爽快な、豪快な人物でありました。そして夜になると、二三の料理店へ行つては、私達に酒を飲ませたり、女を見せたりして、何の屈托も無き相に、興じ合ふのであつた。

東京では神樂坂や神明や麻布や、四谷や道玄坂あたりで、ポツ／＼絃歌の聲が湧き初めた頃を、甲府の夜の町は殊に景氣立つて、何處へ行つても酒の香が漲り、女の匂ひが漾うて居るやうであつた。宿屋の一室に引込で、雜誌など讀で居るには、惜いやうな晩秋初冬の夜が、昨日から今日へ明日へと續いた。仕事をするにも、何となく張合があつて面白かつたが、社長に連れられてさんざめき歩くのも、氣分が變つて面白かつた。

瀧川兄足下、酒を禁じた昔の人であつたが、勸められる

なむこがと出來ず、山國の地酒に醉うて、浮かれるやうな幾夜もありました。

五　地方新聞

「甲府のやうな狹い土地に、新聞がそんなに出來て、よく遣つて行けるものですね？」

と、その頃、東京に歸つて來ると、逢ふ人毎に訊かれたものでありました。

「ほんとに、不思議な所だよ。山梨日々新聞といふ古いのを初め、峽中日報、山梨毎日新聞、山梨民友新聞、山梨民報と在つたところへ、今度は山梨民聲新聞が出來て、六新聞になつた譯さ、それに山梨勞資新聞といふのも、近いうちに出來るさうだから、實に盛觀を極めるといふ譯だよ……」

「で、發行部數は何んな風ですか」

「高々一萬三四千で、少いのは一本の卷取を、三日位に使つて居たのもあるさうな。中には輪轉機が無くて、他社で刷つて貰つて居るのもある位だから、紙數の點から云へば、お話になつたものぢや無いよ」

「紙數がそんな風では、廣告の方も大したことは無いでせうが、それでも編輯や事務の給料だ拂へて、工場の方の賃金も滯らないのですか……」

「何うにかこうにか、遣つて行けるやうだから、世の中は不思議なものさ。それに地方では、社長といふ人が、縣會にも出れば、世間にも顏出して、いろ／＼と働いて居るかられ。金の方の融通も、少しは付くのだらう」

「その民聲新聞は、政黨的に何う云ふ立場ですか。中立か、政友か、憲政か？」

「嚴正中立さ、所謂付で無しの眞正な……。だから僕の書いた短い感想的の論說も、政黨には八つ當りで、大に理想を鼓吹したものだよ。政治の事を書く、ウイルソンの死を悼む、レニンの計を哀しむ、甲府に待合を設置せよと書くと云つた風さ。水道が斷水しても、論說で厭味を云つたり、何でも彼でも、主張、批判の材料ならざるは無しさ……」

「新聞が最も遲れて居る論說の內容や形式に、一大改良を試みたといふ譯ですね。田舍新聞がそんな試みをしたつて、まだ／＼駄目でせう」

「でも、手前味噌では無いが、內容體裁の好いことでは、甲州第一新聞と云ふ觀があつたよ。活字も秀英舍と大阪から來て、次第に良くなつたし、全體に潑溂たる生氣が溢れて、仕事の仕榮えがあつたよ」

「田舎では、何んなに遣つたつて駄目ですよ。原さんも、東京で乘り出せば宜かつたのに、惜いことをしたものですね……」

「だが、原さんの故郷だからね。無意味な努力でも無いし、無意義な徒費でも無いよ」

六　宴會の顏

瀧田兄足下、地方の人々に逢つて、いろいろの話を聞くには好い機會だと思つたが、私は編輯局に引込だきりで、餘り世間へは出ませんでした。論説を書いたり、續き物を書いたり、校正をしたり、編輯をしたりして、その上、訪問に出かけるのは、何と云つても忙し過ぎたからであつた。

從つて土地の人々や、同業者達　逢ふのは、何時も宴會の席上に限られて居た。新聞社長とか主筆とか云へば、何んな宴會にも招かれて、上席か末席かに列するのが、土地の風習のやうになつて居ました。年末から新年にかけては、殊にその宴會が多くて、大抵は望仙閣と云ふ割烹店で、飲食するのが例でみつた。　三省樓と云ふ料理店もあり、開峡樓と云ふ洋食を食はせる家も在るが、大人數の宴會と云へば、先づ望仙閣と云ふことに極つて居ました。

私は其の望仙閣で、同志會の人々にも逢つたし、政友會の人々にも逢つて、政黨の事に熱して居る地方人氣質に、觸れたやうな心持がした。政友會山梨支部の幹事長で、堂々たる風采をして居る早川安吉君が、醉うて怒號つて居る姿を見た時には、如何にも甲州に來て居るといふ　持がしました。支部の總會か何かで、代議士の穴水要七と云ふ男が、「我が山梨支部は結束して、政友會に踏み止まる事にした」とか何とか仔細らしく報告して居るのを見た時には、代議士も田舎へ歸ると、好い心持になるものだと感心しました。郷里では滅多に醉態を見せぬらしい三枝彦太郎老人の眞面目な顏を見たのも昔は色男であつたらしい田邊七六翁の眞面目臭つた姿を見たのも、望仙閣の二階の廣間でありました。

東京ではもの丶數に入らなくとも、地方では長官〳〵で威張られる知事さんが、床を背負つて座つて居る姿は、堂々たるものであつた。色の黑い聯隊長、新聞記者に嫌はれて居た裁判所長、好かれて居た檢事正、謹り切つた內務部長、スベ〳〵した少年らしい顏の警察部長、百萬長者の商業會議所會頭　おつちよこちよいらしい縣會議長利巧らしい法學士文學士の市長……、何でも「長」と云ふ名の付いた人達が、何時もズラリと列んで宴會の方は榮えて居ました。

酒も不味いし、これぞと云つて、特色のある料理も無いくせに、甲州人は宴會好きかと思はれる程に、よく宴會で顔を合せた。何んな宴會にでも列席せねば、存在を忘れられるとでも思つて居るのか、ほんとに驚くほどに、能く努める人が多かつた。

七　甲府藝妓

望仙閣や三省樓などでも、宴會の夜毎に藝妓を見たが、打解けて傍近く顔や姿を見るには、他の料理店の方が面白かつた。彌生、三すじ、など云ふ家は、東京の待合風に出來て居て、落着いて飲むに適い家でありました。

大正元年の春四月、東京朝日の特派員として、二度目の甲府入をした節、岡山縣人會か何かで、私のために浪花節の絃を彈いてくれた吉次といふ老妓が居ました。その後、望仙閣で飲だらしい長田秋濤から、「今、吉次姐さんと共に、君の浪花節の噂をして居る」との繪端書が來た時にも、私は昔を懷しく思ひ起して居た。前年の晩秋十一月、一葉女史の建碑式に招かれて、甲府へ行つた時にも、馬場胡蝶、生方敏郎、村松梢風、松本泰、水木京太、高山辰三の諸氏と共に、望仙閣の大廣間で、私は久し振りに、その老妓吉次を見たのでありました。齢四十を過ぎて銀杏返しも小さく、背もチョコンとして藝妓など〻云ふよりもお師匠さんらしくなつた吉次姐さんの姿を見て、私は何んなに、感慨らしい氣持に打たれたことでせう。

その老妓吉次は、十二三年後の今日でも、一人か二人の抱へを置いて藝妓暮しの一筋道に、一向專念して居るのでありました。

「おや、まあ、松崎さん、おほ、ほ、ほ……」

と笑顔を見せてくれたところで、白粉で隱された小皺の奥には色香の營みに疲れた三十年の陰影を、何うして隱し了はせることが出來ませう。

「今度は、あなたも、此方の新聞ですつて、ね。いや、いやそんなこと、ありませんわ。結構でございますとも……。どうぞ、大にお遣んなすつて下さいまし！」

吉次は斯う云つて、飄輕らしくシナを造つて見せたりした。

「私は不見轉の新聞屋さんで、仕換へばかりして居るから、何時まで經つても丸抱へだよ。せめて、七三か分け位には出世したいのだが、好い旦那がつかないものだから、何時まで經つても、みじめなものさ」

「そんなこと、御座いませんわ。名聲隆々として、松崎天民甲州に來る……なんて、大變な人氣で御座いますよ。ほ、ほ

ほ」

「馬鹿なことを、……君も人が悪くなつたねえ、婆さんになつてから…。ま、宜しくお引廻しの程を願ひ上げますよ。は、は」

楞陰兄足下、私はこの吉次を振り出しとして、いろ〳〵の藝妓を見物しました。

八　燈火の町

近松葉の松葉と云ふ娘々した二十一二に、酒の上の浮かれ心をひかれたは、彌生の離れの六疊に、時雨催いの初夜であつた。チヤブ臺の側の方に、默つて淋しさうに坐つて居たので、最初は社長も政治部長も、居合せた勝沼のドクトルで、社友の近藤英亭氏も、殆んど其の存在を認めませんでした。

中年増の眉が濃くて、張もあり意地もありさうな、眼の美しいお玉さんは、彌生を一人で切廻して、お倶に出來て居る女でした。何處の料理屋よりも、酒が美味いを自慢にして、つき出しに飲める物を出すと云ふので、何かと云へば、濁河岸の三すじに行くか、此の彌生の客となつて、重要な會議もしたし、飲でへどれけることも多かつた。その席上の小會合に、紅一點の彩りらしく、つゝましやかに控へて居たのが、何と云ふことなしに心をひかれた其の松葉でありました。

「何うです。社長……。甲府の藝妓は人三化七どころか、人無し化十だと云つて、あなたは常に痛快に遣つ付けて居ますが、この妓は一寸、好い感じがありますね………」

と云ふと、原氏は既に、トロンとしかけた眼で、

「さうだ、さうだ、これは人五の化五ぐらゐだね。なに、松葉といふのか、好い妓だ、好い妓だ。おい、もう他に、女らしい女は居ないか………」

などゝ、興じ合ひ浮かれ合ひました。

「駄目ですよ、先生がた……。この妓にはチヤンとした方がね、指でもさして御覧なさいまし、命の問題になりますから……」

と、お玉さんは笑ひながら、それでも戯談でなく言ふのであつた。ハイカラの小ばんさんには、前の知事さんの呼吸が通つて居るし、目玉の蝶子さんには、前の土木課長とのいきさつがあるし、松葉さんには川邊長六さんがあるし……と。數へてくれば、大抵の若い美しいさうな藝妓には、東郡に旦那があつたり西郡に情人があつたり、或は町に好い人があつたり――して、アキモノ」は見當りませんと、お玉さんは憮然とするのであつた。

縣廳の人、銀行の方、議員さん、郡部の者といふ風に、せく茶との交錯狀態は何處の田舍も同じことに見えた。ただ、

け出されの連中が、横濱、神奈川、下谷あたりから入込で、大小合せて三百近くなつて居たが、夜の八九時頃になると、一人も出來ませんと云ふ位に、燈火の町は榮えて居た。
瀧田兄足下、田舍藝妓と一口に云つても、決して馬鹿にしたものではありません。

九　田舍政治

「田舍へ行くと、政友宿屋だの、憲政宿屋だのと云つて、政黨的に分れて居る宿屋がある。別府がさうだし、秋田がさうだし、前橋でもさうだつたが、可笑しいことには、藝妓にまでそんなのがあるね。甲府も政黨的爭ひは、烈しい方だらう……」
と、一通信社の一記者に訊かれました。
「都會では想像の出來ぬやうな事が、田舍では平氣で實行されて居るよ。宿屋でも談露館は政友會、佐渡幸は憲政會と極つて居て、互に其の宿屋を本陣にして居るから、面白いぢやないか。藝妓の方には、私は政友會で御座いますと云ふ程に見識張つた奴は居ないが、旦那の方から色分けをして見ると明らかに二黨派に別れて居るよ。僕の泊つて居た古名屋は、中立派の宿屋と云ふことになつて居るが、政友會も泊れば憲政會も泊るし、そこの所は便利だよ……」
「その古名屋の樋口半六といふ人は何でも縣會議員さんだらう、中立派か何かの……」
「新聞の中立と同じことで、極めて便利な自由な是々非々主義の中立さ。憲政會を山梨縣では同志會と云つて居るが、その方に居た小尾濟吉といふ男など、議長にして貰ふと云ふ約束で、當選すると過ぐ政友會に寢返つたが、……。田舍の人でも、政黨的の宙返りなど、實に水際立つた藝を見せるよ」
「憲政會に望月小太郎老あり、政友會に三枝彦太郎老あり、中立の政友臭味に若尾璋八兄ありで、甲州の天下も五月蠅いことだらう。それに小作黨だ農民黨だ、青年黨だと、次第に勃興して來たからね」
「少數の目ざめた連中は、農民を味方としたり、青年を藥籠中のものとしたりして新生面を開拓することに努力して居るが、まだ／＼駄目だよ。舊來の舊政黨人に引ずられて、多數は何の自意識も無しに、ワッショ／＼のお祭り騷ぎをして居るのだもの……」
「みんな、欺されてしまうのだね。前代議連中の報告や、駄ボラに迷はされて……」
「さうさ、縣會議員の選擧だつて、日當にならねば出ねえと

云つて、頑張つて棄權する者が多い位だもの……。地方人は目ざめたりなど云つても、それは高級の雜誌でも讀む極く少數の輩で、多くは依然として、舊來の舊夢を追うて居るのさ」

瀧田兄足下、私はそれだけ、論說の調子を下げて、平明平凡に、日常生活の一少些事までも、言論の題材としたのでありました。

一〇 主筆先生

私の方から訪問して、御意見でも伺はふと思ふやうな傑出した人物の居ないことは、何よりも淋しいことであつた。豪傑らしい風貌を具へた人や、長者らしい重厚の人や、俊秀らしい人物は居たが、一新聞の主筆として、膝を屈して教を乞ふ程の人材は不幸にして發見することが出來ませんでした。

——今日の時世に、清浦さんのやうな御老體を煩はして、内閣の首班に列して頂くことは、何と云つても、石が流れて木の葉が沈むやうな氣持がした。床次さんや中橋さん達が、穩健と云ふことを呼物にして、醜い内輪モメの空氣から逃げたことも何だか時節が悪かつたやうな心持がした。犬猿たゞならぬ連中が俄に護憲三派などゝ稱して、仲好しになつて騷いで居る圖も、私にはチヤンチヤラ可笑しかつた。宅の近所の高橋老人が、子爵を子供さんに讓つて、天下の平民になられたと云ふ宣傳なども、餘りに見えすいた拙い脚本であつた。何んなに正面を切つて、いろ〳〵の芝居をして見せてくれても、舊い政黨者流の思つて居ることゝ爲て居ること、爲やうとして居る事と、私達の思つて居ること、望んで居ること、持つて居ること、爲やうとして居る事とは、百里の隔りがあつた。——私達はほんとに、政治的に目覺めねばなりませんぞと、その年は力強く、熱心に眞面目に、論じもし說きもし叫びもして、私は果無い主筆先生の生活を自ら慰めて居ました。

瀧田兄足下、新聞記者生活二十五年の間に於て、最も愉快に感じたことは、金權にも官權にも何人にも、遠慮會釋するところなく、自分の信じて居る思ひ通りのことを、書き得るといふ境遇でありました。一日に四五百行の勞作は、頗る多きに過ぎて居ても此の思ふ儘に書き得るといふ事で、何も彼も償はれるやうな氣持がしました。たとへ短い四五ケ月の間にせよ、甲府と云ふ狹い一小天地であつたにせよ、また深い思想の根柢が無くて多くは實感に共調を置いた平凡な一家言にせよ、聊か自我を高潮し得たことは、今日も尚ほ私の人知れず愉快に感ずる一事であります　讀者の範圍は狹く、數は少くてもそれだけ反響の強いと云ふ一事は、何んなに地方新聞記者としての慰めであ

りませう。

新宿から二等の汽車賃、僅に四圓足らずの近さでも山や丘を隔てゝ居るためか、甲州の文化といふものは、東京に遠い山奥の國と云ふ感が、私には深く强かつた。

一一　月末貧乏

瀧田樗陰兄足下、新聞は次第に評判が好くて、七八千は刷つて居たが、月末になつて金になるのは、五千部餘しか有りませんでした。少壯氣を負ふて、遮二無二と新聞を創刊したものゝ、大震の影響や何や蚊やで、社長原孫六氏も月々の失費には笑つてばかり居られぬ樣子に見えました。

それに工場の方では、常に職工の出入があつて、手不足に困る日が多かつた。東京の社と違つて、文選も植字も一人で拾ひ、組みをするので、少し怠けられると、一段半ばかりの組上りに三時間を要するやうな事も、珍しくは無かつた。小さい地方新聞社では、經濟よりも營業よりも、工場の職工の一擧手一投足が、その社の盛衰を握つて居るやうな、そんな變態を見せるやうなこともあつた。編輯で何んなに勢ひ込んでも、工場の方が其の氣になつてくれぬと、折角の努氣を挫かれて、何事も手につかぬやうな事も、一度ならずあつた。

月々千圓か千五百圓位の缺損で、收支の算盤が取れる筈であつたが、廣告料は一段幾圓といふほどに安いし、取次店からは月末になつても、なか／＼紙代を送らぬし缺損は二千圓三千圓と云ふ風に續いた。それもこれも創業時代のことで、やがてはホッと呼吸の吐ける時もあらうと、私達までがそれを樂しみにして「良い新聞を造る」ことに、全力とまで行かずとも、七八の力はこれを傾倒したのであつた。原氏とても、百萬の富を擁して居ると云ふ譯では無し、豫算がそんなに狂つては、何うにも斯うにも手が着けられぬやうに、見えることもありました。

「なあに、今、一踏張りさ。金持に金を貰ひに行つたり、同志派や政友會へ渡りをつければ、少しは何とかなるだらうがとても五萬とまとまつた金など、工面の出來さうな筈は無いよ。嚴正中立で立つた以上、金のために機關紙になつたり御用を勤めたりすることは眞平御免を蒙りたい。新聞を廢刊しても宜いから、戰へるだけ戰ふうちには、又何とか都合の好い風が吹かぬとも限らないからね……」

社長は斯う云つて、月末の苦しみをも、樂んで苦んで居る風に見えました。幹部會議に依つて、給料は二十八日、賃金は三十日渡しと極めても、それが翌月の三日になつたり、五日になつたのは、止むを得ないことであり、致し方の無いことであつ

た。それが、地方新聞の常でありませう。

一二　珍人變人

　甲州に於ける古い新聞經營者で、原社長とは縁因の深い近藤永貞翁の倅に、醫師の近藤永貞と云ふがあつて、社友のやうな關係を結んで居た。千葉醫專を出てからは、葡萄の鰍沼に開業して、風變りなお醫者さんとして界隈に聞えて居ました。

　その近藤君は、茅原華山翁に私淑して居る人で、いろ〳〵の文章を書くことにも、勝れた興味を有つて居る風に見えた。家常茶飯の些事や道聽途說を材料にして、華山張や鏡花式や、或は漱石流の文を作ることに、得意らしく見えた。金持の家から、急病人の使者が來ても、容易なことでは動かぬが、貧乏人の家から迎ひ行くと、直ぐ出かけて行くと云ふ程に、當世には珍しい變人タイプの、然し常識的の紳士であつた。

　その近藤永貞君に、英亭といふ號みたいなものを贈つて、民聲誌上に其の作品を發表したのは、私の發見の一つであつた。世相の渦卷とか何とか、好い加減の標題をつけて、五日十日と云ふ風に連載したが、何處やらに宮武外骨翁の風味ある人情觀察には、一家獨得の強い持味が流れて居た。古くは長尾藻城とか近くは正木不如丘とか、醫師にして文を造るに巧な人は、決して稀有なことでは無い。近藤君も其の文品の上に、確固たる一家の風格を築き成すには、前途がまだ近くないが、何よりも面白いのは、この人物であつた。私の同郷の力士の常の花などは、まだ今日の横綱に昇らぬ昔、女のために病を得て、巡業の途次を一月餘りも、近藤君の家に寄食して、治療を受けたといふ談であつた。

　茅原華山翁が、山梨縣の南部で講演した歸途、甲府に滯在して居た二三日間、近藤君に禮を盡して、華山翁を歡待したらしかつた。義務教育のことや、農村問題のことに就いても、實相の上に立論して、一隻眼を具へた主張を公にして居た。

「何うです、醫者の方を廢業して、新聞記者になつては……」

と云ふと、近藤君は笑いながら、

「へい、ま、これでもものになるだらう……」

などゝ、頓興に笑つて見せたりしました。

　瀧田兄足下、田舍へ行くと、よくこんな類の珍しい人物が居て、私達を驚かすものであります。聞くところに依ると、私を民聲新聞社に迎へたは、この近藤君の提唱に、與つて力があつたさうで、醉ふと何時でも其の事を云つては、私を褒めてくれるのでした。

一三 遊興問答

「その近藤君とも、よく方々で飲だけれど、社長と一緒に飲み歩いた時の方が、私には多かつたよ。」

「料理に特色の無い土地だから、酒にも女にも、これぞと云つて、心を動かされるやうなことは無かつたでせう」

「酒も駄目、料理も駄目……。不思議なことには、牛肉だけは美味いのが食べられたよ。何しろ壽司屋でも牛屋でも、西洋料理屋でも蕎麥屋でも、藝妓の入る土地だからね。遊びの方にかけては、民衆的とでも云ふのだらうが、待合といふものが、一軒も無いからね。いざと云へば、その料理屋か壽司屋か蕎麥屋で、ちよい／＼の間さ」

「驚きましたねえ、蕎麥屋とは……」

「でも、構へは大きく堂々として、普通の料理屋と少しも違はないよ。櫻すしも大きいし、牛肉の吹寄せなども堂々として居るし、蕎麥屋の面持だつて、馬鹿にしたもので無いよ。その他、八百竹とか、よか櫻とか、大吉家とか、櫻花亭とかいろんな料理屋や壽司屋や洋食屋がある……」

「待合の代用としては、宿屋へでも泊るより他に、方策は無いのですね……」

「いや、大ありさ。市外の東光寺といふ所には、三樂莊と
ふ鑛泉宿があつて、連れ込みお泊りの專門さ。同じく湯
は、柳屋、明治溫泉など云ふ鑛泉宿があつて、毎晩十組乃
二十組の盛況さ……」

「で、その代償は何んな風です」

「玉が一時間一圓で、十二時から翌朝までが十圓さ。他に往復の自動車賃八圓内外、宿泊料が茶代祝儀とも十五六圓で、合計三十四五圓也と云ふところさ」

「安くはありませんね。東京に比して……。で、待合許可論の提唱となつた譯ですね」

「さうでも無いが、市中では十一時カツキリで、藝妓は引上げて、しまうもの、不便利この上無しさ。湯村行や東光寺行は、藝妓の方から一々警察へ屆けるのだが、何うも奇妙な取締りもあつたものだよ」

「日本全國を一貫した賣笑婦制度の確立と云ふことに就いてあなたは何か論じて居られたが、更にその感を深ふしますね」

梯陰兄足下、甲府よりの汽車中で、一知人とこんな話をした程に、甲府の遊びと云ふものは、奇妙に出來て居ました。役人も紳士も、料理屋も藝妓も、待合の問題に觸れぬことが、私に

は漸く合點されました。

一四　妻と子に

「妻と子に別れ居て」といふ題で、宿屋暮しの佗しい氣持を書かうと思ひながら、遂に一行も書けなかつたは、十二月上旬のことでありました。一月に五六日は東京の宅に歸つて、妻や子の顏を見て居たが、だん／＼月日の經つに從ひ、私は宿屋住居の孤獨の淋しさを覺えるやうになつて居ました。

家庭生活から逃げて出たいとか、何處かへ旅をして、ほんとの一人ぼつちで居たいとか云ふ氣持は、人生に窮屈して居る連中の上に共通した實感でありませう。私も最初の間は、甲府の宿屋住居が心易くて、久し振りに家庭の手枷足枷から放たれたやうな、一種の暢達さを感じて居たが、遂に全くの孤獨で居られぬことを、しみ／＼と感じました。そして不思議なことには、何人よりも、一番幼い下の子の俊郎のことが　何かにつけて先づ思ひ起されるのでありました。

社へ通勤の途上、十四五歲位の中學生の群を見ると、「俊郎も今頃は學校へ行く頃だらう」などゝ、愚なる父と笑はゞ笑へ、ツイ何と云ふこと無しに、ホロリとなるやうなこともあつた。「若しあの子が病氣にでもなつて、死ぬやうなことがあつたら…」などゝ、取り止めも無いことを考へて居ると、淚はとめ度もなく流れて、あとで「何だつまらない」と、自分で自分を笑ふやうなこともありました。いろんな藝妓達の姿を見ると、それを一々妻の姿に比べて見て、假に女房が戀しくなるやうなことも、笑つてはいけません、全く其の頃の實感でありました。妻から手紙が來る度毎に、「何か變つた事でもあるのではないか」と、胸をドキ／＼させながらも、暫く何の消息も無いと、家の事が氣がゝりになつたりした。

「こんな落着きの無い、出稼ぎのやうな境涯は、思つたほどノン氣なものでない。お前も一二ケ月くらゐ此方へ來て居ては何うだね……」

と、勸めて見たが、妻は其の頃からお化粧お着付の仕事を始めるとかで、夢中になつて居る樣子であつた。妻の其の仕事は、合同で造る筈であつた商人が、大馬鹿者であつたため遂に中止してしまつたが、それやこれやで私の一人住居も、脅かされ勝でありました。

瀧田兄足下、一面には斯うした私であつても、他面では持前の浮かれ心が出て、時には若い妓に心を動かされながら、三樂莊に冬の一夜を興がるやうな事もありました。

一五　幸福な人

小尾濱吉と云ふ宙返りの縣會議員が、議長にして貰つた祝の宴を望仙閣の大廣間で催した夜のことであつた。正面には知事、裁判所長、聯隊長を初め、商業會議所會頭、内務部長、政友會、同志會の長老達が、ブラリと顔を見せて居ました。

餘り知人の無い私は、何んな宴會でも、默つて一隅にひかえて、知つた顔の藝妓を相手に、チビリ〳〵と飲むのが例であつた。その夜は小尾議長の挨拶に、誰かゞ答辭を述べた故、藝妓のお座付などもあつて、何となく一座が浮き立つて見えました。私も珍しく浮かれ心になつて、正面に居た政友會の手塚正次老の前に行き、十二三年前に一度逢つて、御馳走になつた折のことを、十二三年後にお禮を述べたりした。拙いけれど手塚翁も、浪花節を自慢の方で、醉ふと大きな聲を上げて、奈良丸か何かの眞似をしたことがあつた。

「いよう、松崎君……。此の警察部長は若いからね。昨夜、我輩が浪花節を教えてやつたよ。君も其の方では、たしか達人の筈ぢやつたね……」

などゝ、右隣の若い警察部長を顧みながら、大分醉うて居る風に見えた。商業會議所會頭の矢島榮介翁にも、大正元年に逢つたことがあるので、私は其の前に出て、一別以來の挨したりしました。

「おウ、松崎さん、よく覺えて居ますよ。あの頃は東京[illegible]の方でしたね。さうもう十二年になりますからなア。……あなたは何うも腰が弱か無いですか、朝日のやうな大新聞を出るなんて……」

矢島翁は斯う云つて、隣席に居た内務部長と、顔を見合せるのであつた。

「さうだ、朝日は大新聞だもの、君も、も一度、朝日に歸つたら何うだ。あの社の上野精一君は、僕より一年前の獨法出だが、……僕はよく知つて居るよ…」

内務部長もこんなことを云つて、官僚らしい態度で、私に盃をくれたりした。

「ふん、大きにお世話だ。君達には判らないよ、人間の苦勞と云ふものが……。百萬長者の矢島さんや、大學を出るとすぐ官吏になつた内務部長の輩に、俺の歩いて來た人生の陥し穴が判つて堪るものか……」

と、樗陰兄足下、私はすんでの事に爆發しやうとしたが、場席を考へて辛抱して、たゞ

「君達は幸福人だよ……」

とのみ云つて、苦笑したこともありました。

一六　生々流轉

「横山大觀の作ではないが、俺はほんとに生々流轉の果敢い境涯に、僅に生きて居るばかりだ。幸福人の矢島榮助長者や世の中を威張つて通れると思つて居るらしい内務部長から、あんな事を云はれるなんて、俺も餘程どうかして居る……」

瀧川兒足下、何だか私自身の存在が、世にもみじめなことに考へられて、憤らしい氣持よりも、泣きたいやうな心持になつて、其の夜は酒ばかりあほりました。そして其の三四日前の深夜、櫻花亭で顏を見た藝妓のことが、不思議に眼前に浮かんで出ました。

「こんな晩には、あんな妓でも引張つて、湯村へでも行つて寢るに限る……」

二人で自動車に乘つて、東光寺の三樂莊へ出かけたは、十二時近い頃でありました。甲府郊外の山の手寄りで、丘陵を負ひ田畑に面して、三階建の三樂莊は、如何にも溫泉宿らしい構へであつた。浴槽は小さくて、湯も沸かし湯で、何の特色も無いけれど、四邊の落着いて居るのが、如何にも世離れたやうな氣持を起させた。そこには既に、幾組かの連れ込みが來て居て、キャツ／＼と騷いで居るのや、人前を憚るらしい低唱などが、何となく色めいて見えました。

私と一緒に行つた妓は、S子とか云つて、名古屋の生れで、十九だと云つて居たが、その肌は男のために、散々に荒み切つて居るやうな、捨ばちらしい調子が見えて居た。藝妓と云つても殆ど娼婦同樣で、少しの金にさへなれば、何んの厭な男にでも「あなた好きさ……」と平氣で言ひ得るやうな、そんな類の藝妓なのでありました。

「ね、先生……。あなたの事、櫻花亭の女將さんから承りましたわ。私ね、から見えましても、隨分、流轉して來た女なんですよ。新聞に書いて頂戴な、藝妓S子の半生とか、S子ローマンスとかして……。そりや、面白いのよ、私の半生は……」

こ　な調子で、油を向けられても、ウカと乘るやうな若さは、もう何時の間にか過ぎ去つて居ました。性慾の衰へを痛切に感じて、何んなに身悶えしても、機會を逸してばかり居る私の頃の私は、何んな女に對しても、最後の一瞬間になると、路傍の人のやうな、冷たい幻滅を感ずるのでありました。

そして、そんな晩などは、殊に、東京の妻が懷しくなつたり子供達に逢ひたくなるやうな眞面目な、私が頭をもたげるので

あつた。

一七　新聞人種

「私が何よりも感謝せねばならぬは、甲州の同業者達が、私のやうな異端者をもよく抱擁してくれたことだよ」

「同業者の交際は、地方に依つて隨分五月蠅いものですが、甲州は何んな風です」

「五つも六つも新聞があつて、競ると云ふことでは、かなり競爭して居るらしいが、社長とか主筆とか記者とかの交際は極めて圓滿に行つて居るらしいね」

「それに東京新聞の支局もあるから、いろ〳〵と面倒なこともあるでせう……」

「そんな事は無いね。朝日、日々、報知、國民、時事の支局長なども、宴會で度々逢つたが、みな好い人ばかりだよ。毎日の社長保坂さん、主筆の松村善助君、民友の社長上野竹影さん、主筆の小泉靜雨君、民報の社長堀口さん、主筆若尾君峽中の主筆清水晩翠君、と何れも紳士ぞろひだよ！」

「でも、甲州は小新聞が多くて、何うも何かにつけて、五月蠅くていかんと、誰でも云つて居るやうですよ」

「新聞に書いて貰つて、利益を得やうとする人達や、書かれて困る種類の人々にはそれは五月蠅いこともあるだらう。然しそれは何も、甲州に限つたことではなく、日本全體の新聞がさうで、社會一般がさうなんだからね。別に不思議は無いことだよ」

「東京でも、新聞が多過ぎて困ると云ふ人がありますが、甲府のやうな狭い土地に、五つも六つもあつては、何だか世間の方が、遣り切れぬのぢや無いでせうか」

「そこは新聞自體の優勝劣敗だよ。何んなに文化の程度が低いと云つても、善い新聞と惡い新聞に對する批判は、自然に世の中が差別をつけるからね。それほど、案じたものでもなく、心配したものでも無いよ」

「何ぞと云へば決議だ、大會だと、よく新聞の方から騒ぎ廻り居るが、甲府の新聞界でも、遣つて居るのでせう」

「一二度、遣つたやうだがね、新聞も飯を食はねば、生きて行かれぬ代物だからね。いざと云へば、金權に降伏したり、官權に屈伏したり、さまは無いよ。東京でもさうだから、地方は推して知るべしだ」

「民聲新聞も、兎に角、好い新聞の一つとして、相變らず出て居るやうですね」

「近頃は、社長が候補者に立つとかで、大にあぶらをかけて

居るらしい。原さんも新聞と代議士と、心忙しいことだらう」

一八　貧乏の話

瀧田哲太郎兄足下、私の方でも社に遠慮して、罷めたいと思つて居たし、社長の方でも私一人に、餘り金が掛り過ぎるので考へたやうでありました。それに最初は、兎に角、創刊のお手傳いと云ふことで、お互に氣輕く約束した事だけで、別に氣まづい思ひをしなくて、引上げることが出來ました。

それに生活向の事情から云つても私一人だけが出稼ぎすることは、徒らに失費のみ多くて、得るところは少いのでありました。それよりも東京に居て、惡文でも書いて居る方が、身體もらくでもあるし、妻や子供達のためにも、その方が力強いやうであつた。一管の禿筆を賴りにして、一家九人の生計を立て行くことは、かなり悲觀せられる責任であつても、矢張り東京に住で、東京の空氣を呼吸し、東京の氣分に觸れて居る方が私には何う云ふことなしに、心丈夫でありました。

甲府で入院中の原社長から、特使の者が來て、あなたの一身上の御都合に依ては、强て甲府に來て下さらなくても宜いとの口上があつたのは、二男の達郎が肋膜炎のため、歸宅して居た

時であつた。それでなくても、私の方から申出でやうと、一再ならず思つて居た際とて、私は一も二もなく、主筆職を退くことに極めた。そしてこれからは、親しい社友の一人として、折々寄稿することになつて居るが、東京に歸ると、方々へ出歩いたり、來訪者があつたりして、一週間に二面の寄稿も、怠り勝に過ぎて居るのであつた。「今度は餘り書き過ぎたから、當分は何も書かずに、ぶら〳〵遊んで居やう」と考へても、さて、何もせずに遊んでばかり居ては、其の日〳〵の生計にも差支へるやうな、實に心細い境涯なのであつた。

貧乏にかけては、徹底して居るらしい友人の添田啞蟬坊が來て、お互ひに「貧乏の話」をしたのは、ついこないだの事でありました。九十圓もするトンビを着て、百圓からの獺の襟をして、四十圓からの中折の帽子をかむつて居ては、如何にも金持らしく見えるけれど、何といふ貧乏な金持でありませう。

「それで宜いんだ、それでお互は、笑つて死ぬことが出來るのだ。松崎天民は何處までも、貧乏で宜いのだよ……」

と、瀧川玄耳翁も、先日來訪した時に、さう云つて笑つたことでありました。何れにしても、甲府へ行かずに濟むやうになつて、私は久し振りに、寛潤いだ心持になりました。

一九　思ひ出は

私に新聞記者の手ほどきをしてくれた結城禮一郎氏は、甲州の出身でありました。私を最初に甲州へ特派して、「水害地の初冬」を國民新聞に書かせたのも、結城禮一郎氏でありました。國民新聞に於ける私の記者生活に、いろ／＼の力と熱と、經驗とを授けてくれた人も、その結城禮一郎氏でありました。

私を二六新報に入れて　れた野澤秋城翁も、甲州出身の人であり、その野澤氏の旨を受けて、二六新報に入つては何うかと私に勸めてくれた人も、甲州人の堀内良平翁でありました。私の一人しか無い妹が生涯の良人として侍いた人も、甲州出身の人であつて、私には何と云ふこと無しに「甲州」が因緣づけられて居ました。東京朝日新聞の特派員として「甲州見聞記」を書いたことも、山梨縣と私とを結びつけた因緣の一つであつた。

さうした甲州の天地ではあるが、人情は何となく索漠として餘りに好もしい人間味と云ふものは、流れて居ぬやうに見えた。金持の多い山國であり、政爭の激しい田舍と云ふ以外に、餘り心を惹かれる人の世は無かつた。朝に夕に富士山を見て慰めたり、秋は葡萄の露に舌鼓を打つたり、或は御嶽新道の風光に、一日を觀賞に喜んだり、その他にはこれぞと云つて、懷しい甲州でもなく、戀しい甲府でもなかつた。四十幾つかのトンネルを越えて、遂ひに行きたい程の戀人をも、發見し得なかつた私に取つて、甲州の思ひ出は、たゞ秋の甘い葡萄のみであります。

それでも、あの大燒大火の後、たとへ四五ケ月の短い間にせよ、私と云ふ一人の存在に、人々がかなりの好情を寄せてくれたことは、忘れてならぬ思ひ出と云つて宜からう。二十五年を新聞界に衣食して居ても、「田舍新聞」の味を知らなかつた私に一種の記錄を作らせてくれたことは、原孫六氏の好意に負ふ所が、淺からぬのであつた。私はもうこれで、新聞界を退いてしまつても、何うやら心殘りが無いと云つて宜いやうな氣持がした。

「人々に送る手紙」や「新聞製作者の惱み」や、新聞に掲げたこれ等の續き物は、やがて私の本の中に、重要なページをしめることであらう。私は其の本が出たら、何人よりも先づ、甲州の人々の前に、デジケートしたいと思つて居るのであります。

瀧田兄足下、私の甲州生活も、思へばアッ氣ない、果敢いものがありました。

二〇　東京東京

——暫く甲府の方へ、出稼ぎして居たが、近頃は東京に歸つて、バラックの銀座界隈や、丸の内方面を歩き廻つて居る。地震があつても、火事があつても、東京と云ふ土地は、離れることが出來ない。旅を思うて旅に出ても、先づ東京が懐しくなるやうに、私達は生きて行く上にも、何時の間にか此の東京と云ふ都會に、不思議な愛着を感じて居る。當分は、いや思ふに一生涯、私は此の東京に居て、生活の喘ぎを續けて行くことであらう。——

瀧田兄足下、私は友人に宛た手紙の中に、前のやうな一句を書きました。何んなに惡いことがあつても、何んなに厭なことがあつても、何んなに苦しいことがあつても、何んなに惱み多いことがあつても、私は「東京に住む」と云ふ一事で、何も彼も慰められて居るやうな、幸福さを感じて居ます。そして可愛い此の自分と云ふものを、滅多に田舍稼ぎなどさせるものかと、ほんとに近頃はシミ〴〵と、いとほしい氣持になつて、自分ご自分の心を、身を、抱いて居るのであります

「さうですよ。御飯など食べられなくても宜いから、もう田舍へなど行くのは、およしなさいよ。一家親子が離れ〴〵になつて稼いだつて、それが何になりませう」

と、妻もさう言ふのでありました。家庭に囚はれ過ぎたり、東京に未練があり過ぎたりして、男が何うするものかと思つても矢張りかうして、東京に住で居る氣持と言ふものには、何とも云へぬ味はひが流れて居ます。その風味に陶醉して、やがて老の一歩に入るのかと思ふと、それが宿命であることながら、何だか行詰つたやうな心持もきざすのでありました。そしてこれから後の自分と云ふものが、一體、何うなつて行くことやら、更に少しも見當がつかないのも、笑止千萬ではありませんか。

甲府の社の同人からは、「何時ごろお歸りになりますか」と手紙が二三度來りしたが、私は「當分歸りません」とのみ、短い返事を出して置きました。近頃では近藤華亭君が、大に名文を書いて居るし、若い記者も三四人入社して、大に新しい氣分を紙面に漲らして居るやうである。此の上は新聞が益々發展して、原氏も代議士に當選してくれゝば、私も寢ざめが好いけれど……。神樣の思し召しと云ふものは、新聞記者の力ぐらゐで何うして想像が出來ませうぞ。

愚なる事ばかり申上げて、瀧田兄よ、私の此の長い饒舌は、少しくピントが外れました。……　（十二月二十八日午後）

泰山に登りて天下を小とす

田中貢太郎

泰山巖巖。魯邦所レ詹。奄ニ有龜蒙一。遂荒ニ大東一。至ニ于海邦一。淮夷來同。莫レ不ニ率從一。魯侯之功。〔詩經〕

一　泰安府

火車は汶河（オンヘー）の長い鐵橋を越した。四時すぎの明るい陽に照された、沙の黄ろな磧のひろびろとした上流には、尖りのある大きな山塊がうす靄にぼかされてゐた。私はそれが泰山であらうと思つたので、同行の下元君と小野君とに注意したがねんのためにと思つて、手帳へ『泰山』と書いて、並んで腰をかけてゐる支那人に見せた。それは指揮刀であらう長いサーベルを持つた將校らしい若い男であつたが、彼は瘦せたぼんのくぼのおち窪んだ首を振つた。

その山塊は徂徠山であつた。河のへりに立つてゐる裸木の梢のあたりがぼうと緑色になつて見えるのは、これから芽をふかうとしてゐる楊柳であるらしい。鐵路の左右は圃地になつて、その一色に赤黄ろく見える所には、麥の緑が見え、牛を追うて耕してゐる人の影が見え、青黒い柏の林が見える。林の陰には消え殘りの雪の光り

右側に一簇の民家がきて火車はちよとそこに停つた。膠濟鐵路の沿線にもその津浦鐵路にも至る所に在る聚落であつた。マッチ箱のやうな土屋がごたごたと並んで、同じやうに周圍にめぐらした土壁に陽炎の立つやうな麗かな陽が當つてゐた。車が停ると二等室の箱いつぱいに乘つてゐた支那の兵士が例によつて煩く昇降をはじめた。その兵士が動くと時をり大蒜の匂がした。この鐵路では兵士が豪くて頭等の扉のある室でないかぎり、これ等無賃乘車の客が傍若無人に出入するのであつた。その兵士の中には襤褸でくるんだ蒲團のかさばつた包みを持つてゐる者もあつた。巡警らしいのが繩で縛つた男を引きたててプラットホームに降りたつたのが眼に注いた。私は車站の名が知りたいので、それを手帳に書いて復た彼の將校に見せた。將校

は私の鉛筆を執つてそれに『大汶河口』と書いた。柵の外の楡の裸木の並んでゐる所には物賣りがゐて、それが淡巴菰や餅の油であげたやうなのを盛つた箱を柵の間から差し出して口口に喚いてゐた。裸木の梢にはともすると小枝を寄せ集めてこしらへた小さな鳥の巣があつた。それは鵲の巣であつた。

私達はその朝、曲阜の孔子廟と郊外の孔子の墓處とに詣でて曲阜の車站を一時四十分發になつてゐる火車で泰安府に引き返してゐるところであつた。青島を經て濟南に來、濟南から曲阜に行つた時は夜であつたから、引き返してゐるとは云ふものの、それは生面の土地であつた。漠漠とした平野、左の窓から見ると赤黄ろくたらたらと擴がつた岡地の果にもうす靄に包まれた山の姿があつた。

窓ガラスをのけたならのんびりした牛の聲、雞の聲、犬の吠ゆる聲も聞こえたのであらう。『東北堡』と云ふ車站を離れてから右の窓から左の方に長く波のやうな支脈を曳いた大きな山の尖りが見えて來た。それが泰山であつた。汶河の支流になつてゐる淺い流れが水際に薄い氷を置いて流れてゐた。火車はその流れを渡つて泰山の左寄りに高まつた丘陵の麓へと行つた。

泰安府の民家はその丘陵の右隣に見えてきた。泰山の裾野の斜面に長方形に城壁をめぐらした城市で、泰山はその上に南嶽の山水圖にある岩山の巌巌たる姿を見せてゐた。火車はその泰安縣城の西端に停つた。そこには大きな車站の建物があり、その傍には鐵路直營のホテルがあつた。私達はその火車から吐き出されたやうに群がつて降りて行く汚い乘客に交つておりて行つた。

この客を目的にしてたくさんの客引や苦力が來て、客の手荷物を持たうとしはじめたので、忽ちそこにはどよめきが起つた。中には掠奪するやうにその手荷物をひつたくつて無理やりに連れて行かうとする者もあつた。蒲團包みのやうな大きな荷物、手の附いた籠に入れた荷物、赤い紙を被せて結えた土産のはいつたやうな竹器、さうした荷物がそれぞれ三つ四つの手に支へられて淀んでゐるのも見られた。私の手荷物にも黑い服を著た長い手が來た。

『なにするんだ。』

私はさう云つてその手を拂ひのけてから後れてゐる小野君を待ち下元君に追ひついて、車站の對面になつた鐵路賓館のホテルへと行つた。

外國人を目的にして建築した旅館は純然たる西洋館で、裏庭から正面に岡を壓して聳えてゐる泰山の姿を仰ぐことができた。裏庭は廣い枯芝の芝生でうすれかけた夕陽の光がそこにち

らちらと動いてゐた。私達は宵と朝との食事も共に一人ぶん六ドルと云ふことにして、それぞれ別の室へと入つた。

私達は食事の時間まで横になつてゐることにしたが、泰安の城内に泰山の神を祀つた岱廟(たいべう)のあることを旅行案内で讀んでゐるので、それを見に行くことにして、腸に故障のできた下元君を遺し、小野君と二人で人力車で出かけて行つた。

ホテルの横から右に通じた路を行つた。そこには古道具、古靴、野菜、獸肉、豆腐、饂飩の類を賣つてゐる汚い小店が左右に並んでゐた。車はその間をぬけて城壁に沿うて流れてゐる谷川を渡り、そこから城內へと入つた。もう陽が入つてゐるのか明るい陽光はあつても、何所となしに暗い淋しいところがあつた。

狹い街路の兩側は皆商店で、暗い穴倉の裏のやうな感じのする店の中に、日本品らしいメリヤスのシャツやクツシタのかけた雜貨店もたくさんあつた。油の壺を並べて棚に赤い蠟燭を置いた店もあつた。鞋店、衣肆、帽肆、車はその街路を暫(しばら)く行つてから左に折れた。そこは岱廟の前の廣場で、三丈の磚壁を左右にした大きな樓門がうすれかけた陽光の中に浮き出てゐた。その左寄りには檜の三層になつた古雅な樓閣が今にも鳥が飛びたたふとしてゐるやうな形をして磚壁の上に聳えてゐるのが見えた。それが有名な角樓であつた。

車は右に曲つて樓門の中へと入つた。門の左右には物賣る店があつて人が雜踏してゐた。玩具を賣る店も見えた。賣卜者、店らしいものもあつた。支那の神祠佛閣の至るところに見る繪畫の一幅であつた。

車は樓門をぬけて左に切れ、そこにも物賣る小舍の二三軒並んでゐる所へ行つて停つた。私達はそこで車をおりて、小野君の車を曳いてゐた車夫を伴れて左の方へと行つた。それはちやうど角樓への方角であつた。境內には柏などの綠葉樹が森森と幹を並べてゐた。

小さな土壁の間の門をぬけると、角樓の後の空地になつて、そこに古木の裸木があつて根をもとに碑が建つてゐた。それが唐槐で斧の痕のある碑には何か文字があるやうであつたが見えなかつた。まだ暮れたせいでもないだらうと思つて、空を見ると空には藍の色が濃くなつてゐた。もうすぐ眞暗になつて來る、暮れないうちに環詠亭へ行かうと思つた。私は小野君を急がして、はじめの土壁の門を內へ入り、それから左に沿うて步いた。

大きな石の龜を臺にした大きな碑が一つ二つ黄昏の灰白色の中に見えてゐた。それは漢碑か唐碑であらう。しかし私はその

碑よりも環詠亭の中の秦碑の淺缺が見たかつた。秦の始皇が支那を統一した時、李斯の筆になつた自家の頌德碑を六ケ所に建てたが、その一つは泰山の絕頂にあつた。ところでその碑は、火のために碎かれて二個の缺片となつたが、それには十字だけ篆書が見えてゐるので、環詠亭へ持つて來て、龕の中へ入れてあると云はれてゐた。その環詠亭には歷代の登岱者の題記した石刻が墻の中に塗りこんであつた。環詠亭はその左の壁の內にあつた。私達はその中へと行つたが、もう暗くなつて墻の中に所所石刻らしいものが見えるばかりで、秦碑の入れてある龕のある所も判らなかつた。車夫に聞かうと思つて口を利いてみても、片ことの支那語であるから容易にその意味が通じなかつた。私達は仕方なくそこを出て、大きな碑を透し透ししながらその境內にまだあると云ふ漢柏宋槐などのことを考へ考へ、泰山の神の塑像を置いてある正殿の方へと行つた。

　そこにも一つの樓門があつた。それをぬけて石橋を渡つて行くと、岱廟の高い高い正殿が暗い中に建つてゐた。二層になつた檐の上の檐下に匾額があつたが無論文字は見えなかつた。正殿に行くには廣い壇の上を通り石階をあがつて行くのであつた。その正殿の廊下には五六人の支那人があがつてゐたが、私達と入り代るやうにおりて來た。私は廊下にあがる氣がしないので壇の上に立つてゐた。小野君はあがつて扉の格子の間から暗い中を透すやうにして見てゐた。

『大きな、像があつたんですよ、雲つくやうな、』

　小野君は歸りに私にこんなことを云つた。石橋を渡つて中の樓門を潜つたところで、右の方を見ると唐槐のあるあたりの空に小さな爪のやうな月が、それは眞黑い空を地にしてほつかりと光つてゐた。

『月が出てますね、』

　私は小野君に注意した。

二　泰山

　私達は翌朝七時に出發することに定めて早くから起た。私の室には上海生れだと云ふ日本語のできるボーイがついてゐた。ボーイは私達の云ひつけどほり轎の約束をして來た。彼は一挺の轎へ三人の轎夫をつけることにして一挺往復三ドルに定めて來たと云つた。泰山の轎は險難の場所へ行つた際、酒錢をねだると云ふことを聞いてゐたので、酒錢は首尾よく歸つて來たなら客一人につき一ドルづつ出さうと云ふやうなことも云はしてあつた。

　六時頃になつてうとうととしてゐると、彼のボーイが來て入口

の扉を叩いた。で、起きて顔を洗ひ、服を著けて廊下へ出た。空が曇つて今にも雨になりさうに見えてゐるが、中止することもできないので、出發の用意をしてゐると、食事ができたと云つて知らして來た。

食堂には時間が早いので他の客はゐなかつた。三人が一つのテーブルを圍んだところで、ボーイの一人が傍のカーテンを捲いた。泰山はこのガラス戸の外に正面に姿をあらはした。その泰山の主峰から左にすこし離れたやうになつて聳えたのは傲徠山であつた。泰山は岱宗とも云つて支那五岳の主になつてゐる山である。舜が堯の後を承けて巡守して以來、秦、漢、唐、宋の歴代の帝王をはじめ、清朝では康熙乾隆の二帝までが巡幸して、親しく天を祭つたと云ふ傳説を持つた山で、私達が登岱せんとするのも、さうした傳説に興味をひかれてゐるからであつた。

泰山は亦岱山とも書く。復た太山と書いてある物もある。古の齊魯の平地に崛起した山で、高さから云へば海拔僅かに五千四百尺、日本の里程にすれば二里內外に過ぎないが、私達はみやうに緊張してゐた。

食事が終つた時はもう七時を過ぎてゐた。それでも四時間あれば上下ができると云ふことを聞いてゐるのであはてなかつた。そして濟南の旅館からもらつて來てゐるサンドイツチのおりを持つて、ボーイに送られて外へ出た。

庭を左に横切つて行けばホテルの正門へ出、右へ行けば昨日から往來してゐる通用門であつた。轎夫はその通用門の口に立つて顏を並べてゐた。雲がすこし晴れて碧い空の地を見せてる所があつた。

通用門の口には轎を置いてあつた。竹を荒く編んで椅子のやうにしたのに、左右に柄のやうな二本のひらべつたい棒を縛りつけ、その棒の端に革紐を著けたものである。そして客の脚の行く所には紙鳶のやうに紐がさがつて、それにつるした横木に趾を載せるやうになつてゐる。私達が乘ると轎夫は革紐を肩からはすにかけ、棒の兩端にかけた手に力を入れて、やつとこさと持ちあげるなり歩きだした。

轎夫は前後になつて歩いたり、並んで歩いたりした。並んで歩く時には客の體は横向きになるが、そのかはり前後を見ることができて面白い。私達は昨日の郊外の人家を右斜に見て、麥圃の中を舁かれて行つた。一寸位出た麥の芽に微風が見える。轎夫達は土の盛りあがつた所や、小溝のへりのやうな傾斜のある所を選んで歩いた。七八疋の大きな犬がじやれあひながらその左傍を通つて走つて行つた。肩と胸とに白い斑のある雌雄ら

しい鵲が、樂しさうに鳴きながら麥畑の上でもつれあつてゐたが、私達の足音に驚いたのか別れ別れになつて傍の裸木の梢に飛んだ。

城壁と一緒になつた岱廟の磚壁が近く見えて谷川が來た。それは昨日城內へ行く時に渡つた流れらしい。すこし流れてゐる水の底に青い藻が生へて其所に空の雲が映つてゐた。上流には柳の裸木が綠の影を見せてゐた。

黑い畝ばかりのやうに見えてゐた。泰山の麓に柏の木が見え裸木が見え、黃ろな土の肌が見えて來た。右には岱廟の正殿の背後の甍。

新らしくつけたのか修繕したのか沙と小石の交つた汚れめの見えない路であつた。その路は斜に麥圃の中に通じてゐた。墻壁に圍まれた五六の瓦屋が路の左に見えて來て、路はそこで本道の廣い道路に合した。それは玉皇閣で、本道のはうにあつた泰山の登山口となつてゐる岱宗坊の坊門はもう後になつてゐた。そこから本道を右に切れると、老君堂、群玉庵、王母池、呂祖洞、虬在灣、小蓬萊、飛虹嶺、東眼光殿など云ふのがあるが行かなかつた。私達はその玉皇閣の壁に沿うて步いた。蔦の這ひまとふた坊門がすぐ來た、それには孔子登臨處と刻んだ文字があつた。そこは泰山の第一天門になつてゐた。

私達はそこでちよと轎からおろされた。土地の事狀に明るくて、詞さへ判れば上下共におりなくてもいいが、土地の事狀に暗いとみると、よく轎からおろされると云ふことも聞いてゐたが、たまには步くはうも面白いので、云ふままにおりて步いた。そのあたりから石磴がありだした。案內記にはこの泰山の石磴は南天門に至るまで六千七百餘級ありと書いてあるが、そのあたりは三四段あるかと思ふと、もう平地になり、平地になつたかと思ふと二三段の石磴が來るのであつた。

そのあたりは路の兩側に民家があつて、物賣る店もあつた。馬蹄銀の形にした紙錢や赤い蠟燭を並べた家もあれば、淡巴菰の袋を並べてゐる家も見えた。そこの路の上に紅く塗つた樓門があつてそこを紅門街と呼んでゐるが、その紅門街の紅門の名の由つて起つたのはその西北の山中にある赤い色の巖石からである。

泰山名物の乞食が來はじめた。小供もあれば老婆の姿も見える。皆手に手に籠の蓋のやうな物を持つてゐる。路の眞中につくばつてゐる不具者のやうな男の姿も見える。轎はそのつくばつてゐる乞食の頭の上をすれすれに行つた。

路の左に聳えた巖石に文字の刻んであるのが眼について來る。それが泰山に有名な摩崖碑である、詩的な字句や道德的な

短語や、人の姓名やそんな物が至る所に刻んである。紅い樓門が復た路の上に跨つてゐる。それは萬仙樓で右の溪には長い間氷つてゐたのがやつと解けて、流れることができずに所所に溜つてゐる水が見え、左の巖石の崩れかけた崖には柏の老樹が深緑の枝葉を張つてゐる。石に石を倚せかけたり、巖窟の口を塞いだりしてこしらへた原始的な住居が眼について來た。

一簇の土屋が路を挾んでゐて、その右側の溪に倚つたはうの壁の丹い土屋が見えた。それが尼僧で知られてゐる斗母宮で、溪の崖の傾斜のゆるい所には麥が見える。溪の對岸の丘の上に數十本の桃の木が植えた土屋はひどく懷かしく思はれる。鷄の聲が何所からか聞こえて來る。

斗母宮の前へ行くと轎夫は復た轎をおろした。私達は斗母宮の門內へと入つた。正面と左とに佛像のある堂があつて、その左手の入口に十八九に見える尼僧がゐたが、黑い支那服を著てさかやきを延ばしてゐるので、口紅をしてゐなかつたなら男とも女ともちよと判りかねるところであつた。下元君と小野君とはそこへ銅貨(ドンツル)の賽錢をあげて笑つた。

轎夫達は斗母宮の下手になつた餛飩屋のやうな店で物を喫つてゐた。轎夫の一人は轎をおろした時、私に酒錢をねだりかけたが、私は、

『ホテル、ホテル、』

と云つてから首を振つてみせた。私達は轎夫達の歸つて來るのを待ちあはせて出發した。

そのあたりから山の傾斜がひどくなつて來た。傾斜のひどい所には石磴が設けてあつた。路の右側の溪の崖に倚つた所に乞食のやうな男がゐた。それは高粱の莖を積んで、その中へ半身を入れ、枕頭にある石でこしらへた竈に鍋をかけて火を燃やしてゐたが、私達の姿を見ると、そのまま右の手をさしだして何か云ひだした。

『おい、世の中に何が橫著なと云つても、これほど橫著なものはないね、』

私はさう云つて前の轎に聲をかけた。寢て鍋の火をたきながら物乞ひをする、私はおかしくて聲を出して笑つた。私の轎夫も私の顏に笑顏を向けた。

高老橋と云ふ橋が來た。それを渡つたところで巖の側面に『洞入佳境』と刻んだ文字があつた。巖の容にも木にも趣が生じて來た。そのあたりから二つに岐れた溪におりて、對岸の小丘の背を越せば一方の溪に『石經峪』があつたが、何時の間にか行き過ぎてしまつたので、歸りに見ることにした。

俗に東西橋(トンシンツ)と呼ばれてゐる橋が來て、路はその溪の右側に沿

うやうにたつた。その橋には登仙橋と云ふ名があつた。柏の老樹が密林をつくつて寒さを感じて來る。そこの巖に柏洞と刻んであるのが見られる。轎夫に讀ますとローソンと云つた。小舍があり、石を積んだ家があり、鷄の遊んでゐるのも見られる。そのあたりは巖に赤があつて枯草が黄ろな地をこしらへてゐた。崖の上には雜木の裸木も見える。子供がその住居の中から出て來て籠の蓋をさしだす。その子供を數人伴れた女の姿も見える。

十人二十人と云ふやうに群をして支那人が上からおりて來るのに逢ひだした。その群の中には必らず一人が三角の黒のへりをした小旗を持つてゐて、それには泰山進香と書いた文字が見えてゐた。私は今日はきつと泰山の神の祭日であらうと思つた。そして先夜岱廟で爪形の月を見たことを思ひだした。その日は支那の二月五日であつた。私はふと書經の『歳の二月東に巡守して、岱宗に至り、柴して山川を望秩す』と云ふ文句を浮べた。

柏樹の間から樓門が見えて來る。石磴は曲折してゐる。その樓門は壺天閣であつた。それを入ると元君廟と玉皇廟とがあつて、食物を賣る人もゐる。崖には小亭が見える。元君廟の背後の崖には、乾隆帝の御筆を刻してあるのが見られる。

急傾斜の螺旋形に登つて行く石磴がそこから通じてゐた。廻馬嶺と刻んだ坊門がそこにあつた。私は自分で轎からおりて徒歩であがつて行つた。二百級の石磴をあがりつめてふりかへると、火車の中で見た徂徠山が低く下の方に見える。徂徠山に近く平野の中を流れてゐるのは汶河であつた。『徂徠の松、新甫の柏』私は詩經の文句をいい氣持ちになつて浮めながら、徂徠山の姿にちよと見入つた。溪の下には泰安府の民家と城壁。

そこには三大士殿があつて、道士の一人がさも銅貨をあげて行けと云はぬばかりの顏をして、私のはうをぢろぢろと見た。

十二連盤の六百餘級の石磴がすぐ來た。私達は復た徒步であがつて行つた。あがりつくした所は馬の背のやうになつた所であつた。そこに坊門があつて中天門の文字が見えた。そこは第二門であつた。そこには三四軒の民家があつて物を賣つてゐた。そこには石のきめが虎の斑に似てゐると云ふ石もあつた。廟もその傍にあつた。それは黑虎廟とも二虎廟とも云つてた。その附近の山陰に見える二三の家は歐米人の別莊であつた。そこから前方の頂上に近い南天門を遙に仰ぐことができた。

轎夫は復たそこで酒錢のことを云ひだした。私は復たホテルホテルと云つて相手にしなかつた。轎夫はそこでまた物を貰ひ

だした。私達は朝陽洞あたりで晝飯を喫はふと云ふことにしてゐたから、そこに長く休んでゐる氣はしなかつた。私達は轎夫を殘してからその丘を前方へとおりた。

傾斜面をおりつくすと路はやや平坦になつて來た。增福廟と云ふのが柏の林の間に見えてゐたが、私達は氣づかずに行つてしまつた。溪が狹くなつて路がおしつまつた所に瀑布があつたが、水は涸れてゐた。そのあたりは一めんの摩崖碑になつてゐる。瀑布の傍に趣のある石亭があつたが、私達はちよと覗いただけで轎の人となつて、木橋を渡りそれから溪を右にして嶮しい石磴をあがつて行つた。三株の老松があつてすこし平坦になつた所が來た。傍には茶を賣る一軒の家もあつた。それは秦の始皇が泰山に登つた時、雨をその下に避けたので五大夫に封じたと云ふ傳説のある松であつた。もう山の木は松になつて柏は見えなかつた。

溪の底巖の陰に雪の殘つてゐるのが眼に立つて來た。うち陽が射して來ることがあつた。五大夫の松から朝陽洞が來た。洞穴があつてその傍に二三の民家と小さな廟とがあつた。洞穴の口には一人の老人が臺を据えて物を賣つてゐた。そこから前岸の數十丈ある巖壁に大きな文字をたくさん彫りつけた摩崖碑が見られる。それは乾隆帝の朝陽洞の詩を刻したもので、御風巖とも萬丈碑とも云はれてゐる。その一字の大きさは三尺角あつた。

もう十一時を過ぎてゐた。私達は朝陽洞附近で食事をすることにしてゐたが、茶をもらふやうな所もないので、そこを通り越したが、先にもいい所がありさうにもないので、とうとう溪の上の巖の上へ出て、持つてゐたサンドイッチのをりを開けた。轎夫の一人が下から持つて來てゐた瓶を急いで持つて來た。それはホテルから持たしてよこした食物で、サンドイッチ、茹鷄子、菓子などと共に、三本のビールも入れてあつた。

『どうもホテルからよこしたと思つてゐたよ。』

と下元君が云つた。下元君ははじめからホテルから何か來てゐるやうだと云つてゐたのであつた。新らしいサンドイッチが來てゐるのに、古い强くなつた物を喫ふこともないので、これを轎夫の一人にくれてやらうとしたが、轎夫は手を振つてとらなかつた。泰山の轎夫は回回敎徒であるから豚の入つた物は喫はなかつた。菓子をやると取つた。私は飲んでしまつたビールのビンを溪の中へ投げやうとした。

『ア、ア、ア、』

轎夫の一人は驚いたやうに止めながらそれを持つて行つた。食事をしながら見ると頂上のはうからおりて來る人の群が非常

に多い。

　食事が終ると私達は復た轎に乘つた。左右の峰はますます迫つて巖はますます奇に、十八盤の千八百餘級ある石磴が天梯をかけたやうに南天門に達してゐるのが見られる。私達は昇仙坊とした石門のある所で徒歩の人となつた。そこには南極老の祠もあつた。私達は前を行く人の靴が額に來さうに思ひながらあがつて行つたが、途中で苦しくなつたので轎に乘らうとした。轎夫は乘せまいとして二人で私を腕にかけてあがらうとした。私はふりはらつていきなり南天門をさして驅けあがつた。

　南天門の内には關帝廟があつた。私達は南天門の二階へあがつた後に、左のはうに見える枯草の峰へとあがつた。それが月觀峰であつた。

　私達はすぐおりて關帝廟へまで引き返し、それから轎に乘つて右の頂上へと行つた。南天門の傍には二十戸ばかりの民家があつて、それが路の左右に檐の低い土屋の口を見せてゐた。

　碧霞元君廟の朱門と大きな建物が見えて來る。それは支那人の禍福をつかさどるために崇敬せられて年年數十萬の善男善女をひきつけてゐる神であつた。私達はこれには興味がないので、轎夫達をそこへ殘してその横から上へ行つた。そこに東嶽廟があつた。それは泰山の山靈を祀つた廟であつた。その背後の懸崖に唐の玄宗帝の御筆の祀泰山銘の文章を刻んであるが、その高さは約四丈五尺、廣さ一丈六尺餘と云はれてゐる。宋の眞宗、淸の乾隆、康熙帝などの筆蹟も附近に見られる。西方には靑帝觀、碧霞元君の寢殿、孔子廟などがあつた。

　私達はそれから崖を這ひあがるやうにして頂上へと行つた。頂上には雪が多かつた。そこに玉皇廟があつた。あがり口に大きな碑があつて、何も刻んでない石の面に寒さのためにからびた苔が生えてゐた。それは秦の始皇の建てた碑とも、漢の武帝の建てた碑とも云はれてゐる碑であつた。狹い玉皇廟の境内には泰山の巓石と云はれてゐる巖石が土中から頭をだしてゐるのに、石の瑞籬をしてあつた。それは明代に掘りだされたもので古帝王の天を祭つた祭壇の舊跡と云はれてゐる石である。私は復たその石に對して、『古は泰山に封し、梁父に禪せし者七十二家』と云つた管仲の詞を思ひだした。『孔子泰山に升り、性を易へて王たるを觀るに、得て數ふべき者七十餘人、得て數ふべからざる者萬數なり』と、史記に引いた韓詩外傳の詞もそれと同時に浮んで來た。私は命を革めて帝王となつた者が、此所で柴を焚いて天を祭る場合を考へて見た。そして現實の吾れに反つてみると、汚い乞食のやうな道士が傍へ來て香錢の催促をしてゐるので、二つ三つの銅貨を投げて出た。

玉皇廟の東に高い丘があつた。そこは日觀峰であつた。私達はそれから山上の眺望をほしいままにするべくそのはうへと行つた。玉皇頂と日觀峰との間になつた低地に二つ三つの碑があつた。その背後の方の小さい碑に『孔子小天下處』としてあるのが眼についた。私は兒戯に類してゐるその碑をおかしく感じたが、すぐさうした感じはなくなつて、物を懐かしむ心でこのまはりを歩いた。そこには『巍巍蕩蕩』とした大きな碑があつた。

私は雪の劍のやうになつたのを折つて、ほてつた咽喉を潤しながら日觀峰へと行つた。そこには乾隆帝御筆の碑があつた。そこの南の懸崖の所には垣をしてあつた。そこは廣い眺望を持てゐたが、雲が一めんに四邊を罩めてゐて、徂徠山と汶河がやや明に見えるばかりで、他は模糊として見えなかつた。秋晴の日には見えると云ふ瑯琊の海は無論見ることはできなかつた。

私達はすぐ碧霞元君廟へとおりた。もう一時になつてゐた。そこには轎夫が待つてゐて、すぐ私達を乘せて出發したが、降り坂の路は石をころがすやうに一時間もかゝらない内に東西橋へまで歸つて來た。私達はそこで行き路に見落してゐた石經峪を見るつもりで、橋を渡つた所から溪におり、その前溪になつた溪へと行つた。

明るい陽が出てゐた。此方に低く溪一ぱいに濶がつた大巖石には、前岸に近いはうに三四人の者がゐて、起つたり蹲んだりして何かやつてゐた。それがその巖石に彫んだ金剛經の經文の文字を石刷にしてゐるところであつた。私達はすこし流れてゐる水を越してそのはうへと行つた。

水のために磨滅して二百字ばかり殘つてゐる七八寸の長さのある文字は、石刷のために周圍が墨汁で眞黒になつてゐた。紙をその文字にあてての掌で押してゐるのもあれば、刷つた文字の墨汁を乾かしてゐる者もあつた。私達は土産にと思つて、刷りあがつたのを見はじめたが、どうも思はしい文字がない。それに墨汁もわるければ紙もわるい。

『さあ、早くしやうぢやないか。いるなら天津に知つてる人がある、その男に賴んで買つてもらうふぢやないか、時間がおそくなる、』

下元君がさう云ふので、私達は起ちあがつた。

三時頃になつて玉皇閣の傍まで歸へつて來た。その玉皇閣の中には孫眞人と云ふ道士のミイラがあつた。轎夫達は私達を歩かすために轎からおろして、これを見に伴れて行つた。趺座したまゝの兩足の骨と、左の手の手先の骨とは本當らしいが、顔あたりは怪しいものであつた。

四時になつてホテルへ歸り、急いで勘定をすまして、四時半に發車する天津行の火車に乘るつもりで、車站へ行つたが、火車は時計どほりに來ずに一時間もおくれて來た。私達は復た大蒜臭い混合車へ乘つたのであつた。私はその火車の中で友人に送るはがきを書いたが、そのはしに、

秦か漢か無字碑に苔の青みたる

逐鹿閑話

生方敏郎

幸兵衛　よう、今日は、福さんかい、さあ〳〵お上りなさい、いゝ陽氣になつたね。

福太郎　どうも御無沙汰しました。此間中風を引きましてね、寢てゐました。今度の風はどうも頭へ來る樣ですよ。熱はいくらも無くつて直き起きられるやうになりましたが、後から幾日も頭がづき〳〵して閉口しました。

幸兵衛　それは〳〵飛んだ目にお會ひだね、厄年が祟つたのだろ、併し、もうさうして外が歩ける樣になれば、もう安心だ。そんな時には本とうに外をぶら〳〵遊んで歩くに限る。風の後の頭痛位は何でも氣樂にしてゐさへすれば自然に癒るよ。え、福さん、ほんとうにいゝ時候になつたじやないか。花は咲くしさ、其花は直き散つても夫れから又若葉青葉だ。目に青葉山ほとゝぎす初鰹てえなあ一年中での一番いゝ時季だね。青葉を見ながら、木の芽田樂で一杯きこしめす等は古風の樣だが江戸ツ子でなくては解らない味ひだ。花の咲いてる時分は却つて世間が騷しくつていけない。江戸の市民が、いやさ江戸でなく明治になつてもまだ東京の市民か上野や向島へ、假裝をしたり、瓢簞に酒を入れたのを携帶して繰出したり、草の上へ毛氈を敷いておさか盛りをし、三味線をひいて歌つたり踊つたりしたのは、三春の行樂として如何にも面白かつた。併し、大正になつてから飛鳥山の樣に、女の醉拂ひが其處にも此處にも倒れてゐたり、草も地面も見えない樣に新聞紙が散らかつてゐる花見では、行樂と云ふよりも狼藉と云つた方かいゝ位なもんだ。向島や荒川堤を汗をじめ〳〵出して歩いて、そこへ塵埃を吹き付け

られて白あへの樣になつて歸るのが、何の風流だ。花見は一體梅や菊を見るのとは違つて、もとより其麼に風流なものではないが、併し此頃の花見の樣に殺風景の極頂と來ては、全くお話にならない。宜しく青葉の時になつて魔法瓶でも肩にかけて、田舍路をぶらついた方が面白い。福さんが行くなら隱居は何時でもお伴をするよ。併しどうもまだ大分顏色が悪いやうだね。

福太郎　然うでせう。頭痛はするし氣持もよくありませんから。如何にも御隱居さんの仰しやる通り、郊外散歩の御伴でもしましたら癒るかも知れませんが、此頃どうもさうしても居られないので困つちまいます。是非お伴はいたしたいのですが。

幸兵衛　夫んなに店が忙しいかい。保養する隙もない程繁昌するつてえのなら、それをば彼此云つては果報過ぎて罰があたるよ。世間も段々復活氣分が濃厚になつて來て商賣の取引も敏活になつたわけかね。私は暫く行つても見ないがもう下町もすつかり家が出來たらうな。

福太郎　えゝ、バラックには違ひありませんが表面から見れば余り昔と變らない程に町の形は整ひました。商賣も御蔭樣で繁昌しますが、それより何より此ごろは色々とうるさい事を持込まれましてね。それに弱らせられてゐるのですよ。

幸兵衛　ふん、何んな事を。夫婦げんかの仲さいでも持込まれるかね。バラックの羽目板越しに隣家の口説を聞くなんかは、今でなければ到底經驗出來ない圖だね。

福太郎　ところが、そんな色氣のある問題ぢやありませんので。

幸兵衛　といふと。

福太郎　まづ夜警の相談ですな。夜警をやつてみたり廢してみたり、又やつてみたり止めてみたりです。それから區劃整理に就いての町内寄合だの、少し古く成りましたが火保問題だの、又最近では選擧運動の騷ぎですよ。何れもこれも何うなることなんだか、私らには全くお先き眞暗の事ばかりなんですが、迎ひをよこされれば寄合に顏を出さないわけには行きませんしね。

幸兵衛　そいつは成程うるさいな。併し寄合をかづけに餘まり家を明けることなんか止しなさいよ。少しは寄合を利用するもいいがな、それが高じると家庭波瀾の源と成るからの。

福太郎　御冗談を。全くそれどころぢや有りません。當分臥新嘗膽といふ有樣なんです。それで區劃整理のことですが、御上の仰せ通りだと誠に結構は結構なんですが、さてそれを實行する段になりますと、かなり多くの犧牲者が出る譯になります。何處も此處も、道幅を擴げるために二間三間位づゝ、ずつと削

り取る事になりますからね。兎に角裏は一切許さないなんと仰るんでせう。ですから、まご〳〵すると生抜きの土地子でもなんでも追ひ拂はれるてえ事になる相です。そこで隨分反對する者もあつて、此頃では何の彼のと毎晩の樣に寄合ですよ。

幸兵衛　それもさうだが、矢張やるべきものはやるべき時にやつて置かないと、何時になつても出來るものではない。今なら地震でこりた怖ろしさが未だ記憶に新たであるし、本普請に取掛つてゐないのだから、やるなら正に今の中だよ。そしてやる位なら多少の犠牲者は出しても矢張理想的にやつて置く事だね。さうして置かないと、又先へよつて火事でもあると、去年と同じ事を繰り返さなければならない。

福太郎　其處ですよ。先の事を考へると正に御隱居さんの仰言る通りですし、差當つて今の事だけを考へると、犠牲者も出し度くないのが人情でせう。其處で寄合をしても議論がまち〳〵で中々まとまりが付かないで困ります。兎もすると、區劃整理反對派の方が勢が盛んになるのです。と云ふ譯は區會議員とか市會議員とか云ふ重だつた者からして、兎角政府のやる事には反對して見たがりますからね。

幸兵衛　江戸子には生れながらにして反抗心がある。上から抑へつけでもすれば一寸の虫にも五分の魂と云ふ所で、早速持ち前のベランメーが出て來るのさ。よくても惡くても政府のやる事には一寸反對してみたいと云ふ負じ魂を市民は皆多少持つてゐる。其心理に盲目なのが常に政府で、また其弱味へつけ込むのが今時の煽動政治家だ。だから魚河岸の移轉問題などは何年かゝつたかわかりやしない。地震の爲めに幸ひにも魚河岸がなくなつたから、今度こそ他處へ移轉する事になるかも知れないが、河岸の連中は從來の魚市場から移轉する事が惚れた女と別れるよりつらいんだ。その腹せかへる樣なつらさと不平とが爆發して遂に松本樓の包圍攻撃となつた譯さ。だが、それも後にゐて糸を引く煽動政治家があつたからの事に違ひない。昔の政治は總て抑へつけて欺したものだが、今の政治は欺して煽てるのだ。

福太郎　さうでせうな。矢張いくらか人氣取りの所もありませうね。

幸兵衛　そりや人氣取りともさ。論語の中に或る人が孔子に向つて、周圍の人が皆で、あの人は善人だと云つてほめる樣な人は果して善人でせうかと聞くと、孔子は、さうだな、皆が皆善人だと云つてほめる樣な人間は、そりや善人ぢやないよ。善人が之を善人だと云ひ、惡人が之を惡人だと云ふ樣な人間ならばそれこそ眞の善人だ、と答へたと云ふ話が有る。所が今の政治

家は、一票でも餘計取つた方が手柄なんだから、つまり多數決で大政治家の資格を極める世の中なんだから、孔子の所謂善人では、落選するより外はない。惡人も之をよしと云ひ、善人も之をよしと云ふ者が、デモクラテイックの世の中に於ける、理想的人物なんだ。つまり人氣取りの胡麻の蠅が、現代に於ける大政治家と云ふ譯なんだ。

福太郎　さうすると、つまり、八方美人と云ふ譯なんですか。

幸兵衛　美人と云ふだけぢやないな、八方に貞操を呈供する、娼婦と云ふ所だらう。代議士で廢娼運動のお先棒となる者もあるが、之等も一種の賣淫行爲に過ぎない。自分自らが、髯の生えた娼婦でありながら、廢娼運動をやらうと云ふんだから。傍から見れば全くのお茶番さ。併し、本人は中々眞劍なものだよ。三番に一番のかね合ひで御さいと云ふ綱渡りだからな。うまく行けばお慰みさ。

福太郎　だが、廢娼運動をやつた先生が、今度神戸から、候補に立たうとしたら、女郎屋仲間の親分共が寄合をして、我々の淸き一票は、あんな人氣取りに投じる事は出來ない、と決議したさうぢやありませんか。して見ると此の人などは、人身賣買業者から憎まれるのですから、さうして、奴隷解放論者から奉られるのですから、先づ〳〵善人の部に入りやしませんかね。

幸兵衛　成る程面白い。そんな話があるのかい。何時もながら選擧シーズンになると、方々に、色んな狂言劇が演ぜられるよ。女郎屋共の、淸き一票はよかつたな。成る程、高利貸の持つてる、百圓札も札は札だから、淸き一票に變りはあるまいて。いや、女郎屋で思ひ出したが、東京でも吉原と云へば、政治家の前には偉大なる勢力があつたものさ。私の知つてる新聞記者だが、何時もそいつは弱い者いじめをする男だつたが、先づ吉原へ登樓したと思へ。奴は懐には幾許も持つてやしない。けれどこんな所で無錢飮食した所で、相手は弱い水商賣だ、此方は、向ふ所敵なき天下の新聞記者様だ。奴等が愚圖々々云つたとて何かまうものかと大きくかまへて、盛んに遊興した揚句の果に、お金は無いよと云ひながら、新聞記者の名刺を一枚拋り出したもんだ。其記者もまだ、若かつたんだな。廢娼運動をやつた、代議士先生と同じ程度の若さだつたんだな。何しろ、記者の名刺を一枚拋り出せば、大抵威張つてゐるお上のお役人でも、又は、堂々たる邸宅に住むブルジョアでも、一寸顏色が變つて、すぐに言葉までも、あらたまらうと云ふものだから、何の女郎屋の亭主位、一と縮みと思つたのがこちらの間違さ。番頭がペコ〳〵して、名刺を持つて引さがると、思ひの外、何だい、此の新聞屋さんは、いやに横柄な事を云つてるよ、一體

お前さん所の社長を、衆議院に送つたのは誰の力だと思ふ。此の吉原様のお蔭ぢやないか。それを有難いと思つたら、君達は内へ上るには、三拝九拝してもいゝ所なのだ。お前さん所の社長は、よもや、吉原の方へ足を向けて寝やすまい。女郎屋の番頭にこんな啖呵を切られて、さしもの新聞記者も青くなつて引きさがつたと云ふ話がある。区会議員でも、市会議員でも、又は、府会議員でも、凡そ、議員と名のつく連中は、これだから吉原を粗末にはしない。吉原大明神様々である。先づこんな有様なんだから代議政体の世の中では、公娼廃止なぞ、まだまだお坊ちやんと、お嬢さんの、白昼夢と思つて、彼等人身売買業者が鼻であしらつてゐるのも無理はない。

福太郎　偉い世の中になつたものですな。

幸兵衛　真に偉い世の中になつたものさ。世は文明に進めば、どうしても、デモクラテイツクになるが、之が即ち退歩的進歩と云ふ奴だらう。今こそ女郎屋の亭主が巾をきかしてゐるが、もつと進むと、亭主より牛太郎の方が巾をきかす世の中が来る。日本牛太郎総同盟だの東洋馬の組合だのと云ふのが出来て、苟もその逆鱗にふれると云ふと、浅草区からは代議士になつて出られない。政治家は、牛太郎さんの方へ、足を向けては寝られないと云ふ訳になる。それもそんなに先の事ではない。普選挙となると早速そんな形勢に成らう。

福太郎　へへえ、そんなものですかなあ。私等は普選の世の中になれば人民に自由が与へられる、普選程有難いものはないと聞かされてゐましたんですか、御隠居さんの話ですと、普通選挙は、牛太郎の専制時代と云ふ事になるんですか。

幸兵衛　あはゝゝゝ、まさか、さうでもないから心配しなさんな。日本国中牛太郎ばかり居る訳ではない。此は、浅草地方だけの話だ。その代り、豆腐屋さんの多い所では、豆腐屋さんが威張るし、大工さんの多い地方では、大工さんが威張る。何でも数の多いものが巾がきく、最大多数の最大幸福、と云ふのが、理想なんだから。数の少ないものは、小さくなつて引込んでゐるより外はない。昔は、川の中でも、鮎が巾をきかしたものだが、今は鰕が巾をきかす様になり、普通選挙となれば、石ころが一番巾がきくと云ふ訳だ。さう聞くと、福さんなんかは一寸悲観するだらうが、よく考へて御覧ん。お前さんなんかはまだ鰕程にも行かない石ころの一つだよ。こう云ふと失礼だが石も石、焼け出されの軽石位の所だ。

福太郎　軽石ですか。どうも恐入りましたな。

幸兵衛　軽石は、銭湯へ持つて行かれて踵の垢を取る位の仕事しか出来ない程度のものだが、それでも何万と集つて、軽石党

を組織するか、又は關東輕石組合でも設立すれば、數の少ない御影石や、大理石より巾がきかうと云ふものさ。デモクラテイツクの世の中になると小數黨の金剛石なんか、それこそ隅つこに小さくなつてゐなければならない。多數黨全盛と云ふ譯だ。

福太郎　さうしますと、何うしても餘り偉い人間は、世の中に出られない事になりますね。

幸兵衛　金剛石が、巾をきかす時代は、之を專制時代と呼び、輕石黨が、巾をきかす時代を自由の時代と云ふのだ。さう考へると、自由も餘り有難くはなくなる樣だが、それは第三者から見た時の話で、輕石にとつては、輕石が、巾のきく時代の方が結構だらうぢやないか。併さうなると、金剛石も、よろしく輕石の假面をかぶつて、中間へ這入つて來るから面白い。金剛石には、まさか、自分で輕石を渡世する譯には行くまいが、そこへ行くと人間は重寶なもので、どんな假面でもかぶる事が出來る.豆腐屋の中へ行けば、豆腐屋の假面をかぶり、牛太郎の中へ行けば、牛太郎の假面をかぶる。何枚の假面でもかぶれ、どんな者の聲色でも使へる者が卽ち大政治家といふわけなんだ。假面もかぶれず、聲色を使ふ事も知らない樣な人間は、現代の政治家たるの資格はない。

福太郎　さうするとまあ、政治家の第一の資格は嘘つきと云ふ事ですね。普通選擧と云ふのも、火保問題と云ふのも、つまりは、聲色なんですね。

幸兵衛　さあ、嘘もつけば、眞もつく。その場合次第の事さ。普選なんかは、嘘から出た誠だと云ふ人もある。さうかも知れない。御影石が輕石の御機嫌をとつてゐる樣な形だからな。治家となるにも色々の資格がいるよ。選擧する方に樣々の資格これで政のいる間は、選擧される方は、餘り多くの資格は必要としないが、選擧する方が、財產もいらなければ年齡も問はない、性別もいらないと云ふ事になると、選擧される方は、非常に多くの資格を要する事になる。

福太郎　中々難しくなりましたね。どんな資格が用なんです、

幸兵衛　福さん、君はまだ水滸傳の中に書いてある王婆が、西門慶に教へた所の、拝光的の男の五つの條件について、讀んだ事はあるまいね。

福太郎　拝光的とは何の事ですかね。

幸兵衛　人の妻君を失敬する事さ。それには五つの資格がいると云ふんだよ。第一に、潘安的の顏、第二に驢兒大的の行貨、第三に鄧通の如く錢有るを要し、第四に小さくなつて綿裏針の忍耐を要し、第五に閒工夫を要すと云ふのだ。こう云ふ面倒な、五つの資格を持たないでは、拝光的は難しいと云ふのだ。

所が政治家が丁度、日本では此の五つの條件を必要としてゐる。これで見ると、選擧に當選するのは、姦通に成功するのと同じ様なものだと云ふ事になる。

福太郎　怖ろしく難しい話ですね。私共にはさつぱり解らない

幸兵衛　うつかり話して聞かせて、此の祕訣を排光方面に濫用されると困るが、君も將來代議士の候補にでも立たうと云ふ野心があるなら王婆の哲學をお傳へして置かう。第一の潘安的の顏とは、美男子と云ふ事だ。潘安と云ふ美男子が町を通ると、婦人が周圍を取圍んで歩く事が出來なかつたと云ふ位のもんだ。其處で、政治家だが、政治家の第一要件は美貌と云ふ事だ漫畫に書いてこそ、原も後藤も、滑稽な人物になるが、本物は中々どうして、立派なものだ。今の清浦首相でも、馬面のなんぞと、惡口は云はれてゐるが、若い時は、美男子だつたに違ひない。少なくとも、あの音吐朗々たる喉には反對黨でもチヤームされるだらう。鳥なんかは、色が美しければ、例へば孔雀の様なのは、美しい聲を持たず、聲の美しいのは羽の色はどうでもいゝ。どつちか一つよければいゝのだが、政治家はさうでない。顏もよく聲もよくなければ通らない。經濟學に於ては博士であつても、小川鄉太郎さんの様に、演說をする時、腦天から黃色い聲を出したのでは、その說く所が如何に立派であつても誰も眞面目で聞いて吳れない。先生、解りませんなどと茶を入れたがる。

福太郎　つまり、雄辯が政治家の最も大いなる資格の一と云ふ所ですか。併し犬養さん尾崎さん、又新しい所で、中野正剛、永井柳太郎、など云ふ所をのけると、議會に余り、雄辯家もないやうぢやありませんか。

幸兵衛　其處だて。本來は、孔雀の如く美しく、鶯の如く美音であらねばならぬのだが、所謂、天二物を與へず、の道理で、美貌と雄辯と併行して來る場合が滅多にない。中野正剛程の雄辯を持つてゐれば、いが栗頭でゐられる所でも、辯の無い奴はコスメチツクでもぬりこくらないでは居られぬ。そして、せい〴〵しやれて、氣取るのだ。殊に西洋の様な、政策と經綸とによつて、政權をやり取りする國柄では、いゝ腦味增といゝ音が、何より大切だが、まだ今の日本の様な國柄では、幸か不幸か雄辯は銀で沈默は金だから、雄辯を持たぬ男でもさう心配しないでもすむ。雄辯な奴に余り金はないが、議席で何時も沈默してゐる陣笠は、嚢中常に金を藏つてゐる。卽ち、沈默は金だと云ふのだ。雄辯も持たねば金もたない者は、最後の資本として、どうしても、いゝ男振りを持たねばならない。

福太郎　さうすると、矢張り三木武吉さんの様に、議會の野次

から、男妾と罵られる樣なのが、いゝ政治家の資格でせうか。

幸兵衛　男妾は余り名譽ある呼び聲でもないが、いゝ政治家になるには、男振りのいゝのは何よりの條件だなあ。見給へ、大臣になつたり、政黨の親分株になつたりする連中は、たとへ、年取つて頭は禿ても、禿つぷりが中々いゝから。

福太郎　ですが、武ト金さん等は、さう好男子ではないでせう。

幸兵衛　いや、さうでない。あれで中々愛嬌があつて、そのくせ、押出しの堂々たる所もあるよ。政治家に取つて、體は又顏以上に大切だ。先年も小島七郎が、牛込から、市會議員で出ると云ふから、何か自信があつての事かと聞くと、そりやあの圖體が資本だと彼の友達は自慢さうに語つてゐた。

福太郎　さう云へばさうですよ。武ト金さんの選擧區からは、今度もう一人、武藤某と云ふ男が名乘を揚げたので武藤と武藤の本家爭いになつた譯ですが、其時、武ト金さんの云ふには、俺の方が本家だ。何より先づ、體を見て吳れ、と云つたさうです。議會で見る時、左程の體とも思ひませんが、普通人に比べたらあれでも、巾がきく譯でせう。

幸兵衛　さうだとも。體の目方と云ふものは中々馬鹿に出來ない。君達は、豚や牛の値段は目方の優劣で極まる樣に思ひながら、人間の事となると、まさか食べ物でないんだから目方うでもいゝと思ふだらうが、中々そんなもんぢやない。相撲りは無論だが、會社の重役なんか、目方が重くないと、信用が薄い。社員を雇ふにも、目方を聞いてから、入れる會社がある。わけても政治家は、目方が大切だ。野田卯太郎が、豆腐屋からあれ迄になり上つた只一つの資本は、牛の樣な重い目方の他はない。先づ大臣になる男とか、政黨の領袖となる連中は、何れも立役と云ふ面構へをしてゐる。團十郎張りなら理想的だ。又議會での流行兒と云ふ所では、ハイカラな才子肌で、芝居で云へば、色事師と云ふ所だ。

福太郎　其處で陣笠は、あの蜻蛉反りをうつとつたりと云ふ所でせうね。今度の總選擧には、二萬も三萬も金を使つて、そのとつたりを志願して候補に立つ物ずきが、已に七百人から名乘をあげてるんですから。聖代も泰平といふものですね。併し、中には、とつたりにはなり度し、金は無しと云ふので家、藏を質に置き、無理算段で軍用金を作る向きもありませう。さうなるともう、妻子泣せ親泣せの政治狂ですね。

幸兵衛　いや、この選擧といふものに騷ぎ廻る人間は、誰も皆多少氣が變になつてる者ばかりだよ、手錢手辨當で降つても、照つても有權者の戸別訪問をやつて、先樣に迷惑さうな顏をさ

れても、自分は迷惑とは思はない。之も誰故かと云へば、皆他人の爲めだ。そして、自分が運動した候補者が當選すれば、淚をこぼしてよろこぶが、それが落選すれば、氣が遠くなる程落膽する。中には其爲め病氣を引き起す者もある。先刻、政治家の資格の中へ數へる事を忘れたが、運動屋でさへ此の通りだから、本人の候補者諸君が、常識はずれの要素を充分に備へてゐる事は確實だ。一言にして言へば、馬鹿が政治家の大切な資格の一つだ。馬鹿は馬鹿だが、家の中にじつとしてゐる馬鹿ではない。其處等中を驅け歩いて自分の馬鹿を天下に廣告して歩く馬鹿で、之を稱して彌次馬と云ふのだ。

福太郎　地震の後で、政治家達が、火保問題で大分骨折つて呉れてますが、あれは、選擧の時の種蒔きとしての、人氣取り仕事かと思ひましたが、あれも矢張り彌次馬的行爲でせうか。

幸兵衛　あれは、人氣取りでもあれば彌次馬でもある。彌次性はあの人達に取つての、本能みたいなもので一日でも靜かにしては居られない。國民大會だの、護憲運動だのと誰か喜劇の筋立てを書いて呉れる人がありさへすれば、あの連中は何でもやるんだ。其處は役者と同じ事で、衆人環視の中で、お芝居を打つ事はあの人達の本業だが、やつてる事も、云つてる事も、一つも自分の頭から出た譯ではない。全く、鸚鵡と同じ事で、聲は美しいが、言葉は自分のものぢやない。何處かでそれを暗誦して來たんだ。自由民權でも、普通選擧でも、又は憲政擁護でも筋書を書く者は別にある。だから政治家を相手に、腦味噌の存在を問ふのは、初めから間違つた話だ。

福太郎　捱光的をやるのにもその彌次性がいりませうか。

幸兵衛　いや、その點だけは政治家と姦通家と、少し違ふ。但し、どちらも、驢兒大的行貨と、鄧通的錢あるを要する事は同樣だ。昔から色男金と力は無かりけり、と云ふがあれは間違つてゐる。色男金も力も無さ相だと云ふ方がいゝ。金も力も無さ相に見えると、周圍の者が安心して油斷をする。時には同情さへもする。其隙を見て獲物を手に入れるのだ。けれど、實際金も力も無かつたら、世間は鼻汁も引きかけやしない。代議士となるの秘訣も亦其處にある。森寅さんや鳩一さんの腕が時々呻つて見せるのも其理屈の履きちがへなのさ。

福太郎　成る程、その逆手を取つて尾崎さんも金がない犬養さんも金がない、色男氣取りと云ふ譯ですね。さうして金の有りさうな、加藤高明や、中橋德五郎は、兎角人氣が無い譯ですね。

幸兵衛　さうさ。加藤高明も、尾崎程に貧乏らしく見せかける事が出來たなら、憲政會はとつくの昔に天下を取つてゐたらう

よ。どうも岩崎の婿と聞いては、周圍の者が、金を使はせたがる氣ばかりあつて、無報酬で助力しようと云ふ心持にならない。此處等は、ひどく金持ちの損な點さ。加藤も岩崎の婿である限りは、否、三菱が、破産しない限りは、犬養尾崎の樣な魅力を萬人の間に持つ事は出來まい。だが、それでも矢張り、加藤が憲政會の總裁になり、中橋が政友本黨の中堅になり得るのは、山吹色のもの丶力だ。だから御覽ん、日本全國何處から候補に立つ者でも、總て金持と定つてゐる。人格が高いからとか、學問が有るからとか、智慧があるからとか云ふ理由で、周圍から押されて代議士になつたと云ふ者は、之迄恐らく一人もない。

福太郎　でも、東京では何時も、金持候補者よりも、貧乏候補者の方が、高點で當選するぢやありませんかね。藏原の招き猫でも、林田幹事長でも、金が無いので却つて安々と當選した樣です。

幸兵衛　さうさ、其處が江戸子の旋毛曲りの所で、地方へ行つては中々さうはまいらぬが、東京では、貧乏候補が金持に勝つと云ふ番くるはせが屢々あるんだ。こんな點がつまり姦通と同じく、間工夫あるを要すで、戰術次第で樣々の番くるはせが起つて來るところだ。好男子と金持のみが何時も必ず印で捺した樣に勝つものとは定つてゐない。其處が選擧の面白味だ。其處に選擧の冒險がある。

福太郎　間工夫とは、どんなものです。

幸兵衛　つまり、選擧場裏の掛引だ。こいつは孫子、吳子にも書いてないが、一寸面白い戰術だ。何しろ群衆を相手にする事だから、まるで賭博みたいなものだが、それでも、選擧運動屋となると、運を天にばかりにもまかせて置けないから、夫れ夫れ小さな智慧袋をしぼつて、必勝を期して運動に取り掛る。この間工夫は、一樣一式ではない、人に依つて皆違ひ、政府の援助をあてにするもあれば、壯士の腕力を恃むもあり、又は、こつそり金をまき散すもあれば、草鞋をはいて戸別訪問と出かけるもあり、家の子郎黨は勿論の事、女房やお袋迄も搔出して、運動する有樣はどうしても正氣の沙汰ではないな。

福太郎　靜岡縣で候補に立つた杉浦某と云ふ者は、投票を依頼する有權者への手紙は、自分で書けば効果が多からうと考へたが、字が拙いので直には書けず、手習ひの稽古をはじめたさうです。手習の稽古だけではまだ足りず、政見發表の演説もやらねばなるまいと云ふので、遂に演説の稽古も初めたさうです。い丶年をして、高等學校の入學試驗の準備でもする樣なかつこうですから。滑稽と云へば滑稽、悲慘と云へば悲慘でせう。

幸兵衛　いや、そんなのは寧ろしほらしい部だよ。其處が即ち

綿裏針の忍耐を要すと云ふ所だ。裸で、素足で、荆棘も負ひましよ。と云ふ唄の文句通りで、かうなると、鈍感や厚顔無恥も亦選擧必勝の一要件だ。言ひ代へて見れば、押しが强いと云ふ事だよ。すべて之等の條件が悉く備はらないと、山形市の佐々木春作君ではないが、萬年候補の綽名を付けられて世の物笑ひになる他はない。

福太郎　其處でどうでせう。今度の選擧は、どの政黨が第一黨になるでせうね。矢張り護憲三派のものでせうが。

幸兵衛　中々さうは行くまいて。選擧は何時でも政府黨が勝つに定まつてゐる。勝つ見込みが有ればこそ政府の方でも議會を解散するんだ。例へば、思想善導の名の下に、坊さんや神主さんを招待するのを見て、世の識者は笑つてゐるが、成る程、文字通りにそれを、思想善導の手段と解すると、如何にも滑稽至極な事に違ひないが、あの思惡善導は、平たく言へば、選擧の時は何分賴むよ、間違つても、護憲三派等に、投票するのではないぞよ、と云ふ會議なのだ。其他、經濟なんとか會であれ、文敎なんとか會であれ、政府のする仕事は、名こそ樣々に變るけれども要するに、皆政府黨になれと云ふ御相談に過ぎない。もう少し世の中が進歩すると、國定敎科書の第一頁に、人民は如何なる時でも政府黨たるべしと言ふ、總理大臣の御敎書がつく事だろう。

福太郎　併し、新聞では大抵護憲三派の味方をしてゐる樣ですね。

幸兵衛　處が、新聞も餘りあてにならない。政府黨でも餘り新聞に攻擊されるので弱つた上句に、だん／＼新聞社會を探偵してみると、震災のためにどれも之も、大損害を蒙り基礎がぐら／＼になつてゐる。誰か買つて呉れないかと、資本の有りさうな方面へどれも之れも色目を使つてゐる。早速何萬圓かで、政府黨がそれを買取つたと思へ。

福太郎　新聞は買取られた所で、それは建物と、印刷機械とだけの話でせう。記者の魂まで買取る事は出來ますまい。

幸兵衛　魂までは買取るまいが、記者さん達の、字を書く手だけは買取つたと見える、何の事はない、昔のロシアの農奴の樣に、畑と一緒に轉賣されるものとみえるよ。それでも一寸きまりがわるいとみえて、憲政常道などと一寸固くなつて、辭表を出すといふ一幕ぁあつた樣だが、まあ／＼野暮を云ひ給ふなと說きふせられるのを待つてましたとばかりに、其儘、編輯局に居すわつてしまつた。之が今の新聞記者氣質さ。無理もない、新聞記者だけが、伯夷叔齊の子孫と云ふ譯でもあるまいし、矢張我々と同じ血統の人類だからな。誰も日干しにはなり度くは

ない。それ故無理はない話だが、あまり頼りにもならないな。之を新聞屋さんばかりのことではなく、何處も此處も天下到るところ野黨の方にはこんな調子でひびがいつて來る。

稲太郎　ああ、その事をいへば新聞記者の選擧法違犯が方々にありますね、沖繩でも又栃木でも盛岡でもあつたやうです。あんまり出鱈目をならべるからでせう。中にも盛岡では護憲記者團が、誰やらに招待された後で、早速選法違犯に問はれ中には禁錮三ケ月又は二ケ月の者もあり、輕い所でも六十圓の罰金を取られたと云ひますから、政府に何か臭い所をかぎ出されたものでせう。

幸兵衞　新聞はもとより屁兵だ。護憲でもよけりや、馬面でもいゝ、どつちでも儲かる方へついて、一理窟こねるのが商賣だ。憲政擁護のおだい目に有難味をつけたのは新聞記者だけれども、御當人の記者先生達は、護憲運動などもとより眼中に置いてゐない。だが、盛岡と云ふと、例の高橋達ダルマと田子一民の取組で天下の注意をひいてゐる土地だが、あの選擧はどうなるだろうな。

稲太郎　彼處は中々面白さうですよ。私は、元來政友會は大嫌いですが、あの達磨と云ふ男一人だけは、可愛らしいと思つて最屓にしてゐるんです。だらか達磨に勝たしてやり度いと思ひますが、どうも形勢は田子作の方がよさそうですよ。第一に、政府黨と云ふ強味が有るし、從つて金はどうにもなるでせうし奇拔なプロパカンダをするやら原敬の墓へ電報を打つやら、中々手管の多い男で、鳴物入りの運動が巧妙ですよ。政友會の方でも松田源治をはじめとして、大家が大勢達磨の應援に乘込んだけれども、盛岡在の百姓の青年にさんぐ彌次り立てられて、這々の態で引き上げたさうです。話は之れだけでなく、彼處の對抗戰は中々奇談珍談百出です。達摩が盛岡へ別莊を建てゝ永き彼處の市民になつてゐると云ふ樣な譯で、一方は政友會こそ原敬の嫡流だと云ひ、一方は、否、政友本黨こそ、原敬の衣鉢を傳へるものだ、と絶叫し、今から宣傳戰爭が中々猛烈を極めたものです。

幸兵衞　さうさう、私も此の間新聞に田子一民の慾張りと書いてある記事を見たよ。選擧運動の奬勵になる樣に、和歌、俳句水菓子あんパンなんでも寄附してもらひたいと云つてゐると書いてあつたつけよ。

稲太郎　はて、そんな事が近來政界の流行と見えますな。私の所へも、富山縣から候補に立つた友人から、幾許でもいゝ、寄附して呉れと云つて來ましたよ。私等の考では、有權者の方

が、候補者から、いくらか、もらつてもよさ相なものだと思つてましたのに、何だか近頃世の中はすつかり逆さになりましたね。いくらか寄附しないではなりますまいか。

幸兵衛　何にそんなに正直に、彼等の言葉を解釋なさらんがいゝ。先刻から云ふ通り、選擧は排光的と同じだから、手練手管ばかりのものさ。彼等は口で寄附して呉れと云ひ乍らも、寄附など決して當にしてやしない。まあ、そんな事でも言つて、選擧民との間に親しみを作り何とか關係をつけ樣といふのさ。人と云ふものは妙なもので、自分の受けた恩は忘れやすく、自分の施した恩は永久に忘れるものでない。其處で、候補者は選擧民から寄附をつのり、田舍者は、それを眞にうけて眞に寄附する。どうせ田舍者の事だから、大きな事はやりつこはない。高々、三圓か五圓、投げ出すのだらうが、之に對して、候補者の方から恭しい禮狀を送る。禮狀丈けならいゝが、お禮の名目の下に何を送るものやら。其の送るものによつては、野黨の方なら問題になるかも知れぬが、政府黨の方ならそれも問題にはならないだらうから、そんな事は水に流して置いて、さてお百姓の胸の中だ、俺はあの候補者に金三圓を寄附したぞ、それ見ろ、此の通り衆議院議員田子一民和錐の禮狀が有るとて、額にでも納めて、客間に飾り、人に見せびらかし、子々孫々まで傳へようと云ふ考へだ。之程だから、自分で僅か三圓でも、資本に注ぎ込んだ候補者ならゆめ〳〵忘れつこもなければ逃しつこもない。必ず、田子一民に投票する。そして彼奴も俺たちのお蔭で代議士になつたぞよと、圍爐裡ばたで新聞の政治面を見ながら村人と談す時、何時もそれが自慢の種になる。だから之は、寄附する方も一儲けだし、寄附される方も一儲けだ。

福太郎　ははあ、さう云ふ譯ですか、それなら私も、一つ寄附してやりませうかね。

幸兵衛　さうれ、誰も有權者の心持はそんなものだ。寄附すべき所へは寄附しないが、寄附していいお釣りが取れ相な所へと、吃度寄附する。投票だつて其通りだ。學識がどうの政見がどうのと云ふた所で投票する心持にはならないが、候補者の押し出しがいゝとか、金があるとか、下らん事に感心して投票する。それ丈けならまだしもいゝが中には之を醜飾にしようとか、メリンスの風呂敷にしようとか、清き一票を若干かの鳥目にしようと考へてゐる者も少くない。有權者が、さう云ふさもしい心持でゐる時に、候補者のさもしさはもう一枚上だ。何とかして有權者を、欺くらかし、誘惑し樣と考へる。其處が即ち、間工夫

を要すなんだ。

福太郎　さうです、此切の候補者は中々するくなりましたよ。葉書と手紙と薄つぺらなパムフレット位しきや持つちや來ません。それで、戸別訪問をして、おじぎは只ですむものだから、大勢連れて來ておじぎばかりペコ／＼する丈けで、鰹節なんか一本も持て來た事はありませんよ。

幸兵衛　それが當然の話だ。福さん、鰹節なんぞ欲しがつちやいけないよ。

福太郎　いえ、別に欲しがる譯ぢやありませんよ。でもね、選擧上手な奴は思ひも寄らぬ時に園遊會に招んでくれたりします。又は子供に繪葉書なんか送つてくれたりね。それから細君に婦人雜誌を寄贈してくるのも有りますよ。あゝして常日頃地盤を固めて置くからぬかりはない。人は人情でその候補者に投票します。いつも落選するやうなのは、乾度その間際に成つてからばかり騒ぎ立てるからダメなんでせう。

幸兵衛　だが近頃其筋の取締りがだん／＼矢釜しく表面から物品が送れないものだから、物品の代りを駄法螺で間に合はせる奴がある。何んな事をいふかと思ふと、此候補は我黨内閣に成れば大丈夫大臣に成る人です、といふのさ。又は黨内での肩書總務だとか幹事だとかいふ名を賣り物にする手合もある。わけても此私製大臣が今度の選擧にバカに流行る。例の共産黨事件の堺枯川たちが私製大臣に成りそくねてふん縛られた時には、世間の人は或は慨憤し或は嘲笑したが地方へ行くと選擧民が大分この私製大臣政策に引つかかるらしい。おらが候補が鐵道大臣に成つたら村のものはハア皆な唯で汽車サ乘れべえによ。あにき、おらが候補こそ大藏大臣だもの地租税はおれら村の者みんな免税だとよ。こんな取らぬ狸の皮算用から淸き一票を投ずる者もある。論語には君子欺き易しとあるが今の選擧民はよく／＼君子ぞろひと見えて候補者どもの並べる太平樂にたわいもなく欺かれるのう。間工夫を要すも大概にしてくれないと、世の中は狐狸の化けくらべ百鬼晝行といふ有樣に成る。

福太郎　長崎だかにそりや面白い化けくらべが有ります。新聞社の主筆の森隆といふ男が本黨から候補の名乘をあげると、女優律子のお父さんで長髮辯護士の森肇も同じところから候補に立つ。双方同名同姓なんですから、何地の蒔いた種を何地が拾つてもよろしいわけで、選擧民も之には全く煙に卷かれてゐる相です。

幸兵衛　それは面白い。競爭もさう茶番じみてる中はいいが、之からだん／＼間ぎわに近よると笑ひ事ぢやなく成つて來る。もうそろ／＼護憲三派の結束がくづれ出した樣ぢやないかな。

こんな事は最初から誰でも分りきつてゐた事だが。

福太郎　例の三浦觀樹がその結束のために出馬して來た相です。

幸兵衞　またあの男がかい。私はこの一月護憲運動の時、あの男が飛び出したから、もう此れもダメだと思つた。長州人の中でもこれ位虫の好かない男はないな。同じ長州でも死んだ伊藤博文などは長人のいいところを多分に持ち合はせたが觀樹は長人の嫌味ばかりを持つて、生れた不幸な男だ。一言一行いや味な奴だ。あゝいふ者が飛び出すやうに成ると政界が小穢く成つていけない。

福太郎　觀樹をいや味だとおつしやるのは大分長州言葉が耳さはりなせいぢやないですかね。近畿岡山長州邊の人達はあのグニヤ／＼した言葉のために餘程損をしてゐるやうです。殊に政事家は損ですね。言葉の音も妙なもので何うも九州か東北辯かでないと大政事家らしくありませんものね。

幸兵衞　江戸兒辯は何うだ。

福太郎　あれは喧嘩をするには持つて來いですが、要領を得すぎる損が有ります。政事家には不得要領も少し必要ですから東北や九州辯だと言葉が全部人に通じることがないので、至つて便利だ相です。

幸兵衞　その代り又意志が疏通せぬため喧嘩に成る事もあらう。あツはツ……は兎に角政戰は東北地方が激戰のやうだ。それにしても三派の同志打ちは餘りに早いな。綱戸の演說會で憲政會の候補は政友會の壯士に撲られたといふね。

福太郎　それに不思議は有りませんよ。憲政會なんかは判るところで同志討ちさへやつてるんですから。會津の幾寅さんともう一人何とか云つた憲政會の候補は上野驛で同じ汽車に乘り合せたが「やあ」と言ひ合つたきり會津までお互ひに猜疑入して一言も交さずに行つた相です。群馬も憲政會候補の夥多に苦しみ同志討があり相です。

幸兵衞　さういふさもしい仲間喧嘩をやつてる時が、いつも他から侵略される時なんだ。さう多數の候補を立てて內部で爭ふやうでは、今度も憲政會は物にはなるまいよ。何うも憲政會は作戰が下手だよ。

福太郎　と云つて、何うも足輕黨に勝たせ度くも有りませんね。御隱居さん、この小石川區の形勢は如何です。矢張鳩一派の全盛ですか。

幸兵衞　足輕黨は人氣が無し、鳩一さんも先年議會内で暴行事件から味噌をつけたが、しかし何といつても小石川區内に於ける彼の地盤は固からう。あの先生は選擧にかけちや仲々手

が有るよ。だが若し相當な人物を連れて來れば鳩一さんを追ひ落せない事もないが、森脇天涯だの佐々木蒙古だのといふ代物では知識階級の多い小石川は切り崩せまいよ。實は今日も寫眞入りの端書が舞ひ込んだから大方活動の廣告かと思つたら、それが蒙古のおひろめの舌代だつた。文章と云つたら全く齒の浮く様な文句で、あれでは無智な深川邊なら兎も角も山の手で候補に立つのは身の程知らずだよ。もう少し腦味噌の有る奴を連れて來ないではの。少くとも腦味噌の有り相に見える奴をサ。

福太郎　いや、ところが今度小石川へ武富時敏を連れて來る相です、これなら輸入候補でも鳩一君と相撲に成りませう。

幸兵衛　さうさ、武富なら豆鐵砲くらゐの役には立つかな。鳩一くらゐ大した大物でもないに、大騒ぎをして落すのはいささかバカ〳〵しいな。だがまあ、今の山は護憲派の足輕黨のと云つたところで、いはば内輪同志の揉めごとのやうなものだが、英國みたいに勞働黨でも出來るやうに成ると、それからは政爭も本物で、我々も一生懸命に成れるだらう。今のところまだ競馬ほどには力が入らないでな。だが、茶を飲み乍ら選擧無駄話も一寸氣散じだのう。

福太郎　ところが私は花客さきと問屋すじから別々の政派の運動を頼まれまして、目下板ばさみにされて苦しんでるところなんです。衆議員も人間の代りに案山子でも並べる事にして、く選擧なんてヌキにして買ひ度いと思つてますよ。

幸兵衛　成程案山子とはいい思ひ付きだ。何うせ案山子を並べるなら、福さん、人間の案山子より本物の案山子の方が大人しいだけよさ相だね。あはハハハ。

福太郎　あははハハハハ。

自動車橫行時代

タクシの常客として

菊池寛

六七年前私は「タクシの辯」と云ふのを書いた。私に關した文章の中に、私がタクシにいつも乘つてゐるやうに書かれたので、そんな贅澤はしてゐないと云ふ辯解であつた。その後星移り物換りタクシその物があまり贅澤でなくなり、又私の收入が殖えてタクシに乘ることが、私として贅澤でなくなつた。この頃私はいよ／＼タクシに乘る。夜外出すると、私はきつとタクシに乘ると云ふのは、私の現在の家は雜司ケ谷に在る。東京朝日の外報部長の米田實氏が、神經衰弱のために、東京近くで一番物音の聞えない不便な土地を撰んだ。それが私の家のつひ近くである。その事から考へて、私の家がどんな不便だか分るだらうと思ふが、如何なる電車からも十五六町乃至二十町近くある。目白の驛と早稻田の終點と、大塚仲町とこの三點を通る圓の中心に在ると云つてもよい。その上坂道である。歩行の嫌な私はつひタクシに乘るのである。從つて、東京にあるタクシ自動車は、あまねく乘つてゐる。現在東京に在るタクシは、昔から在るタクシ、小型自動車、それにツウリング、平和タクシ、實用自動車、日の出、安全タクシの七つだが、それ／＼特徴がある。中で、料金の一番安いのは、小型で、車がよいのはツウリングである。駐車場で乘ることもあるが、多くは呼び止めて乘る。呼び止めの呼吸などは、うまいもので、いつか、島田清次郎と歩いてゐて、私が疾走するタクシを突嗟に呼び止めたので、何事につけても威張り返つてゐた頃の島田君も感心したほどである。この頃は、主として平和タクシを愛用してゐる。車はシボレイで、車臺が新しく運轉手自身の經營で、資本家がゐないた

めに、客扱ひがよく、運轉手に不正が少いからである。だが、乘心地は、ツウリングの方がよく、料金も安いやうだが、車臺が少いので、捕へる機會が少いのである。普通のタクシや小型は、車臺が古くなつてゐるので、うつかりすると動搖の烈しい車臺に乘り合はして閉口することがある。賃用自動車は、佛國製のシトロウエンで乘心地もよく、料金も安いが、車が少いので、滅多に乘れない。

小型や賃用自動車になると、料金が安く人力車よりも遙に安い。一人乘つてさへ安いのだから、二三人で乘れば、人力車賃の三分の一位で乘れるわけである。

タクシメートルに出る料金は正確だが、十二時を過ぎ、車臺に取りつけてある電燈の光がうすい深夜などには、客がメートルを仔細に見ない所をつけ込み、料金をごまかさうとする運轉手が偶にはゐる。去年まではたしかにゐた。また仲には故意か偶然か、とんでもない遠廻りをする運轉手がゐる。いつか私が上野から雜司ケ谷へ乘つたら。その運轉手は先づ萬世橋へ行き、御茶の水、飯田橋を經て雜司ケ谷が來た。そして、四圓三十錢（いつも二圓五六十錢）を請求した。私は迂路をなじつて爭つたら、先方は、直ぐ閉口してしまつたが、とにかくタクシの隆盛につれ高い賃金を取らうとする朦朧自動車が、ステーションなどには可なりゐる。信用のあるタクシを——（特にタクメートルの取付けてあるものを）見立てゝ乘らないと飛んだ目に逢ふ。

この頃では、交通頻繁の往來なら、五分も立つてゐると、きつと「あき車」が來る。だが、「あき車」が來合はせるのも、チヤンスの問題だ。偶にはタクシに乘らうと決心した瞬間に姿を現すときもあれば、三十分も以上待つても、待ちぼけに了ることもある。

私が、タクシに乘つた最大距離は、今年三月に千葉縣の姉ケ崎に講演のために行つたときだ。汽車の時間に間に合はなかつたので飯田橋から、平和タクシに乘たが、東京市内は、障害多く一時間六七哩の速力しかない。小松川までの千葉街道も疾走は絶望である。たゞ、小松川の新江戸川を渡つたあたりから、縣道が坦々としてゐて、二十五哩位の速力で疾走することが出來るへん愉快であつた。だが、四十哩の賃金が、チップを合せて十幾圓、時間は掛つて、次の汽車を待つた方が早く着けたことが分つた。講演料の大部分を、タクシ代に拂つたが、稻毛から千葉へかけての疾走は惡くはなかつた。

この頃は、自動車の安いことは驚くばかりで、スタアとかシボレイなどは、二千二三百圓で附屬品一切買へるらしい。中古

なら千圓も出せば可なりよい車が買へるとの事で、僕等にも自動車を持つことが分不相應なことでもなくなりかけてゐる。もう、一、二年もすれば月賦販賣の法が出來て、毎月のタクシ賃を其方へ廻すれば自動車が買へるやうになると思ふ。自動車の運轉手と云ふ職業も私は興味のある職業で、小説家志望の少年などには、危險な小説家志望などを捨てゝ運轉手にでもなるやうに、いつも勸說してゐるが、これは決して無責任にさう云つてゐるのではない。私は、富坂にゐた頃から、近所に住んでゐた一人の子供の面倒を見てゐるが、その子が今年十八になつたので、この五月から自動車學校へ入れて、運轉手にするつもりでゐる。私の親類の子も東京へ呼んで運轉手にしようかと思つてゐる。そして、これらの少年が免許狀を得たら、自動車を買ひ與へて、營業をさせ、私丈は只で乘らうと思つてゐる。

都會的恐怖

佐藤春夫

「自動車横行時代ですつて？　さ？　横行と言へるか知ら――今の東京ぐらゐでは。もつとも地震以來よほど澤山になつたやうですね。だが、こんなことぢやない。まだまだ！　それこそ本當に横行する時代が來るやうな氣がしますよ。

「僕はよく空想して、おぞ毛をふるふ事だが、今に、いつか、歩行してゐる人間なら轢き殺してもいい。仕方がない。自己の庭園以外の場所を歩行によつて通行しなければならないやうな者は人間として認めない。たとひ認めるにしても、そんな人間が轢き殺されることは公衆を本位とする社會では、やむを得ない犠牲だといふやうな理屈が出來て來る。さうしてただ、運轉者が歩行する者を轢き殺した場合には規則として、必ず規定のハガキにその旨を記入して報告しなければならない。その爲めにそんなハガキが印刷されて郵便局で賣つてゐる。場所、性別、推定年齢、其他參考、といふやうな項目になつてゐる。尤も、犬の場合ならば、場所とただ犬とだけ書いてその他の記入は必要ない事になる。どうして犬まで報告するかといふと　犬と

とはどつちが不注意のために餘計死ぬかといふ統計學上の必要からである。……

「まさかそんなことはあるまいといふのですか？ さうまさか、とは思ひますね。しかし、まさかと思ふやうな時代がどんどん人類の歴史には出現してゐるでせう。僕の空想だつて、ユートピアが出現するよりは出現しやすい事ですからね。いや、その萌芽ぐらゐならすでに出來てゐると云つていいのです。アメリカの或る雜誌には、日本の地震の記事の序に「この地震を以て死傷したものはアメリカ諸地方に於て一ケ年に自動車事故によつて生ずる死傷人命ぐらゐにしかすぎない。」(！)と記してあつたさうぢやありませんか。尤も、僕がそんなことを讀んだのはすこぶる與太な雜誌だから、やつぱり與太だつたかも知れないが、本當のやうな氣持ぐらゐはするぢやありませんか。だが、そんな眞僞保證の限りでない話は別としても、現に上海の租界では自動車で轢かれた人間があると、第一にその轢かれた人間が、行通の邪魔をしたといふ廉で銀九弗の罰金をとられるといふことです。罰金を取るよりは罰金を取らない方がおだやかだといふ事になると、僕の空想などは甘いもので、僕のいふやうな時代にでもならうものなら轢き殺された人間の遺族は死體處分料としてなにがしかの金を徴收されないとも限らない。

さういふ時代がくると、その他のいろいろな生命狀態も甚しく變化して居る。空氣と日光とが一リットルいくらといふで賣られる。嘘ではない――これだつても既に萌芽を示してゐる。現に、我々は安全な飲料水のために料金を仕拂ふ。（これが文明だ！ 昔の哲人とやらに見せてやりたいものだ）又、現にフランスの法律では家をつくつて部屋に窓を設けるためには、その大きさによつて税金がかかるといふことを聞いたやうに思ふ。これなどは既に空氣と日光とを賣つてゐるといふことにもなる……

ユートピアを描いた人は古來幾人もある。僕はその反對のものを一ぺん書いてみたいやうな氣がする。

ヘンリイ・フォードのことその他

宇野浩二

自動車――といふと、近頃私はヘンリイ、フォードの傳記を書いた本をへから貰つて、それを讀んで妙に感心した記憶を持つてゐる。この本を讀むまでは、實に私はこの有名な僅二十年間の間に、一躍世界一の大金持になつたといふ人に就いて、何にも知らなかつた。もつとも、フォードといふ名前は知つてゐたのであるが、それは自動車か自動車會社の名前だらうといふ程にしか考へてゐなかつた、そしてそのフォードといふ自動車は最も實用向きで、廉價で、つまり石鹸でいへば花王石鹸とか、齒磨でいへばライオン齒磨とかいふのと匹敵するやうなものだと誰からとなしに聞いてゐたが、いくらそれが實用向きで廉價でも、品物が自動車のことであるから、私たちとは關係のないものとして大した注意もしてゐなかつた。次には又、先頃の關東の大地震で、東京市の電氣局では澤山の自動車を燒いてしまつたものだから、それの補充に、至急の間に合せとして、千臺とかの自動車を買ふことに定めて、それをフォード會社に注文したといふやうな記事を新聞で見たことがあつた。斯ういふ大口の注文を右から左に受けられるのは、世界中でフォード會社位なものだとあるのを讀んで、なる程さういふ馬鹿げた大きな會社も必要なものだな、と私は人事ながら大いに愉快に感じたものである。――と、ざつとフォードといふ名前に就いては、それ位のことしか知らなかつた。

そこで、今度そのフォード會社の社長の、ヘンリイ・フォードの傳記に就いてゞあるが、（因みに、フォード自身の書いた自叙傳もあるが、私は見てゐない、私の讀んだのは、アラン、ベンソンといふ人の書物の譯本である。）中で私が感心したことといふのは、いふ迄もなくフォードといふ人の性格のえらさには違ひないが、その性格が私自身とことごとく正反對である點であつた。もつとも、少年の頃から機械の類に異常な興味を持つてゐて、殊に懷中時計と見ると、片つ端からこれを分解する癖があつて、その爲に手當り次第に懷中時計を集めたのが、溜り溜り――

ツシエル（日本でいふ上三、外何升）もあつたといふ、何しろ後年機械技師になり、自動車會社の社長になり、世界一の大金持になつた彼と、子供の頃から空想に耽り、無爲を樂み、勉強といふと稗史小説を讀むことの外しなかつたところの、果して後になつて一介の文士になつた私との相違であるから、その性格が正反對であることに少しも不思議はないのであるが、それに就いて私は私自身の過去の滑稽な出來事を思出したのである。

愚な話をするが、私は二十歳の文學青年で、或私立大學の文科に遊んでゐた頃に、どんな文學青年でもが感じるやうに、自分の文學的才能といふものに疑ひを持ち出した、それから引いて文學を職業にして立つといふことの、前途の不安を覺えて來た、どういふ機會からであつたか、文學は文學、生活の爲の職業は職業、と別々にすることにして、その後者に役立てる爲に養豚事業を始めようと思ひ立つた。そこで、一人の友達を勸誘して、一時學校も文學も投げ出す程の熱心で、二人で毎日方々の養豚場へ見學に行つたり、それに關する書物を集めたりして半年餘りの月日を送つたことがある。私たちが調べたところに依ると、豚はこの世の中で最も安いものを食つて、最も肥つて最も増えて、それで比較的最も高く賣れるといふことであつた、一疋の豚は半年毎に六疋づつ仔を生んで、その仔は又一年もすると半年毎に六疋づつ生むのである。これはまるでお伽話のやうな商賣に違ひなかつた。だから、その當時、有頂天になつてゐる私たちに、養豚事業といふものがどんなに有利であるかといふことを說明さしたなら、その素晴らしさに、どんな人でも驚かないものはなかつたらう。もう少し誇張していふと、どんなけちな引込思案の金持でも、一度その話を聞いたなら、屹度彼の財布の口を開ける氣になつたに違ひなかつた。現に、私はそれの資本を得るために、或頑固な親類の老人を訪問して、岐阜や友人や、その他會ふ人毎に何回か喋つてゐたことなので、活動寫眞の辯士のやうに巧くなつてゐるところの辯舌で、私がその養豚事業に就いての援助を賴んだところが、相手の五十歳の男は、聞き終つて「君の話は餘り面白過ぎて、餘りとんとん拍子過ぎる、しかし面白い。唯、面白過ぎるので信用し兼ねる。しかしそれを數字に現して、それで私を得心さしてくれたら、相當の出資を約束しよう、」といつた。

私は勢ひを得てその翌日から、最初買ひ入れる仔豚が一疋幾らといふことや、それを何疋買ふといふことや、それが一年目に幾らに増えるといふことや、一年目には豚の子と孫と曾孫とが合して何疋になるといふことや、その中から何疋賣るかといふことや、賣つて幾ら幾らになるといふことやを、紙屋から大

判の洋罫紙を買つて來て書き始めたが、その數字が次第次第に想像の出來ない末廣がりになつて、紙が足りなくなるとその先につぎ足し、又つぎ足し、そして書き入れ書き入れするのに、その又計算が多岐に分れて面倒なものだから、五分間書いては一時間休み、又五分間書いては二時間休み、さうなると意地の悪いもので別れた文學が戀しくなつて、一日その計算をした翌日は一日文學書を讀み、又一日計算に費した後では二日文學に親みして、到頭半年近くもかゝつて完成せずに止んだことがある。

が、その完成しなかつたのは、私の根氣がなくなつたといふよりは、幾分それもあつたが、何よりも餘りに無限に大きくなつて行く數字に恐怖を覺えたがためであつた。實際、たとへば二年目には豚が三百疋になつて、三年目には三千疋になつて、四年目には三萬疋になつて、……といつた風に増えて行くとすると、私は日本中が私の養成した豚のために埋まつてしまひはしないかといふやうな恐怖をさへ感じた。そんなに増えて行く豚を食ふことで、終にはたゞでそれをやると觸れ廻つても、乞食でさへも背中を向けるだらうとか、人々が皆滿腹のために死ぬだらうかとさへ心配された。それは多少の誇張ではあるとしても、（實際は本當にそんな風に思つたが、）そんなに増えて行く豚の始末を考へて、私は暗然として溜息を吐いたものである。即ちこゝで私とヘンリイ、フオードとが截然として分れる所である。

アラン、ベンソンのフオード傳の中に、千九百〇三年から二十一年までの、毎年の自動車の製造賣上高が表になつて出てゐるが、最初の年に七百八臺とあるのが、四年目には八千四百二十三臺になり、九年目には七萬八千四百四十臺になり、最後に千九百二十一年のところでは九十三萬三千七百二十臺となつてゐる。すると、一ヶ月にざつと八萬臺、一日にざつと二千五六百臺の自動車を製造販賣した譯である。後から後からと萬人相手に食つてなくなつて行く豚でさへ、私には一日に千疋も生れたら始末に困ると思へたのに、限られた人間相手の自動車を日に二千臺、――恐らく今日では三千臺以上にもなつてゐるだらう、を賣出して行かうといふフオードの大膽さに、私は少なからず敬意を感じた所以である。もつとも彼の考では、今日我々が下駄を買ふ位の輕便さで、自動車をだんだん廉價に供給するつもりらしい。

これは冗談ではないので、以前私は斯ういふ傾向の人たちの（即ち所謂成功者型の）立志傳を讀むと、大抵反感なしに濟まされなかつたものであるが、今度は全然それと正反對であつた

無論、彼のやうな人のことを、一口にいふと、つまり意志の人といふ一言で盡きるのであらうが、何にしてもこれは最も立派な（快活で、實際的で、そして民衆的な、）亞米利加人の型であらうと思はれる、これは私自身とは足の裏同志に立つてゐる人であるが、近頃私は斯ういふ人種に興味を持ち出してゐるのである。

つひ話が横道に反れたが、この本の中に、フォードが初めて自動車を作つて、それの試運轉をした時の、當時の新聞の記事が參考として載せられてあるのが面白かつた。それに依ると、――唯見たところ、何の機械らしいものが外に現れてゐない一臺の車が驚くべき速力で走り出したので、それと往き違つた馬車の馬が驚いて跳ね上つたといふ話などがあつて、さて、世界の歴史の、或區切り區切りの時代には、必ずそれを代表する音がある。それは獅子の叫びの時代もあつたし、火の爆聲で醒まされた時もあつたし、さては石斧の打つ音、舟の櫂の打つ音、帆の風に鳴る音、それから漸く火藥の時代が來、ダイナマイトの音が代り、次に汽笛の響の時代となつたが、今はこの自動車のガソリンの響に新しい時代が豫想される。その音の如何に愉快な心を躍らすものであることよ、それは川蒸汽のパフ／＼といふやうなのでもなく、汽車のゴロ／＼いふやうなのでもなく、いふと、チヤク／＼チヤク／＼といつた風な響の驚くべき聯續、――これこそ最近文明の音響だ、その前徴が見えるものはないだらうか、云々といふのである。

なる程、自動車といふものがこの世に初めて一臺現れて、我々の目の前を走つて見せたなら、こんな風に愉快に思はれるかも知れないだらう。が、此頃の東京のやうに、下町の狹い道を特權者のやうな顔をして、無遠慮に容赦なく走られたのでは、我々一般人は雨の日は忽ち泥を跳ねかけられて迷惑だし、走り去つた後に殘されて行くガソリンの臭などを決して享樂する譯に行かない。まして、フオードの國のやうに、それが一般人に安く手に這入つて、丁度日本でいふと自轉車ぐらゐの程度で我々にも利用出來るものなら結構だが、今の我國の狀態では、それの横行は更に何我々に少しも愉快でないことは確である。もつとも、數年前、眞僞のほどは知らないが、何かの新聞か雜誌かで、私は南米の何とかいふ町では、人口十七人に就いて一臺づつの割合で自動車があるといふ記事を讀んだことがあつた時、十七人に自動車が一臺づつもあつたら、どんな大きな町かは知らないが、それが日本のやうな狹い町のところなら、始終自動車で埋まつてしまふだらうし、例へば劇場などの前では、十七人の客に一臺の割合の自動車だとするとそれの置場所も居場所

もなくて困るだらう、と心配したことがある。

——以上、大體何を主題で書いたのか分らなくなつてしまつたが、さうだ、表題の自動車の横行云々といふ題目に就いては實は私はこれといふほどの感想を持たなかつたのであるが、ふと前記ヘンリイ、フォードの傳記を讀んで感心したことと、就いて私自身の過去の愚な事業の思出したのとで、秩序もなくこんな風に書いて見たゞけである。我慢してもらひたい。

自動車横行に對する階級的實感

小川未明

「自動車が横行するやうになつて、米國では、社會主義者が増加した」と、言つた者があつた。恐らく、このことは、獨り米國のみに限つたことであるまいと思はれる。さうあるのが、寧ろ必然の現象ではあるまいか。

人間各自の境遇と、趣味と、性格にもよることであらうが、無産者が、自動車を見る時程、階級鬪爭の觀念を惹起することはないと言へる。

私達は、常に、道路といふものについて考へさせられる。歩行するための道路であるか、また車に乘るための道路であるかと、今更こんなことを問題にすべきでないかも知れない。なぜなら、文明は、交通機關の發達そのものである上は、道路は、歩るくための道路であり、また、車馬の行通するための道路でなければならないからである。けれど、本來は、第一に歩るくための道路であつた。

貨物の輸送や、生存上の必需品を運搬する如きを除いては、路上を足で歩るくのが、通例であつて、車に乘る場合は、むしろ例外の場合と見做すのが當然である。

若し、車に乘るのが通例であつて、歩るくことが例外であつたなら、自動車に對する不平は起る筈がないかも知れない。無産者が、悉く自動車を驅使することを得たなら、このことで、階級鬪爭の觀念を惹起することがなくすんだかもしれない、しかし、事實は、これに反してゐる。そして、永久に、自動車に

乘らずにしまふやうな人間が、どれ程、多くこの都會の中に住んでゐるかを知らなければならない。

私達は、たとへば、天氣の惡い日に、泥濘の中を歩るいてゐる。その時、前からでも、後からでも自動車が疾走して來たとする。それでなくてさへ、足許の危ぶないのを、どんなにか慌てなければならない。まるで、群集は、蜘蛛の子を散らしたやうに、右に左に大急ぎで路を開くのだ。これと對照するに自動車は、たゞ、威嚇せんばかりに警笛をつゞけさまに鳴らしてゐるのだ。

この時、何人か、「ブルジョアに、俺達を脅かす權利があるか？」と、心に叫んで、憎惡に燃えた瞳で、其の自動車を見送らざる者があらう。

私達は、何も、彼等に脅かされて、道を開くために慌てるのでたい。急いで逃げるものは、自分の生命を氣遣ふからだ。傷付いてはたらないと考へるからだ。この一事を見ても、無産者はブルジョアのために、勞働に於て、搾取されるばかりでなく、道を歩るいてゐる時ですら、生命を脅威されつゝあるのだ。

かうして、私達が、片手に傘をさし、片手に物を抱いて泥濘の中を步るいてゐる時や、停留場に黒山をなして立つてゐる時に、自動車の中には、着飾つた女が、たゞ一人乘つてゐることもあれば、また、男と女と並んで乘つてゐることもある。等は傲然とした態度で、みんなの慌て、ふためくのを冷かに流して行くのである。これは、ある街の一角の光景に過ぎないが、このやうた有様を見るのは、こゝだけでない。至る處でこの自動車が過ぐるところ、かうしてみんなは、慌て、ふためくのだ。一人のブルジョアが乘る自動車のために、みんなが、いかに迷惑をするかを考へて見るがいゝ。

彼等は、自動車を持つために、稅金を拂つてゐると言ふであらう。しかし、そのことは、無産者に、何の關係があるのだ。ことに、震災後は、僅かに、やつと自動車がはいる程の、狹い道を頻りに、警笛を鳴らしながら行く、權暴を逞ましうしてゐる。

自動車に乘れる人々の中には、眞に、急を要するものがある。そして、自己のためでなく、他人のために、社會のために、時を爭はなければたらぬものがある。たとへば、急病患者に於ける醫者の如きがそれである。また、その他にも公共な仕事に從事する人達で、急ぐ必要のあるものがある。しかし、それならば無産階級は、社會のために、また、人生のために、怠つてゐるか。そして、孜々として日々働いてゐないか？しかるに、彼等は、自動車を有しない。矛盾である。先づ、自動車の通るに足

る道を通つてから、自動車が通るのでなければ、たゞ、この一事だけでも階級闘爭の觀念を促進することを、感ぜずにはゐられない。

人間の生命を威嚇することによつて、自分の乘る車の通る道を開かさせることが、なんで、危險思想を生ぜずに濟むことがあらう。自動車を避ける所以のものは、自からの生命を思ふからであつて、何も道德心からさうするのではないのである。こゝに、自動車に抵抗し得る、防衞機械が、簡單に、各自の體を武裝せしめたなら、恐らく、誰でも、自動車の前面に立つて、決して、一歩も動きはしないであらう。

ブルジョアに、泥濘のとばしりを頭から浴びされる理由がないやうに、天氣のいゝ日には、乾いた往來の上で、塵埃の渦を捲き起すことによつて、ブルジョアから、塵と黴菌を吸はされる理由がないのである。

彼等は、かくすることによつて、無產者の激怒をます／＼募らせてゐる。

ある日の夕暮方であつた。私は、一人の青年といつしよに散歩してゐた。時刻は、ちやうど狹い道の上があふれる程雜踏する時分であつた。たま／＼一臺の自動車が、群集の波を突き切つて走つて來た。女や、子供等は、聲を上げて避けたのであつた。すると青年は、帽子を脫いで、振りながら自動車の前に立塞がつた。そして、顏を眞赤にして、

「馬鹿野郎！」と、怒鳴つた。

自動車の中には、男と女が、悠々として腰をかけてゐたのであつた。

自動車は、これがために愕いて止まつた。群集は、聲を上げた。

私は、この青年の奇狂な行爲を決して喜ぶものでない。しかし、青年の憤りが、純眞なものであつたことを否むことが出來ない。

私は、いつも心の中で祈つてゐるのである。どうか、私の最も愛するものが、自動車に轢かれてくれるな……と。なぜなら、私は、氣が狂ふであらうからである。

自動車に抵抗し得るやうな堅牢な防衞機が發明されざるかぎり、自動車によつて、轢かれた時は、復讐せずにはゐられないからである。自分の最も愛する子供や、親や、妻が、自動車に轢かれて、しかもブルジョアの乘る自動車に轢かれて、僅かばかりの金で濟ますことができると思ふか？　そんな金が、何のためになるのだ。その悲しみと、憤りとが、何つて償はれ得るであらう。たとへ、ブルジョアの全財產を以て詫びても、死

者の二たび生きざる限りは、尚ほ足りないのである。しかも、自動車で無産者を殺すことは、決して、過失ばかりと言ふことはできない。まさに、階級的の虐殺である。これがために、妻や、子供や、親を殺されたら、感情の趣くがまゝに、テロリストになつたとて仕方がないであらう。私は、自から、どうすることもできない、自分の感情が怖しいのだ。そして、自動車に對して、そのために、ことさら病的たらざるを得ないのである。

　ある夜、私は、日本橋通りを歩るいてゐた。路次は、暗かつた。暗い、路次を一人の老婆が、腰を曲げ、杖をつきながら、歩るいてゐた。それは、子供の這ふよりも、もつと影が小さかつた。この時、あちらから、自動車が、ヘツドライトを燃える巨眼の如く、郎かして疾走して來た。この老婆の影を認めたかどうか分らない。私は、「あぶない！」と叫んだ。そして、老婆をつかまいて、道の端に避けしめやうとした。幸にして、自動車は刹那の距離で止つたが、老婆は氣狂のやうに、私の手に噛み付いて罵つた。

「いらんことをするな！　お前が、いらんことをするから危ぶないんぢやないか！」

　私は、呆れて、すぐには物が言へなく、この頑固な、根性骨の曲つた老婆を睨み付けた。

「こんな奴が、自動車に轢かれてくたばるのだ！」と、言ひ捨て、去つた。

　かういふ風に、轢かれる者の中には、圖々しい人間もあるにはちがひない。けれど、私は、常に、無産階級の實感として、ブルジョアの乘る自動車を憎むのである。

　眞に、たゞ一日だけでもいゝ。都會の自動車を一臺殘らず、無産階級の權利によつて停めて見たいものだ。——二四、四——

醜い圓太郎、危い貨物

生方敏郎

以前から自動車は自分で乘つて見ると心持がいゝが、自分が歩いてゐる時、前から又は後から、時には横あいから不意に自

動車が飛ででられると、隨分あぶなくもあるし、又危險が去つた後では、無性に腹の立つものだつた。

私は、本鄕三丁目の角で、自動車の爲めに、已に一命を失はうとした經驗がある。警笛も何も鳴らさずに、不意に横あひから出て來て私の目の前をかすめて過ぎた。其車と、私の體との距離は、二寸か三寸であつたらう。私の着物にさはつて通り過ぎた。其時若し觸れてゐれば、もう死んでゐたにちがひない。あの後の瞬間は、身の毛のよだつ程怖ろしかつたが、助つたと思ふと、無闇と腹が立つた。

又、雨の降る日には、泥をはねかされ、それも、かなり癪にさはつた。又、暗闇から不意に、猛獸の樣に目を光らかして自動車が、かけ出して來ると、眩しくて目を開く事も出來ない。それも只眩しい丈けで、明るく其處等が見えると云ふ譯ではない。そう云ふ時にもかなり腹が立つ。又神經をいら〳〵させて、可成り體にも毒だと思ふ。

併し、こう云ふ憎い自動車も、時々自分で乘つてみると、中々憎めなかつた。廣い通りを、風を切つて、疾走する心持は、晏子の馭者ではないけれども、意氣揚々たらさるを得なかつた。他所へ訪問して、自動車で送り歸されたり、又は下町で遲くまで遊び過ぎて、自動車で歸る時など、何とも云へぬいゝ氣持だつた。

併し、それも、もう歸らぬ過去の夢となつた。震災以來、自動車が無闇とふへて來た。殊にボロ自動車が非常に目につく。又市營の圓太郎自動車と云ふものが、まだかたづかない、ゴタ〳〵した狹い道を、縱横無盡に馳け歩く、只それ丈けでない。一噸積又は一噸半積の貨物自動車が、絶え間なく、亂暴に馳け歩く。先づ自動車に乘つてる人を見れば、時には傲慢な顏をしたブルジョアも居るが、時には可愛らしいお酌さんを乘せたのもある。又は、私の住む音羽の通りなどでは、墓參に行くのであらう。老若とりまぜつゝましやかに乘つてゐる婦人客等を見る事もあつた。自動車の客は、さう迄氣持の惡い人々ではない。

所が、震災以來、自動車は、怖ろしく客種が惡くなつた。そして運轉手の質も惡くなつた。日がとぼ〳〵暮れかかつてゐるのに、燈も無しで走るものもある。雨の降る日に、一つの車の泥よけがとれたのを其儘で、泥水をはねかし放題に走るものもある。だが、中でも貨物自動車が一番亂暴だ。見るから無恥で粗暴さうな男が、二人三人位乘り込んで、非常なスピードで走つて行く。子供が前に居ようと、お婆さんが來ようと、お構ひなしだ。そして、雨の日には勿論泥をはねかし放題、天氣の日には濛々たる白雲の樣に後へ塵埃を上げて行く。多くの自動車の中

でも、此の貨物自動車が一番怖ろしく質が悪い。如何にも相手が悪いと云ふ感じがする

もう、少しく古い話になつたが、大塚仲町の電車道で、岩野泡鳴君の子供が馬力の車に足を轢れた事がある。其時には、鼻梁の強い事に於て恐らく天下無敵であつた所の彼、泡鳴も、相手が悪いので話のつけ様もなく、威張つて見ても威張りがひがないので「君、世の中で一番强いものは馬方だね」とこぼしてゐた。現代に於ける貨物自動車の主が即ちそれだ。

私の所で長男が初めて學校へ上つた時には、送り迎へをしないでも、安心してゐられた。私は、子供については特に心配性なので、彼が學校から歸つて來た顏を見る迄は安心出來なかつたが、母親の方は一向平氣な方で、さう毎日心配ばかりしちやゐられませんよ、と云つて濟してゐたものだ。所が、此の春から次男が學校へ通ひ出すと、今度は流石の母親も安心出來ないとみえて、手の無い中で毎日送り迎へを怠らない。何の爲めだ、全く自動車と、貨物自動車とのお蔭だ。

去年の暮の事だ。私は丸ビルへ用事があつて、俥で出かけた。少し曇つてゐる日ではあつたが、午後四時頃の事で、路面はまださう人通りの多い時刻では無かつた。用も濟んだので、丸ビルを出て、東京驛前の廣い通りを宮城の濠の方へと走らせて來ると、私の後に警笛の音がして、自動車が忽ち私達の傍を走りぬけ、前へと驅け去つた。そして、見る間に、七八間先に自轉車に乘つてゐた若者を輪にかけて轢いてしまつた。自轉車が倒れてころがつたと思ふと、人間の方は、風呂敷でも投げた樣に平たくなつて、そして又波打つて動いた。自動車は直に、走るのを止めて怪我人を中へ收容した。

此の時には、あの廣い通りをさう澤山の人や車が通つてゐた譯ではなかつたのに、どうしたはみか轢いてしまつた。運轉士がぼんやりしてゐた事だと思ふ。轢かれた男は其後死んだか生きたか消息を知らないが、私はあれ以來、自動車がつく〴〵怖ろしくなつた。それ迄は、自動車に、自分が乘る事だけはすきであつたが、あれからこつちは、乘る事さへも怖ろしくてならない。其後、三四度やむを得ず、乘つた事があつたが、とても以前の樣に晏子の馭者の樣な、いゝ心持になれない。何かに突き當りはしないか、誰かを轢きはしないかとびく〴〵する。

新聞で交通事故に關する警視廳の統計を見ると、自動車は更に一層怖ろしいものになる。自動車と云ふ名前を廢して、新に人轢き車と改名した方がいゝ位だ。人を殺す事に於て、近來、猫いらずと其の覇を爭ふ程である。

刃物ばかりが殺すじやないよ

自動車で轢くのも人殺し。

こんな都々逸もありさうな氣がする。

冗談でなく、刄物で人一人殺されたとなれば、警視廳は總動員をして、之が捜索につとめる。嫌疑者を何人も警察へ引ばつて來る。さ程確實な證據の上らない者でも、警察へ連れて來て白狀させ樣とする。時には拷問さへもする。そして、未決へ擲り込んで、豫審でさんざしらべて、それから公判へ廻す。新聞にも何度も書かれる。檢事は之が爲めに峻嚴な論告をなし、辯護士は之が爲めに熱心な提燈を持ち、判事は之が爲めに、恩威並び至るらしい判決を下す。さてそれから今度は監獄の手に廻る。そして數年間典獄や看守や教悔師の御厄介になり、親戚朋友は差入れものをするやら、面會に行くやら、大騷ぎをなし、やつと年期があけて出て來ると、今度は免囚人保護所のお世話になる。人一人殺せば、この位の手數はかゝるのである。所が、近頃の自動車の人殺しをなすや、實に簡單で、あツと云ふ間に殺してしまひ、新聞にはたつた三行ばかり、例により免狀持たずの運轉士なる由、位の事でけりがついてしまう。探偵や警察や、裁判官や辯護士や、免囚人保護所の人達は、手をこまぬいて見てゐるより外はなく、まことに暇で結構かも知れない。爾來殺人は總て專ら自動車のみでやつてもらひたいなんて云ふかも知れないが、私は此說に餘り贊成出來ない。自動車で、殺される人の數は、東京市内で、凡そ一日一人の割合に當り、怪我人はこれより遙に多いさうであるが、如何に人間がふへたとは云へ、自動車の樣な殺人器で、さう無雜作に殺されてはたまらない。佛蘭西革命の時には、ギロチンとよぶ殺人機械を以て、毎日無雜作に人を殺してゐたと云ふが、此頃の東京に於ける自動車と比べて果してどれだけの徑庭があるか。もう少し自動車にも遠慮してもらひたいものだ。

震災後の交通事故と自動車

警視廳交通課長　藤岡長敏

震災後交通事故が著しく多くなつたと云ふ事は、寔に遺憾ながら事實です。此のことに就て、吾々は最も頭を惱して居るの

ですが、何分現在の樣な惡い道路の上を、一千臺の電車、九千にあまる自轉車が馳せ違ふ。十二萬臺位の荷車、荷馬車が、大きな荷物を積んでのそ〱歩いてゐる。その中を二十餘萬の自轉車が、飛び廻つてゐる。步行者(ペデストリアン)にはまだ交通道德が普及してゐない。路面は彌が上に惡くなつてゐる。假橋はたいてい出來上つたが、十分ではない。到る所で電車軌道の修繕工事をしてゐる。瓦斯、水道、下水と次から次へ、堀りくり返へしてゆく、その爲道路は片側しきやつかへない所が尠くない。なほその上車道の舖裝が無い爲、又は舖裝はあつても完全でないため、自動車と云はず、自轉車と云はず、荷車と云はず、車と云ふ車は全部石の敷いてある電車軌道の上を通りたがる。——これを考へると交通事故の數が現在のまゝに止つてゐるのは、寧ろ不思議な位です。

然らば事故は一體、どれ程あるかと申しますに、之を月別に致しますと、

九月——死一三、傷一五二
十月——死一四、傷六三三
十一月——死　九、傷六〇三
十二月——死一八、傷五七五
一月——死一九、傷五六八
二月——死一七、傷六〇一

と云ふ數を示して居ります。

震災後僅六ケ月間で交通事故の爲、九十人の死人を出し、三千百三十二人の負傷者を出した勘定になるのです。言ひ換へますと、電車、自動車、その他諸車は每日十七件の傷害、二日一件の殺人を行つてゐるのです。しかも帝都の眞中で、白晝。

もし戰慄すべき殺人鬼があらはれて、每日こんなに數多くの慘劇を演じたとすれば、如何にのんきな人達でも、枕を高くして寢るわけには參りますまい。

この數多い事故のうち、自動車に歸因するものが、その約五割强を占めて居ります。

東京市内に自動車が現在九千臺あまりあると申しましたが、震災前までは、自家用、營業用、貨物、乘用を合せて、五千七十八臺に過ぎなかつたのです。それが交通機關の不備の爲、復興材料運般の必要等により、隨分多數の自動車が他府縣からはいつて來ました。その上關稅が一部免許になつてゐたので、輸入を促進し、十、十一、十二、一月、の四ケ月間に於きましても、既に三千百三十二臺の增加を來して居ります。兎に角、東京市では平常時に於ても、一ケ月約三百臺位の自動車增加率を有してゐると見て、差閊へありませぬ。今自動車の數に對する

事故の割合を見ますれば凡そ一千臺の自動車を一ヶ月運轉すると、人の死者三十五人の負傷者を出すことになつて居ります。東京の自動車増加率は、一ヶ月約三百臺でありますから、此の割合で事故がふへたとすれば、どうなるでせう。

しかし事故の原因の過半數が自動車であると申しましても、強ち自動車のみを横暴である、殺人車であるとして、責める譯には參りますまい。毎日起る事故のうち、被害者の過失が加はつてゐないと云ふ例は、殆ど稀です、しかもその過失が重大な過失なのです。

警視廳と致しましても、五百人あまりの交通巡査を交通頻繁の場所に配置してありますが、あの交通巡査の立つてゐる所で事故があつたと云ふことは、殆どありませぬ。これを見ましても、お互にいま少し注意して、他人から世話を焼かれなくとも交通上の秩序を守つてくれたならば、こんなに多數の事故を出さなくつてすむと信じるのであります。(談)

時代の表象自働車の横行

近松秋江

アイ氏から、自動車横行といふ題で雜感を書いていくれといふ命令であつたが、横行といふ題意から察するところ、自動車の横行に對して多少の惡感を表してゐる氣持らしい。無論私も自動車の横行に對しては惡意を唆られる場合が屢々あるが、しかし、今日の成り行きから考へたところ、自動車の横行は時代の大勢であつて如何ともし難いのである。のみならず實際、自動車は危險であるとゝもに便利であるのだから、強ちそれに對して惡意を抱く譯にもゆかないやうである。

東京市の交通が何時までも整理されず、道路は晴天には砂塵を捲げ、雨天には泥濘膝を沒し、そこへ自動車が前後左右から疾驅して來るのだから私共東京へ出て往く時には、實際生還を期してゐないといふも、敢て過言ではないのである。玄關に下り立つて靴を穿きながら、まるで水盃でもして別れて往くものゝやうな不安を抱きながら自家を出るのである。

そこへ昨年の大震災で、又々東京市が愉快なる都市に改造されるまでには一層の長い年月を待たねばならぬことになつた。私共が生きてゐる間は、多分東京ば、今日の不愉快なる都會のまゝで殘されるであらう。

文明の利器が倍々發達するにつれて、人の、其等の機械の爲に誤つて死傷する數は却つて、減じないで、正比例的に增加して來てゐる。昔は江戸の辻々に辻斬りや追剝强盜などが現はれて行人を惱ましたといふが、今日の東京市中の、喧嘩と混亂を極めた交通機關の狀態などを見ると、何だか猛獸が牙を剝いて唸つてゐるやうな感じがする。昔しの江戸と今日の東京とどちらが、人心に禮讓と節制が多くあつたかと思つてみるのに文化といふことは何處まで來ても唯外皮的のことのやうに思はれる。人間性の殘忍は今日の東京人の方が江戸時代の人間よりも遙に露骨で無遠慮であるかも知れぬ。

社會生活の自由主義といふことは文化人の特權のやうになつてゐるが、私は此の頃、動もすれば權力主義の節制を謳歌する氣になる。それは、昔しに後戻りをするものであつてはならぬが今日は又餘りに權力の中心が無さ過ぎるのではあるまいかと思はれる。偉大なる權力の人が出現して果斷に富んだ痛快な改良や節制を實行してくれたら好いと思ふ。

今日の有樣では、世の中の事が何も斯も睡眠をすばかりである。これは、自動車の主題と懸け離れたことのやうであるが、其の自動車が泥濘を蹴立てゝ、遠慮會釋もなく右往左往に橫行するところを見ると、何の事はない社會生活の自由主義の弊害をまざ／＼とそこに認めるのである。

政府は思想善導だの、文政審議會だのと、いろ／＼な、人心教化の機關について苦心をしてゐるやうであるが、其等の事も無用でないにしても、そんな無形的の方面よりも先づ有形的の事物の改善を急ぐのが肝腎ではあるまいか。無論その方も極力急いでゐるのであらうが、なか／＼實際に當ると、さう細かいところに氣が付いてないことが多くあるだらうと思ふ。一々實例を擧げるの繁に堪えないが、いろんな機關の不備不整理の爲に日常の不愉快と不自由とは言葉に盡し難い程である。

吾々は、幾らそれを思つたとて仕方もないから、丁度此の頃の曇天つきゞを凝乎と諦めて耐忍してゐるやうに、たゞ辛抱してゐるの他はない。

自働車は便利で愉快な乘物であるが、何となく不作法で、無遠慮で、危險なものゝやうな氣のするのは、その用法に時代の惡弊が表象されてゐるからではあるまいかと思ふ。

文明の斬捨御免

白柳秀湖

交通上の自然淘汰

或る日、ロンドンの町を遊歩中私はフト氣がついて『此所には自轉車が見えないぢやないか、一體どうしたんだらう』と云つた。すると一行のものも氣がついて、途々自轉車に注意して見たが一向に見當らない。

併しその後氣をつけて居ると絶對にないといふわけでもないらしいと見え、その後ビショップ、ゲートの邊かで一度見うけたことがある。ロンドンで自轉車を見たのは、それが始めにして終りであつた。

ロンドンに自轉車の見えない理由は何人にも直ぐ分つた。それは自動車の多い爲に、自轉車が自然に陶汰されてしまつたのである。危險で町を自轉車で乘廻すことが出來ないのである。之を以て見てもロンドンに、自動車の數の多いことが分る。

東京は未だ自轉車の時代

此關係は東京に就いて見るとよく分る。

東京では自動車の運轉手にきいても、人力車夫にきいても、電車の車掌にきいても、往來で一番困るのは自轉車であるといふことに一致する。自動車はブルの乘物だ。泥を撥かへし、臭い瓦斯を吐き、人を轢逃げる憎い奴だと一概にいふが、私は自動車よりも自轉車の方が餘ほど厄介者であると思ふ。町を歩いて自轉車ほど無作法に人を困らせるものはない。

自轉車乘りには資格に制限がないのか、昨日今日乘初めたやうな下手なのが、往來をお草紙にして千鳥に乘廻して居る。少し上手なのになると往來で友達同士競走をやつて居る。法外な速度で走つて居る。自轉車で一番困らせられるのは、何んな細い狹い路次からでも思ひがけなく飛出して來ることである。鈴など鳴らすものは殆どない。警視廳の方にはいろいろ規則もあ

るやうだが、此自轉車ばかりは取締りの法がないものと見え、規則を守るものは殆どない。それで居て曰く、自轉車は平民樣の乘ものだと、近頃譯もないことに平民呼はりされるにはウンザリする。

ロンドンや、ニューヨルクに半年も暮した人でなければ、東京の町で自動車に轢殺されるのは、轢殺される方が餘程何うかして居るのだといふことはホントによく分らぬ。それほど東京にはまた自動車の數が少い。ロンドン、ニューヨルクからかへつて來ると東京は世界の田舍だといふことが沁々思はれる。久し振りで銀座を散歩し、往來を横切らうとして誰でも考へるのは『昔はこれでも自動車に氣兼をしたものだ。何うしてこればかりの自動車に心配をしたものか。モウ已れはドンナことがあつても東京の町で自動車にだけは轢かれないぞ』と云つたやうなことだ。(それで居て、一ヶ年もすると、又、元に戻つて自動車が可なり邪魔になつて來る)

轢き逃と轢かせ逃と

尤も立場をかへて歩く人から、乘る人になつて見ると、轢殺される方の無理は初めからよく分つて居る。必ずしも外國で修行をして來る必要はない。歩いて居てこそ『コン畜生!』であるが、乘つて見ると氣が氣でなく、轢殺されても仕方がないやうな歩きかたをして居る人の多いのに驚かされる。但し、歩く人の不注意によらず、自動車が事故を惹す場合がある。併しそれは原因が大抵例の自轉車による。

自轉車が思ひがけもなく横町からヒョイと飛出したり、突然鼻先をかすめたりするので、それを避けようとして急にハンドルを廻すはずみに、人を轢いたり電車に衝突したり、人力車を突飛ばしたりする。怪我人が出來て、巡査が來る頃には當の責任者である自轉車は、雲を霞と逃去つて居り、貧乏籤はいつでも自動車の運轉手が引き當てる。自動車は轢き逃をする。自轉車は轢かせ逃をする。

強者の悲哀

瀬戸内海で霧の深い夜などによく汽船の衝突することがある。これは大抵漁船が原因であるといふ。漁船をつひ鼻先に見出して急に舵を轉じ、思ひがけもなく他の汽船と衝突をする。陸で自動車が自轉車を助けやうとして、大きい事故を惹起すのによく似て居る。

人間生中弱いものを踏潰すに忍びぬ心がある爲に、弱いものを踏潰すより以上の悲劇を生んで居る。

第五街が安宅の關

轉じてニューヨークに行くと自轉車といふものは全く見られぬ。之は絶對に見られぬと云つてよさそうだ。

それだけニューヨークにはロンドンより自動車が多い。ロンドンでも往來を横ぎらうとするには隨分苦しんだものであるが、ニューヨークでは殆ど立すくみの形であつた。

ビルトモアー・ホテルに泊り、ブロードウェーに出かけるにフイフス・アベニューを横る。此所が安宅の關で、辯慶、判官ともに甚だ行惱んだ。シツキス・アベニューには高架鐵道があるので、往來を横るにも大きに都合がよく、それを越すとブロードウェーとなるのであるが、フイフス・アベニューではボントに弱らせられた。

東京のやうな往來のノンキな所からニューヨークにやられると、氣の小さいものは大概一ケ月で神經衰弱になつてしまふそうだ。東京も世界の都となるには未だ〳〵前途遼遠といふものだ。

田舍新聞の文藝欄

フイフス・アベニューには日本橋の白木屋の前にあるやうな信號機の精巧なのがあつて、十分間置位に巡査が自動車をとめてくれる。止れの信號が出ると、見る〳〵中に往來が自動車で埋つてしまう。埋るといふのは形容でも何でもない。ボントに地の見えないほど溜つてしまふ。

『止れ』だの、『進め』だの、大袈裟な信號を出しても、止る自動車が多くて五臺、少い時は二三臺に過ぎないなど何だか要もない人眞似をして居るやうで田舍新聞の文藝欄を見るやうだ。

それでも注意をすると、自動車だけは二三十臺止つて居る。信號は自動車が目的でなく、自轉車が目的であると思へばそれもよい。

車の山と人の波

ロンドンでは信號で止めず、巡査が手に持つた棒で合圖をする。

何でも舊式な國で、皆機仕掛けの氣の利いた機械など使はぬのかと思へばそればかりでもないらしい。ロンドンの町は曲りくねつて見透しが利かぬので、信號よりも、巡査が手で止める方がよいといふ所もあるのだ。

ピツカデリー・サーカスでも、オツクスフオード・サーカスでも、巡査が合圖をすると、自動車は忽ち往來を埋めてしまふ。

併しその數は何と云つても、ニユーヨルクの方が多いやうに思はれた。併し、ピツカデリー・サーカスで自動車が止ると、兩側に停滯して居た人が、堰を切つて落した水のやうに往來に流れ出す。往來が歩けぬので、止つて居る自動車と自動車との間を縫つて向側に移らうとする。此恐ろしい人間の洪水はニユーヨルクよりもロンドンの方が上であると思つた。

ブロードウエーのさかり場でも、町に溢れる人波のピツカデリー・サーカスほど物すごい所はない。

日曜の朝

ロンドンでも、ニユーヨルクでも着いて初めの十日程は町の空氣にガソリンの臭が充滿して居ることが氣になる。東京では自動車の通つた跡でなければ此臭はせぬ。併し十日ばかりすると鼻が馬鹿になつて、その臭がしなくなる。

ロンドンは町が曲りくねつて居るので、その感じが薄いけれども、ニユーヨルクの日曜の朝はまるで町が新しく建直つたやうだ。ガソリンの臭がしなくなつて、自動車の數がグツと減つてしまひ、眞直な町が遠く見透されるやうになるからだ。

日曜の朝、お寺の鐘をきゝながら、まるで新しく建直つたやうな町を見透して居ると、今更のやうに平日の目まぐるしい自動車の往來が思出される。

『東京』を書く人々

ロンドンとニユーヨルクの目抜きで今見られぬものは、電燈、電話の架空線、電車の軌道、それに自動車の爲に陶汰された自轉車と此三つである。

『東京』を題材とした小説や、繁昌記に電燈、電話の架空線や市街電車の軌道を、蜘蛛の巣のやうだとか、綱の目のやうだとかサモ自慢らしく書立てて居るのはチヨツト悲慘な氣持がする。

世界を旅して三流、四流の都會に入り、往來を電車の走つて居る所を見ると『アヽ田舍へ來た!』といふ何とも知れぬ氣安い、懐しい心持がする。誇張でも何でもない。

寂しい野末を汽車が煙を出して走つて居るのが、石燈籠に火のともつて居るのを見たり、自在鈎に鍋のかゝつて居るのを見たりするのと同じやうな感じを起させる電氣の時代はモウ私達の眼前に迫つて居る。ホントに東京を書かうと思つたら、少くともロンドン、パリ、ニユーヨルク、ベルリン、ウヰンナ、ローマ、ヴエノス・アイレス、リオ デ・ジヤネロぐらゐは一通りでも知つて居る必要がある。それは大阪をよく知つて居るとい

ふことが東京を書く上に大切な素養であると同じことである。

自動車ではおくれる

ロンドンでは未だ『自動車でお出かけになつてはおそくなりますから、チューブで入らつしやいまし』といふやうな注意を宿の番頭からされたことはない。ロンドンでは未だ自動車は確かに早い乗りものの一つとなつて居る。

處がニューヨルクに行くと全く事情が違つて居る。『オイ急ぎだ！ 自動車を呼んでくれ！』といへば、『お急ぎならばサブでお出でなさい。自動車ではおそくなります』といふ注意はしばしばきかされる。嘘と思へば全くのホントである。

自動車が多過ぎるので辻々で巡査に止められる。往來が止まると直に五十臺でも百臺でも閊えてしまふ。それを二三度やられると全くおそくなつてしまふ。所詮地上に急ぐ人の歩く所でない。急ぐなら地下を行けといふ。これがニューヨルクの現狀である。

文明は子供の積木遊びのやうなものだ。

自動車を待つ職工

大正十一年十月二日、ニューヨルクの中央ステーションを發し、ホドソン河を溯つて、午後九時五十分スケネクタデーに着き、翌朝三井物産の紹介で有名なＧ・Ｅ・會社の工場を一覽した。

工場の脇に二三百臺もあらうか、夥しい自動車が、列を作つて置いてあるのを、て、案内人に『之は社の營業用ですか』と尋ねると、案内人は笑つて、『イヤ、これは職工の自動車です』と答へた。

アメリカでは少し給料のよい職工になると皆自動車で工場に通つて居る。歐洲の勞働者とはまるで生活の程度が違つて居る。Ａ・Ｆ・Ｌ・がインターナショナルの運動に參加せぬのも無理はない。『萬國の勞働者、結合せよ！』と叫んだマルクスは、歐洲の歴史だけを見て『共産黨宣言』を書いて居る。今日の如きアメリカの發達は全く想像せずして死んだ。歐洲の勞働者は或はその共通の利害において一致團結する日もあらう。併し米國の勞働者や濠洲の勞働者は恐らく容易に一致點を見出すことが出來まい。況んや一枚下の有色人勞働者が何うして白人勞働者と一致點を見出すことが出來よう。マルクスの歴史の見方は原則として私も之を信ずるものの一人である。併し私はマルクスの見た歴史は歐洲の歴史であり、その『共産黨宣言書』の結末に All countries. とあるのは『歐洲各國』の意味に解すべき

であらうと思ふ。

されぱと云つて米國の勞働者に生活問題がないといふのは飛んでもない間違ひである。米國で或る人が自動車を持つといふことは、新舊世界で或る人が自動車を持つのとは全く事情が違ふ。自動車は持つても勞働者はヤハリ勞働者である。米國には米國の貧乏がある。米國も勞働爭議の多い點に於いては決して歐洲に劣らぬ。米國の勞働者は勞働運動に於いて恐らく歐洲の勞働者と提携するやうなことはあるまい。併し、國内の勞働爭議は今後もいよ〳〵紛糾するばかりであらう。

フォードの傳送組織

翌十月三日、デトロイトに到着し、グランド・ブーレバード街を西北に、ニューヨルクの棘々しい、殺風景な街衢と打つて變つた、風雅な、閑靜な田舎町らしい何ともしれぬ平和な空氣を懷しみながら、左折してウッドソード街に出で、更に西北に駛走してハイランドパークを前にしたヘンリー・フォードの自動車工場を一覧した。

近來英米の諸會社では日本人が工場の秘密を盗むといふので警戒が嚴しく、寫眞機などは一切攜帶を許されず、前日參觀したＧ・Ｅ・會社の如き、ホンの紹介者の顔を立てるまでの案内で要所々々は深入させず、甚だ不愉快極まるものであつたが、フォード會社は工場の縱覽を許すことを以て呼物の一として居るだけあつて、專任の案内人を置き、毎朝内地はもとより、世界各國からフォードの名をきいて集まつて來る參觀人を纏めて工場の隅から隅まで丁寧に案内をする。原料から材料の出來上るまでの過程、材料と材料とを結付けて局部を作る作業、最後に帶のやうな傳送機（Moving Conveyor）が、小川の流れのやうに動いて行く其上で局部と局部とが完全に組立てられ、最後に立派な一臺の自動車となつて、傳送機の上から勢よく工場の外の廣場に送出される所まで惜氣もなく案内してくれる。

驚嘆に値するのは此工場の傳送組織である。會社では之を"The Ford Conveyor System"と云つて居る。

小川の流れのやうに緩やかに動いて行く帶のやうな傳送機の兩側には、局部々々を受持ちの職工が、自分の前に車臺の流れて來るのを手ぐすね引いて待つて居る。さうして手早く仕事をし了せてホッと一息つぐ間もなく次の車臺が流れて來る。最初に此傳送機の上に置かれる仕事は車軸と枠との結合である。次に、ガロン入のガソリン・タンクが置かれる。次にハンド・ブレーキ・レバー・ガソリンを供給する管、鐵の安全板などが結付けられ、いよ〳〵モークーが結付けられる段取となる。普通に此

モーターを持上げるのは容易ならざる作業であるが、此所ではホイストを用ひて輕々と持上げられ、直に車臺の上に置かれる。次にダッシュ、舵機、コイル、號笛などが結付けられる。それが濟むと次は排汽管、モーターの覆被、サイド・パンなどが結付けられ、次に車輪、次に放熱器といふやうに段々出來上つて、最後に車體が加へられ、一臺の完全なフォードの自動車となつて傳送機の外に送り出される。

此傳送組織を見るに及んで、フォードが千九百二十年の八月一日から、千九百二十一年の七月三十一日に至る一ケ年間に百二十五萬臺の自動車を作つたといふことが初めて信じられた。一ケ年間に百二十五萬臺といへば一日に約三千四百二十五臺、一時間に百四十二臺、一分間に二臺といふ勘定になる。如何にフォードの工場でも、自動車が一分間に二臺出來ようとは思はなかつた。併しかうして工場を隅から隅まで案内され、最も能率的な分業組織と傳送組織とによつて、原料から材料へ、材料から局部へ、局部から全體の組立へ、眼のあたり説明されて見ると一時間に百四十二臺、一分間に二臺といふ製造能率を信ぜざるを得なくなる。

フォードの製造能力

フォードの報告によると、此會社のかく發展したのはヤハリ戰爭のお蔭で、戰爭以前は未だ製造能力も微々たるものであつた。即ち千九百四年度には千七百八臺、千九百十年度には一萬八千六百六十四臺を作つたに過ぎなかつたものであるのに、歐洲大戰爭の突發した千九百十四年度から遽に增加して二十四萬八千三百十臺となり、米國の參戰を決した千九百十七年度にはそれが更に激增して七十八萬五千四百三十二臺となつて居る。今千九百四年度から、千九百二十一年度に至るフォード會社の各年度製造高を表示すると次の如きものとなる。

一九〇四年度	一、七〇八
一九〇五年度	一、六九五
一九〇六年度	一、五九九
一九〇七年度	八、四二三
一九〇八年度	六、三九八
一九〇九年度	一〇、六〇七
一九一〇年度	一八、六六四
一九一一年度	三四、五二八
一九一二年度	七八、四四〇
一九一三年度	一六八、二二〇
一九一四年度（歐洲大戰役開始）	二四八、三〇七
一九一五年度	三〇八、二一三
一九一六年度	五三三、九二一
*一九一七年度（米國參戰）	七八五、四三二

*一九一八年度	七〇六、五八四
一九一九年度（ベルサイユ講和）	五三三、七〇六
一九二〇年度	九九六、六六〇
一九二一年度	一、二五〇、〇〇〇

備考——各年度共前年の八月一日より、當年の七月三十一日に至る一ケ年間。*印は軍用自動車の製造を含む

自動車で魚釣

フォード會社の參觀を了へてデトロイトに引かへし、ミシガンロードの角の支那料理洞湖亭で晝飯をたべた。食後、セント・クレイア湖のベレ島公園を志し、ウッドワードの本通りから、ヂェファーソン・ロードを東にデトロイト水峽に沿うてグランドブールバードに出て、それから南に折れて眞直にセント・クレイアの湖邊に出た。ベレ島はちやうどセント・クレイアの水が縊れてデトロイト水峽となり、エリー湖に落ちようとする、河の出口に横はつて居る小さい島である。グランド・ブールバードから湖上に棧橋がかゝつて居て自動車で行くことが出來る。

ベレ島は岩石の奇があるでなく、森林の幽があるでなく、眺望と云つても、右はカナダ、左はミシガンの大平野で、漫々たる水の外は眼に入るものもない。時々水峽を溯つてセント、クレイアからヒューロン湖の方に通ふ國境聯絡の大汽船が靜かな水の面に白い波をあげて行くのを見るぐらゐなものである。

島の突角にタコマの池があり、池と水峽とを距つる砂地の上に柳の木が水に垂れて居る。

久し振りでユッタリとした心持になり、一行柳の下のベンチで午後四時頃まで、對岸カナダの平淡なけしきを眺めながら、連日奔走の骨休めをした。

此突角は魚釣りに都合のよい所と見え、町の茶目どもに、黑ん坊の女房までがまじつて、熱心に魚を釣つて居る。日本のやうに竿を並べるのでなく、長い絲に錘をつけ、それを拋ると絲がする〳〵と出て可なりの沖合に落ちる。竿は三尺か四尺でホンの魚のかゝつたのを知るだけのものである。中には車の仕掛けで、短い竿の先から絲を操出すやうになつた本式の道具を持つて來て居る閑人もある。

パーチ（Perch）と云つて鱸に似たの、ウインパーと云つて大さ小鯛ほどもある、タナゴのやうな淡水魚が釣れる。淡水魚と云つてもすべて海のやうな五湖に通ずる水とて、姿も形も海の魚に似たものである。

夕方になつて工場が退けると、デトロイトから職工達が自家用の自動車を走らせて釣りにやつて來る。自動車で釣にやつて來るといふのが、米國でなければ見られぬ圖である。一寸又一

葉、自動車を柳の木の下にとめて、中から釣道具を出す。日本の大公望とは大分様子が違ふ。中には細君携帯でやつて來るのもある。子供をつれないで、細君と魚釣りに來るといふのも面白いと思つた

自動車を持ちよい條件

米國で腕のよい勞働者が大抵自動車を持つて居るといふことについては少し割引して考へねばならぬこともある。

それは米國では第一に自動車が安い。殊に中古などゝ來たら幾らも金を出さずに手に入れることが出來る。第二にガソリンが安い。米國は有名な石油の產地である上に、メキシコに隣接して居るので、日本でガソリンを買ふやうなことはない。第三に米國に限らず、外國はすべて道路がよいから、タイヤアが痛まぬ。田舍へ乘出しても、山踰えをしても道は立派なものである。日本のやうにタイヤアが痛んでは如何に米國の勞働者とて自動車は持ちきれまい。

自動車必ずしも贅澤なものでない。日本では自動車を買つても、それを持つて居るといふことが容易でない、米國にはそれを持ち易い條件が揃つて居る。

禁酒と自動車

米國では最近まで自動車が十人に一臺位な割合であつたが、禁酒を斷行してから、勞働者の懷合が幾分でもよくなつたものと見え、今日では七人に一臺位な割合になつたと、旅行中何かの新聞で讀んだのを覺えて居る。

街路に映る燈影

ベルリンでは自動車のヘツド・ライトが、燈火の水に落ちるやうに、アスフアルトの道路に落ち、長く影を引くのが殊に目に立つた。

リープクネヒトとルイザ・ルクセンブルグとが殺されたといふチーア・ガルテンの森など夜ふけて通ると雨も降らぬのに、自動車のヘツドライトが長く影を地に引いて、何とも知れぬさみしい心持がした。

燈影婆娑として水に落つと云つた昔の人に、燈影婆娑として街路に落つとやつて見せたら何のことと思ふだらう。ベルリンのアスフアルトには何處かよい所があるのかしら、専門家にきいて見ようと思つて、未だきゝ出さぬ。

平和な自轉車

久しくイギリスに滯在し、ドヴアーを渡つて白耳義のオステンドに著き、ブルツセルに向ふ途中、先づ眼についたものは穀物の畑であつた。

イギリスでは容易に穀物の畑を見ることが出來ぬ。行つても〳〵エバーグリーンの原で、大かたは牛や、羊の遊場所となつて居る。廣い貴族の獵場には、オークの木蔭や楡の林に野兎や雉子の遊んで居るのが汽車の窓からチヨイ〳〵と眼につくほどで、日本のやうに食糧の乏しい、行詰つた國からゆくと、ウオルズウオルスの詩を思出すよりも先づ土地の使ひ方の贅澤なのに驚く。森を見ては貴族の我まゝを思ひ、牧場を見ては自由貿易主義の横暴を考へさせられる。

一度ドヴアーを渡つて白耳義、和蘭の平野に入ると直に青々とした小麥の畑が目につく。何のことはない。イギリスの爲に百姓をしてやつて居るやうなものだ。

穀物の畑について眼につくものは、田舍道を走る自轉車である。『アヽ久しく自轉車を見なかつた』といふことを直に感ずる。私は秩序のない東京の生活で散々自轉車の爲に惱まされ、自動車よりも自轉車を呪ふやうに習らされて居たが、此時ほど自轉車を平和なものに思つたことはない。

東京で自轉車が恐ろしい邪魔なものになつて來たのも、して考へると自動車が増えて來た結果かも知れぬ。して見ると自動車はヤハリ文明の斬捨御免だ。

轢殺される女の聲

斬捨御免といへば、ニユーヨルクの町々を見物中、コロムビア大學の脇で二十三四になる婦人が或る紳士の自動車に轢かれたのを眼のあたりに見た。

其時婦人の揚げた悲鳴は今でも耳に殘つて居る。

其婦人の悲鳴で前後二三町ほどの自動車が一齊にパタリと停止してしまつた。ニユーヨルクのやうな騷々しい町で、大の男が精かぎり大聲に呶鳴つたとて、これほどの距離に亘つてこれほどの自動車を只の一聲に止めることは絶對に不可能と云つてよい。

人間死ぬ時の悲鳴には不思議な力があるものだと沁々思つた。

自動車事故保險

ニユーヨルクには自動車の事故を引うける保險會社があり、

Ｉ兒。

それに加入して居る自動車の持主が過つて人を轢くと、其被害者に對する賠償料から治療費一切を引受けることになつて居る。

その保險會社には豫め指定の病院があつて、自動車の持主が人を轢くと被害者を直にその病院につれてゆく。病院では引受けて直に手當をするといふことになつて居る。

かうなつて來ると自動車はいよ〳〵文明の斬捨御免だ。

自動車を乘せる船

獨逸のハンブルグではエルベ河の河底を通ずる隧道を自動車で往復して見た。河底隧道はイギリスのニユーポルトでも汽車でくゞつたものだが、此所のは徒歩聯絡を目的としたもので、構造も見事なものであつた。此隧道で一寸驚いたのは河の岸から地下數百尺といふ隧道の口まで下りてゆくエレベーターの大きく、シッカリとしたことであつた。三四臺の自動車に徒歩の人々を滿載して、靜かに靜かに惡びれもせず下りてゆく。隧道をくゞつて向ふの口に出ると、又エレベーターが同じやうに人と車とを地上に運んでくれる。

イギリスのグラスゴウでクライド河とフオース河とを利用して北海とアイルランド海とを繋いだ運河に沿うてドライヴした時、その運河を自動車のまゝ蒸汽の曳船で渡つたことがある。

ニユーヨークのマンハツタンとニユージヤーシーと距つるホドソン河の河口は汽船で聯絡されて居るが、自動車は却て運び切れず、岸には汽船の到着を待つ自動車が山のやうに停滯する。

大正ジプシー生活の夢

久米正雄

自動車の横行に就て、何か書けと云はれ、書けさうな氣でゐ

ましたが、結局、横行を讃美する傾向になりさうなので、何だか書きたくありません。踵を接して自動車が來、誰でも乘れるやうな世の中になつたら、文句はないでせうが、さうでなくとも、此頃のやうに交通機關が不便では、一臺位持つてゐて、所謂オーナー・ドライヴでもしたいと、つく〳〵思ふ事があるからです。通信に依ると、在米の上山草人は、ダグラスの「バクダットの泥棒」に出た報酬で、一臺古自動車を釣魚に行く爲に買つて、乘り廻してゐたさうですが、（それはやがて直ぐ盜まれたさうですが、——其盜まれたところも愉快です。）其話を聞いて、私は羨ましいと思ひました。

　自動車を持つことは、子供が玩具自動車を欲しがるやうに、少し前からの私の夢でした。私はよく、金でも少し溜つたら、一臺の成るたけ大きな箱自動車を買つて、それに一箇のトランクを入れ、机のやうなものを拵へ、洗面器などを備へつけて、車を自分の家として、所定めぬ移動住居とする事を、夢想してゐました。そして今でも事情が許せば昔の一簑一笠の境涯でない、所謂今のトランク一つの生活でない、一車一屋の大正ジプシー生活をして見たいとさへ考へます。同好の士があつて、さう云ふ住居自動車が群をなして、都市田園の水草を追ふて、漂泊するなんさアほんとに文化的ですぜ。

　好きな所へ行つて停まり、好きな所で錨を下ろして、寢たり仕事をしたり、……おつと併し悪戯つ兒に、寢てる間に發動機を動かされて、朝眼を醒してみると、飛んでもない所へ行つてゐたり、懸崖の上で疾走したまゝ、谷へ向つて突つ放されたりしては堪らないから、尻尾（テール）に鐵の鎖をつけて、寢てゐる間は何處かへ縛りつけて置くんですね。橋際の柳に、車を繫いで一と寢入り、なんぞは「ほんとに風流」ではありませんか。

　たゞしさうなると、自動車の横行時代より、散歩時代ですね。

　それは夢、さてそれでは、これからぽか〳〵した戸外へ出タクシーでも拾つて、せい〳〵埃つぽい都大路を、ブルジョア文士らしく横行しませうかな。

憎みたくない

上司小劍

二十年ばかり前の西洋の雜誌を披いてゐると、自動車のひつくりかへつてゐるポンチ畫や、自動車が途中で動かなくなつて乘つた人の困つてゐるポンチ畫が、いろ／＼載つてゐて、自動車を嘲り、自動車に對して惡感をもつてゐた當時の人の心をあり／＼と表はしてゐる。西洋でさへ二十年前はさうであつたのだ。近代文明に於いて、西洋よりも二十年、或はその以上もおくれてゐる日本が今丁度自動車を嘲罵と惡感との的にしてゐるのは當然だ。

すべて、便利を主として造られたものも、それを人間の手によつて久しく使用するうちには、便利を超越した趣味を生じ、好尚を起させる。たとへば茶道具の如きものだ。あれとて最初はたゞ人間に飲料を供給するに用うる實用一方の器物であつたのだが、使用久しきに渉るに從ひ、だん／＼實用を超越したものになつて、今では人生の裝飾品となり、愛玩、乃至は珍藏のみを目的とするものもあるに至つた。自動車は飛行機を除けば、造られた年代が最も新らしいから、今日ではたゞ俗惡一方の實用品若しくは贅澤品としてのみ、用ゐられ、それも多くは中流以上に限られ、中流以下の人たちからは憎まれ切つてゐるけれど、今後幾十年かの後には、必らず一種の趣味と骨董的の價値とを生ずるに至るであらう。今でも既に自動車に趣味をもつて賞翫以外にそれを愛用する人が、日本にさへ極はめて少數ながらある。

馬車といふものが、今では仙人の乘り物のやうに思はるゝに至つたけれど、あれが實益と趣味とを兼ね備へたものとして、中流以上の階級に愛用された時代は、可なりに長かつた。馬車の趣味は馬の趣味を伴ふので、愛玩的乘り物としては、自動車の上にあるか知らないが、とにかく馬車全盛の時代に、ひよつこり現はれたのが自動車で、馬車の領域をだん／＼に狹めて行つたから、この點でも自動車は大に反感を買つた。

現に日本では自動車が憎まれものゝ隨一だ。しかし私は自分

が貧乏でそれに乘れないからと言つて、むやみに反感をおこしたくないと思つてゐる。徒歩の通行人に泥や塵埃をあびせて、勢ひよく驅け去る彼の大きな姿を見て、反感を起す人のあるのはむろん當然と思ふには思ふけれど、あれはどうも七八分或は九分九厘まで道路がわるいからなのであらう。道路は死物で動かないから、動く自動車に食つてかゝるは人情として已むを得ないけれど、道路の方からは自動車が道路を毀して困ると言ひ、自動車の方からは道路がわるいので、自動車が損じて困ると言ひ、文壇の議論のやうに、各々自分を本位にして、水掛け論をやつてゐても、果てしはない。とにかく日本ではまだ自動車を走らせる準備の出來てゐない道路へ、委細構はず自動車を持ち込んだから、今日のやうな惡道路を生じ、今日のやうな憎まれ自動車の世の中となつたのであらう。新東京復興計畫設計圖によれば、大通りには、自動車が二臺づゝ並んで走れる鋪裝道が、電車の複線の左右に一筋づゝ二筋出來ることになつてゐる。東京市が初めからあれほどの道路を設備して、さアいらツしやいと、自動車を迎へたならば、今日のやうに、自動車が憎まれものゝ隨一になることは、少くとも東京ではなかつたであらう。渠成つて水到る、といふことがあるのに、日本では多く、水到つてから、あわてゝ不完全な渠を造るのだからたまらない。私はどうもいくら泥や埃りを浴せかけられて後から追ひ拔かれても、それは我々のもつ社會がわるく、道路がわるいのだと觀念して、自動車を憎む氣にはならぬ。自動車に乘つてゐる主人は、搾取階級の不道漢かも知れないが、それを操從してゐるものは、多く勞働階級の人だ自動車を憎んでも哀はれなる運轉手を憎みたくない。運轉手を憎まずに自動車ばかりを憎むは、坊主を憎まずに袈裟だけを憎むにひとしくはないか。

交通上の障害物といふ點からすれば、自動車よりも自轉車の方がヅツと上だ。自轉車は柄が小さく、乘つてゐる人が富豪や貴族でないから、憎まれずに濟んでゐるけれど、あの小さい奴がちよか／＼するのが間接の原因として、自動車や電車に事故を起したことが幾度あるか知れないさうだ。いつかも荷車と電車との衝突した時、荷車を挽いてゐた勞働者は、向ふから自轉車が來たので、柁を横へ取ると、電車にぶつかつた、と言つてゐた。さうして、衝突の原因になつた自轉車は其のまゝ何の係り合ひにもされずに驅け去つてしまふのだ。憎むべきは、この交通上の匹夫ともいふべき自轉車だ。

現に東京市でやつてゐる乘合自動車は、ケチを付けることの好きな人々によつて、圓太郎だとか、何んだとか、圓太郎の語原も知らずに罵られたが、私はあの乘り合ひ自動車が好きだ。

私たちには相當の乘り物のやうな氣がしてゐる。空氣がタイヤーにいツパい入つてゐた時は、道路がわるいのですゐぶんガタ〳〵したけれど、空氣を八分ぐらゐにまで拔いてからは、柔かくなつて、震動もわりあひに少くて、それに油もわるくないのを焚いてゐるし、銀座から、しまひ車に乘ると、目黑まで二十三四分で來て、賃錢は二十錢だ。あんた安いものが他にはどこにあらうか。タクシーのボロ車でも、チツプを合せて六七圓は取られるところを、二十錢だもの、それでわる口を言つたら口が裂けるであらう。それに電車の乘客には大抵初めから車掌運轉手を敵視してかゝるといふ惡習慣がつき、また乘客相互の間も何んだか仇敵のやうに睨み合つてゐる場合が多いけれど、乘り合ひ自動車の方は、乘客と運轉手とが親密で、乘客同志にも相互扶助が行はれて、昔しの乘合舟のやうな睦まじさをもつてゐて心地がよい。我々のもつ一般文化の上からすれば あの乘り合ひ自動車が丁度ころ合ひのものといふべく、嚴密に言へば まだ少しよすぎるかも知れない。

自働車横行時代

長田秀雄

昔の大盜が持つたがんどうの光のやうな物凄いヘッドライトを二つきらめかして、大震以來荒廢しきつた東京の街區を縦横無盡に馳驅して行く自働車の叫聲をきく者は、誰でも現代の物質文明が、いかに殺伐として非藝術的であるかを感ずるであらう。

自働車の警笛はいたづらに人の心に不安と恐怖とを印象せしめる——何と云ふ不作法な代物であらう。およそ乘物の内で[illegible]喝と脅威とを生命とする無頼漢は即ち自働車である。

もとより貨物自働車、囚人自働車、消防自働車などは、論ずる迄もないが、ブルジョア連の乘廻す黑札の車を見ても、我々は決して美くしいとは思はない。あの甲蟲のやうなぎごちない形を見玉へ。どう考へても、廿世紀の華奢な都會を乘廻す乘物

としては非藝術的である。

試みに古來文化の花の咲き匂つた國々について、その乘物を考へて見玉へ。我國の牛車は勿論、優美のきはみであるが、近世の黒塗鋲打ちの駕にしても、決して自働車のやうに不風流な物ではない。

印度、支那の輿は、云ふまでもない。西洋近代の馬車にしても、華奢をきはめた形は、まさに貴人の乘物たるに耻ぢない。夕暮れせまる並木路を二頭立の馬車の車輪の響も輕やかに打たせてゆく姿は、まことに心憎く思はれるが、フイアットの箱自働車に藝者をのせて、夜陰の大路を疾驅する醉大盡の成金振りは、下司にして散文的である。況んや、雨ふりしきる巢路に、汚ない泥よけを引づりながら、あたりに泥水の飛沫を散亂させつゝ走り行く自働車の姿は、みるも厭はしい醜さである。

現代は自働車横行時代である。世智辛き世の中は自働車によつて、一段と世智辛らくなつた。もし、卅年前の日本人を、今日の銀座街頭の夕暮れに、一人立たせたならば、彼は必ずや數時間にして、發狂してしまふであらう。

闇をつんざくヘッドライトは巨獸の眼の如く、しかも、その咆吼は、街路を鳴動させる程の威喝を含んで、疾風の如く馳驅して行く幾百臺の自働車は何かさも容易ならぬ事があつて、その方へ急行するやうである。

十字街頭に立つ夕刊賣は、咽も張裂けんばかりに夕刊夕刊と叫ぶ。その前にかけた白紙には朱の大字を以つて、最大級の形容詞を用ひたセンセーショナルな事件が幾つとなく書きつけてある。電車は、間斷なく十字に交錯して火花をちらし鐘を打ちならしてすぎて行く――その窓にもプラットホームにも數えきれない人間の眼が輝いてゐるのである。

往來の人浪は、黒い潮のひた／＼と流れるやうである。すべてが異常である。痙攣的である――そして、神經衰弱的である。

烟塵に汚れた黝黒色の空には、やがて銀灰の繊月が、ぽかりと置き忘れられたやうに上つてくる……

何と云ふ病的な光景であらう。人間の生活が、此處では荒涼な弊端となつて渦卷いてゐる。――このせはしなさ世智辛さを導びいたものは、卽ち自働車の渡來である。

人力車と、馬車との日本は、まだ、長閑な夢の國であつた。鹿鳴館時代と呼ばれる明治廿二三年の事を考へてみると、私は限りなくなつかしい一種の感傷をおぼえないではゐられないのである。

夜會結びの麗人は、高島田のお嬢さんと打ちまじつて、白や

かな居を囲い閑居にかくしつゝ、琴の音のする山の手のひつそりとした垣根の内に、仄かに立つてゐた。

月の光も今のやうに煙塵に汚れてはゐなかつた。その蒼白い光りをあくまで東京の地上に伸ばして、人の心を吸ひこむやうであつた。

暗の小路には、ぽつちりと提灯の光がにじんでカランコロンと響く駒下駄の音と一緒に動いてゐた。

交通事故のために死人が出るなどゝ云ふ事は、人口百萬の東京市に、月に一度か二度であつた——此頃の新聞をみ玉へ。毎日十や二十の人馬が、きつと自働車や、電車のために死傷してゐるではないか。

私は自働車の轍をみると、何時も慄然として血を思ふのである。肉は裂け、頭蓋は砕かれて、街の土の上に惨ましく横たはつてゐる人間の姿を、今では、もう子供でもさして珍らしくは思ふまい。

自働車の殺傷は、東京の街上では既に平凡な出來事である。かつて、私が一年志願兵として入營してゐた時の事である。一日路上偵圖の演習のため、教官に引率されて、千駄ケ谷の方へ行つた事があつた。

私たちは個々に分れて、圖板を胸にかけたまゝ、熱心に地圖を描いてゐた。晴れた秋の午後であつた。

千駄ケ谷の街は、中野の方へ長く長くつゞいてゐた。往來の人は長閑に行來してゐた。巨大な赤つちやけた瓦斯タンクが、青い空氣の中にクツキリと姿を現はしてゐた。

その時、中野の方から轣轆として、一臺の大形の自働車が疾驅してきた——黄色に塗られて星章を輝かした電信隊の自働車であつた。その自働車の前を一人の若い丸髷の女がつゝましやかに歩いてゐた。

自働車は女に迫つた。女は右か左かによけた。自働車も生憎そつちに除けた。女はまた反對の方に逃げた。自働車もまた女を除けやうとして、その方に向きをかへた——もう、女と自働車との間には、間隙がなかつた。私は凝立したまゝ眼を大きく瞠つてゐた。

女は物も言はずにゴム毬のやうに轉がつた——自働車は更にその上を進んだ。かと思ふと、ぴたりと止つてしまつた。

カーキ色の服をきた兵卒が、バラバラと自働車から下りてきた。

そして、車の後輪にかゝつてゐた無慘な女を引づり出した。女は引出される時、始めて長い血を吐くやうな悲鳴を上げた。

私の立つてゐる處から、自働車までは、二三十間離れてゐる

た。

何處からともなる人がバラバラと集まつてきた――が、私はさう云ふ場合にはどうしても、正視する事が出來ない性分なので、そのまゝ、以前の處に凝立してゐた。

やがて、一人の兵卒が、女を脊負うて醫者につれて行くために、私の方へ進んできた。女の片足が、妙にブラブラ動いてゐた。足を轢いたなと、かう私は思つた。私の傍を通りすぎるとき、私は見るともなく女の顔をみた。濃く白粉をつけて、紅い手柄をかけてゐた。鼻口から、黒い血が流れ出てゐたので、白い顔が化物のやうに長く不釣合に見えた。

後できくと、青山邊の藥屋の妻で、まだ、嫁に來て半年と經たない人だといふ話であつた。新聞には、その氣の毒な亭主の談話が出てゐた。

それ以來、私は自働車に對して、異常な恐怖を抱いてゐる。路を歩いてゐる時、向ふから自働車が疾驅してくると、ほんとに身がちゞむやうな心持がするのである。自働車を運轉してゐるのは、決して神樣ではない。やはり我々と同じ心持の不同な人間である。ひよつと、もし、彼が發狂したら……

また、發狂しない迄も、もし、彼が酒に醉つてゐたら――

即ち私が轢殺されないのは、つまり偶然と云ふだけではあるまいか。

自働車全盛の世になつてから、往來で遊ぶ子供を見かけなくなつたのは淋しい心持がする。私たちが子供であつた頃は、夕方になると、きつと、往來は、子供の國になつてゐた。そして日がくれて、家で夕御飯の仕度が出來ると、皆、明日の日を約してちりぢりに歸つてゆくのである。

夕やけ小やけ、
明日(あした)は天氣になアれ。

とか、または

蛙がなくからかへろ――

などゝ唄つては、樂しい兩親の側へと歸つて行つた。

いま、東京の街を歩いてみても、何處にもさう云ふ美くしい子供の聲はきこえなくなつてしまつた。

東京の子供は日がくれかけて、星が美しく瞬くときも、やはり大人のやうに、家に隱れてゐるやうになつてしまつたのである。

半夜、路上を通る自働車の轟々たる響に夢をやぶられて、私はいつも、このまゝ、益々せはしなくなつて行つたら、東京の將來はどうなるだらう。ひいては私の老後は、どのやうな神經

衰弱的な社會で送られるのだらうと云ふやうな事を考へる。そして、一種の不安と憂鬱とに襲はれるのである。

甲蟲のやうなぎごちない姿をして、恫喝と脅威とを生命とする自働車は、まさに乗物界の無頼漢である。

果して何時になつたら、私たちは、この不愉快な乗物から解放されるであらう。自働車はいまや、人間の生活の脅威である。神經衰弱の源泉である。社會の散文化の動機である――呪ふべきかな。

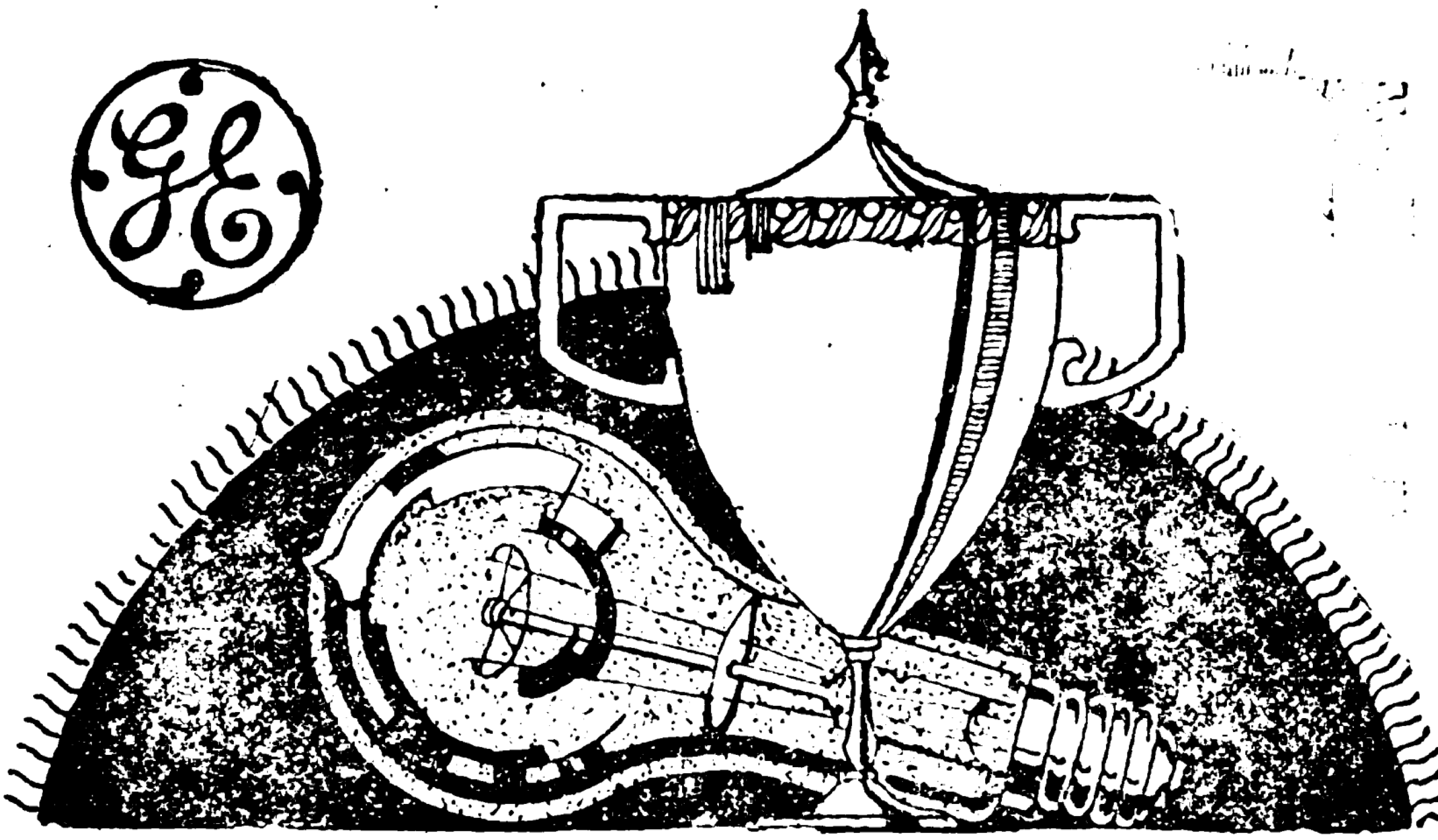
自働車取締に關する希望

徳田秋聲

自働車といふものを、私は餘り好かない。乘つてゐるのも危險だが、往來を通過されるのは尚更不愉快だ。其の形からして愉快なものではない。新聞の報ずるところでは東京に於ける車馬の事故は自働車が尤も多いので、今年の二月の統計では五百件以上に上つてゐるが、その内負傷が二十六人で、死亡が十二人である。市營自働車は尤も猛烈で、去る一月十八日に運轉開始以來の事故は實に四百件に上つてゐる。そのうち死傷が二百である。三月中旬の十日間だけでも、百十七件の事故があり、負傷五十一人、死者二人とある。勿論此の外にも電車自轉車荷馬車などの事故も可なり頻繁であるが、以上總てで毎月千百からの事故があり、六百の市民が大なり小なり遣られて十七人の死者を出してゐると聞いては、恐く誰でも寒心しないではゐられないであらう。けれども何といつても自働車が一番亂暴なので、今や九千臺を算する車體が、東京の雜踏のなかを無遠慮に馳驅して、日に何等かの危害を市民に及ぼしつゝあるのである。尤もなる原因は東京市の交通の混雜と、道路の不整頓とによるのは無論だが、車體の多過ぎるのと、市民の不注意と運轉士の鈍感から來る操縱上の不手際によることも爭はれない。私などには專門の智識がないから、交通の問題は解らないけれど、自働車が都會居住者の一大脅威であるとは勿論で、人間本位で行く日に

なれば、これを廢止することは不可能だとしても、かゝる危險な交通機關は、色々の點で嚴重に制限せらるべきものではないかと思ふ。たとへば車體を或る程度の數に限ること、速力を今よりづつと遲くすること、人の込合ふ電車の乘降場所では、必ず一度止まつて、その電車の發車を待つて、運轉を初めること、電車が他の電車と摺れ違つた場合にもぐつと速力を緩めるか止めるかして、道路を突切る通行人の有無を確めてから出直す事、遊民の道樂や、急用でない外出には、自働車の乘用を嚴禁する事、運轉士の頭腦や知覺に關して、適當な試驗を行ふ…などだが、乘客の取締りは時々呼止めて交通係りが其用事や行先きを取調べるくらゐの手數をかけてもらひたいが、電車の停留場や電車と電車との摺れ違つた場合などは、特にも運轉士の微妙な注意を要するので、今のところでは、それがまるで等閑に附せられてゐる。是等の要點を嚴重に取締つたならば、自働車の事故はづつと減るだらうと思ふが、今一つ道路とか、交通の混雜とかいふ事の以外に、否寧ろ東京の交通を煩はしくしてゐる原因が、東京に於ける通信機關の不備に原因してゐることが多いと思はれるので、當局は是非とも郵便物や電報の取扱ひを、今一層機敏にすると同時に、大概の用件は一々外出する必要のないやうに一大努力をもつて、眞の意味での電話を輕便安價な實用的のものにしてもらひたいのである。現在の事務的生活では、電話は水道や電燈と共に、必要缺くことのできないもので、恐らく道路の裝飾などよりも緊要である。私は市民が道路ばかり氣にするかはりに、なぜもつと電話を利用することに意を致さないかを不思議に思ふものである。

日本で飛行機の屢々墜落するのは、機手の感覺、つまり日本人の感覺が、鋭敏でないからだと、或西洋人が言つたやうに新聞で記憶してゐるが、總て文明の利器の操縱の不手際なのは、日本の荒さと鈍さによることも、爭はれない事實だらうと思ふ。それに怯懦な割りに、人間の生命に對する觀念が、思ひのほかルーヅで希薄で、唯物的な醫者などにも、それの缺けてゐる人が隨分多いやうに思ふが、殊に電車や自働車や自轉車の運轉にたづさはつてゐる人に、粗野な頭腦と愚鈍な知覺の持主のあるのを見受けるのは、餘りいゝ感じではない。物質文明はそれ自身では、寧ろ恐るべき文明の破壞者であることを知らねばならない。



マツダ瓦斯入電球

値下斷行

マツダ瓦斯入電球

二〇ワット
三〇ワット
四〇ワット
六〇ワット　金壹圓均一

マツダ瓦斯入自動車電球

二七燭以下　金一圓
三二燭以上　金壹圓参拾錢

大正十三年四月一日

東京電氣株式會社



伊太利亞の古陶

中條百合子

一

晩餐が終り、程よい時が經つと當夜の主人である高畠子爵は

「どれ――」

と云ひ乍ら客夫妻、夫人を見廻し徐ろに椅子をずらした。

「書齋へでもおいで願ひますかな。」

「――どうぞ……」

卓子の彼方の端から、古風な灰色の裝で蠟のやうな顏立ちの夫人が輕く一同に會釋した。

「御飲物は彼方にさしあげるやうに申しつけてございますから……」

「ぢやあいかゞです日下部さん――日本流に早速婦人方も御一緒に願ふとして悠くり寛ろがうぢやありませんか。」

「お先に。」

「いや、どうぞ子爵から……」

戸口でおきまりの讓り合ひの後、高畠子爵が先に立つて部屋を出た。後から日下部太郎が續く。彼の艶のよい、後頭部にだけ軟かな半白の髪がもしやく丶と遺つて居るペテロのやうな禿頭は、前を行く子爵のすらりとした羽織の縫いけし縫ひの紋位迄の高さしかなかつた。男にしては低い丸々とした軀を彼は品のよいモーニングに包んで居た。彼はその軀を心持斜にひらいて、すぐ後に跟いて來る子爵夫人に敬意を拂ひ、一歩一歩に力を入れ、宛然歩くことまで今日は愉快た適宜な運動と感じて居るやうに進んで行つた。

彼の風采には、快活な眼付から眞白なカフスの端に至る迄、一種渾然と陽氣さと慇懃さとの調和したものが漲つて居た。彼を見ると、口を利かない先から人はこだはりのない社交性の愛素よい沸と、信義に篤さうな暖みとを感じた。若し敏感な教養ある觀察者なら日下部太郎が彼のX會社の專務取締役と云ふ職業にも似合はず相當に洗練された趣味家であることをも、服裝や話題から發見し得たゞらう。

殊に其晩、彼の特徴は華やかに發揮された。彼は自ら座談のリーダーとなつた。相手を如何にして面白がらせようなど丶云ふ考慮は一切忘れ先づ自分から喋る題目に打ち込み、活潑に樂しさうに話す調子に傍の者はひとりでに卷き込まれた。其上、彼の條件が其晩はよかつた。皆の體に苦情がなく、晩餐の白葡萄酒が稀に美味なものであつたと云ふばかりではない。日下部太郎はつい先頃、高畠子爵の廿六才になつた長女を、伊勢の豪家へ縁付ける媒酌をした。三日ばかり前に正式の結納が取り換はされたところであつた。當時、高畠夫妻にとつて、其未婚の長女は何より苦勞の種であつた。長男の妻となるべき令嬢は定つて居た。昨年學習院を出たばかりの次女の縁談さへ名望ある青年貴族との間に整つ

たのに、屢々社交會にも引出し、其となくよい候補者を物色しつゞけて居た長女の行末ばかりは何とも見當が付かずに遺された。昆子は、靜かな、おつとりした何でもひとまかせな性質であつた。はつきりした缺點は一つもない代り、紹介する時とり立てゝ相手の興味を惹くやうな何ものをも持たなかつた。上品でこそあれ、彼女の容貌もごく十人並であつた。父の高畠子爵が夫人に向つて

「あれは幾つになつても無色透明だな。あれでもよしわるしだ。」

と述懐した、その通りの娘なのであつた。如何うかして、難しい小姑と云ふ地位に置かれないうち、自分だけ幸福に見すてられたと妹の島田を見て思はないうち、昆子の運命を明るくしたいと云ふ親心を、日下部太郎は同情を以て推察した。彼は、廣い交際の網目を彼方此方と注意した。そして、彼が牛津（オックスフォード）留學時代、其父親と親しくした今度の青年を見出したのであつた。

高畠子爵は、青年が有望な外務省書記官であるのを喜んだ。夫人は、爵位のない先方が大概伯爵の親戚であるので安心した。

日下部太郎は今晩、その禮心として内輪の招待を受けたのであつた。

書齋に行くと、日下部は待つて居た小間使の手をかりず、氣輕に自分で椅子を暖爐の前に持ち出した。

「さあ、どうぞおこのみの席におつき下さい。御婦人がたは火のお近くに。」

「いや君、それはいけない。」

子爵が眞面目くさつて日下部を遮つた。

「我々は細君方より少くも五つや六つは年上だ。年長者の特權と云ふものは、暖爐の近くで最もいゝ場所を占めるにあ

る。どれ、——では失禮。」

子爵は、皆を笑はせながら、どつかり安樂椅子に納まつた。珈琲とキユラソオとが運ばれた。日下部太郎は、婦人達に向つて二言三言毒のない冗談を云ひ、子爵と愉快さうに酒の品評を始めた。

二

此方では、子爵夫人とみや子とが並んで長椅子にかけて居た。端正な、然し一度もぱつと咲き揃つた花盛りと云ふ時代は無いなり凋んだやうな顔をみや子に向け、子爵夫人は感歎した。

「いつおめにかゝりましても日下部さんはお氣が若くて何よりでございますことねえ。」

「騷々しいばかりで恐れ入ります。」

みや子は、小じんまりした夫人の横でなほ堂々と感じられる盛裝の體をちゞめるやうにし乍ら謙遜した。

「いつも〳〵さぞおやかましうございませう。」

「何の、お賑やかで何よりでございます。私共ももう直ぐお祖父さま、お祖母さまでございますが、お宅では？」

「私共では男ばかりで先が遠いことでございます。上のがやつとこの春大學に入る筈ではございますが如何かなりますか……」

珈琲を靜にまはしながら、みや子は微に聲の調子を更へた。

「それにつけても、御前様はさぞ御安心で被居ひませう。もうこれからは皆様の御繁昌を御樂しみ遊すだけでございますもの」

「まことにねえ」

子爵夫人は掌の上で段々冷える珈琲を飲まうともせず溜息をついた。

「近頃は萬事むづかしうございましてね。打ちあけたお話が、私共の致すことは若い人にはよかれと存じても氣に從はないらしく見えます。それでも、まあ晨子のことは幸日下部さんのお肝煎でどうやら安堵出來さうでございます。本當におかげに存じて居りますよ。」

「それどころでございますか」

みや子は力強く對手の感謝を遮つた。そして、自分の言葉がまるで土地賣買にでも關するやうだといふことには全然心付かず話を進めた。

「及ばずながら日下部も出來ます限りお氣風に合ひますところと隨分心にかけては居りましたやうでございますが……當節のお方はなかなか御注文がどちらもおやかましいものでございますからね。――それでも、晨子さまならばきつとお仕合はせでゐらつしやいませう。」

子爵夫人は、無邪氣に然し淋しさうに微笑した。

「それが可笑しうございます。晨子はもう西洋へ參ると申すのばかりが嬉しいものと見えましてね。……まるで子供のやうでございますよ。彼方に參つて役に立たないものは何も入用らないなどゝ存氣を申して居ります。」

彼女は、細そりした肩に片手を動して羽織のずつたのをなほした。

「……親の心子知らずとはよく申したものでございます。」

此に應へて、みや子が更に同感を示す溜息を吐かうとした時であつた。

彼女は、

「ほゝう、これは——」

と云ふ亢奮した良人の聲を聞いた。見ると、日下部は何を見つけたのか、足より首が先に延びると云ふ風で側棚の方に歩いて行く。子爵も續いて立ち上つた。そして、男ながらしなやかな衣類の袖口から些も手首がいかつく見えない腕を鷹揚に運び乍ら、至極満足さうに云つた。

「さすが眼が早いな。——どうです？實は君の鑑定を仰ぐ積りでわざ〳〵倉から出させたのだが……。」

みや子は好奇心を動かされた聲で

「何でございますせう」

と傍の夫人に訊いた。夫人は、みや子を私かに苦しめて居る無氣力な優美さで膝の上に置いた手の位置も換へずに答へた。

「きつと燒物でございませう。——殿方はお娯みも多くてお仕合はせでございますことねえ。」

勢、會話は陶器と無關係な方向に流れた。彼女等はぼつ〳〵近頃流行の婦人の水泳、乘馬、舞踏などの話をした。何を話し出しても夫人は

「私共のやうになりましてはねえ」

と微に眉を顰めるばかりである。到底全心を打ちこめない弱々しい殆ど退屈な會話の傍ら、みや子の注意は卓子の前

た居る良人と子爵とに向けられた。二人の前には珍しい深紅色に光る皿が一枚出て居る。みや子は、うつかり黙り込んだ自分を見出し、元氣をとりなほして新たに話の緒を見出した。彼女は氣候の話から、子爵夫人に旅行をすゝめた。

「これから關西はさぞよろしうございませうね。晨子さまの御仕度がたく〳〵お揃ひで京、大阪にお出かけ遊しませ。——よいお思ひ出でございませう。」

「それほどに致しませんでも、これで暫くところが變りますよね。當分はそれどころでもござりますまいが。——けれど、あいにくこれと言つて手頃な別莊もございませず……」

みや子は訝しげに夫人を顧みた。

「沼津の御別莊は——お手入れでゐらつしやいますか？」

「あゝ、あれはもう昨年から參りませんのですよ。追々手離す所存でございませう。小田原に小さい家がございますが、これは又昨年の地震で滅茶になりましてね。」

「さようでございましたか。………」

みや子は、何故か二三度せわしく瞬きをした。今迄ぼんやり部屋中を見廻して居た彼女の瞳の奧に活々と集注した耀きがとぼつた。彼女は愛嬌よく訊ねた。

「失禮でございますが、あの沼津の方はどなたかの御懇望でございますか？」

夫人は、ひとことのやうに説明した。

「いゝえ、子爵の氣まぐれでございます。まるで眺望がないから陰氣でいやだと申しましてね。近頃おはやりの土地開拔とやらの眞似事でございませう。」

二人は聲を合はせてそつと笑つた。
「お宅では？　定めしいゝところにあれでございませう」
夫人はみや子に問ひかへした。
「まあ私共などはそれどころではございません。」
思はず地聲で高く言つたみや子は、紛らすやうに顏をそむけて咳拂ひをした。彼女はむせたやうな、やゝわざとらしい低聲で云つた。
「日下部も元氣なやうでも年でございますから、近頃はよく日曜にかけて氣樂に暖い海邊にでも參りたいと申すのでございますが——矢張り手頃なところはもうちやんと何方かゞお約束でございましてね。」
「本當に——お國元ももう少々近うございますとよろしいのですが」
みや子はやがて、空想に浮ぶ沼津の風光の美しさに我知らず恍惚したやうに呟いた。
「沼津あたりはさぞさぞおよろしうございませうねえ、上つがたのお邸さへございます位ですもの。——年をとりますと分不相應な我まゝが出まして、宿屋はどのやうに鄭重にして呉れましても何處となし落着かないものでございます……」
子爵夫人は、蒼白い氣の優しい顏にぼんやり同情とも困惑ともつかない表情を浮べた。彼女は暫く默つて居たが、程なく獨言のやうに呟いた。
「若し………」
みや子の夫人に向つた一方の耳はむく〳〵と大きくなつて行くやうに鋭く次の言葉を待ち受けた。が、みや子は、凝つ

と何も心づかないらしい靜粛を守つて睫毛一つ戰かせなかつた。夫人はつゞけては何も云はない。みや子のうつむいた前髪はこの時彼方に居る良人に向つて、

「今何か云ひ出してはいけませんよ。今はいけませんよ。夫人は私共に大事なことを思ひつけかけて被居るのです」

と警戒して居るやうに見えた。

三

婦人達のかたまつて居る長椅子から十歩足らず隔つて居た日下部太郎は、彼女達の間に、如何那微妙な外交的默劇が行はれて居るか知るどころではなかつた。

假令みや子が夫婦間の特別な敏感さを利用して熾に暗號を送つたとしても、其時の彼は、賴りにならない無反應の冷淡さを證據だてるに過ぎなかつたらう。何故なら彼は此瞬間、N會社の取締役としての日下部太郎でもなければ、高畠子爵相談役としての彼でもなかつた。ましてみや子の良人だと言ふことなどは念頭にもなかつた。彼は心魂から根氣よい、熱心な情の深い一人の古陶器愛好者となり切つて居たのであつた。

子爵と喋り乍ら、暖爐前のぽか〳〵する場所から何心なく室内の裝飾を眺めて居た日下部太郎は、不圖側棚にある一枚の皿に目がとまると、覺えず眼を瞠つて椅子からのり出した。天井から來る明るい燈光の煌きと、大卓子の一隅からのデスク・ラムプの乳色を帶びた柔い光とを受け、背縮の高い槲の腰羽目は、落着いた艶に木目の色を反射させて居る。その前に、紫檀の脚に支へられ、純粹極る東洋紅玉のやうな閃きを持つた皿が、一枚、高貴な孤獨を愉しむやうに

ゆつたり光を射かへして居た。直徑九吋もあらうか。濃紅な釉藥の下からは驚くべき精緻さで、地に描かれた僧侶の胸像が透きとほつて見える。

これ程のものが今迄彼に見えなかつたのは、偏に彼の位置がわるかつたからに違ひない。日下部太郎は、感動を聲に出して立ち上つた。彼は高畠子爵が背後から何か云つたのを聞きしめる餘裕を持たなかつた。彼は側榻に近づくと、體をかゞめ吸ひつくやうに皿を眺めた。ひとりでに手をのばし、皿をとりあげると表裏、裏表と繰返し〳〵調べた。彼はそつと皿を元の台に戻すと、子爵に振向き、呻くやうに云つた。

「珍しいものをお持ですな。何處でお手に入りました？」

子爵の答へを待ち切れないらしく、彼は再び皿を手にとつた。

「珍しい。此那マヂョリカが日本で手に入りますか。――いゝ艶だな。」

日下部太郎は皿を調べ乍ら段々獨言のやうに呟いた。

「ふうむ。なか〳〵放膽な調子だ。しかも充分莊重で優しい。」

彼は子爵に云ひかける積りで大きな聲を出した。

「この深紅の艶の下によく思ひ切つて藍を使ひましたな。ふうむ。――なか〳〵いゝ。」

裏には、薄く琺瑯のかゝつた綠底の中に茶がかつた繪具で署名がしてあつた。先の太く切れた繪具筆で無雜作らしく書いたM、Sと云ふ二つの頭文字と、上に一五四〇年と云ふ年代が記入してある。皿を掌の上でかへしながら、日下部は頭の中で模索した。

「M・S・と。――M――S――・・何處かで見たな。この樂譜の始りに書いてあるやうな形のSは。」

さう云へば、彼には、表面の獨特な模様も何日か何處かで見たことがあるやうに思はれた。圓皿に圓形で區切つた模様は平凡だが、この暗紅色マヂョリカは、中央に濃い強い藍色で長めな心臟形を持つて居た。その心臟形の中に件の胸像は描かれて居るのだが、嚴しい茶色でくまどられた鷲鼻の隱者の剃つた丸い頭の輪廓とその後にかゝつて居る圓光のやゝ薄平たい線とが、不思議に全體圓い皿の形と調和を保ち、強く効果多く藍色の心臟形を活かして居るのだ。その周りに軟く力をこめてうね／＼して居る唐草模様、あしらはれた二つの側面も彼に初對面とは感じられなかつた。幾年か前夢で見たそのまゝの姿が今はつきり現れて來たやうな氣がするのであつた。

皿が手に粘りついて離れないとでも云ふやうに、見なほし見なほし仕て居るうちに、日下部太郎は突然啓示のやうにM・S・と云ふ頭文字を持つた陶工の名を思ひ出した。

Maestro Giorgio of Gubbio

「グーツビョー！　グーツビョーのヂョルヂョ！」

二つの文字を見たやうな氣がした筈だ。廿年前、彼がヴヰクトリア、アルバアト美術館の特別陳列室で、其前に佇んだぎり立去ることを得なかつた素晴らしい數點の作者とそこのグーツビョーのジョルヂョではなかつたか。

日下部太郎の老眼鏡をかけた顏には、歡喜と追想と羨望とがごつちやになつて照り輝いた。彼は皿を置き、情に迫つた聲で云つた。

「思ひがけないものを拜見した。失禮ながら此程のものがお手元にあらうとは思ひませんでした。」

彼はカフスの奧から純白な麻の手巾を出した。そして、眼鏡を外し廣い額やうるんだ眼を、じきに拭き廻した。

高畠子爵は充分の滿足を湛へた落付きで日下部の傍に立ち、しつとり重い袂をゆすつて煙卷の灰を落した。

「其程に買つて貰へれば私も大滿悅です。――これには一つ挿話があるのでね」

子爵は皿について居たあるかないかの塵を指先でとつた。

「日本にはまだ眞物のマヂョリカ、まして、ヂョルヂョの作なんか恐らく一點も來て居ますまい。ざらな商人の手に負へないからでせうな。これは一昨年巴里に行つた時、羅馬まで遠征して堀り出して來たのです。ほら、あのサン・ピイエトロからずうつと右よりに行つた處にある萬神殿（パンゼーオン）ね、あの横通りをぶら〳〵歩いて居るうちに不圖穢い婆さん一人で店番して居る處で見付けたのです。――勿論羅馬に行つたのも、その蜘の巣だらけの飾窓に怪しげなマリアの木像と並んで居る皿が目に止つたのも悉く偶然です。見ると如何うも只ものでない。下等な婆さんが戸口の腰架で豆か何かむいて居るのに出させて見ると、全く驚きました。いゝ鹽梅に巴里を出る少し前或有名な蒐集家の所藏品を見て居たので大凡の見當はついたわけなのです。が、さて價を訊く段になるとね。ハヽヽヽ」

高畠子爵は、思ひ出しても愉快さうに笑ひ乍ら、彼として稀しい多辯で話しつゞけた。

「あの心持は今考へても可笑しい。出さきだから持ち合はせすつかりはたいても高が知れて居るのですからな。實にこわ〳〵訊いた譯です。」

「いやその心持はよくわかります。欲しいは欲しいが、さて、と云ふところ。然しあれも一寸いゝものです、ふうむ、それで？」

日下部太郎は、先刻から熱心に皿を見なほし乍ら合槌を打つた。

「訊いて却つて反對の意味に驚いた。婆さんは私の風體を頻りに見上げ見下しして餘程吹いた積りらしいのだれがそ、がまるで嘘のやうな價なのです。私は單位の違ひかと思つて念を押す。婆さんは高價すぎると云ふのかと思つたと見

え、まるで私には通じない南方訛りで夢中に説明するのである。たつた一つの店の飾だとか、美しい、珍らしい美術品と云ふ位の單語が私にわかる總てだ。私は又誰かもつと確りした男でも歸つて來て、いやその價では渡せぬとでも云はれたら事だと、云ふ丈の金を拂つてさつさと抱へて來て仕舞つたのだが」

子爵は湧き上る微笑を禁じ得ず、手入のよい短い髭を動かした。

「婆さんは、只紅くキラ〳〵するから奇麗だ位に思つて居たのでせう。………巴里で二三の人に見て貰つたが、幸贋物ではなかつたやうです」

この時、日下部太郎は皿を見て居る眼の裡に困つたやうな淋しいやうな光を宿した。長い子爵の話の間、一層詳しく釉藥や圖案やを調べた彼は、子爵が樂天的な結論を下した丁度その時、心の裡で其とは全然逆な推斷を持つたのであつた。彼には一見眞物に紛ふこのグーッビョーの皿が、どうも贋物らしく考へられて仕方なく成つて來たのであつた。話のうちに、日下部太郎の記憶にはあり〳〵とヴィクトリア・アルバアト美術館で見たヂョルヂョの圓皿にも、殆んどこれと同じ模樣がついて居た事實が甦つて來た。ヂョルヂョ程の名工が一生に同趣向の作を二つも遺すことがあり得るだらうか。疑なく圖案は警拔と云へた。或はヂョルヂョが自身ひどくこの作を愛し、身邊に置いて眺めやうと更に一つを作つたのであらうか。土の古さ、色調、艶の落付きは時代ものには相違ないが、疑問を以て見ると日下部太郎は、皿に描かれた一五四〇と云ふ日附を素直に巨匠ヂョルヂョの名と結びつけ難くなつて來た。うろ覺えの年代表をさぐると、ヂョルヂョ自身作を遺したのは千五百年代の初めから卅年位までゞはなかつたらうか。

彼の考を總括すると、この紅色釉藥のマヂョリカは、高畠子爵の掘り出した世界的逸品か、或は只の贋物、ヂョルヂョ歿後工房の誰かゞ師の作を模造したに過ぎないものか、二つに一つと云ふ事になるのである。

日下部は、高畠子爵の折角の幸福感を傷つけるに堪へなかつた。同時にもつと深く研究する必要があるので、彼はモーニングの衣囊をさぐり、小形の備忘錄をとりだした。そしてスケッチする許を求めた。

「おかまいなければ、一寸形だけ書かせていたゞけますまいか。描いて置いて思ひ出した時見なほすと愉快なものです。」

日下部は、段々社交になれた人づきよい捌けた聲の調子と態度とをとり戻し、子爵に其處此處、備忘錄の頁を繰つて見せた。

小さい紙面には、萬年筆で濃淡をはつきり達者に、盃台、花瓶、油壺などの寫生がしてあつた。中には子爵自身もその實物を見たことのある和蘭陀青絵の鉢もあつた。

「ほう。—君のはほんものゝ研究だな。さしづめこれは名譽表（オナラブルリスト）と云ふわけですか。」

彼等は程なく、元の喫煙前の席に戻つた。けれども、日下部太郎の眼は、制せられない力で、側棚の方へちよく／＼吸ひよせられた。少し離れて見ると、眞疑不明のグーツピョーの皿は、云ふに云はれない深い美しさで、暗紅色のくすんだ釉藥を輝やかせる。—

子爵は日下部の牽きつけられた顔から彼方の皿へ眼を轉じて云つた。

「餘程興味を唆つたと見えますな。—私も思ひがけないことでこの皿一枚兎に角自分の力で救ひ出したと思ふと悪い氣持もしません。まあ私の腕で世界の文明に貢獻らしいことの出來たのは、後にも先にも、このグーツピョーの皿一點と云ふところかな、ハヽヽヽヽ。」

天性の感情と、先刻自分の與へた賞讃の手前日下部太郎は、穏やかに相手の言葉を受けた。

「いや、皿一枚と云つても意味があります。何しろ昔の名工の作は、滅る事があつても永劫殖えることは無いですからな、眞物なら破片でも大切です。私も、これで、もうちつと金があると本當に會社なんか廢めちまつて理想的美術商になりますな。世界の隅々を廻つて歩いて思ひがけない處から思ひがけない逸物を堀り出す愉しさは、考へた丈でもぞく〳〵する………然し」

彼は、滑稽に凋れて歎息した。

「悲しい事には金もなし、第一妻君の許可が出さうもありません。」

「ハヽヽ。その許可ばかりは君の方から出させたくもなしだらう。ハヽヽ此は愉快だ。――奥さん」

子爵は體を捩つて、長椅子の婦人達に聲をかけた。日下部太郎は、此に應へて向けた妻の笑顏が、如何にも僞瞞に强いられたものであるのに一向氣付かなかつた。彼は、辭し去る間際に迄

「一寸。――お前先に………」

と云つて側棚の前に立つた。瞬間を惜む彼の瞥見に、疑問のヂ、ルヂ、の皿は更にまじ〳〵と、底深く煌く紅玉色の閃光で瞬きかへした。

四

自働車は、ヘッドライトの蒼白い光で、陰氣に松の大木が見え隱れする暗い濠端に沿ふて駛つて居る。

外界の闇や動搖に神經が馴れると、日下部太郎は忽ち、見て來たばかりのマヂョリカのことを考へ始めた。

彼は人知れず自負して居る通り、多くの古陶器愛好家などが陷り易い、病的な所有慾には煩はされて居なかつた。彼は寧ろ寛大な觀賞家であつた。彼は自分の購買力をはつきり辨へて居たから、却つて他人のところでこそ所謂世界的な名品を見たがつた。そして、彼は、そのやうにして見せて貰ふ逸品を自分のものひとの物と云ふ區別ぬきにして、心から愛し認め得る生れつきの朗らかさを持つて居たのである。

けれども、その朗らかさには一面執念づよい愛好家の神經質が附隨して居た。彼は、自分の鑑識でよいと認め得ないものに對しては納得の行く迄帽子をとらない頑固さを持つて居た。彼は、N會社の事務室でゞも、電車の中でゞも、頭について居た陶器のことは忘れなかつた。絶えず心でその色や形を反芻した。そして或期間經つと、何かのはずみで忽然彼自身の信念が其の作品に對して明確に形造られるのであつた。

彼は、時々恐ろしく凸凹な市街の道路で揺り上げ揺り下げされ乍ら、衣囊から先刻の備忘錄をとり出した。そして、スケツチのマヂヨリカを見なほし、彼の謂ふ捏ねかたを始めた。

みや子は、黑絹の襟卷にくるまり、默つて暫く良人の手元を見て居たが軈て

「貴方」

と呼びかけた。日下部は手帳に眼をとめたまゝ答へた。

「うむ？」

「高畠さんのところで沼津の地所を開放なさるつて云ふ話ね、御存じだつたのですか？」

「あゝ。山村がいつか其那意志が子爵にあるらしいことを云つて居た」

「――御相談役で責任がおありになるんではありませんか？」

みや子は、子爵の應接間や書齋で喋つた時よりはずつと強い、たつぷりした音聲で物を云つた。

「一向其那事は伺ひませんでしたね。」

日下部は、面倒さうに云つた。

「細かな事まで一々覺えて居られるものか？いづれ相談會へ持ち出すだらう。——が、相談會其ものが今時、抑々愚の骨頂さ。」

車は、兩側に明るく店舗が軒を並べた四谷の大通りに出た。呉服屋の飾窓の派手な色彩などが、ちらりちらりと視野を掠める。みや子は何か託つやうな調子で呟いた。

「もう私共も二つ位別莊があつてもよい時ですね。」

「ふむ。厄介だよ。息子共の巣箱にばかりされても堪るまい。」

日下部は手帳をモーニングの衣囊にしまつた。彼の望みは此時たゞ一つしかなかつた。それは、一刻も早く家に着きたいと云ふ願であつた。彼はせめて今夜のうちに、あのマヂョリカの時代だけもはつきり調べて置き度く思つた。

然し、彼の心持を知らないみや子は、何故かひどく彼女の別莊話に執着した。彼女は數年前買ひ損つた沼津の土地のことまで良人に思ひ出させた後、意味ありげな嬉しさうな眼付で云つた。

「ね、貴方、今日のお話ぶりだと、沼津の土地と云ふのを分けて戴けますよ。」

「勿論貰へるさ。」

日下部は單純に解釋した。

「分けて貰へることは貰へるが彼那處仕様があるまい。海岸のくせに海から七八丁もあるんぢやあ」

「それは――買ふのでしたらね贅澤も申しませうけれど」

彼は、急なカーヴで體を搖られ乍ら怪訝さうに妻を見た。

「――買ふならつて――たゞとる氣か？ハ、、、。お前らしい理屈だ。今時たゞの地面などはアフリカの端に行つてもあるまいよ、殘念ながら――」

みや子は莞爾ともせず、聲を低めて熱心に囁いた。

「何でも冗談にしようとなさる！だから皆よい機會を失つて仕舞ふのですよ。――高畠夫人がね、若しかしたら沼津の土地を無代で分けて下さつても好いお氣持らしいのですよ。」

「へえ。――何のために？其那ことをお前が當つて見たのか？」

「まさか、不見識な。今度私共が晨子樣のことで盡力してさしあげたお禮といふ意味に、先樣でお思ひ付になつたらしいのです」

今までほんの座興的に話して居た日下部は、この說明で眞面目に妻の言葉を打ち消した。

「其那ことはある筈ないよ。又あつたとしても俺としては受けられない。」

「――それは勿論、始めから私共が其那打算などはまるでぬきにしてお世話したのは先方だつて萬々御承知です。だからこそ又、さう云ふ氣にもおなりなすつたのでせう？私は、若しさう云ふ事になれば、素直に先の御厚意を受けるのが禮だと思ひますよ、種々にひねくれて考へるのは此方の心の卑しさを見せるようなものではありませんか。」

「さうではないよ。ものには程度がある。自分が當然と思はない好意を平氣で受けるやうになつては男もお仕舞だ。」

「どうしてさうお思ひなさるんでせうね。」

みや子は、困じはてたやうな聲を出した。

「貴方の忙しい體でわざ〳〵伊勢迄出かけて今度のことは纒めてあげたのぢやありませんか。晨子樣のことでは皆それは〳〵氣に病んで被居つたのですもの」

「もうおやめ、其那に欲しければ沼津に何處か見つけて買つてやる。貰ふ話だけはやめてくれ、俺は嫌いなんだから。……」

日下部太郎は、家の門が見える位の處へ來た時、念を押し、みや子が

「本當にお願ひですから、高畠さんから何かお話があつたら即答なさらないで下さいね。貴方は私が遊びに行きたがつて居るとでも思つて被居るのでせう。……母親は息子達の將來をいつも考へて居るものなのですよ。」

と、涙を含んだやうな聲で云つたのをも默殺した。

玄關に降ると、彼は書生に、すぐ書齋の暖爐に火をつけることを命じた。

彼は手早く着換をし、高畠子爵の其ほど宏大ではないが、小ぢんまりと充分居心地よい書齋の机に、大部の書籍を數冊とり出した。二月下旬の夜氣は何と云つても手足の爪先にしみる。彼はそれを物ともせず活氣横溢した學生のやうな意氣込みで、ヂョルヂョの作品年代を調べ始めた。直覺的な自分の推測と合致した記述に出逢ふと、老ひた若者は亢奮してデスク、ラムプの狹い光の孤の下で肩を搖り動した。執念深いみや子の別莊話も、一日の疲勞も何處にか消えて仕舞つた。日下部太郎は、燈火の朧ろな書齋の一隅で、古風な鳩時計が、クックー、クックーと二時を報じる迄、机の前を去らなかつた。

五

翌日の午後、日下部太郎は昨夜の禮を兼ねて再び高畠邸を訪ねた。

主人は留守であつた。彼は夫人に通じて、もう一度疑問のヂョルヂョを見せて貰つた。得たばかりの新鮮な知識を以て調べると、彼は自分の鑑別を肯定しない譯には行かなかつた。昨夜通讀した數冊の著者は一様に、ヂョルヂョの作品を一五三七年どまりと斷定して居た。どの本にもヂョルヂョが四〇年迄仕事をしたとは書いてない。何より大事な署名さへ、一層この場合不利な證明でしかなかつた。何故なら、本當のヂョルヂョは、MSと云ふ二字の上に一つづゝ、小さい水の泡のやうなまるを描きつけた。この皿の銘のやうに、二つの文字の間に現代人のする通りの句切點を打つことは、決してなかつたのである。

愈々自分の見識で、この皿を贋物と判定して仕舞ふと、奇妙なことに日下部太郎は、今迄とまるで異ふ一種の愛着が、この皿に對して湧き起るのを感じた。

それは、明かに皿を憐れむ心持と云へた。彼は工人の欲で、僅か一字か二字無くてよい漢字か歐字かが描き加へられたばかりに贋物とされる皿が可哀想であつた。文字で汚されないうちは、兎に角それはまだ贋物ではない。巧拙の差こそあれ、其は其としての美と命とを享けて居る。柄相應に、觀られもする。愛されもするだらう。處が二三度の餘分な筆觸で、陶器は贋物地獄に墮される。聲が出せたら、陶工がさてと僞の署名をしかけた時、皿や花瓶は一齊に哭いて拒んだゞらう。

「やめてくれ、やめてくれ。どうぞ貴方の名を書いてくれ。」と、日下部太郎に皿は生きものであつた。無抵抗な、而も情感をなみ〳〵と内に湛へた一つのいとしい生物のやうに思はれるのであつた。

窓際に佇んで、側棚に近より遠のき、飽きず眺める日下部の擧動を見守つて居た高畠夫人は、彼の樣子に殆ど「戀々」と云ふ形容詞があてはまりさうな何ものかゞ在るのに驚いた。

次の日は、日曜であつた。

日下部太郎は來客で應接間に居た。

みや子は居間の六疊で炬燵に當り乍ら、高畠夫人宛の手紙を書いて居た。

彼女は、無斷で良人が昨日子爵家に行つたのを知ると、ひどく不安な感情に襲はれた。彼女は

「さう云つて下されば私の名刺も持つて行つて戴いたのに………」

と良人をせめた。が、彼女の眞の心掛りは其ではなかつた。沼津の話はまだ自分と夫人との間に閃いた沈默の感じ合に過ぎなかつた。良人が言葉に出して何を云はないでも、昨日の今日、彼だけが夫人の目前に現れ、自分と夫人との心の糸を遮つたことは、みや子にこのましくなかつたのである。

彼女は、廊下で應接室に行かうとする良人を引とめて訊ねた。

「貴方、きのふ被行つたとき沼津のこと何とも仰云ひませんでしたらうね。」

彼は、立ち止らうともせずに云つた。

「云へるものかね。」

けれども、彼女は氣がすまなかつた。彼女は居間に來て案頭の書簡箋を繰りひろげ、芳しい墨をすり流した。そして徐ろに一昨夜の禮から、筆をかへして今度の慶び、人の親の心、自分達の誠心を書きすゝめた。彼女は調の高い自分の文章に醉つた。彼女はいつか自分がこれを受取つて讀む高畠夫人の身にまでなり、眼をうるませて筆を運んだ。

丁度みや子が本文を書き終り、ほつとして、長い卷紙の端を手にとりあげた時であつた。彼女の背後の襖の外で書生の聲がした。

「奥様。」

「――あけておはひり」

書生は鳥の子の襖を肩幅だけ開けて、一つの到來品を書状ぐるみさし出した。

「今高畠様からお使ひがこれを差上てくれと申しました。」

「へえ……高畠さんて――」

彼女は腑に落ちない面持で封書の裏を見た。高畠正親とある。みや子は理由の分らない不安にせかれて封を切ッた。處々とばして讀んだ文面によると、例の皿は餘程お氣に適つたと推察する。昨日も亦わざ〳〵御入來の由を妻から承つた。先般來晨子のことでは一方ならぬ御配慮を煩し、何かと心がけて居たところ、圖らずあの皿がお目に止つたやうだ。自分等夫妻の感謝の微意を表すには、この皿を貴下の優秀な蒐集の一部に加へるのが最も適當と思はれる。何卒飾棚の一偶に席を與へて呉れるやうにと云ふのであつた。

みや子は、持つて居た筆の軸で無意識に額の偶を掻いた。彼女は俄に氣の抜けた風で

「お使は待つて居るのかえ?」

と物懶げに訊いた。

「はい。」

「ではね、旦那様に失禮でございますが一寸つて――」.

廊下にどか〳〵跫音を立てゝ日下部が入つて來た。

「何だい？」

「今此那ものが參りましたよ。何とか云つてあげなければいけますまい。」

「どれ」

彼は氣のせく中腰のまゝ子爵の手紙をとりあげた。讀むうちに、彼の顏はぱつと火のやうに紅くなつた。彼に、どつさり片膝をつき、いそいで包を解き、箱を開け、つめものゝ綿をとりのけた。中には白羽二重の布につゝまれ、あれ程心を勞させたグーツビヨー。彼ばかりが贋と知るヂョルヂョの圓皿が、紅玉釉藥の艶も靜に入つて居るではないか。日下部太郎は皿を手にとり、說明出來ない複雜な表情を浮べた。炬燵布團にぐつたり頬をもたせ、眼の端から良人の仕業を見て居たみや子は、深紅色の珍しい皿の耀きに頭を擡げた。彼女は良人に注意した。

「あとで悠くり御覽になれるのだから御返事だけ早くなさい。」

彼女は、今の今まで熱心に書いて居た高畠夫人宛の手紙をすーつと鋏で剪りとつた そして筆をしめし良人に持たせた。

日下部太郎は、非常に高畠子爵に對して氣の毒を感じた。子爵が贋などゝはまるで思はず珍藏して居たこの品を、自分に呉れようと思ひ切るには餘程の決心がいつたらう。彼に其那決心をさせた原因は、世間に有り觸れた媒酌と云ふ一つの行爲にすぎない。日下部はその親心を身につまされて感じた。同時に、自分が二度も折り返して觀せて貰つたのは、

たゞ自分の研究心の滿足の爲ばかりであつたことや、いづれ、これが眞物ではなかつたことが子爵の耳にも入るに違ひない時のこと等を考へると、彼は寧ろ痛み入つた氣持になつた。彼は丁寧な、眞心の籠つた禮手紙を書いた。彼は自分で玄關まで出、待つてゐる使に其を渡した。

十分ばかり後、客を送り出して居間に來て見ると、みや子は箱を出したまゝ、奉書や水引の始末をして居た。

彼女は良人を見ると不平さうに云つた。

「箱書も何もありませんね。」

彼は胡坐をくんで、箱の蓋をとつた。

「西洋のものだから箱書はないさ。」

「いゝものなんですか?」

「さあね」

日下部は陶器に關して丈は妻に出鱈目を云へなかつた。勝氣なみや子は大抵のことは自分の頭で眞僞を判斷することを主張し、且實行して居たが、陶器は例外であつた。彼女が素直に自分の意見を棄てるのはこの一事ばかりとも云へた。從つて、日下部は嘘を教へると、自分が何時何處で如何那冷汗を掻くまいものでもない危險が伴ふのであつた。

彼は、淡白らしく云つた。

「極上と云ふものではあるまいね。」

「何處です?」

「伊太利——」

「――一體眞物なんですか？」

みや子の詰問するやうな語勢に、日下部は微な不快を感じた。

「兎に角古い事は相當古い。然しまあ珍しい一つの標本と思つて居れば間違ひない。」

「貴方其那にお賞めになつたんですか、贋物と知つて居るくせに？氣の弱い方ね。いゝだらうと云はれると惡いと仰云れないのだもの。」

彼女は皮肉な調子で呟いた。

「この頃は華族樣でも拔目はおありにならないこと。――沼津の代りですよ、お皿一枚！」

日下部太郎は、苦々しい顏をし、默つて箱を持つて立ち上つた。みや子は兩袖を胸にひきかさね乍ら應接間まで跟いて來た。

彼は鍵を出して飾棚の硝子戸をあけた。そして、一番上の段の赤繪の盃台を卸し、其處に來たばかりのマヂョリカを置いた。彼は部屋の中央まで後退りして見た。光線が不充分だ。彼は赤繪を元に戻し、今度は一番下の棚に場所を換へた。光線は程よく皿の側面から注ぐが、別な故障が起つた。下に張つてある灰紅色の天鵞絨と皿の艶とが衝突する。――

日下部太郎は、長閑な日曜日の午後を、一枚の皿の爲に飽きずに彼方此方した。遂に、彼は、この皿が棚には到底納らないのを發見した。彼の神經の故か、左右八つの棚に、それ〴〵の姿で並んで居る支那や日本の純粹な古陶等は、見えない空氣の顫動のやうなもので、頻りに新に加らうとする怪しいマヂョリカを拒むやうにさへ感じられる。

日下部太郎は生のあるものに云ひきかせるやうに贋のヂョルヂョに呟いた。

「仕樣がない。――ではお前は此方で堪能しろ。」

皿は最後に、晴々した日光が正面からさす暖爐棚の上に飾られた。

たつぷりした午後の光をまともに受け、その紅玉色釉藥の皿は、富豪家の榭の腰羽目を後にして見たと、まるで別樣の趣で日下部の心に迫つて來た。重々しさ、威嚴こそ幾分減つた。が、紅い釉藥の透明さは愈々增し、下の深い藍の心臓形が、何とも云へず見事な鮮やかさで浮上つた。描かれた僧の胸像も立體的に、今にも微細な紛末になつて舞ひ立ちさうな暗紅色の燦めきの一重奧に、神秘な中世期の代表のやうに謙直さと憂欝とを以て横向いて居る。

日下部太郎の目に、皿は此迄になく魅力と抑揚とに豐んだ一幅の陶器の額のやうに見えた。彼は、傍で何か云ふ妻に空返事をした。眺めれば眺めるほど情が移り、彼は、これ程美しいものゝ裏に、彼那まやかし文字があつたと云ふ自分の記憶を疑はずに居られない心持になつて來たのであつた。

彼は、又皿を暖爐棚の上から下した。そして、南に開いた明るい窓際の長卓子まで持ち出した。

先刻から良人のあとについて、此方に一足彼方に一足して居たみや子は、此時、相變らず兩袖をかき合はせたまゝ皿を下目に見下して良人に訊いた。

「貴方、これはどの位のものなのです？」

「え？何？」

日下部は、鼈甲ぶちの大きな老眼鏡の袋を拂ひながら、上の空できゝ返した。

「どの位のものですかと申すのですよ。――」

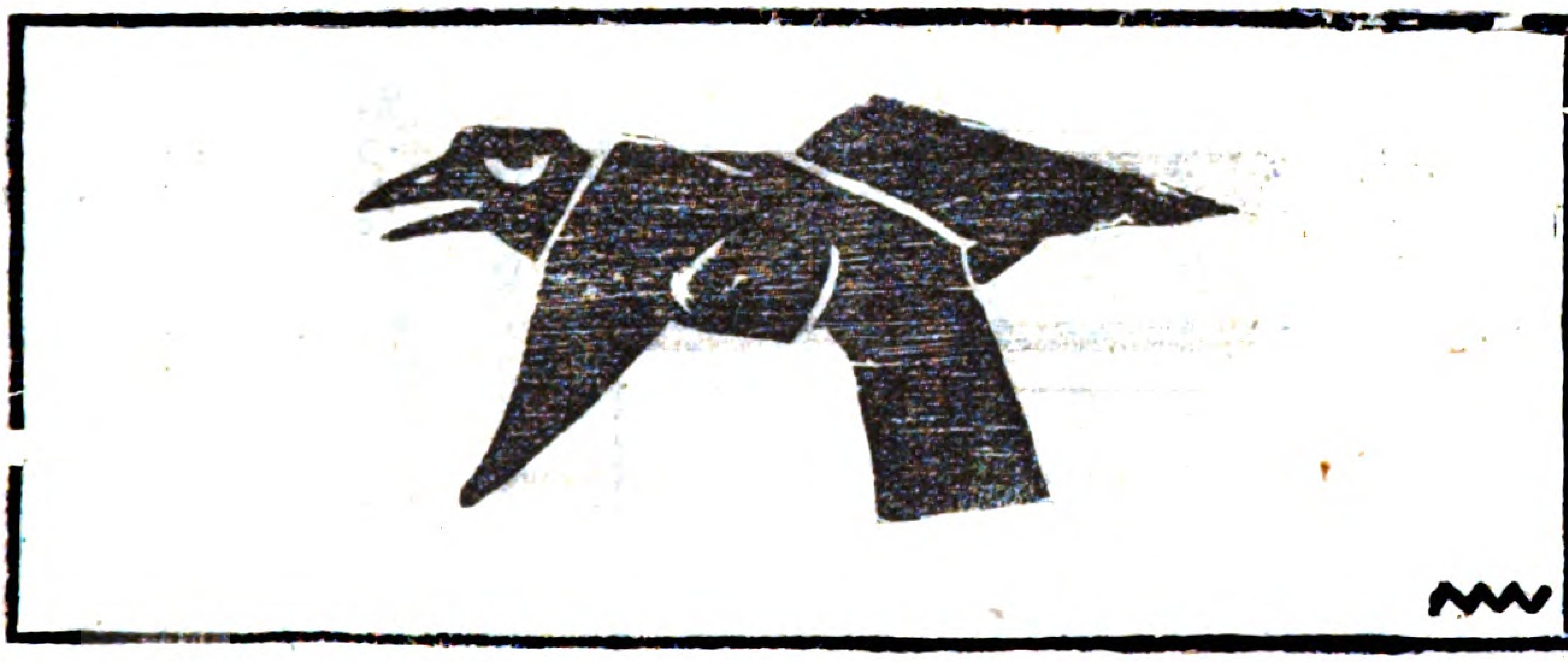
「どの位　？」

彼は、ちらりと苦笑の影を口邊に走らせた。彼は子供を宥すやうに云つた。

「いゝよ、安心おし。――價が出るよ。」

みや子はぴたりと默つた。

日下部太郎は、蟲眼鏡をとりあげ、餘念なく、暨の、而も彼の心を捕へて離さないヂョルヂョの岡皿の上にこゞみかかつた。



屈辱

近松秋江

一

その女の背後に附いてゐる人間が、大凡そどんな種類の人間であるかと云ふことはほゞ見當がついてゐるのであるが、田原は、自分では見たこともなければ、住處も姓名も知ることが出來ぬ。一體何處の誰であらう？

初め田原は、その女の背後に、たれか他の男が附いてゐるといふことを、容易に信ずることを欲しなかつた。それは、彼の自惚も手傳つてゐるのであるが、さう信ずることが何ともいへない無念で堪らなかつた。彼女の旦那といふべき者が、もしありとすれば、それは自分のほかにはない筈だと彼は深く信じてゐるのである。然るに今彼女を我が物顏をして世話をしてゐる者が附いてゐると分つては、彼は心外千萬とも何ともいひやうがなかつた。自分がその女の爲に多年盡して來た苦勞をその男は知つてゐるか、どうか。切られ與三の白(せりふ)ではないが死んだとばかり思つてゐたお富が生きて

ゐて、それが他の男の世話になつて湯上りの水化粧で艷さうた日を送つてゐると知つては、ひとり、芝居の與三郎ばかりではない、どんな、世間の男でも嫉妬の焔を燃さずにはゐられない。

「どんな奴か、その男に必ず一度會つてみたい。そして向うの出ようによつて、此方にも決心がある。」

戀愛を生命として生きてゐるかのやうな場合に置かれてゐる川原は、假ひ先きが何者であらうとも、それに打突かつてゆくことに少しもひるむのではないが、その男の處も名も知る術のないのに手の施しやうがなかつた。肝腎の女の心が不確かなものであることが分るに從つて、一層、最後の手段は、その男に打突かつて行くより他に爲方がないと思つたが、いくら焦慮してもその男の本體は分らなかつた。

金を出して家を持たしてゐるのであるから、始終女の處に入り浸つてゐる筈だが、その男は滅多に女の處には出て來ぬといふのが眞相らしい。

「そんなことがおすもんか、始終來たはりますがな。」

女の事について、川原の爲に屢々女の處へ口說きにいつてくれた家主のお婆さんは、焦れつたさうにさういふのであつた。そのお婆さんの二階を借りて、女は、病氣で去年の秋稼業を廢するまで長く同居をしてゐたのであつた。それでそのお婆さんは、女の旦那といふ男とは互によく知つてゐた。

彼女の話によれば、此の間中女の處へいく度に向うの男は來てゐたといふのである。

「はて、先繰り〳〵好い着物や帶をお重さんにこしらへて上げはるらしうおす。この間も、あれは小濱いふのどしたかいな、黑に派手な裾模樣のある着物を下着をそろへて、これを此度旦那はんにこしらへてもらひましたいふて、お母はんが出して見せはりました。これを着て、今まで贔負にしてもろて出入してたお茶屋さんへお禮に廻はるやうにいふて

拵へてくりやはつたんやさうにおす。そら眼の覺めるやうな美しいのどした。」

彼女はたゞ無心に有りのまゝを語つて聽かすのであるが、田原にとつては、そんなことを聽かされると、胸の火を焚き付けられるやうであつた。その男が呉服問屋であるといふことだけは違うから知れてゐた。

田原は、それにつけても憐れなる自分の態を振返らずにはゐられなかつた。彼はもう幾年もの長い間女に貢ぐために自分はまる裸體になつてしまつてゐるのではないか。人に着せてやるどころではない、自分が今其中に顫へてゐるばかりであつた。

彼は名狀し難い苦惱を顏色に浮べながら、

「どうかしてその男に一遍會つて、直々に話したいと思つてゐるんですが、何とかして分る術はないものですかなあ。」

彼は太息とゝもに唸るやうに獨語をいつた。

「こんなことになるんやつたら、此處へ來てはつた時分に、ちよつと訊いとけばよかつたな。……今になつて、あんたはんのお處は何處どす、名前は何とおいひやすいふて訊くのも氣がさすよつて。――わたし、此の間もお重さんの處で會ふた時に餘程口まで出かゝつたけど、年寄りがそんなこと訊いて入らんことや思ふて、それきりいひまへなんだ。」

お婆さんは、田原に同情するやうな、殘念がるやうな調子で呟いた。

「いや、それは今になつては、訊くほど却つていひませんよ。」

「さうどすやろなあ。……あんたはん一遍そのお人、お見やしたことおつせ。」

「えツ⁉」

「さう、氣が附かなんだやろなあ。……そりや氣の附く道理おへんわ。氣が附かんのが本間どすもの。」

彼女は獨りで背づくやうにいつた。

田原はそんなことを初めて聽くので、訝かしさうな顔をして、

「わたしが見たことがある。何時、何處でどす？」

「此處でどした。あんたはんが今腰を掛けておゐやす處に、丁度そのお方もそのとほりに腰を掛けておゐやした。その時あんたはんが見やはつたのどす。」

田原は、そんなことを聽かされて倍々不審さうな顔をしてお婆さんの顔を見守つた。

「こゝへ、その人間が腰を掛けてゐる時に私が見た。……へえ、どうも自分には考へ出されませんなあ。」

「そら、あんたはんには氣が附きまへなんだやろ。……わたし、その時、これは惡いことやなあ思ふて、獨りで胸がはらく〳〵してゐました。あのお母はんは、好うないことをする人や思ひました。」

家主のお婆さんが、それについて話すところはかうであつた。

去年の五月頃田原が、此處の二階に住んで居る女の處に東京から來て暫く滯在してゐた時分のことであつた。一方その頃、二月時分から始終女の處に來てゐる男があつた。それが、その呉服問屋といふ人間で、女の母親が家主のお婆さんに話してきかすところによれば、大變に女を贔屓にしてくれる旦那といふことであつた。その時分からよく着物などを女に拵へてくれたりしてゐた。その男は、女の處に來るたびに、階下の茶の室の長火鉢の處に坐つてゐる家主のお婆さんの前を通つて二階に上つてゆかなければならぬので、何時も出入りに鄭寧にお辭儀をしてゐた。それで顔だけはよく知つてゐた。すると五月になつて、田原が來た。その時も女の母親は、家主のお婆さんに、娘が長い間大變に世話になつてゐる親切な旦那であると、譯をいつて、ある晩夜遅く外から案内して伴れて來たのであつた。お婆さんは、

さうどすか。」といつて、知らん顏をしてゐた。

さうしてゐるところへ、田原が來てから四五日もして、例の呉服問屋の旦那といふ人間がたづねて來た。お婆さんは自分に關係ないことゝはいひながら、心の中で、はつと思つたが、その旦那は、

「今そこでお母はんに遇ひました。直き返つて來るさかい、いて一寸待つてゝおくれやすいはゝりましたさかい、歸らはりますまで此處で待たしていたゞきます。」

といつて、茶の室の隅の上り框のところに腰を掛けて暫く待つてゐた。母親は先刻そこまで使ひに出ていつて、二階には田原と女とゐるだけであつた。呉服問屋は暫く待つてゐたが、待つてゐるため母親がなか〳〵戻つて來ないので、出好きのお婆さんは自分も用があるので外に出掛けようと思ひながらも、頼まれた譯でもないのに、迷惑な關所守りのやうなことになつて、ひとり心の中で、何でお母はんは早う戻つて來ないんだらうと、やきもき氣を揉んでゐた。

するとと呉服屋も待ちあぐねて、

「お母はん、えらい歸りが遲うおす。ちよつと上がらしてもらひます。ご免やして。」

といつて、彼は上りさうにした。それを見た家主の婆さんは、柔和な中にも威嚴の具はつた顏であつたが、當惑さうな愛相を浮べるやうにして、

「えらいお氣の毒さんどすけど、お母はんのお歸りやすまで、どうぞ其處でお待ちやすとくれやす。」

言葉數も餘計にいはずに、凜としてさういつたので彼の男はそのまゝ又腰を落着けてゐるより爲方がなかつた。さうしてゐるところへ、そんなことゝは夢にも知らぬ田原がとん〳〵段梯子を下りて來て、婆さんに輕く會釋をしながら、

「毎度お邪魔をいたします。ちよつと出てまゐります。」といつて、下に待つてゐる男の足許に脱いであつた下駄を穿

いて出ていつた

そして田原が出てゆくと、彼の男はもう家主の婆さんに遠慮もせず、すぐさま、長火鉢の前を通つて二階へ上つていつた。お婆さんも、もう構はずにゐた。すると、毎時もは來ると暫く居つてゆくのに、今日は直ぐ下りて來て、浮かぬ顏をしてお婆さんに挨拶もそこ／＼に歸つて去つた。階上で女に何か非道くいはれたのであると察しられた。それから間もなく母親も戻つて來た。

「そんなことがあつてから、お重さん久しい間、そのお人の行かはるお茶屋から迎へに來ても斷はつて、おいきしまへなんだ。お重さんその時、斷はりなしに人の家へ上つて來たいふてえらい立腹おしやした。」

田原は始終の話を初めて聽いて呆れもし、今更に深く考込んだ。そして、去年のその時分の記憶を凝つと思ひ浮べようとしてゐた。なるほどさういはれてみれば、一度、散歩に行くと行つて二階から下りて來た時に、そこの上り框の處に腰を掛けて腕組みをしてゐる人間が居つたことを微かに思ひ出す。それは、質素な木綿物の茶つぽい羽織を著て、紺の前掛けを締めた、三十六七の色の淺黑い、一見土地の呉服屋か何か地味な商人風の男であつたやうに思はれる。田原はその時、格別氣にも留めず、家主の隱居さんの處へ出入りの悉皆屋でも用事で來てゐるのであらうくらゐに思つたゞけで、今それを言ひ出されるまで忘れてゐた。

「あゝさう仰有れば、あの時此處にそんな人間が腰を掛けてゐたことを思ひ起します。」

「あれがお重さんの旦那はんどす。」

田原は實に臍を噛むといへども及ばぬ悔しさを感じた。そして、

「何だ、あんな奴が旦那といはれてゐるのか。」と思ふと、彼は倍々自分の器量が下つたやうな侮辱を感じた。

「つまらない、手代か何かのやうな風をしてゐたでせう。」

「さうどす。何時も堅い風をしてはります。京都では好い商人ほど皆な地味な風をしやはります。」

田原は、映畫に表はれる西洋の探偵が、心を靜めて味の好い葉卷の煙をぽかり／＼と吹かしながら、全身のイマジネーションを一點に集中して、六ケしい謎を解かうとする時のやうに、隱居のお婆さんのいふ言葉を頼りに、自分の去年の記憶をもう一度明瞭に腦裡に浮べ出さうと努めた。しかし氣を留めて見たのでないその顔は、たゞ茫乎と霞を隔てゝ物を見るやうに思ひ出されるだけであつた。

なるほど、中京あたりの堅い商人は、京都特産の美術呉服物などを取扱ふ商賣をして居りながら、自分には、商賣實利で木綿物を身に着けてゐるやうな人間がめづらしくない。隱居のお婆さんの話の樣子では、何でも處は中京あたりに違ひない。店には相當多勢の手代や丁稚も使つてゐるらしい。

内がひどくやかましいので、遊びに來てゐる時分から、決して身裝など作つてゐることはなかつた。何時もたゞ、ちよつと其處まで用足しに出たといふやうな風であつたといふ話からほゞ想像することが出來る。田原は、中京あたりでよく見受ける呉服問屋の店頭をいろ／＼に想像に描いてみた。そして、その時見た顔の記憶は薄れてしまつてゐるが、もし、そこらを歩いてゐて偶然その人間に行き會つた場合に、以前の記憶を呼び起さぬとも限らぬ。彼はさう思つて中京の街をあちら此方歩いてみた。

失戀の憤恨と孤獨の寂寞とに苦められて氣の狂ほしくなつた田原は、夜など寢床の中で眠られないでゐると、荒れ馬の狂ふごとく神經が無暗に昂奮して來て、想像は飛ぶやうに／＼湧いて起るのであつた。中京あたりの問屋の店構へが映つてゐる眼にまざ／＼と見えた。四間々口五間々口の半ばは太い紅殻格子になつてゐて、入口には白い文字を染め拔

いた黒か澁染めの納簾が掛つて自轉車が四五臺も置いてあり、廣い店の間には、巻いた物があちらにも此方にも山ほど積み重ねられて、手代や丁稚が急しさうに荷づくりをしたり、卓上電話で取引の商談をしたりしてゐる。廣い土間の奥にはも一つ入口があつて、そこにも納簾が掛つて居り、中庭の方に通ふてゐる。

　そんな商家の主人が、家内には飽くまで秘密を守つて外に女を隱してゐる。その女には遠うから馴染みを重ねてゐる人間があつて、その男は、女の爲めに裸體になるまで貢いでゐた。そして最後に女はやつぱり、土地に居附きの堅い商人を信頼して、今その世話になつてゐる。何でも聞くところによると向うは養子であるといふことだ。養子の分際で、恐る〳〵女を圍つてゐるところが、田原には、せめての無念晴らしである。今に見てゐろ、何時かは姓名を突留めて、番頭や手代の多勢居並ぶ店先にいつて、尻を捲つてやるんだ。さう思ふと、彼れ自身が恰も芝居の中の人間のやうに思はれて、頻りに氣が逸つた。しかし、自分は何にも好んで芝居の眞似をしようとするのではないのだ。自分はどうあつても、是非とも女を取り戻さなければならぬのだ。その爲には、たとひ如何なる恥辱を忍んでも厭いはせぬ。あの女が自分の物にならなければ自分の生存の興味も理由もなくなるのだ。あの、氣に入つた女を人手に奪られて、空しく生きてゐるといふことは、まるで中途半端な生存である。そんな、いゝ加減な處で折合を付けたやうな、不徹底な生活をして何の樂み、何の滿足があらう。さう思ふと田原は、自身の肉體を砲彈の如くに向うの男の本陣に向つて打突つて行きたかつた。

　しかし待て、目的は、たゞその女を自分の所有にしさへすればいゝのだから、下手に事を荒立てゝ虻蜂取らずに了つはて可けない。さうするには何處までも一應は穩かに出て、此方に最後の成功をおさめることが肝要である。そんなことを、それからそれへと、取留めもない空想に騙られてゐると、今にもその男の家が分つて、自分がそこへ乘込んでいつ

てゐる光景が又しても眼に見えて來るのであるが、ほつと我れに返つて氣がつくと、それは何處の誰れであるのか、まるで雲を捉むやうな當てのないことなので、彼は極度に神經の疲勞を身に感じつゝ、獨りで手にじつとり汗を握つてゐた。

二

田原は、あの時そんなことがあつたと知つて、それについて尙ほ思ひ起すことがある。彼が久し振りに東京から來て暫く女の處に居つた時、彼女はぽつり〳〵思ひ出したやうに、長い間慘苦を嘗めて來たことを話して聞かすのであつたが、それは、今の境遇が以前に比べて大分氣樂になつたところから、辛かつた過去を振返つてみるといふ風であつた。

「長いこと御心配かけましたお蔭で、わたしもこの頃やつと少しは樂になりました。もうそんな長いこともありませんの。」

といつてゐた。それにつけて彼女は、ある客で、殘りの借金を拂つて商賣を廢めさせてやらうといふ人間があるけれど、それは斷然ことはつてゐると話してゐた。彼女が二月時分一ケ月ばかり病氣で寢てゐる時、茶屋に招ばれてゆくほか、自分の居處など知らしてゐなかつた筈であるのに、日頃ゆきつけのお茶屋の女衆を案內にして出し拔けに彼女の寢てゐるところへその男は菓子など持つて見舞ひに來た。知らさない自分の住居へ不意にやつて來られたのがひどく彼女の氣嫌に障つたが、そんな顏も見せずにゐると、彼の男は母親にもいろ〳〵な深切な口を利いていつた。そして日を更めて、そのお茶屋を通じて、商賣を廢めてはどうかといふ話を進めて來たのであつた。その人間には女房もあり子供も二三人あることは知つてゐた。

「御深切なお言葉は難有うおすけど、ちよつと私一人の考へにいけまへんよつて、そのお話は暫時お斷はりしておきます。」といつてゐた。

彼女はそんなことを嘗て田原に語つてきかせたことがあつた。彼はその話を女から聞かされた時に、はじめて報ひられたやうな、愉快な滿足を覺えたのであつた。長い間辛苦を重ねて女に仕送つてやつた一念が屆いてその効ひがあつたと思つた。女の心が堅くその男の勸誘を拒んでゐるか、どうか、田原は自分の、何につけて不如意な今の乏しい境地を振顧つてみると、自信の勇氣は根こそぎ挫けてしまつてゐるかのやうで何だかまだ十分女に心の許せないやうな氣がするのであつたが、それについて、もつと委しく突込んで彼女の意中を訊ひ糺してみるのが憚られた。

「その時引かすといつたのに對して、あんた何といつたの。」

「さうどすさかい、あんたはんに相談せんと、わたし一人の考へにしては惡い思ひましたから、お斷はりしました。」

「あんたが、何處までもその決心でゐてくれるなら、私の方の力の入れ効ひもあるといふものだ。どうかもう暫くその氣持を變へずにゐてもらひたい。」

「安心してとくれやす。噓はいひまへんよつて。」

「あゝ、さうか〳〵。」田原は、それですつかり悅に入つてゐた。

それを後になつて今から考へてみるのに、話の樣子がどうも同じ人間に相違ない。

家主の隱居さんの話を思ひ合すと、女はその時あんなことを云つてゐながらも、その男は絕えず入り込んでゐたのであつた。

一度かういふこともあつた。田原が女の處に足を逗めてゐる時分、中を十日ばかり旅に暮して又京都に歸つて來た。

もう梅雨の半で、欝陶しい雨はその日も朝からじと〳〵降り罩めてゐた。田原はステーションから車で彼女の住家へ來着いてみると、じめ〳〵として薄汚い露地の中はいとゞ暗くて悒かつた。俥を返して庭へ入つて訪ふと、階下の隱居さんも留守と思はれて返事もない。內庭の中仕切の潜戶に手をあてゝ、引張つてみたが開かない。はては二階にも皆な留守かと思ひながら續けて高い聲で、「ごめんなさい。」と呼んで暫く薄暗い內庭に突立つてゐると、とん〳〵と段梯子を踏む音がして、誰れか降りて來た樣子である。やがて中仕切りの潜戶を開けて、

「どなたはんどす？」

と低聲にいつて、用心したやうに顏を差覗けたのは女の母親であつた。そして、そこに田原の顏を發見すると、彼女は、ちよつと當惑したらしくさつと顏を曇したが、田原が優しい調子で、

「只今戾つて來ました。」といつたので、彼女も幾らか笑顏をつくつて、漸つと「おかへりやす。」と間の拔けた言ひ方をした。それから、

「ちよつとお待ちやしとくれやす。」といつて、そのまゝ彼女は急いで二階に戾つていつたが、やがてすぐ又降りて來て、

「ほんなら、どうぞ一寸こちらへおあがりやしてゝおくれやす。今ちよつとお客さんどすさかい。すぐ歸らしますよつて。」と云つて、田原を、階下の家主の使つてゐる六疊の座敷の方へ案內した。

「えらい濟んまへんけど、こゝで暫くお待ちやして。」といつて、母親は襖をぴたりと閉めて又すぐ二階の方へいつたが、間もなく今度は娘が降りて來て、笑顏で田原を迎へながら、いきなり彼の傍に來て、ぺたりと座つた。

「おかへりやす。えらい早うおしたなあ。」

「もつと居るつもりであつたが先達て中此處に暫く居つて見ると、こゝにゐるのが何處より好い。」

「今ちよつとお客どすさかい。あんたはんお顏差すといけまへんやろ思ふて。すぐ去んでもらひます。」

そんなことをいつてゐるところへ、二階から誰れか人が降りて來て茶の室の方から歸つて行く樣子であつたが、それを送つてついて來た母親は、客を送り歸へしておいてから閉切つてあつた襖を開けて、

「さあ、どうぞ二階にお上がりやしとくれやせす。」といつた。

「大變早く。」と、田原は口の中でいつたが、その時、先刻からの母親の顏の樣子といひ、何かしら胸に疑念が浮んだので、彼はすぐ二階に上つてゆくところを、緣側の方の障子を開けて、梅雨の降りそゝいでゐる狹い前栽の方に何となく眼をやつた。女が傍に立つてゐるので、彼は端なく疑ぐり深い樣子をするのが氣が咎められたが、それでも、庭から門の方に出てゆくところと、狹い前栽とを仕切つた低い板塀の方をそれとなく見てゐると、そちらに今丁度歸つて行く客の下駄の足音とゝもに、新しい麥藁帽子と鼠色のセルの夏外套のかげがちらつと眼に映つた。田原は何だか胸苦しいやうな疑惑が矢の如く走り過ぎたのを覺えたが、それを口には出さなかつた。

それから二階にあがつてくると、二階の八疊の方の火鉢の脇に坐布團が二つ向ひ合つて置いてあつて、火鉢の中には敷島の吹殼が何本となく灰に立つてゐた。田原はそんな物が本能的に何より先きに眼に映じた。そして一寸息を吞み殺しながら、何氣なくふつと女の方を見ると、不思議に彼女の眼と視線がかち合つた。彼はすぐ眼を外らしてしまつた。

女はそれから間もなく支度をして店の方に出ていつた。

今になつてみると、そんなことゝ知つたら、あの時何で、もう一といき疑念を突込んでみなかつたか。殘念で堪らない。女の氣持ちにうつかり此方の心をゆるしてしまつたのが、返へす〴〵も不覺であつた。それは、しかし最早手遲

悔んでも爲方がない。白い麥藁帽子と鼠色の夏外套の色は今も眼に見るやうにのこつてゐるが、たゞそれだけでは何の手がゝりにもならない。

三

それで、家主の隱居さんは、自分の處に女が居つた時分からの推測と、此の間中二三度も行くたびにその男に出會したことから、今もなほ始終女の處に來てゐるに相違ないといふのであるが、近頃又田原との間に立つて女の方に口を利いてゐる、彼女とすぐ壁隣に入口を並べた家の人間の話すところによると、そんな男の來る樣子はついに見掛けぬ。夜遲くでも忍んで來れば分らないが、晝間そんな人間を見たことがない。尤ももう一と月ばかり前であつた。隣家の人間が此の事に仲に入つた當初、一度午前中ある男が女の家に入つて來たことがあつた。その時隣家の人間は露地の内で、彼の男の歸つてゆくところを聲を掛けて自分の家に呼び入れ、それとなく樣子を訊いてみたことがあつた。その時彼の男のいふところによれば、なるほど田原といふ人のことも一寸聞いてゐる。自分はかうして女母子の境遇に同情して、世話はしてゐても、始終此處へ入り浸つてゐる譯でもなく、無論自分には妻子のある身である。それゆゑ、かうしてゐる間にも、女二人を引取つて一生養つてくれる深切な人間があるなら、自分は悅んで仲に入つて口を利く量見である。その田原といふ人は、どうです、結構女二人を見てくれるほどの力のある人ですかどうですと、向うの方から訊き返した。その時隣家の人間にしては、田原を知つてゐるといつても、つい二三日前から初めて口を利き合つたくらゐのことであつたから、田原について委しいことは知つて居るはづもなく、それを保證するやうなことは何ともいひ樣がなかつた。すると彼の男は、

「親子の者も、あんたはんには深いお世話になつた御恩報じや思ふて、暫くかうさせてもろうてゐますといふて居ります。」

と、自分の方の器量の好いことをいつておいて歸つた。しかし、それきりその男は殆どやつて來ない。そして尚ほ隣家の人間は、

「さうどすけど、あの人旦那とはどうしても思へまへんなあ。身装かて、そら汚いなりをしてゐます。」

といつて顔を顰めるやうにした。

「へえ、汚いつて、どんな身裝をしてゐます。」

「どんなて、ちよつと申されまへんけど、ぢゝむさい風どす。内でもさういふてました。あれがもし旦那といふのが本當でしたら姉さんが可哀さうどす。」

隣家の人間は心から女に同情するやうにいつた。すると傍にゐたそこの若い女房も同情に堪えぬといつたやうに、

「本間にさうどすせ、えらい、こんなことといふて、あんたはんに失禮どすけど、そら、とてもあんたはんと比べられしまへん。一體お重さんどんな氣どすのやろ、内でもいふてゐます。」

「そら、人ちうもんは見掛けばかりでいへまへんけど、あんなんどしたら、此の間お重さんのおいひやしたのが本心に違ひおへんやろ。」

亭主は又言葉をつゞけた。

そんなことを聞くと田原は、せめて幾らか慰むるところがあつたが、その男のいつたといふことが癪に障る。人を馬鹿にしてゐやあがる。田原といふ人は女母子の者を末始終見て行けるだけの腕のある人間かどうかは、隨分見縊つた言

ひ分である。定めし、舟を自分の岸に繋いでゐるので、そんな勝ち誇つた口を利いてゐるのであらう。可矣々々今に店先に乘込んでいつて趺坐をかいて尻を捲つてやるんだ。田原はそんなことを聞かされると又、一刻片時も辛抱して待つてゐられないやうに氣が逸つて爲方がないのであるが、對手が誰れといふことが皆目分らないので、たゞ徒らに神經を疲勞さするばかりであつた。

女の處で度々その男に出會つたことのある、家主の隱居さんは、旦那らしい人間はそれつきり姿を見せぬといふ隣家の者の説を否定して、むしろそのいふことに深い疑ひを挾んでゐるのであつた。

「何云ふてはるのやろ、來んちうことがおすもんか。毎日々々來てはりますがな。…………お重さんは又思ひ切つた遣い物をしやはるよつて。」

彼女は、隣家の人間が、女と田原と兩天秤にかけて、うまいことをしてゐるやうにいふのである。田原もそれには、どちらを信じて可いか甚だ迷つた。人柄や身分からいつたら女の隣家の人間は家主の隱居さんとは、まるで違つてゐた。けれども、あれきり男が來ぬといふのも、どうも空つきし嘘とも思へなかつた。田原は、やつぱり、人のいふことばかりは安心して信じてゐられないので、身を斬るやうな庭の寒氣に身を曝しながら根氣よく毎晩のやうに、そうつと女の家の露地の入口のまはりを徘徊して、それらしい人間の出入りを見張つてゐた。が、ついぞそんな男に出會はなかつた。

四

さうしてゐるうちにも日の立つのは存外早くつて、寒い一月二月はいつしか過ぎて、ぢきに三月になり四月が來た。」

去年の冬の初紅葉の散る頃から丁度京都の冬空の色と同じやうに、陰氣に鬱結してゐた田原も、その頃になると東京から知つた者がやつて來たりして、少しはそのために氣がまぎれたりすることもあつたが、深い失望と無念に傷けられた、生々しい胸の創痍は春が來ても花が咲いても癒すすべもなかつた。そして昔しの仇討ちを志願してゐる者が年中仇敵にめぐり會ふ機會を待つてゐるやうな苦しい緊張した心持ちを續けて、さまぐ〵に肝膽を碎いたが一向手がゝりもなかつた。

やがて京都の春も老いて初夏になつた。ある日田原は宿に命じて按摩を呼ばした。按摩はまだ三十ばかりの男であつたが、話の樣子では、その顧客先きは主に祇園の廓にあるらしかつた。田原は何氣なく按摩を對手に祇園の妓女の話などをしてゐると、彼は田原の關係のある女のことをもよく知つてゐた。

「あの人もう疾うに引かはつた。先の金山さんですやろ、よう知つてます。今度又その後の金山さんが出來ましたけど、……えゝ太夫さんどした。やさしい、えゝ人どすせ。」

「あゝさうかねえ。」と、田原は輕く返辭をしたが、さうなるともう自分の方からその上餘計な口を利かうとせずに、對手の口を探つてみた。彼は彼女の抱へられてゐた家へは一と頃始終出入りしてゐたのである。

「この頃は行かないのか。」

「えゝ、近頃ちよつと往きまへん。やつぱりその時の番どすさかい。」

田原はそれまで、いろ〵〳に迷つてとても効果はないと知りながらも、ある手蔓で、始終遊廓に出入りしてゐる松原警察の刑事に賴んだり、又大阪の方に本部のある私立探偵社などの手で探らしたりしてみたが、駄目であつた。それでその日は餘分に療治代を遣つて、明日も又來てくれる約束をして歸した。

翌日療治がすんだ後で、田原はやゝ改つて、
「時に、あんたに一つお願ひしたいことがあるんだがねえ。」
「何でごはりますか、私で叶ひますことやつたら。」
按摩は脱ぎ棄てた羽織を取つて引掛けながらいつた。「實はねえ、その金山といふ妓と自分とは大分入組んだ關係があるんだ。ところが、あの女の旦那といふのが誰れだか分らないんだ。それをぜひ知りたいと思つて隨分苦心して訊ねてゐるんだが、どうしても分らないのだ。それで君におねがひといふのは、その旦那が何處の何といふ人間からうまく訊き合はしてもらひたいと思ふんだ。」
するとゝ、山科の在所産れであるといふ小膽者らしい按摩は、憶病さうな顔になつて、
「へえ、そら何とかして訊いてみたら、分らんこともおへんやろが、その爲に又向うに迷惑かけて私の商賣の妨害になるやうなことでもおしたら、ちよつと此方が困りますよつて。」
「大丈夫だよ、君。そんなことのある筈はない。それとなく氣に掛けておいて、嘩ばなしの中に自然に訊かうとするのでなければうまくいかない。私もいろ／＼な方法で探つてみたが昨日から氣がついてみると、これは君に頼むのが何より好い考だと思つたんだ。ぜひやつてくれたまへ。確かなことが分つたら、お禮は十分にするよ。」
「よろしい、一つ訊いてみまへう。」
「うむ、頼みますよ。」
田原はさういつて又餘分な療治代をやつた。
「こりや、ちと多うおす。」

「なに、少しばかりだ。取つといておくんなさい。」

「さうどすか、えらい濟んまへんなあ。」

田原はそれから間もなく、次第に近づいてくる京都の暑氣を避けて叡山に上つた。叡山で不自由な僧房生活をして、夏中三ケ月をそこで過した。無聊な僧院の質素な生活に全く興味のないこともなかつたが、幾日もつゞく貧弱な食物には流石に辛抱しきれなくなつて、東京に居る時に毎夏行き馴れてゐた箱根や日光などの繁華で便利な避暑地のことなどを遠く想ひ浮べて、懐しくなつて堪らなくなることがあつた。そして、それにも係らず奮然憤りを發して京都を立ち去つてしまふことの出來ない、自分の囚はれたる心を不甲斐なく思ふのであつたが、またその反對に、どうしても京都に殘る無念をすつかり晴してしまはなければ、死んでも他へは往かれないといふ氣持ちをどうすることも出來なかつた。

彼は僧院の貧しい食物がつく〴〵果敢なくなつてくると、半月に一度くらゐ山の上から下りて來て、四條あたりの繁華な夜の街を散歩して、幾日も肉食に餓へた胃の腑を存分に充たすのであつた。それには、かねて事を頼んである按摩に會つて結果を訊かうとする用事もあつた。按摩は祇園町のちよつと横丁に入つたところに、多勢同業者のゐる店があつて、電話が掛つてくると、そこから方々に派出するやうになつてゐるのであつた。田原はそつと彼を呼び出して近所の洋食屋の屋根上に出て涼みながら、その後の様子を訊いてみるが、どうもまだ好い機會がないといふのであつた。

そんなことを何度も繰返してゐるうちに、やがて長いと思つた夏も過ぎて山の上には連日の秋霖が濛々と一山を罩めて降りつゞいた。一時土用の最中には七八十人も集ふてゐた僧院の避暑客もその雨とゝもに山を下りてしまつた。田原は一番遅れて下りて來た。いつまでも殘つてゐた殘暑もその雨を境にして、名ごりなく拭ひとられ、爽かな初秋の氣分

が靜かな町に漲つた。

　田原はその秋から、以前女の住んでゐた家のすぐ壁隣りの二階建の古い長屋を借りて獨りで自炊生活をしてゐた。按摩に會つて樣子を訊いてみるが、相變らずまだ手掛りもなかつた。

　女はやつぱり同じ露地の中に住んでゐたが、隣家の人間に訊いてみても別に變つたこともなかつた。田原もその頃は女の家を覗いて見ることは以前のやうにあまりしなくなつた。そして旦那といふ人間を探り出すことに專ら心を潜めてゐた。しかし偶然の機會の來るのを待つてゐるのであるから、何時そんな機會が、來るといふ當てはなかつた。その間に田原は、段々落着いた生活氣分になつて來た。今までの宿屋暮しとちがひ、たとひ不自由な男ひとりの自炊生活であつても、自分で一軒家を持つて暮してみると、曾てないその土地に根を下ろしたやうな落着いた氣持ちになつてくるのであつた。簡易な生活にもなければ不自由を感ずるやうな、細々した茶道具のやうなものや火鉢などを、街を探して買ひ求めて來たりするにも興味が生じて來た。さうして悠然氣長に好い機會の來るのを待つてゐた。

五

　すると、その年ももう十二月に入つてから間もなくであつた。田原は二階にゐて机に凭つてゐると、門のところから、

「おいでやすか。」

と、聲を掛けた者があるので、障子を開けると按摩が立つて此方を見上げてゐた。

「やあ、どうぞ。」

田原は、心の中で、はゝあ、好い話を持つて來たなと直覺した。これまでは毎時も、こちらから、催促するやうに訊いてゐたのであつたが、向うからわざ〳〵やつて來たのは、何か變つたことがあるにちがひないと、さう思ひながら、彼は早速階下に下りていつて按摩を二階に通した。

「どうしたです。」

按摩はのつそり其處に坐りながら、

「分りました。」と微笑んだ。

「ふむ、分つたか。どうして分つた。」田原は火鉢の方に乘り出した。

「何といふ人間だ。」つゞけさまに問ひかけた。

按摩は落着いた調子で、

「それは今いひますが、……えらいこれやて。」

と拇指と小指とを喰附ける形をしてみせた。

「えらいこれやて、どういふんだ?」

「えらい熱々やて。」

「あゝ、さうか。それで女もその男に惚れてゐるといふのか?」田原はそれを氣にするやうに訊いた。

「さあ、それは、どや、知りまへんけど、これがえらい熱心やて。」と又拇指を示した。

按摩が巧く探つて來た筋路はかうであつた。つい一昨日の晩彼はある行きつけのお茶屋に呼ばれて仕事にいつたらいつてみると、それは、以前から時々療治に呼ばれたことのあるお客であつた。その客の伴れの客が金山の馴染みで二人

は毎時も一緒に來て遊んでゐた。その客の馴染は一馬といふ妓であつた。それで按摩はその晩、その客の座敷に這入ると、心の中で肯いて、

「あ、この人に一遍様子を訊いてみたら分るかも知れん。」と思つた。

そしてやんわり肩のまはりを揉みながら、

「旦那はん、えらいお久しおす。もう、てんと祇園はお見かぎりどすなあ。」と遠まはしに話しかけた。

「見限るちうこともないけど、長いこと來なんだ。」

「本間にさうどすなあ。あの、あんたはんとよう一緒に來てはりました、も一人の旦那はんは、此の頃どないしてはります。相變らず御機嫌よろしうおすか。」

「金山の旦那か。」

「おう、さうどしたなあ、太夫さんは金山さんどしたなあ。」按摩はわざとそのことは疎いやうにいつた。

「あの男もう來やへん。」

「何でどす？」

「金山を引かして圍ふてるよつて、もう獨り占めや。」

「あ、さうどすか。」

と按摩は口の先で何の事なくいつたが、心の中では、暗い夜道を歩いて來て急に明るみに出會はしたやうな思ひをした。こゝまで分ればもう占めたものだと雀躍りするやうな氣持ちで、それでも尚ほ確かなところを聞かうと思つて、

「さうどすか、………それ本間どすかいなあ。噓とちがひますやろなあ。」彼はわざと戯談のやうに呆れた物の言ひやう

をした。
「嘘いふたかて、あかんがな。えらい熱々や。」
客は仰山にいつて笑つてゐた。
「さうどすか、そらまあ、結構なことゝすなあ。」
「うむ、あんまり結構なこともないやろ。」
「なんでどす。」
「内のこれが喧しいよつてな。大將きつう秘密にしてよる。養子やさかいこれに頭上らんのや。」
客は又拇指を出してみせた。………「それに又あの女子に東京の小説家が附いてるちう話や。」
「あゝ、さうどすか。」
按摩はそれだけ聞くと、もう胸の中で舌を出すやうな氣持ちで、占めたと思つた。そしてわざと暫く間を置いて、
「あの旦那はんお名前何とかおいひやしたなあ。先度よう呼んでもろてお處も名前も聞かしてもろてゐましたけど、う暫くになりますよつて、てんと忘れてしもた。」
その實、名も處も聞いたことはなかつた。
「名は吉田友次郎、處は三條姉小路衣の棚や。俺とは丹後の縮緬問屋に奉公してゐた時分からの長い友達や、もう二十年からの交際しとる。」
客はべらべら話して聞かした。
「おう、さうどしたなあ。吉田友次郎さんいははりましたなあ。處は衣の棚どすかいなあ。」

そのうち療治がおはつたので、按摩は、

「吉田さんの旦那はんにおあひやした節にはどうぞよろしい云ふて頼みます。」といゝ加減なことをいつて歸つた。

一伍一什を聽いて田原は會心の笑みを湛えて、

「それは難有う。大變なお骨折りであつた。探してから丁度今でまる一年になる。もつと早く君のやうな人に頼むことに氣がつけば餘計な手數を掛けずに濟んだのに。難有う〳〵。」

田原は幾度も繰返して心から禮をいつた。そして早速懷中物の中から、なけなしの拾圓札を惜げもなく取り出して、

「これは、ほんの少々だけれどお骨折りのお禮のしるしだ。」といつて差出した。

すると、小心な按摩はすこし意外の金にすぐに手に取ることを躊躇しながら、

「こんなん入らんことどす。」

「いや、私のつもりではまだ少いのだけれど、度々君にも聞いてもらつたとほり、長い間その事で此のとほり微祿してゐるやうな有様で。」

「ほんまにお氣の毒さんどす。……ほんなら遠慮せんと貰ろときます。」

按摩は金を懷中に藏ひながら、

「私も、あんたはんにあゝいふて頼まれてゐましたさかい、これで、ちよつと長い間氣い使ひました。」彼もほつとするやうな顔をしていつた。

「さうだらうとも。幾らその商賣の人間でも、氣轉が利かないと巧くゆかない。」

六

按摩が歸つた後で、田原は又一人きりになると、恰も多年の艱難辛苦の結果探ねあぐんだ仇敵にめぐり會つたやうな天にも昇る勇んだ心持ちになつた。「おのれ畜生、去年の暮れからまる一年の間といふもの、實に口にもいふことの出來ない辛苦と屈辱を嘗めて來たことを思ふと……。」

彼は拳を握りしめてひとり語をいつてゐると、言葉は咽喉に詰つて玉のやうな熱い涙がほろ〳〵と兩方の頬を流れ落ちた。そして百策盡きて按摩を手先に使つて安々と奇功を奏したことを思ふと、自分ながら、窮すれば窮して、うまい智惠の出るものだと、思はず獨り笑ひをしたいやうな心地にもなつた。

「よし、これからすぐ今日にも向うへ押掛けて行きたいのだが、今晩はまあ、じつくり心を落着けて十分熟睡し、明日は早速乘込んでやる。」

彼はやつと一年振りに、胸の溜飲が下つたやうな氣持ちになつて、その晩は足も輕く祇園町から四條通りの方をぶらぶら歩いて來た。

翌日はいつにない早く起きいでて、朝飯もそこ〳〵に濟ますと、早速行李の中に藏つて置く一張羅の着物を取り出して着た。彼はそんなに尾羽打ち枯して女のことに憂き身を窶してゐても、まさかの時に見すぼらしくないだけの一とほりの着物は用意して置くのであつた。それは恰も仇討ちを志してゐる者が晴れの勝負の時に用ゐる白裝束だけは、どんなに困窮しても用意を忘れないのと似たものであつた。もう長年の間女のことに眞裸(まるはだか)になつてゐても、それだけは手放さずにゐる古くから所持の藍色くづし縞の結城の綿入れに茶格子の結城縮みの羽織を來て、無地博多の細仕立ての帶を

きつゆと締めて、その上から一つぽんと腹を叩くと、ひとりでに武者ぶるひをするやうな滿身の元氣が湧いて來るのを感じた。しかし彼は芝居じみた餘裕のある氣持ちなどは少しもなかつた。何處までも仇討ちに出掛ける者のやうな緊張した氣持であつた。

外に出ると陰氣に濕つた薄暗い空から粉雪のやうなものが、ちら〳〵額に散りかゝつた。田原はそのために一層身體が引締まるやうな心地になつて、三條姉小路衣の棚を探ねていつた。

どんなに小さくつても五間々口の紅殼格子に、暖簾の掛つた老舗構への店頭につゝと入つて行くのだと思ふと、彼は電車に乘つたり道を歩いたりしてゐても胸は早鐘を撞くやうに躍つた。

烏丸三條で電車を降りて少し入つてゆくと、なるほど衣の棚と記標の出てゐる町はすぐ見附かつたが、そこらは同じ中京でも大店や老舖の軒を並べた目拔きの場所とは大分邊僻になつてゐると思はれて、田原がかねて想像に描いてゐたやうな店構への家はそこらの四辻を何遍彼方にいつたり、こちらに戻つたりして見ても、ねつから見附からない。そして昨日按摩から聞いた番地と吉田友次郎といふ表札を探ねて歩いたが、番地は見附かつたけれどその名前はどうしても見附からない。同じ處を何度となく往つたり來たりしながら、さては又誰れかに騙られたのではあるまいかと疑惑の念に驅られて、そこらを軒並に窺いて行くと、吉田つると女名前の表札の出てゐる家を一軒發見した。番地も聞いたとほりであるが、煤けた入口に狹い格子戸の嵌つた、仕舞た屋づくりで、話に聞いた盛に商賣をやつてゐる家とはどうしても受取れない。田原はそれで一旦引返して、もう一度按摩に念を押したうへのことにしようと思つて、その前を立ち去らうしてふと氣が附くと、吉田つるといふ女名前の表札よりはずつと小型の表札が、それと離れたところに別に打着けてあつて、これに吉田友次郎と書いてある。けれども、そこらの軒下の壁の色や木柱の色が名札と同じ色に黑く煤けて

ゐるので、ちよつと見て歩いたくらゐでは容易に氣が附かない。
「はゝあ、ちや、やつぱり此の家だな。」
と、田原は心の中で肯いたが、何だか、ひどく拍子抜けのしたやうな心持ちがした。そして、あれほど意氣込んでやつて來たのが詰らなかつたやうに思はれた。彼はそれでも折角來たのだから入つていつてみようか、どうしようかと、人通りの少い家の前に立つて暫く躊躇してゐたが、思ひ切つて格子戸の外から
「ご免なさい。」と聲を掛けた。
その家の子供であらう、穢い子供が二三人羽目の外の廂合ひのやうな處に蓆を敷いて遊んでゐたが、大人はゐないのか、家の中からは返事も聞えない。少し間をおいて、二度ばかりご免なさいとつゞけていつてゐると、やがて奥から鈍い女の聲が洩れて來たので、彼はそれを聞いてから格子戸を明けて入つた。狹い庭の中に立つてみると、かねて想像に描いてゐた光景はます〳〵裏切られた。古く住み荒した疊の上に貧乏臭い蓆が敷いて、見たところ、盛に商賣をしてゐるらしい樣子などはない。
そこへ出て來たのは、妻君であらう、年の頃もう三十七八の古女房で、無論、類型的に、他の土地の者がよく想像してゐるやうな京都風の女とは、まるで違つた、普通の在所の女である。
「おいでやす。どなたさんでござりますか。」
と女房は鄭寧な言葉で上框の處に來て膝をついた。
「はあ、私は一寸遠方の者ですが、只今御主人は御在宅ですか。」
「あ、さいでござりますか、今朝は一寸外に用事がござりまして、早うに出やはりまして、只今は生憎と留守でござり

ますが…………何か御用で？」

田原は、決して芝居をするつもりではない、それどころか、血の涙の滲むやうな生命がけの問題にかゝつてゐるのであるが、それでも、長い間いろ／＼に想像して、ひとりで昂奮してゐた演劇的光景が、あまりに彈力のない現實であつたので、一寸、狐に撮まれてゐた者が正氣に返つたやうな、張りのない空虚を感じた。

田原は、亭主が留守であるのを幸ひに、此處で何も斯も一切外のことを素つぱ抜いてやらうかと思つたがいや、まて。そんな氣の逸つた打ち壞しなことをしてしまつて、對手に向ツ腹を立てさせては後の話が蓋も實もなくなる。勘忍のうへにも勘忍をして、最後に女を此方の物にするまでは何處までも我慢の蟲を耐えてゐなければならぬ。咄嗟に又さう思案を仕直して、

「あ、さうですか。それでは又更めてお伺ひいたしませう。」と、田原は少し考へるやうにしてゐると、

「さいでございますか。えらい生憎でございました。何どしたら、わたくし御用向をお聽きいたして置きましようか。」

「いや、又出直してまゐりませう。」

といつたが、田原は、女房が亭主の外の秘密を知つてゐるかどうか一寸探りを入れてみるつもりで、

「あの…………！御主人は近頃も相變らず安井の方へ毎度お出掛けになりますか。」

と、輕く謎のやうな問ひをかけてみた。果して女房には飽くまで秘密にして外に女を隱してゐるものか、それとも又薄々知つて默認してゐるものか、世間にはその關係に色色のがある。もし家の妻君が亭主の女道樂を大目に看過してゐるやうなのだと、爺兒と談判をする時に、弱い尻を捉へて嚇かすことが利かない。又かねて聞いてるとほりに養子などであつて内儀さんにひどく氣兼ねをしてゐるのだと、談をするのに極めて此方に都合がよい。

で、さういふと、女房は、何のことか十分了解めぬやうな顔をして、

「安井？」と小頸を傾けながら、「安井……あんまり聞きまへんどすなあ。」と、矢張りおとなしい物のいひやうをする。

田原もやさしい調子で、

「あの、安井の金比羅の境内にお知り人があるでせう……」と、やゝ委しくいつてみた。

「へえ〳〵安井の金比羅、よう存じて居ります。」

「あそこに此方の御主人の御懇意な方がありますでせう。」田原は笑顔をして、重ねてさういつてみた。

「安井の金比羅に、内の懇意な方て……ちよつと聞いて居りまへんですなあ。」

女房は、やつぱり飲込めぬ風である。

「それでは又いづれ。」……可矣々々と心にうなづきながらさういつて田原はその家を出て來た。

七

對手の家がもつと堂々たる店構への家であると思つてゐたのが、すつかり想像とちがつたので、田原は何だかひどく張合ひぬけがしたが、とにかく亭主に打突かつていかねば腹の蟲が承知しないので、翌日又例にない早くから目を覚して、朝の起きぬけに時々行きつけてゐる圓山公園の茶店にいつて、パンと牛乳とで輕い朝飯をとりながらそこの電話を借りて、吉田の家へ電話を掛けてみた。

「どなたさんでございます？」と、初は女の聲がしたが、

「私は昨日一寸お邪魔をいたした田原と申す者ですが、今日は御主人は御在宅でせうか。」といふと、
「へえ〳〵今日はまだ早うございますよつて宅に居ります。」といつて、暫くしてから今度は變つて男の聲で、
「御用件は何でごはりますか。」と向から訊いた。
「あなたが吉田さんですか、あゝさうですか。私は田原と申す者ですが、田原と申せば、多分、お目にはまだ懸らなくつても私の事は御存じだらうと思ふのですが、その用件は今此處では申しにくいですから、これから直ぐお宅の方へまゐります。どうぞ御多用でせうが、暫く待つてゐていたゞきたいのです。」さういふと、
「へえ〳〵、それでは、えらい御足勞お掛け申してすみまへんどすが、お出でになるまで待つて居ります。」
「すぐにまゐりますから、どうぞお待ち下さい。」
田原は念を押しておいて、茶店を出た。先つきから大分雪花が散つてゐたが、さうしてゐるうちに段々本降りになつて、公園の樹木や遠山の姿が白く隱れてしまつた。田原はその中を祇園の石段下から電車に乘つて、三條衣の棚の吉田の處へいつた。
格子戸を明けて庭の中に立つて訪ふと、早速主人が立ち出でゝ、上框のところに、ちよこつと膝を突いて、
「おいでやす。何の御用事でごはりますか。」
といふ調子は、腰の低い、穩かな物の言ひ振りである。色の淺黒い、小づくりの、見榮へのしない男で、何日か安井の家主の隱居さんの處で見た記憶は殆ど殘つてゐなかつた。が、一見して呉服商らしい、無地の羽織に、前掛けをしてゐる。田原が意氣込んでゐたやうに、尻を捲つて啖呵を切る對手にはひどく物足りないやうな氣がした。それで彼も穩かな調子で、

「その用事といふのは、大抵貴下にはお祭しがあると思ふのですが、此方でおはなしするのも何うかと思ひますが。」
といつた。すると吉田は格別驚きもせぬ顔色で、
「さあ、どんな御用事でござりますか、私には一寸考へられまへんどすが。」
と、小頸を傾けるやうにして、京言葉の滑々したことをいふ。田原は腹の中で、
「白々しい。此奴め、なか〳〵喰へない奴だな。」と思つたので、少し白い歯を出して笑ひながら、
「いや、貴下にお祭しの附かない道理はないんです。此方でお話しても私は一向構ひませんがな。………けれども、それでは貴下に御迷惑ではあるまいかと思つて。何處かそこらまで御一緒に出ていたゞけませんか。」
「あゝ、さうですか。手前も貴下さんの御都合のえゝやうに、どちらでもよろしうござります。」と、柳に風のやうなことをいふ。
「いや、私こそ何方でも構はないのです。ぢや、お邪魔でも此方でお話ししませうか。」
「ほんなら、一寸そこまで御一緒にまゐりませう。」
といつて、吉田はすぐ奥に入つてトンビを着て出て來た。
外に出ると、一としきり物の隠れるほど降つてゐた雪は小休みになつて、空の處々から日が射してゐた。
彼等はそれから烏丸通の電車道の方へ歩いて出ながら、田原の方から先づ口を切つた。
「かねて貴下に一度お目にかゝつて委しいお話をしたいと思つてゐた、あの前田じうの事ですが。…………よく貴下は彼等二人の者の世話をしてやりますなあ。」と、蟠りのない調子でいつた。
すると吉田の方でも、わざと何氣ない風を裝ふのか、

「いゝえ、世話といふほどのこともよう出來まへんけど、あの人達の境遇に、同情しましたものどすさかい。」

「なるほど……」

「よう聞いてますと、あんな處にいかんでよかつたのどすなあ。」

吉田は妙に、話の中心から脇へ外れたやうなことをいふのであつた。そして、その言ふことによつて、あの娘と母親とが自分達に近づいて來る男には誰れにでもいふとほりのことを、いつてゐるのだなと、田原は腹の中で思つてゐた。

「えゝ、あの母子の者がいふところを聞けば一應さうですけれど。……私もそれに同情したのが始まりで。」

そんなことをいつてゐるところへ電車が來たので、二人はそれに乘つた。そして四條烏丸の乘換へ場の處に來ると、吉田は、

「これからどちらへお越しになりますおつもりで。」と訊いた。

「さあ、兎も角もまあ、洛東の方へ。」

そして祇園で電車を降りると、田原は、雪解けに濡れた道の上に突立つて、

「何處かそこらへいつて、何か食べながら話してもいゝんですが、私の處はすぐこの裏の方です。貴下知つておいでゝせう。菊水の家を。」

さういふと、吉田は商人口調で氣輕に、

「いえもう、何にも結構どす。さうどしたら、えらい御迷惑どすけど、あんたはんのお宅へお邪魔さしてもらひまよう。入らんお金使はん方がよろしい。」

それから田原は吉田を伴れて自分の家へ歸つて來た。自分の家といつても、他に誰れもゐないので彼は自分で火鉢に

炭をついだり、新しく茶を入れたりしながら、

「あの女については、今改めて委しいお話をせずとも大抵御存知のことでせうと思ふんですが、私も長い間出來ぬ中から精一杯助力をしてゐるので、昨年來のことはどうも一寸私にしては納得しかねるのですが。」

田原は穏かな調子でさういつた。すると吉田の方も同じ調子で、

「いゝえ、格別委しい話も聞きまへんけど、田原さんといふお方のことは、ずつと前から聞いて居りました。」

吉田は故意にか、どうだか、なるたけ自分の方からは話に深入りをせぬやうにしてゐた。

「それで貴下は、今後引續いて彼等の世話をなさらうといふお考ですか。」

「いや世話といふほどのこともようしまへんのどすけど、去年病氣の時に、あの人達の不幸にえらい同情しましたものどすよつて。……近頃もう長いこと前田さんにお目にかゝりまへんが、いかゞでござります。格別お變りありまへんどすか。」

吉田は何處までも正直さうに、そんな白々しいことをいふのであつた。長いこと前田さんにお目に掛らないといふのを掛引でいふのだとすれば、餘りに子供騙しである。さうかといつて、近頃前田の家へやつて來ないといふのもまるつきり嘘とも思へないふしもある。

田原は又そこで、白々しいことをいふなといふ顏をして笑つて見せながら、

「さあ、私もしみ〴〵會つた譯ではありませんから、一向近頃の様子は知りませんが。………それで貴下の御意向をお訊ねしたいといふのは、これから先き長く女を圍ふて置くおつもりですか。」

田原は早く話の要領を得ようとして突込んで訊いた。すると吉田は意外といふやうな顏をして、目を刮目きながら、

「いや、囲ふて置くなんて、ちよつともそんなことはおへん。」

「いや、さうでもありますまい。世間の者がさういつてゐるのですから。」

「世間の者が……誰れがそんなことといふて居ります。私そんなこと今日初めて聞きます。」

「いや、さうでもありますまい。皆がさういつてゐるです。……此の事については貴下とお目にかゝるのは今日が初めてゞすが、去年の丁度今時分から一年の間私は隨分いろ〳〵な人と會つて掛合つてみたのですが、誰れでも、私に向つて、あんた今時分になつて、そんなことをいふたかて、もう、ちやんと金山さんにはえゝ旦那さんが附いてゐるやおへんか、人の囲ふてゐるものを、そんなことといふたかて明かへんがなといつて、笑つて對手にしないのです。それは笑つたつて構ひませんがな。しかし、いくら人を騙す商賣でも、さうは往きますまいと思ふのです。散々私から、引いたらお世話になります、あなたの方へまゐりますといつて、その爲めに金を受取つておいて、そしてその揚句に他の男に寢返りを打つたのでは、そのまゝ、へえ、さうですかと默つて引込んではゐられない。」

「それは御尤。」

「それで、一度ぜひあなたにお目にかゝりたいと思つてゐたのです。」

「そやけど、私が囲ふて居るといふのは自分には初めて聞くことゞす。一向自分に覺えのないことゞす。」

「いや、しかし、こんなことを押問答したつて爲方のないことですが、貴下が世話をしてやらなければ、あゝして女が二人で遊んで食つて居られる道理がないぢやありませんか。」

「そりやさうどす。」

「さうでせう。」

「ほんなら誰れか他に金を出してゐる者があるんぢやありまへんか。」
「いや、他にはない。兎に角それはどうでもいゝのです。私の方では貴下が世話をして居られると認めてゐるのです。――尤も貴下が彼等の爲に世話をしようとせられまいと御自由ですが、私にしては、どうも去年來のまゝで濟ましてゐるといふ譯にはいかないのです。」
「それで、貴下さんのお考は、どういふおつもりでござります。」
「どういふつもりと申して、つまり女を私の方に引取ればいゝのです。それは不承知だと向ではいふでせうが、そんなら前からの約束をどうするのだといふところです。」
すると吉田は氣輕さうに、
「そんなら、丁度都合がよろしいやおへんか。私一遍前田さんにお目にかゝつて母親によう話してみまへう。」
田原はそれを聞いて、腹の中で何をいつてゐるかと思つたが、吉田がそんなことをいふなら、一應向うの口に乘つてみるのもよからう。破壞は何時でも爲たい時に出來ることだ、急ぐには及ばぬと思案をきめて、
「貴下が話してみようといふお考へがあるなら、さうして下すつてもよろしい。」
「二三日中に一遍會ふて、よう話してみます。その上で御返事をいたします。」
吉田はそんなことをいつて置いて歸つた。
その結果はどんなであらうとも、長い間知れなかつた人間を突留めて、それが女の方にどう反響するかを考へると、田原には興味があつた。

八

これから吉田の出樣によつて、仕事は何うにでも出來る。次第によつては女房に亭主の秘密を素つぱ拔いてやるのが一番痛快であると思ふが、それは最後に執るべき手段として控へておいて、吉田から女の母親に、此の結果がどう響いてゆくであらうかと心待ちにしてゐると、果して、その翌日であつた。絶えて人の訪れる者もない田原の佗び住居のところへ、がら〳〵と多勢女の下駄の足音をさして、露地奥の門を明けて入つて來た者があつた。田原は立つていつてみると、それは思ひがけもない、女の母親の婆あを先に立てゝ、女が商賣をしてゐる時の抱主であつた女將と、その家でやりてのやうなことをしてゐる婆あと三人づれであつた。何處までも女に未練のある田原は、それを見ると、心の中で、

「はゝあ、吉田の話が母親の方に通じて、これは、ひよつとしたら、好い話を持つて來たのかも知れない。」と、早合點をしながら、

「どうぞお上んなさい。」と二階に案內した。

すると、田原と火鉢を挾んで向側に三人ずらり居並んだ婆達三人の中で、一番上座に坐つた主人のおかみは、きつとした顏をして、

「あたし、あんたはんに今日ちよつとお訊ねすることがあつて來ました。」と切り出した。

彼女はもう五十を大分過ぎてゐるといふことであつたが、今からまだ十五六年ばかり前までは揚卷といつて祇園で全盛を唄はれた太夫であつた。その頃當時の顯官や大盡にも多くの馴染みがあつて、何人といふ數知れぬ人を喰つて來た果ての女である。

田原はその顏を見守りながら、

「はあ、どんなことです？」

「あんたはん、お重さんの旦那はんのことを私の處で聽いたおいひやしたさうどすなあ。」

と、出し拔けに妙なことをいふ。

田原は笑ひながら、

「飛んでもない。私はそんなことをいつた覺えはありません。」

「ほんなら、誰にお聞きやした。」

「誰に聞いたつて、そりや云はれない。」

「聞いた人があるんなら云はれんことないやろ。」と、嵩にかゝつて來た。

「それはあるが、全く別な方から訊いたのです。」

田原は、腹の中で、こんな奴等に鄙劣な口を利くんぢやないが、何處までも女が欲しい一心から四方八方に惡い感情を起させたくないと思ふので、飽くまでも短氣の蟲を抑制してゐた。

「だれからお訊きやした。今朝私、お母はんに不足をいふて來られてえらい困つてゐるとこどす。」

「もう一年も經つた今になつて、こんな古臭いこと、ほじり出して來て、人を困らせよる。」と、母親も傍から汚い口を入れた。

田原は、それを聞いて、わざと高い聲で、から／＼と痛快さうに笑つた。人を困らせるといふのは、一體どちらが人を困らせてゐるかと思ふと、どい奴もこいつも勝手な奴等ばかりの揃つてゐるのに呆れた。あの病人じみた女が――

つも病人じみて嫋々として衣にも堪えかねる容姿をしてゐるところがひどく心に染んでゐるのかも知れぬが――欲しいばかりに、底の知れぬ馬鹿になつて、こんな奴等と辻褄の合はないことをいひ合つてゐなければならぬかと思つてゐた。

「さあ、誰れから聞いた。お母はんは、あんたはんが、お重さんの旦那のことを、私から訊いたおいひやしたいふて、散々不服をいふて來てるのどす。あんたはんが聞いた人を明かしてもらはんと、私が困ります。」

「それはいへない。しかし、おかみさん、あんたから訊いた覺えはない。」

「あんたはん、私から訊いたとおいひやしたらう。」

「そんなことは、いはないつてば。」

「ほんなら誰れや、いふたのは。」母親が又傍から口を挾んだ。

「だれでもいゝ。そんなことは私の方の勝手だ。」

田原は、さういひながら、腹の中で、按摩の手で吉川を突留めた影響が大分向う側で波瀾を起してゐるのを見ると、せめて、それだけのことでも、彼には多少胸の透く思ひがするのであつた。しかし、長い間の死ぬほどの苦しみと惱みを思ふと、炭を喰ひ、面に漆を塗つて復讐を謀つた豫讓にも劣らぬ痛恨は容易に醫すべくもなかつた。

「何吐かす。さあ、いへ。」

揚卷の婆は俄に大きな聲を出した。

そんな場合になると、田原は却つて妙に氣が落着くのであつた。そして少時じつと對手の顔を見守つた。

「あんたの方で、ぜひともそれを訊ねる權利はないぢやありませんか。」わざと優しくいつた。

「權利があるがな。いへ。」

母親は又口を出して、横から田原を小突くやうにした。

「何、しやがる。」田原は、半分身體を、そちらに扭ぢ向けた。

「この破落戸め、さつ〳〵と東京へ歸つて失せい。」

田原は、その言葉裏に母親の迷惑してゐる心の中を讀むと、一層いゝ氣持ちであつた。

「はゝゝゝ。まだなか〳〵東京には歸らないよ。」

といつて笑つた。

すると、今まで默つてゐたおよしといふ遣り手の婆さんは、

「まあ〳〵皆な、そんなことをいはんと。」と靜に仰へるやうにいつた。「田原さんも此方からは聞かんおいひやすのやよつて、それが本間どすやろ。しかし何處からお訊きやした。いふたてよろしいやろ。」彼女は樣に田原に向つていつた。

「うむ、それはいつても構はんが、全くあんた方に關係のない處から、ふと聞込んだんです。しかし旦那が誰れと分つたつて差支へないぢやないか。」

「えゝ、それは構やしまへんけど、……お母はんがえらい今朝喧しういふて自宅へ來やはつたので、何處からお訊きやしたか、一遍あんたはんにおたづねしてみよう思ふて。」

「あゝさうですか。」と、田原は口の先きでいつたが、腹の中では、好い氣味だ。昨日吉田に會つて、もう、今日此のとほり母親が我鳴つて歩くところをみると、吉田の奴め、昨日あれからすぐ母親に會つて話をしたのだ。自分では、もう長い間彼等に會はぬなどゝ空々しいことをいつてゐたが、やつぱり始終會つてゐるにちがひない。自分が行くと、何時もぴつたり戸を閉めて入らせないやうにして置きながら、吉田に對しては自由に出入りをさせてゐるのだ。

さう思ふと、田原は、近頃大分平靜になりかけてゐた眞恚の焰がまた忽ち、むら〳〵と胸の内に燃え上つて來た。

「畜生、この思ひを今に分存に晴してやるんだ。」

と、意志に從つた。

三人の婆達は、間もなく歸つていつた。



少年續編

芥川龍之介

一　海

保吉の海を知つたのは五才か六才の頃である。尤も海とは云ふものの、萬里の大洋を知つたのではない。唯大森の海岸に狭苦しい東京灣を知つたのである。しかし狭苦しい東京灣も當時の保吉には驚異だつた。奈良朝の歌人は海に寄する戀を「大船の香取の海に碇おろし如何なる人かもの思はざらん」と歌つた。保吉は勿論戀も知らず、萬葉集の歌などと云ふものはなほ更一つも知らなかつた。が、日の光りに煙つた海の何か妙にもの悲しい神秘を感じさせたのは事實である。彼は海へ張り出した葭簀張りの茶屋の手すりにいつまでも海を眺めつづけた。海は白じろと赫いた帆かけ船を何艘も浮かべてゐる。長い煙を空へ引いた二本マストの汽船も浮かべてゐる。翼の長い一群の鷗は丁度猫のやうに啼きかはしながら、海面を斜めに飛んで行つた。あの船や鷗は何處から來、何處へ又行つてしまふのであらう？　海は唯幾重かの海苔粗朶の向う

に青あをと煙つてゐるばかりである。……

けれども海の不可思議を一層鮮かに感じたのは裸になつた父や叔父と遠淺の渚へ下りた時である。保吉は始め砂の上へ靜かに寄せて來るさざ波を怖れた。が、それは父や叔父と海の中へはひりかけたほんの二三分の感情だつた。その後の彼はさざ波は勿論、あらゆる海の幸を享樂した。茶屋の手すりに眺めてゐた海は何處か見知らぬ顏のやうに、珍らしいと同時に無氣味だつた。しかし干潟に立つて見る海は大きい玩具箱と同じことである。玩具箱！　彼は實際神のやうに海と云ふ世界を玩具にした。蟹や寄生貝は眩ゆい干潟を右往左往に歩いてゐる。浪は今彼の前へ一ふさの海草を運んで來た。あの喇叭に似てゐるのもやはり法螺貝と云ふのであらうか？　この砂の中に隱れてゐるのは淺蜊と云ふ貝に違ひない。……

保吉の享樂は壯大だつた。けれどもかう云ふ享樂の中にも多少の寂しさのなかつた譯ではない。彼は從來海の色を青いものと信じてゐた。兩國の「大平」に賣つてゐる月耕や年方の錦繪をはじめ、當時流行の石版畫の海はいづれも同じやうにまつ青だつた。殊に縁日の「からくり」の見せる黃海の海戰の光景などは黃海と云ふのにも關らず、毒々しいほど青い浪に白い浪がしらを躍らせてゐた。しかし目前の海の色は——成程目前の海の色も沖だけは青あをと煙つてゐる。が、渚に近い海は少しも青い色を帶びてゐない。正にぬかるみのたまり水と選ぶ所のない泥色をしてゐる。いや、ぬかるみのたまり水よりも一層鮮かな代赭色をしてゐる。彼はこの代赭色の海に豫期を裏切られた寂しさを感じた。しかし又同時に勇敢にも殘酷な現實を承認した。海を青いと考へるのは沖だけ見た大人の誤りである。これは誰でも彼のやうに海水浴をしさへすれば、異存のない眞理に違ひない。海は實は代赭色をしてゐる。バケツの錆に似た代赭色をしてゐる。

三十年前の保吉の態度は三十年後の保吉にもそのまま當嵌る態度である。代赭色の海を承認するのは一刻も早いのに越したことはない。且又この代赭色の海を青い海に變へようとするのは所詮徒勞に畢るだけである。それよりも代赭色の海の渚に美しい貝を發見しよう。海もそのうちには沖のやうに一面に青あをとなるかも知れない。が、將來に憧がれるよりも寧ろ現在に安住しよう。――保吉は豫言者的精神に富んだ二三の友人を尊敬しながら、しかもなほ心の一番底には相不變ひとりかう思つてゐる。

大森の海から歸つた後、母は何處かへ行つた歸りに「日本昔噺」の中にある「浦島太郎」を買つて來てくれた。かう云ふお伽噺を讀んで貰ふことの樂しみだつたのは勿論である。が、彼はその外にももう一つ樂しみを持ち合せてゐた。それはあり合せの水畫の具に一一挿畫を彩ることだつた。彼はこの「浦島太郎」にも早速彩色を加へることにした。「浦島太郎」は一冊の中に十ばかりの挿畫を含んでゐる。彼はまづ浦島太郎の龍宮を去るの圖を彩りはじめた。龍宮は緑の屋根瓦に赤い柱のある宮殿である。乙姫は――彼はちよつと考へた後、乙姫もやはり衣裳だけは一面に赤い色を塗ることにした。浦島太郎は考へずとも好い。漁夫の着物は濃い藍色、腰簑は薄い黄色である。唯細い釣竿にずつと黄色をなするのは存外彼にはむづかしかつた。蓑龜も毛だけを緑に塗るのは中々なまやさしい仕事ではない。最後に海は代赭色である。バケツの錆に似た代赭色である。――保吉はかう云ふ色彩の調和に藝術家らしい滿足を感じた。殊に乙姫や浦島太郎の顏へ薄赤い色を加へたのは頗る生動の趣でも傳へたもののやうに信じてゐた。

保吉は匆々母のところへ彼の作品を見せに行つた。何か縫ものをしてゐた母は老眼鏡の額越しに挿畫の彩色へ目を移した。彼は當然母の口から褒め言葉の出るのを豫期してゐた。しかし母はこの彩色にも彼ほど感心しないらしかつた。

「海の色は可笑しいねえ。なぜ青い色に塗らなかつたの？」

「だつて海はかう云ふ色なんだもの。」

「代赭色の海なんぞあるものかね。」

「大森の海は代赭色ぢやないの？」

「大森の海だつてまつ青だあね。」

「ううん、丁度こんな色をしてゐた。」

母は彼の剛情さ加減に驚嘆を交へた微笑を洩らした。が、どんなに説明しても、――いや、癇癪を起して彼の「浦島太郎」を引き裂いた後さへ、この疑ふ餘地のない代赭色の海だけは信じなかつた。………

「海」の話はこれだけである。尤も今日の保吉は話の體裁を整へる爲に、もつと小説の結末らしい結末をつけることも困難ではない。たとへば話を終る前に、かう云ふ數行をつけ加へるのである。――「保吉は母との問答の中にもう一つ重大な發見をした。それは誰も代赭色の海には、――人生に横はる代赭色の海にも目をつぶり易いと云ふことである。」けれどもこれは事實ではない。のみならず滿潮は大森の海にも青い色の浪を立たせてゐる。すると現實とは代赭色の海か、それとも亦青い色の海か？　所詮は我々のリアリズムも甚だ當にならぬと云ふ外はない。かたがた保吉は前のやうに無技巧に話を終ることにした。が、話の體裁は？――藝術は諸君の云ふやうに何よりもまづ内容である。形容などはどうでも差支へない。

二　幻燈

「このランプへから火をつけて頂きます。」

玩具店の主人は金屬製のランプへ黄色いマッチの火をともした。それから幻燈の後ろの戸をあけ、そつとそのランプを器械の中へ移した。七才の保吉は息もつかずに、テエブルの前へ及び腰になつた主人の手もとを眺めてゐる。綺麗に髮を左から分けた、妙に色の蒼白い主人の手もとを眺めてゐる。時間はやつと三時頃であらう。玩具屋の外の硝子戸は一ぱいに當つた日の光りの中に絶え間のない人通りを映してゐる。が、玩具屋の店の中は――殊にこの玩具の容箱などを無造作に積み上げた店の隅は日の暮の薄暗さと變りはない。保吉は此處へ來た時に何か氣味惡さに近いものを感じた。しかし今は幻燈に――幻燈を映して見せる主人にあらゆる感情を忘れてゐる。いや、彼の後ろに立つた父の存在さへ忘れてゐる。

「ランプを入れて頂きますと、あちらへああ月が出ますから、――」

やつと腰を起した主人は保吉と云ふよりも寧ろ父へ向うの白壁を指し示した。幻燈はその白壁の上へ丁度差渡し三尺ばかりの光りの圓を描いてゐる。柔かに黄ばんだ光りの圓は成程月に似てゐるかも知れない。が、白壁の蜘蛛の巣や埃も其處だけはありありと目に見えてゐる。

「こちらへかう畫をさすのですな。」

かたりと云ふ音の聞えたと思ふと、光りの圓はいつの間にかぼんやりと何か映してゐる。保吉は金屬の熱する匂に屛好奇心を刺戟されながら、ぢつとその何かへ目を注いだ。何か、――まだ其處に映つたものは風景か人物かも判然しな

い。唯僅かに見分けられるのははかない石鹸玉に似た色彩である。いや、色彩の似たばかりではない。この白壁に映つてゐるのはそれ自身大きい石鹸玉である。夢のやうに何處からか漂つて來た薄明りの中の石鹸玉である。

「あのぼんやりしてゐるのはレンズのヒントを合せさへすれば――この前にあるレンズですな。――直に御覽の通りはつきりなります。」

主人はもう一度及び腰になつた。と同時に石鹸玉は見る見る一枚の風景畫に變つた。尤も日本の風景畫ではない。水路の両側に家々の聳えた何處か西洋の風景畫である。時刻はもう日の暮に近い頃であらう。三日月は右手の家々の空にかすかに光りを放つてゐる。その三日月も、家々も、家々の窓の薔薇の花もひつそりと湛へた水の上へ鮮かに影を落してゐる。人影は勿論、見渡したところ鴎一羽浮んでゐない。水は唯突當りの橋の下へまつ直に一すぢつづいてゐる。

「イタリヤのベニスの風景でございます。」

三十年後の保吉にヴェネチアの魅力を教へたのはダンヌンチオの小説である。けれども當時の保吉はこの家々だの水路だのに唯たよりのない寂しさを感じた。彼の愛する風景は大きい丹塗りの觀音堂の前に無數の鳩の飛ぶ淺草である。或は又高い時計臺の下に鐵道馬車の通る銀座である。それらの風景に比べると、この家々だの水路だのは何と云ふ寂しさに滿ちてゐるのであらう。鐵道馬車や鳩は見えずとも好い。せめては向ふの橋の上に一列の汽車でも通つてゐたら、――丁度かう思つた途端である。大きいリボンをした少女が一人、右手に並んだ窓の一つから突然小さい顏を出した。どの窓かははつきり覺えてゐない。しかし大體三日月の下の窓だつたことだけは確かである。少女は顏を出したと思ふと、更にその顏をこちらへ向けた。それから――遠目にも愛くるしい顏に疑ふ餘地のない頬笑みを浮べた！　が、それは掛け價のない一二秒の間の出來ごとである。思はず「おや」と目を見はつた時には、少女はもういつの間にか窓の中

へ姿を隱したのであらう。窓はどの窓も同じやうに人氣のない窓かけを垂らしてゐる。………

「さあ、もう映しかたはわかつたらう？」

父の言葉は茫然とした彼を現實の世界へ呼び戻した。父は葉卷を啣へたまま、退屈さうに後ろに佇んでゐる。玩具屋の外の往來も相不變人通りを絶たないらしい。主人も——綺麗に髮を分けた主人は小手調べをすませた手品師のやうに、妙に蒼白い頬のあたりへ滿足の微笑を漂はせてゐる。保吉は急にこの幻燈を一刻も早く彼の部屋へ持つて歸りたいと思ひ出した。………

保吉はその晩父と一しよに蠟を引いた布の上へ、もう一度ヴェネチアの風景を映した。中空の三日月、兩側の家々、家々の窓の薔薇の花を映した一すぢの水路の水の光り、——それは皆前に見た通りである。が、あの愛くるしい少女だけはどうしたのか今度は顏を出さない。窓と云ふ窓はいつまで待つても、だらりと下つた窓かけの後に家々の秘密を封じてゐる。保吉はとうとう待ち遠しさに堪へかね、ランプの具合などを氣にしてゐた父へ歎願するやうに話しかけた。

「あの女の子はどうして出ないの？」

「女の子？　何處かに女の子がゐるのかい？」

父は保吉の問の意味さへ、はつきりわからない容子である。

「ううん、ゐはしないけれども、顏だけ窓から出したぢやないの？」

「いつさ？」

「玩具屋の壁へ映した時に。」

「あの時も女の子なんぞは出やしないさ。」

「だつて顔を出したのが見えたんだもの。」

「何を云つてゐる？」

父は何と思つたか保吉の額へ手のひらをやつた。それから急に保吉にもつけ景氣とわかる大聲を出した。

「さあ、今度は何を映さう？」

けれども保吉は耳にもかけず、ヴェネチアの風景を眺めつづけた。窓は薄明るい水路の水に靜かな窓かけを映してゐる。しかしいつかは何處かの窓から、大きいリボンをした少女が一人、突然顏を出さぬものでもない。――彼はかう考へると、名狀の出來ぬ懷しさを感じた。同時に從來知らなかつた或る嬉しい悲しさをも感じた。あの畫の幻燈の中にちらりと顏を出した少女は實際何か超自然の靈の彼の目に姿を現はしたのであらうか？或は又少年に起り易い幻覺の一種に過ぎなかつたのであらうか？それは勿論彼自身にも解決出來ないのに違ひない。が、兎に角保吉は三十年後の今日さへ、しみじみ塵勞に疲れた時にはこの永久に歸つて來ないヴェネチアの少女を思ひ出してゐる、丁度何年も顏をみない初戀の女人でも思ひ出すやうに。

三　お母さん

八才か九才の時か、兎に角どちらかの秋である。陸軍大將の川島は回向院の濡れ佛の石壇の前に佇みながら、味かたの軍隊を檢閱した。尤も軍隊とは云ふものの、味かたは保吉とも四人しかゐない。それも金釦の制服を着た保吉一人を

例外に、あとは悉紺飛白や目くら縞の筒袖を着てゐるのである。

これは勿論國技館の影の境内に落ちる回向院ではない。まだ野分の朝などには鼠小僧の墓のあたりにも銀杏落葉の山の出來る二昔前の回向院である。妙に鄙びた當時の景色——江戸と云ふよりも江戸のはづれの本所と云ふ當時の景色はとうの昔に消え去つてしまつた。しかし唯鳩だけは同じことである。いや、鳩も違つてゐるかも知れない。その日も濡れ佛の石壇のまはりは殆んど鳩で一ぱいだつた。が、どの鳩も今日のやうに小綺麗に見えはしなかつたらしい。「門前の土鳩を友や樒賣り」——かう云ふ天保の俳人の作は必しも回向院の樒賣りをうたつたものとは限らないであらう。けれども保吉はこの句さへ見れば、いつも濡れ佛の石壇のまはりにごみごみ群がつてゐた鳩を、——喉の奥にこもる聲に薄日の光を震はせてゐた鳩を思ひ出さずにはゐられないのである。

鑢屋の子の川島は悠々と檢閲を終つた後、目くら縞の懷ろからナイフだのパチンコだのゴム鞠だのと一しよに一束の畫札を取り出した。これは駄菓子屋に賣つてゐる行軍將棊の畫札である。川島は彼等に一枚づつその畫札を渡しながら、四人の部下を任命(?)した。此處にその任命を公表すれば、桶屋の子の平松は陸軍少將、巡査の子の田宮は陸軍大尉、小間物屋の子の小栗は唯の工兵、堀川保吉の地雷火である。地雷火は惡い役ではない。唯工兵にさへ出合はなければ、大將をも俘に出來る役である。保吉は勿論得意だつた。が、圓まろと肥つた小栗は任命の終るか終らないのに、工兵になる不平を訴へ出した。

「工兵ぢやつまらないなあ。よう、川島さん。あたいも地雷火にしておくれよ、よう。」

「お前はいつだつて俘になるぢやないか?」

川島は眞顏にたしなめた。けれども小栗はまつ赤になりながら、少しも怯まずに云ひ返した。

「嘘をついてゐらあ。この前に大將を俘にしたのだつてあたいちやないか？」

「さうか？　ちやこの次には大尉にしてやる。」

川島はにやりと笑つたと思ふと、忽ち小栗を懷柔した。保吉は未だにこの少年の惡知慧の鋭さに驚いてゐる。川島は小學校も終らないうちに、熱病の爲に死んでしまつた。が、萬一死なずにゐた上、幸ひにも教育を受けなかつたとすれば、少くとも今は年少氣鋭の市會議員か何かになつてゐた筈である。…………

「開戰！」

この時かう云ふ聲を擧げたのは表門の前に陣取つた、やはり四五人の敵軍である。敵軍はけふも辯護士の子の松本を大將にしてゐるらしい。紺飛白の胸に赤シャツを出した、髮の毛を分けた松本は開戰の合圖をする爲か、高だかと學校帽をふりまはしてゐる。

「開戰！」

畫札を握つた保吉は川島の號令のかゝると共に、誰よりも先へ突喊した。同時に又靜かに群がつてゐた鳩は夥しい羽音を立てながら、大まはりに中ぞらへ舞ひ上つた。それから――それからは未曾有の激戰である。硝煙は見る見る山をなし、敵の砲彈は雨のやうに彼等のまはりへ爆發した。しかし味かたは勇敢にぢりぢり敵陣へ肉薄した。尤も敵の地雷火は凄まじい火柱をあげるが早いか、味かたの少將を粉な微塵にした。が、敵軍も大佐を失ひ、その次には又保吉の恐れる唯一の工兵を失つてしまつた。これを見た味かたは今迄よりも一層猛烈に攻撃をつゞけた。――と云ふのは勿論事實ではない。唯保吉の空想に映じた回向院の激戰の光景である。けれども彼は落葉だけ明るい、もの寂びた境内を驅けまはりながら、ありありと硝煙の匂を感じ、飛び違ふ砲火の閃きを感じた。いや、或時は大地の底に爆發の機會を待つ

てゐる地雷火の心さへ感じたものである。かう云ふ潑剌とした空想は中學校へはひつた後、いつの間にか彼を見離してしまつた。今日の彼は戰ごつこの中に旅順港の激戰を見ないばかりではない。寧ろ旅順港の激戰の中にも戰ごつこを見てゐるばかりである。しかし追憶は幸ひにも少年時代へ彼を呼び返した。彼はまづ何を措いても、當時の空想を再びする無上の快樂を捉へなければならぬ。——

硝煙は見る見る山をなし、敵の砲彈は雨のやうに彼等のまはりへ爆發した。保吉はその中を一文字に敵の大將へ飛びかかつた。敵の大將は身を躱すと、一散に陣地へ逃げこまうとした。保吉はそれへ追ひすがつた。と思ふと石に躓いたのか、仰向けに其處へ轉んでしまつた。同時に又勇ましい空想も石鹸玉のやうに消えてしまつた。もう彼は光榮に滿ちた一瞬間前の地雷火ではない。顏は一面に鼻血にまみれ、ズボンの膝は大穴のあいた、帽子も何もない少年である。彼はやつと立ち上ると、思はず大聲に泣きはじめた。敵味かたの少年はこの騷ぎに折角の激戰も中止したまま、保吉のまはりへ集つたらしい。「やあ、負傷した」と云ふものもある。「仰向けにおなりよ」と云ふものもある。「おいらのせいぢやなあい」と云ふものもある。が、保吉は痛みよりも名狀の出來ぬ悲しさの爲に、二の腕に顏を隱したなり、愈懸命に泣きつづけた。すると突然耳もとに嘲笑の聲を擧げたのは陸軍大將の川島である。

「やあい、お母さんつて泣いてゐやがる！」

川島の言葉は忽ちのうちに敵味かたの言葉を笑ひ聲に變じた。殊に大聲に笑ひ出したのは地雷火になり損なつた小栗である。

「可笑しいな。お母さんて泣いてゐやがる！」

けれども保吉は泣いたにもせよ、「お母さん」などと云つた覺えはない。それを云つたやうに誣いるのはいつもの川

島の意地悪である。——かう思つた彼は悲しさにも增した口惜しさに一ぱいになつたまま、更に又麗へ泣きに泣きはじめた。しかしもう意氣地のない彼には誰一人好意を示すものはゐない。のみならず彼等は口々に川島の言葉を眞似しながら、ちりぢりに何處かへ駈け出して行つた。

「やあい、お母さんつて泣いてゐやがる！」

保吉は次第に遠ざかる彼等の聲を憎み憎み、いつか又彼の足もとへ下りた無數の鳩にも目をやらずに、永い間啜り泣きをやめなかつた。……

保吉は爾來この「お母さん」を全然川島の發明した嘘とばかり信じてゐた。所が丁度三年以前、上海へ上陸すると同時に、東京から持ち越したインフルエンザの爲に或病院へはひることになつた。熱は病院へはいつた後も容易に彼を離れなかつた。彼は白い寢臺の上に朦朧とした目を開いたまま、蒙古の春を運んで來る黄沙の凄じさを眺めたりしてゐた。すると或蒸暑い午後、小說を讀んでゐた看護婦は突然椅子を離れると、寢臺の側へ歩み寄りながら、不思議さうに彼の顏を覗きこんだ。

「あら、お目覺になつていらつしやるんですか？」

「どうして？」

「だつて今お母さんつて仰有つたぢやありませんか？」

保吉はこの言葉を聞くが早いか、回向院の境内を思ひ出した。川島も或は意地の惡い嘘をついたのではなかつたかも知れない。

微苦笑

菊池寛

講演會が濟んでから、北の新地の大きいお茶屋へ招待された。講演會の主催をした雜誌社が、此の土地での實業家の經營にかゝるもの丈に、凡てが華美だつた。講演會の餘興にさへ、南陽の大きい藝妓屋で組織してゐる少女歌劇のやうなものを、くつつけて、講師の一人である啓吉にくすぐつたいやうな、馬鹿々々しいやうな氣を起させた。

お茶屋などで、藝妓を侍らせて酒を飲むことを、啓吉は好きではなかつた、酒が飲めないので、何うしても一座の空氣の中に溶けこんで行けないからである。と云つて、そんな所への招待を一圖に拒むほど嫌ではなかつた。その晩も、啓吉は講演を濟ました後の、のんびりとした氣持で、あまり飲めもしない酒盃をいくつか重ねた。

一行は山野と野田と三井とであつた。啓吉をのぞいたその三人は、かうした酒席での最も親しい僚友であつた。久し振の土地と、上方特有の良い酒とで、彼等は酒が始まると直ぐいゝ氣持になつてゐた。

と、野田に電話がかゝつて來た。野田は、立ち上つて電話を聽きに、階下へ降りて行つた。
「はゝあ。先刻の女だな」
三井さんが解し得たと云ふ風に、云つた。
「えゝ女ですつて。野田の奴怪しからん」
と、山野はわざと憤慨したやうに云つた。
「いや、とても大變ですよ。先刻、僕が講演會から松竹座へ廻つてゐると、その女が尋ね來たのですよ。講演會へ行つたが、野田君に會へなかつたので、僕と一緒に松竹座へ來たものと思つて、後から追かけて來たのですよ。」
三井さんは話上手の口調で云つた。
「それで、松竹座の入口で、僕を捕へて野田君に會はせろと云ふんですよ。だから多分此方へ來てゐるだらうと思つて、電話番號丈を知らせたのですよ」
「さうですか。いゝ女ですか」
山野が訊いた。
「いやなかなかいゝ女ですよ。」
「そいつは、野田の奴うまくやつてやがる！」
山野は憤慨したやうに云つた。啓吉も羨しい氣がした。
しばらくしてから野田が上つて來た。みんな一齊に野田の顏を見た。
「野田君、うまいことがあるさうですね。」

山野が云つた。

野田は、ちつとも得意らしい容子をしてゐなかつた。當惑したやうな赤い顔をしながら云つた。

「參つちやつた。」

「何うしたのです。女の人でせう、貴君に會ひたいと云ふ」

三井さんが云つた。

「さうです。よく御存じですね」

「先刻松竹座へ貴君を尋ねて來たのです」

「おや〳〵」

野田は、頭をかいた。

「何うすると云ふのです。」

山野が訊いた。

「玆へ尋ねて來ると云ふのです」

「呼べばいゝぢやありませんか。」

山野が云つた。

「いやあ。とんでもない……」

野田は、恐縮して頭をかいた。

野田が、得意になつてゐれば、皆はもつとその女のことで、野田を追窮したりしたのであらうが、野田がひどく悄氣

げてゐるので、その話はそのまゝになつた。

啓吉は、十二時が過ぎると、自分丈車を賴んで、堂島近くの旅館へ歸つた。

×　×　×

旅館の朝は、さはがしい人聲で、夢が破られた。それは、階上に何か寄合のやうなものがあり、その人聲が立て込んでゐる隣の家の壁に衝きあたり、直ぐ反射して、啓吉の寢てゐる階下の部屋へ聞えて來るのであつた。

目を覺して室內を見ると、床が昨夜のまゝに敷いて在つて、山野も野田も三井も歸つてゐなかつた。みんなお茶屋で、大醉してそのまゝ其處で、宿まつたのだらうと思つた。

啓吉は、床の中でその日の講演の準備をした。講演は二日つゞくのである。それから、女中を呼んで、床を上げて貰つてから、飯を食つた。

庭は狹いけれども、竹に石燈籠などを配して數奇を凝してあつて、二階の人聲さへなかつたら、どんなに閑寂だらうと思はれた。啓吉が、緣側に置いてある籐椅子に身を橫へて、ボンヤリしてゐると、女中がは入つて來た。そして、啓吉に會ひたいと云ふ女の客が來たことを告げた。

「どんな用事だか訊いて下さい。」

講演會へ來て、女の訪問を受ける、それは野田丈の幸福ではなかつたと思ふと、啓吉は無條件で案內して貰ふやうな氣持だつたが、併し初對面の人には、きつと用事を訊くのが、習慣であつたので、いくら旅先で相手が女だからと云つて、自分自身の內規を崩したくはなかつた。

出て行つた女中は、直ぐ歸つて來た。

「あの雜誌のことでお目にかゝりたい云ふて居やはります。」

さう云はれると、啓吉はすぐ思ひ當つた。これは、啓吉は小さい文藝雜誌を經營してゐた。そして、その月の編輯雜記に、女の編輯助手がほしいと云ふやうなことをかいて置いたのだ。だが、それは編輯助手と云ふよりも、實は家庭で女中がほしかつたので、多くの申込の中から、家事の手傳ひをしてくれさうな女を、とつくに定めてしまつたのだ。

「ぢやとにかく通して下さい。だが、どんな女です。」

彼は、どんな女が來るのか、一寸心の準備をして置きたかつた。

「若いえゝ女子さんだつせ。昨夜は、野田さんに會ふ云ふて、遲うまで、待つて居やはりましたのえ。」

何だ！ ぢや、野田に會ひたがつた同じ女なのだ。つまらない！ 野田が居ないので、代りに自分に會ふと云ふのか。啓吉は未知の女に會ふ前の緊張が、半分以上溶けてしまつた。

「今朝も野田を訪ねて來たのだらう。」

「えゝさうだす。野田さんは、居やはらん、木村先生ぢやと云ふたら、そんなら木村先生に會ふ云やはりますのえ。」

女中が云ふ所に依ると、その女は昨夜十時頃野田を訪ねて來た。お茶屋にゐる野田に電話をかけたら、旅館へ行つて待つてゐて呉れと云ふので、旅館へ來たのだと云ふことだつた。旅館では、その女を上げて待たせた。十二時が過ぎても野田は、歸つて來なかつた。女は、大阪の市外から、高野電車で來てゐたのだが、終電車の時間は、過ぎてしまつた。女は、當惑した。宿屋の方でも困つた。野田との關係がはつきりしない女性を、宿める譯には行かなかつた。到頭宿屋のお女將が氣を利かせて、近所の知合の宿屋へ紹介し、其處で宿つて貰ふことにしたのだと云ふのであつた。

今朝になると、早くから電話で、野田が歸つたかどうかを訊いてゐたが、野田が到頭歸つて來ないので、木村先生に會ふと云ひ出したと云ふのである。

女は、女中に案内されては入つて來た。啓吉は、一目見て美しいと思つた。殊に、まつげの長い黑目が、可なり魅惑的であつた。

挨拶が濟んでから訊いた。

「何うして野田を知つてゐるのです。」

「いつか上京してお尋ねしたことがあるのです。」

さう云はれて見ると、野田の所へ、關西から若い小説家志望の女性が、尋ねて來たと云ふことを、聞いた。野田自身、啓吉に「君のところへ、關西の女が尋ねて行かなかつたかい」と、訊いたことがあつたのを思ひ出した。

「その時、先生をお尋ねしようと思つたのですけれども。」

「さうですか。それで、野田は何うして今度は、貴女に會はないのです。」

「會つて下さると云ひながら、お歸りにならないから、もう會つて下さらないのだらうと思ひます。それで、野田先生の方は思ひ切つて、先生にお願ひしたいと思ふのですが、あの編輯雜記にかいてある助手に使つて下さいませんか。」

啓吉は、編輯助手と云ふのは、名目で本當は、女中を求めてゐたのであることを話し、しかも人が定まつてしまつたことを話した。だが、女はあきらめなかつた。どうにかして、上京して、小説の修業が出來るやうに世話してくれるやうに云つた。

世話好きで、女性に對しては、可なり丁寧である啓吉は、賴まれると、素氣なくはねつけることは出來なかつた。そ

して、本氣になつて探せば、此女のために、東京で一寸した職業の口位見出してやれないことはないのだつた。だが、こんな魅惑的な女性を、自分の身邊近く置くことから、どんな誤ちを犯さないとも限らない事などを、考へると、直ぐオイソレと引き受けることは出來なかつた。自分もよく考へて見なければならない。また女が、どんな性格だか見きはめなければならない。それには何うしても、詮衡の期間を置くことが必要だ

「さうですね。そりや、上京出來るやうに盡力して上げてもいゝですが、然し作家としての素質が全然ない人を、世話してもつまらないと思ひますから、とにかく貴女がお書きになつたものを拜見しようぢやありませんか」

「ぜひ、どうぞ。」

女は素直に云つた。

「ぢや、僕が東京へ歸つたら、作品を送つて見て下さい。それを見て、貴女が素質があると言ふことが分つたら、お世話しますから。」

「どうぞ、さうお願ひします。あのそれから、變なことをお願ひするやうですが、妾が先生にお願ひしたと云ふことは、野田さんには一切お話しにならないやうに。」

「野田に……」

啓吉は、一寸困まつた。何も友人である野田に云へないやうな惡いことをする譯ではないし、また野田の處へ最初行つた女性を、自分が世話することになれば、一應野田に斷るのは、友人としての義理だ。さう思つたけれども、然し今それを爭ふ必要もなかつた。

「貴女が嫌なら、野田に云はないことにしませう。」

女は、それを二度も念を押した。

二三十分、話をした。だん／＼昔近くなつて來た。山野や野田や三井が、歸つて來さうな時間になつて來た。かうした女性と話してゐるとき、皆に歸つて來られるのは、一寸啓吉には、嫌だつた。女性と、何だか甘さうな話などをしてゐる處を、友人に見られるのは、あまり格好のいゝものではないと思つた。殊に、野田とのいきさつがあつて見れば、女の立場だつて、自分の立場だつて、變なものになるし、またさうした場面をうまく繕ふには啓吉は、あまりに酒脫でなさ過ぎた。

啓吉は、一寸新聞社へ顏出しをしなければならないことを考へついた。彼は外出しなければならないことを女に云つた。女は、

「それでは、妾も御一緖に出ます。」

と云つた

啓吉は、女に待つて貰つて、袴をつけ女と連れ立つて、旅館を出た。そんな所へ友達が、歸つて來なければいゝがと思つてゐたが、運よく歸つて來なかつた。啓吉は、電車へ出る道を、女に訊いて其方へ步いた。美しい若い女性と步くことは、惡い氣持はしなかつた。

「あの道頓堀の方へは、いらつしやいましたか。」

「いやまだ何處へも行きません。」

「新聞社の方は、お急ぎですか。」

「いえ。今日中に顏出しすればいゝのです。」

「あの、道頓堀の方を一度お歩きになりませんか。」

「さうですね。行きませうか。」

若い女性と道頓堀を散歩するのは、惡くはない。もつとも、七月の中旬で歩くことは肥滿してゐる啓吉には、一寸苦痛だつたが、だが、もう十二時過ぎてゐた。食事でも一緒にして分れよう。啓吉はさう思つた。

啓吉達は、左へ折れ心齋橋筋へ出た。そして、一丁ばかり歩くと、啓吉は下駄の鼻緒が切れた。困まつた。人通は、可なり多いところで、下駄を下げても歩けなかつた。啓吉は切れたまゝで、下駄を曳きづつて歩いた。

「妾の肩におすがりになりませんか。」

女は、啓吉の方へ眞近に身を寄せた。だが、眞日中女の肩に手をやることは出來なかつた。

「いや、結構です。」

啓吉は、恐縮して云つた。だが、女は啓吉に身を寄せるやうにして、四五間歩いた。その時に、啓吉は、七月の太陽の光で、女の顏をマザ〳〵と見た。先刻、薄暗い旅館の部屋では、あんなに美しく見えた女の顏が、案外すさんでゐて、髮の生え際が薄汚く、汗のにじんでゐる皮膚が、少しも彈力のないのを知つた。それは、一の幻滅だつた。その女から受けてゐた魅呪が、すつかり解けたやうに感ぜられ、啓吉は氣が大變樂になつた。

女は、啓吉がどうしても肩に手をやらないのを見ると、

「ぢや、妾が下駄屋を見つけて來ますわ。」

さう云つて、小走りに半町ばかり、先きへ走つたが、直ぐ下駄屋を見つけて、引返して來た。啓吉は、其處で下駄を買つた。そして、前よりは氣易い氣持で、道頓堀を一廻りした。そして、食事をするために、川座敷になつてゐる川魚

料理には入つた。

座敷は、水面とすれ〳〵であつた。小さい座敷に割きられてゐるのだが、障子はすつかり取り拂はれてゐるので、廣い間と變らなかつた。

女は、物なれた容子で、食卓の上を取り廻した。女は、いろ〳〵の話をした。大阪のある小説家の家へ入門したが、奥さまが先生と自分の間を、嫉妬して困まつたことなどを話した。ふと、彼女は野田のことを云ひ出した。

「野田さんて、眞面目な方ですか。」

「眞面目つて、言葉の意味次第だが、普通の世間の道德から云へば不眞面目でせうが、僕等から見れば眞面目ですよ。だが、貴女の云ふ意味は。」

「あの方は、女なんかに對して、冗談に手を握つたり接吻したりなさる方でせうか。」

「女次第ですが、玄人ですか、素人ですか。」

「素人です。」

「素人ですつて、どんな方です。」

「あの、妾のお友達です。」

「あなたのお友達、ぢややはり大阪の人ですね。いつ頃です」

「一二年前」

「その人に、野田が手を握つたり接吻をしたと云ふのですか。そんな女のことは聞かなかつたな。貴女自身ぢやありませんか。」

啓吉は、突嗟に思ひ付いて訊いた。女は、一寸あはてた。

「いゝえ、妾ぢやございません。お友達です」

「さうですか。素人で、良家の方だとすると、野川は眞面目にやつたのですよ。野川は御存じの通り、遊蕩はやりますよ。だが、素人に對しては、絶對に眞面目ですよ。若し、野川が良家の娘に對して、そんなことがあつたとすれば、たしかに結婚する意志があるのですよ。」

啓吉は、實際野川をさう信じてゐた。

「さうでせうかしら。」女は、一寸考へるやうな目付をした。

食事は、了つた。川面に照る太陽の熱が、可なり強く反射して來た。啓吉は、雜沓してゐる暑熱の街を、もう歩く氣はしなかつた。それに道頓堀へ來たために、新聞社は可なり遠くなつてゐる。彼は女中に命じて、タクシを呼んで貰つた。

一寸、廻り道して女を旅館まで、送つてやることにした。タクシは啓吉が宿つてゐる旅館の前を過ぎ、二町ばかり行つて、女が宿つてゐる宿屋の前で止つた。

「さあ。どうぞ。」

啓吉は、女を降した。

「ぢや、いづれ！」

さう云つて、去らうとした。女は、ベソを掻くやうな顔をした。

「あの一寸、お寄りになつて。」

子供に對して、何かしようとすると、子供が急にベソをかくので、大人が動かされるやうに、啓吉も女の必死の哀願するやうな表情を振り切ることが出來なかつた。女の宿屋へ行く、少し亂暴だ。が、啓吉は、自分の行爲を少しも、邪しいと思はないほど、女は必死な顔をした。

宿屋は、東京の高等下宿程度の手輕な家だつた。女の部屋へ通つて見ると、小さい手持の外、何もなかつた。

女は、啓吉を下へも置かないやうに云つた。坐蒲團をすゝめてから、自分で團扇を取つて、扇いでくれた。啓吉は、堅くなつて坐つてゐた。女はしきりに、袴を取つて、寛げと云つた。

啓吉も、少しは誘惑を感じた。男と女とが關係が出來るなら、こんな場合だなと、思つた。自分が、この女に野心があれば、彼女はどうにでもなるのだなと思つた。

だが、啓吉は惚れても居ない女を、何うすると云ふ氣はなかつた。彼は、可なり餘裕のある氣持で、五六分坐つてゐた。

だが、啓吉は何うしてこの女が、自分を宿屋へ連れて來たのであらうかと思つた。自分を誘惑しようと云ふやうな心があるとは思へなかつた。

啓吉はふと思ひついた。昨夜、野田に會ふつもりでゐたのが、會へないで、思ひがけなくこんな宿屋へ送られてしまつた。彼女は、ホンの小遣しか持つてゐない。宿屋の拂ひの額を聞いて、それが所持金以上であつたら、何うせう。女は、乾度これを心配してゐるのに違ない。金錢問題については、察しのいゝ啓吉は、女が啓吉を自分の宿屋へ連れて來た動機をさう解釋した。

「貴女、何うします。直ぐお歸りになるでせう。」

「えゝ、さうです。」

「ぢや、直ぐ勘定をさせたら何うです。」

「えゝ、さうします。」

女は、女中を呼んで勘定を賴んだ。

「僕が勘定を拂つて上げませう。」

女中が去つたとき、啓吉がさう云つたとき、女は一言も辭退しなかつた。啓吉は、自分の想像が略適中してゐたことを知つた。

勘定を拂つて、外へ出た。啓吉は、待たしてあつたタクシで、女を京阪電車まで送つてから、新聞社へ行つた。

啓吉は、女に對して、少し甘すぎたかなと思つた。だが、可なり女との危險な接觸から、キレイに切りぬけたのが、得意でもあり氣持がよかつた。

×　×　×

旅館へ歸つたのは、四時近くであつた。野田も山野も三井も、皆歸つて來てゐた。彼等は、前夜寢たりなかつたと見え、蒲團を敷かせて寢てゐた。

野田は、啓吉の姿を見ると云つた。

「おい、木村！　あの女を連れて、何處へ行つた。」

「道頓堀へ行つて、飯を喰つたよ。君が、會てやらないもんだから、僕が代りに接待したわけだ。」

「だつて、會へないんだよ。東京へ來たときに、手を握つたり接吻をしたりしたもんだから、恐くて會へないよ。」

「何だ―　君は、そんなことやつたのか。」

「だつて、一緒に淺草へタクシで行つたら、タクシの動搖を利用して、僕によりかゝつたり何かするんだもの。僕だけのせいぢやないや。」

「道理で、あの女が云つてゐたぜ。野田さんと云ふ方は、冗談に女の手を握つたり接吻をしたりする人かつて。」

「おや〳〵、それで何と答へたんだ。」

野田は床から身を起して訊いた。

「僕は、野田は素人に對しては絶對に眞面目だ。もし、素人に對して、そんなことがあれば、結婚する意志があるんだと云つてやつた。」

「おや、そいつはつまらんことを云ふ奴だな。」

野田が頭をかいて笑つた。

「よかつたね。そいつは傑作だ。」

傍から、山野が云つた。そして一座は愉快に笑つた。啓吉は、道に宿賃まで拂つてやつたことは耻しくて云へなかつた。野田も、自分も同じ女と同じやうな接觸をなし、たとひ自分が既婚者であるとは云へ、自分丈がキレイにあしらひ捨てたことが、うれしかつた。やれ〳〵、つまらないことをしなくつて、よかつたと思つた。だが、野田に簡單に唇を許した女に對し、誘惑に會つたダイオゲネスか何かのやうにあまり堅くなり過ぎてゐたのが、馬鹿々々しかつた。

啓吉は、そんなことを考へながら、心の裡で山野がよく使ふ微苦笑と云ふのを洩したのである。

豫約募集

締切 五月廿日

全譯 王朝文學叢書

吉澤博士曰く

王朝文學の尊いところは九百年前に源氏物語を生んだといふ過去の事實のみではない。永久に、日本民族が行く可き文學上の進路に暗示の影を投げかけてゐるところにある。然るに言語の變遷は現代人を阻礙して祖先が貯へた饗庫を窺ふことを容さなくなつた。—この秘庫を開いてあるがまゝなる王朝文學の神髓を自由に味ふことの出來るやうに—吾々が王朝文學譯出に志した動機はこゝにある。

執筆者

京都帝大教授 文學博士 吉澤義則
京都第一女教諭 文學士 加藤順三
奈良女高師教授 文學士 春日政治
龍谷大學教授 文學士 吉川理吉
大谷大學教授 文學士 能勢朝次
龍谷大學教授 文學士 有川武彦
富山高校教授 文學士 木枝増一
大阪高校教授 文學士 宮田和一郎
第三高校教授 文學士 島田退藏
大谷大學教授 文學士 鈴鹿三七

裝幀及挿畫筆者

菊池契月　中村大三郎

―第一輯―

一、竹取、伊勢、大和、堤中納言物語
二、蜻蛉、土佐、和泉式部日記
三、落窪物語
四、源氏物語1
五、源氏物語2
六、源氏物語3
七、源氏物語4
八、源氏物語5　宇治十帖の上
九、源氏物語6　宇治十帖の下
十、狹衣物語（上）
十一、狹衣物語（下）
十二、とりかへばや物語

平安朝文學の現代語全譯の完成

本叢書の體裁

▼本書の形は別漉紙にして四六版と菊版との中間をとり各卷四百五十頁
▼表紙圖案は淡桃色に金にて模樣を散らせる優雅なもの
▼卷頭挿繪は兩畫伯の分擔執筆になる木版數度刷の美術作品

募集豫約略規

▼會費全額金參拾六圓
內申込金參圓（申込と同時に）毎月拂金參圓
▼一時拂金參拾四圓（申込金不要）
▼送料は別に申受く
▼刊行は大正十三年六月より同十四年五月に到り完結

豫約申込所
京都市下長者町油小路西入
株式會社文獻書院內
振替口座大阪六九九七六番

見本進呈

王朝文學叢書刊行會

十年間貳千五百圓の貯金の通帳を無くして仕舞ふも同じだと云ふ

煙草も一度「カロット」を口にすれば

斷じて再び煙草は吸へぬ、乞ふ明かなる事實に聞け…

實業之日本代理部と榮川主人

震災前は東京日比谷でしたが一時表記の處に假營業始め候間御用命の程願上候

先年十月十三日煙草代用品「カロット」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロット」の御註文がありました店員が此事を主事に報告しますと主事は「明日は私自身で代理部へ上つて「カロット」を御説明申さう」と云て主事は翌十五日午前十時「カロット」一組を携へて實業之日本社代理部を訪問しました、丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて與れました其處で榮川堂主は自身來社せる眞意を述べて「カロット」發賣に至る迄の苦心と確信を申上げました、其うして先づ一應社員の煙草好な方に御試を願ひました、すると其社員の方は早速「カロット」を取上てお試しになりました、暫して其方は「カロット」を口より放して今度は卷煙草をお吸ひになりましたが、社員の方、やつ、之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました到底煙草等吸へないですね」、驚いたと仰有いました。此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ」「僕もやつて見やう」「僕も」と云ふ風に全社員の方が總立になつて「カロット」を取上げてお試しになりました。「やあこれでは煙草は吸へませんね」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞賛下さいました、其處で更に店主は口を開いて一度「カロット」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて兩び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロット」が多くの人に認められて來た事の本懐を述べて暇をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此の品の將來に對する御奬勵の言葉を述べて下さいました。何うか誰方も御使用の上ニコチンの中毒の害からのがれて下さいまし。

特徴

外見少も煙草を用ゆるに異ならざるを以て手持無沙汰の感なく適量朝鮮人參の精氣を含有するを以て朝鮮人參が具有せる諸效用の凡てを人體に與ふると同時に清撥なる香氣と忘れ難き清涼たる甘快味とは輕き刺戟と快感とを與へ口中に發し一度之を口に試みたる者は全く煙草に對する永き嗜好を必ず離れて斷じて再び試みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて「ねばり」を生ずる時其他散歩等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を光治すべし

カロット金貳圓 百日分

パイプ(水牛製銀)金五十錢
同(模様入)
同(ベークライト)金七十錢
同(象牙サック入)金壹圓五十錢

送料(內地十八錢 臺朝樺四十五錢)
代金引替(內地卅錢 臺朝樺五十五錢)

○パイプは右三種の內御希望の品御書添願候○

東京府下大森不入斗四五一

榮川堂

東京振替五一、九一一

御註文は振替利用を便とすれども御都合によりては郵便にて御申込次第引換へにて發品可仕候(滿州支部は代金引替御斷り)

中央公論大賣捌所

東京市神田區表神保町　東京堂
同　神田區通神保町　上田屋
同　京橋區銀座三丁目　東海堂
同　京橋區丸數寄屋町　北隆館
同　日本橋區本石町　至誠堂
同　本鄉區春木町　盛春堂
大阪市北區梅田町　盛文館
同　北區東梅田町　立盛堂
京都市七條停車場前　共盛社
同　新町通七條南入　大盛社
名古屋市　富澤町　中京堂
朝鮮京城本町二丁目　日韓書房

◎定價　金八拾錢郵稅金貳錢五厘（海外郵稅貳拾八錢）
但支那を除く

冊數／國別	內國	外國	
六冊	金四圓八拾錢	金六圓四拾八錢	以上郵稅共
十二冊	金九圓六十錢	金拾貳圓九拾六錢	

▲但し新年號春秋二期附錄號增刊號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十七册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金拾參圓六拾錢外國は金拾八圓參拾六錢の割となれども頁數の都合にて變更することあるべし。

送金注意

一誌代郵稅は一切前金とす、前金切の場合は發送を止むべし
一振替貯金口座番號は**東京三四番　長野三二〇五番なり**
一郵券代用は謝絕す但し郵便局に不便の地に限り一割增にて代用せらるるを妨げず
一代金引替小包の取扱は一切謝絕す
一集金郵便御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし、弊社は直ちに其取扱手續をなすべし但集金郵便の申込を受くるも現金受領濟にあらざれば雜誌發送せず
一金二圓以上五圓迄　金七錢（集金來託料
一金拾圓迄　金八錢（及送料共）
一中央公論及婦人公論代金取り纏め御拂込みの場合には各誌割當て金額御指定を乞ふ
一受領證請求は必ず返信料を要す

大正十三年四月廿五日印刷納本
大正十三年五月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人　瀧田哲太郎
印刷人　高木島三

發行所
東京市丸ノ內ビルヂング七階七百七十六區
中央公論社
電話　長丸ノ內三〇二（當分不通）
牛込五〇八九
電信略號コウロン

印刷所
東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
株式會社秀英舍

明治三十年一月廿九日第三種郵便物認可

CHUO KORON (*The Central Review.*)

By The Chuo Koron Sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: Annual subscription *yen* 12.48; Single copy 80 *sen* including Postage. Entered at the Post Office at Los Angeles, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.